

東洋大学 FD・SD 活動報告書 (2018 年度)

2019 年 5 月

東洋大学

高等教育推進センター

学部 FD・SD 活動報告	1
文学部.....	2
経済学部.....	5
経営学部.....	8
法学部.....	11
社会学部.....	14
理工学部.....	19
国際学部.....	22
国際観光学部.....	25
生命科学部.....	41
ライフデザイン学部.....	46
総合情報学部.....	49
食環境科学部.....	52
情報連携学部.....	54
研究科／センターFD・SD 活動報告	58
文学研究科.....	59
社会学研究科.....	62
法学研究科.....	65
経営学研究科.....	67
理工学研究科.....	71
経済学研究科.....	74
国際学研究科.....	78
国際観光学研究科.....	80
生命科学研究科.....	86
社会福祉学研究科.....	89
ライフデザイン学研究科.....	91
学際・融合科学研究科.....	93
総合情報学研究科.....	98
食環境科学研究科.....	101
情報連携学研究科.....	104
国際教育センター.....	106

高等教育推進センター / 高等教育推進委員会 活動報告	109
高等教育推進委員会	111
部会長会議	116
教育方法改善部会	117
FD・SD 研修部会	120
高等教育研究部会	125
教育開発・改革部会	129
その他―各学部・研究科からの教学データ提供依頼状況―	131
高等教育推進センター刊行物	133
東洋大学高等教育推進センター規程	138
付録	143

学部 FD・SD 活動報告

文学部

作成者 矢口 悦子
須田 将司

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

1. 『各年度データブック』による情報公開

例年、文学部における授業実績や教育に関わる各種取り組みについて、各年度の「データブック」として作成し、学部教育の基礎的な資料を共有している。各学科や関係部局からの情報提供に基づき構成され、ガルーン等を通じて学内外に広く公開している。

2. FD 講演会・研修会

例年 2 回程度、学内外の講師を招いての講演会・研修会が実施されている。講演・研修テーマは、学部内自己点検・評価委員会での検討をもとに、教員が共通に学ぶべき課題であり、かつ時機を捉えた内容を意識して設定している。2017 年度は ToyoNet-ACE 活用について学ぶとともに、海外大学との協定に向けた海外視察報告会、文学部 GPA 分析報告会など、多様な視点を盛り込んだ講演会・研修会を実施した。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

- ① 『文学部自己点検・評価報告書（2017 年度データブック）』の公開
- ② FD 講演会・研修会
- ③ 学生アンケートデータの活用

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 『文学部自己点検・評価報告書（2017 年度データブック）』の公開

例年通り、文学部の教育研究活動について「データブック」として情報公開を行っている。今年度も H P での公開のみとし、刊行経費の削減を行った。

② FD 講演会・研修会

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの公表有無
		教員	職員	計	
7/11	PROG テスト結果報告会	85 名	5 名	90 名	無
10/3	海外大学との協定に向けた海外視察報告会	84 名	5 名	89 名	無
12/5	ハラスメント防止研修会	88 名	5 名	93 名	無
2/6	授業評価アンケート分析報告会	81 名	5 名	86 名	無

【PROG テスト結果報告会】

就職・キャリア支援部で実施した1年生・3年生を対象とした PROG テストの報告が(株)リアセック担当者からなされ、学生のジェネリックスキルを可視化する一助となった。

【海外大学との協定に向けた海外視察報告会】

視察を担当した教員（2名）による報告がなされ、文学部における海外大学との学生交流および研究交流に関する意識向上の一助となった。

矢口悦子（教育）・佐藤里野（英米文）：アメリカ ハワイ大学ヒロ校

【ハラスメント防止研修会】

山田・尾崎法律事務所の厚井弁護士によるハラスメント防止研修を実施し、ハラスメントに対する意識向上の一助となった。

【授業評価アンケート分析報告会】

高等教育推進センターによる分析結果報告がなされ、学科内で共有および具体的な改善策の検討により教育の質向上の一助となった。これに基づく各学科での分析および検討結果については、『文学部自己点検・評価報告書（2017年データ・ブック）』としてホームページで公開する。

③ 学生アンケートデータの活用

文学部内に設置した「文学部自己点検・評価委員会」を中心として、学生アンケートの分析に基づく、学生満足度を高める教育の実践について方向性を協議している。この分析にあたって

は、高等教育推進センター等との連携のもと進めていくことを予定しており、次年度以降、継続して議論を重ねていく。

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

2018 年度の FD 活動を踏襲しつつ、学部長のイニシアティブの下、2019 年度文学部自己点検・評価委員会委員を中心に推進していくこととなる。

具体的な予定としては、これまでに引き続いてグローバル化に対応するための学生の海外派遣や研究交流を推進する研修会・交流会等を実施していくことを想定している。併せて、学生による各種アンケートや適正テスト等の分析結果等を基に、学生満足度の向上や学修環境の改善を推進していきたい。

また、学生に対して適正な教育環境を提供するためには、ST 比や SS 比の改善も取り組むべき課題であり、同委員会を中心に検討を重ねていく。

経済学部

作成者 千明 誠

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

経済学部では授業評価アンケートを中心にして FD 会合・FD 研修会・FD 視察等の様々な組織的な取組を行っている。こうした活動によって学部の教育力は毎年着実に向上している。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

① 授業評価アンケート

講義科目は全学方式、ゼミアンケートは学部独自方式で実施した（実施科目：講義科目（春学期 197、秋学期集計中）、ゼミ（春学期 21、秋学期集計中））。

② FD 会合

以下のテーマで FD 会合を実施した。春学期（テーマ別）：「GPA の経年変化で見る成績評価について」（全体会合の後、学科・分野別会合を実施）。秋学期（学科別）経済：専門「反転授業について」基礎「ポリシー検討について」、国際経済：専門「卒論指導について：卒論の提出率を上げるには？質の高い卒論とは？それを書かせるためのノウハウは？」基礎「現状と課題(2018 年度の振り返り)」、総合政策：専門「専門ゼミプレゼン大会について」基礎「今年度の振り返りと来年度に向けてのゼミ内容の再検討」、秋学期（分野別）英語：「新カリに向けて英語の現状と問題点」、初習外国語：「総論、言語別の状況、問題点、授業実施状況」、一般教養：「基盤科目講義における最近の課題と対応」。後日、報告書・報告会を通じて各テーマの内容を共有した。

③ FD・SD 研修会

今年度は FD 研修会を 2 回開催した。①「白山キャンパス ラーニングサポートセンターについて」、奥山 英一氏（本学教務部事務部長）、北 旬氏（全学学務推進課長）、7 月 5 日、スカイホール、参加人数 57 名。②「就活データの分析: 途中報告」、経済学部 隅田准教授、川上准教授、11 月 1 日、スカイホール、参加人数 55 名。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの 公表有無
		教員	職員	計	
2018/07/05	白山キャンパス ラーニングサポートセンターについて	53	4	57	無
2018/11/01	就活データの分析: 途中報告	47	8	55	無

④ FD 視察

9月14日に金沢大学角間キャンパスに6名の教職員が訪問し、アクティブ・ラーニング・アドバイザー制度と成績評価についてヒアリングを行った。

⑤ 学生との意見交換会

7月3日、12月4日の各日昼休みに実施した。合計6名の学生が参加して、学部教育、大学施設等への様々な要望や意見が出された。

⑥ 授業参観

参観可能な専任教員の科目（講義・ゼミ）を対象として実施された（参加者0名）。

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 授業評価アンケート

全体のアンケート結果は経済学部 HP 上にて公開される。また、ゼミアンケート結果は学習ポートフォリオとして各学生にフィードバックされる。

② FD 会合

今年度の春学期 FD 会合は共通テーマを設定した。GPA データによる成績評価の実態について報告があり、それを受けて各学科・分野に分かれて成績評価について議論した。学科・分野別の違い等の情報もあり、有意義な会であった。秋学期は例年通り学科・分野に分かれて1年間の総括や対応すべき課題について議論をおこなった。

③ FD・SD 研修会

学内活動の紹介（共通理解を得る）として、ラーニングサポートセンターについて理解が深まった。また、本学部では就活データの整備を行ってきたが、データを利用した分析の中間報告は、学部生の特徴に関する貴重な情報提供の場となった。

④ FD 視察

経済学部は SA を積極的に利用している。金沢大学のアクティブ・ラーニング・アドバイザー制度も同様な制度であり、実施体制などに関する課題と対処法について大変参考になった。

⑤ 学生との意見交換会

今年度も昼休みに開催したが、学生の参加者は減少してしまった。ただし、学生からは率直かつ積極的な意見が数多く出されて大変参考になった。学生からの意見は各学科・委員会等で検討された結果、いくつかの要望はすみやかに実行に移された。また、参加学生には検討結果がフィードバックされる。

⑥ 授業参観

参観者はゼロであり、次年度以降の実施については検討を要する。

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

経済学部ではこれまでの FD 活動を来年度以降も引き続き FD 推進委員会を中心として実施していく予定である。

来年度の活動計画としては、FD・SD 研修会では引き続き学内活動の紹介や、既に要望が出ている「AI と大学教育」に関する講演等を検討していきたいと考える。

経営学部

作成者 寺畑 正英

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

経営学部では、これまで様々な FD 活動に取り組んできた。初年次教育である「基礎実習講義」は、4 年間の学生の学修の基盤となることから、全ての教員が連携して、テキストの検討と教育方法の改善を図っており、そのなかで各教員のスキルアップも図ってきた。この数年、授業公開の取り組みを拡大しており、今年度も全教員の専門教育科目および基盤教育科目を全回公開するといった取り組みを始めた。また、学部内 FD 委員会を中心に学外の FD 研修会に参加し、他大学の事例を積極的に取り入れるよう試みた。さらに学部内の FD 研修会を企画し、全教員の授業内容及び方法の改善を図るような意識を高めた。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

- ① 基礎実習講義
- ② 授業公開
- ③ 学外研修会への参加
- ④ 学部内 FD 研修会

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 基礎実習講義

本講義では、助教を含む教員が学生に対して講義・実習指導を行うものであるが、講義内容や実習課題に関して、WG で随時検討・確認を行っている。また、指導方法や課題の評価方法に関する議論も教員間で活発に行われており、その結果、全教員のティーチングスキルの向上に貢献している。

② 授業公開

授業公開に関しては、この数年、取り組みが進んできた。経営学科では、教員が担当する専門教育（基礎演習・演習を除く）および基盤教育（外国語を除く）については、原則として全講義回を公開することとなった。マーケティング学科においては、5～7 月に全専任教員が授業公開日を設定し実施した。平成 30 年度から、全教員が他の教員の授業を聴講・見学することにし、実施した。初めて、他の教員の講義を聴講した教員も多く、なんらかの発見をしたものと考えられる。外国語教育においても、11 月に専任教員 4 名による授業公開を実施し、教員間で授業に関して気づいたポイントに関して指摘しあった。

③ 学外研修会への参加

学部内 FD 委員を中心に、学外の FD 研修会に参加し、他大学の取り組みや先進事例の見聞を深めた。6 名の教員が各地の大学が開く FD 講演会に延べ 8 回参加した。その例としては、「英語による授業のためのスキルアップ研修」、「産学連携に基づく消費者行動研究—大学教育への活用事例の紹介と企業のニーズの把握—」「汎用的能力の育成を目指した教養教育改革」「BYOD を活用した授業・学習環境を考える」など、多岐にわたった。これらの講演会、研修会に参加して得られた内容は委員内で共有され、学部内の新しい取り組みに活用されている。

④ 学部内 FD 研修会

今年度、学部独自の FD 講演会を 2 回実施した。1 回目は、東京大学の板津木綿子先生をお招きし、留学生教育に関わる問題とその対処法について興味深い話を伺い、留学生が増加している本学の教育環境改善の参考となった。2 回目も、やはり東京大学の宇佐美洋先生をお招きし、アクティブラーニングに関わる授業実践のお話を伺った。新学習指導要領で積極的に取り入れられている教育手法を経営学部に取り込む手がかりをつかむことが出来たであろう。英語分野では、非常勤講師の先生を含めた教員懇談会を 9 月に開催し、本学における外国語教育に関する問題点について議論した。会計ファイナンス学科では、平成 28 年度末より「教育水準の向上により学科の評価を高める WG」が設置された。具体的な取り組みは昨年度より始まり、成績評価のあり方に関する意見交換をしたうえで明確な基準を決めた。また、証券アナリスト資格取得を目指す学生のための教育方法や体制の検討を行なった。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの 公表有無
		教員	職員	計	
9/26	留学生教育とその先にあるもの	51 名	2 名	53 名	無
2/16	協働のプロセスの中から発見する自分 ～大学における、「自ら考える力」を育成する授業実践から～	46 名	4 名	50 名	無

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

学部全体の FD 活動の企画運営・実施は、経営学部 FD 委員会が中心となる。2019 年度の計画としては、引き続き FD 講演会を予定しており、年 2 回の実施に向けて企画内容を検討中である。

る。また、FD 委員会を中心に、引き続き、学外の研修会、講演会に参加し、学部内の他教員へ情報提供することによって啓発を試みる。英語分野では、来年度以降も非常勤講師を含めた担当者が集まって、外国語授業のスムーズな展開を進めていくと同時に授業内容や授業方法の改善につとめる。

法学部

作成者 上田 知亮

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

法学部では教育の質を高めるべく、FD 学習会や学期末試験不受験者代替措置の実施、単位僅少者面接、保護者との連携を視野に入れた活動を基本的な柱とする学部独自の FD 活動を実施するとともに、授業評価アンケートやルーブリックを導入したシラバス・チェックを始めとする全学的な FD 活動にも積極的に参画してきた。毎年、適宜工夫や改善を盛り込みつつ同様の活動を継続的に実施し、学部全体の教育能力の向上に努めた

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

①授業評価アンケートの実施

春・秋の各学期に本学高等教育推進センターによる全学統一フォーマットを用いた授業評価アンケートを実施した（春学期 141 科目、秋学期 138 科目）。さらに法学部独自の質問項目を設け、貸与六法を用いた試験実施と学習成果の関連などについて学生の意見を継続的に収集したり、学生の志望進路（公務員志望など）に関する質問項目を設け、どのような学生が履修しているのか担当教員が把握できるように工夫している。

②法学部学期末試験不受験者代替措置の実施（学部 FD 委員会、カリキュラム検討委員会合同）

各学期の学期末試験を病気その他やむを得ない事由により受験できなかった学生（※学期末試験を実施する法学部開講科目の受講生に限る）に対して統一した対応を行えるよう「学期末試験不受験者代替措置」を定めて、科目担当教員がそれぞれ該当学生と相談して日程を設定して代替措置を実施した。

③単位僅少者面接の実施（学部 FD 委員会、学生生活委員会合同）

留年率や退学率の低下につなげるべく、修得単位が少ない学生に対する個別面談を 2018 年 10 月に学部 FD 委員会委員と学生生活委員会委員が実施し、教員が学生の相談に乗るとともに助言を行った。面接後には、面接対象者の保証人に「単位僅少者面接結果通知」（欠席者には欠席通知）と「修学状況調査書」を送付した。欠席学生には「修学状況調査書」を後日教務課まで持参させ、学修状況の把握や学生との面接といったフォローアップを教務課で行った。

④保護者との連携を視野に入れた取り組み

法学部生の保護者に 「14（とーよー）メール」と題したメールマガジンを毎月14日に配信し、教育活動の紹介や行事予定の案内、各種事務手続きなど様々な情報提供を教職員が行っている。2018年度の配信件数は延べ約16,800件、毎月約1,400件となっている。

⑤法学部FD学習会の開催

教員主体のFD学習会を3回開催し、専任教員による「法学基礎演習」での取り組みについて報告したほか、障害のある学生への合理的配慮に関する対応や、多人数授業におけるアクティブラーニングの方法について外部講師による講演を実施した。報告や講演の後に質疑応答を通じて参加者は情報の共有や交換を活発に行った。詳細は「研修会等の参加状況」を参照。

3) 2018年度におけるFD・SD活動の成果と課題 【C】

①授業評価アンケートの実施

授業評価アンケートの結果はこれまで通り授業改善のために活用されている。今年度も学部独自の質問項目を盛り込んで学生の志望進路を把握できるようにしたので、その傾向を参考にきて来年度の授業計画を組むことが可能になった。

②法学部期末試験不受験者代替措置の実施

代替措置を原則筆記試験で実施することにより、疾病などの不可抗力で学生が学業上の不利益を被る可能性を極力排除するという教育的配慮を払いつつ、成績を厳格かつ公平に判定することができた。正当な理由で学期末試験を欠席せざるを得なかった学生への救済措置として重要な役割を果たした。インフルエンザ罹患者が多い秋学期はとりわけそれが顕著であった。

③単位僅少者面接の実施

教員との個別面接により、学習意欲が減退している学生に奮起を促すだけでなく、精神的な問題を含む学生の様々な事情を早期に把握して対応することが可能になっている。

④保護者との連携を視野に入れた取り組み

「14（とーよー）メール」を通じて、学業や就職活動に関する学内の取り組みについて保護者に情報提供を行い、保護者から学生への働きかけを促すことができた。2月号の「法学部の情報」では学部FD活動も紹介した。

⑤法学部 FD 学習会の開催

英語による授業の運営方法や障害のある学生への合理的配慮といった法学部が対処すべき教育的課題について、教員が理解を深めるとともに情報共有を行うことができた。参加人数の実績は上表を参照。

研修会等の参加状況

開催日時 開催場所	研修会名 (講演タイトル、講演者)	参加者数			ホームページ での公表有無
		教員	職員	計	
2018/7/3 16:20～17:00 スカイホール	第1回 FD 学習会 講演:「法学基礎演習」の授業方法の一例 講演者:大坂 恵里教授 (法律学科)	43 名	3 名	46 名	無
2018/10/2 16:30～17:30 スカイホール	第2回 FD 学習会 講演:「精神的な障がい・発達障がいのある 学生への対応について」 講演者:高野 明氏 (東京大学学生相談ネットワ ーク本部 所長 准教授)	45 名	4 名	49 名	無
2019/1/15 16:00～17:30 スカイホール	第3回 FD 学習会 講演:「多人数授業における効果的なアクテ ィブラーニングの方法とは？」 講演者:栗田 佳代子氏 (東京大学 大学総合教育研究センター 准教授)	48 名	4 名	52 名	無

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

今年度の実績を踏まえ、2019 年度も適宜工夫を凝らしながら FD 活動を引き続き実施していく。その際、追試験についてはカリキュラム検討委員会と、単位僅少者面接では学生生活委員会と緊密に連携して進めていく。教職員からの要望に応じて学部 FD 委員会を中心に企画を立てて FD 学習会を一層充実させるなど、教職員全体で教育の質保証に向けて取り組んでいく。

また、学部 FD の活動をホームページで報告できるよう体制を整えたい。

社会学部

作成者 松田 英子

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

2016 年度の FD では、多様な学生に対応するための教職員連携の模索をテーマとした活動を行ったが、2017 年度からは、「TOYO GLOBAL DAIAMONDS 構想」により進められているグローバル教育の強化に関連した活動を中心に FD・SD を実施してきた。特に英語で行う専門科目も含め、学生の英語力を伸ばしていくことが重要であるとの認識から、その関係の取組みを実施している。また、新任教員との関係では、学部新任教員研修会を毎年早い時期に継続的に開催している。

2017 年度については、4 月の FD 推進委員会を皮切りに社会学部における FD 活動を開始した。主な行事としては、5 月の社会学部新任教員 FD 昼食会、7 月の契約制英語講師を交えての FD 意見交換会、11 月の海外研修引率の危機管理に関する FD 講演会を開催した。これらは、「TOYO GLOBAL DAIAMONDS 構想」との関係で、社会学部として取り組むべき英語教育の目標や工夫、海外研修等の海外渡航における安全確保といった今日的なテーマであった。このことによりさらに英語教育、英語による専門教育の実施についての教員間での議論が起こり、また受講した学生たちの反応の共有が行われた。

また、新任教員については、英語教育対応以外でも重要な各種学内システム、手続等に早期に慣れ親しんでいただくための機会として例年どおり実施しているものである。このほかにも、5 月に Toyonet-ACE に関する ACE よろず相談会、8 月に英語開講の専門科目に関するコンテンツの検討会を開催するなど、継続的な教育の質的向上のための活動に取り組んだところである。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

2018 年度は、4 月 9 日に FD 委員会を開催し、昨年度の委員会での提案、教務課や学部長の希望等を踏まえた相談の結果、

- ・ グローバル教育に関連して、英語コミュニケーション教育、語学教育、英語で実施する専門教育のそれぞれの目標と連携に、引き続き取り組んでいくほか、
- ・ 他学部において実施している授業評価の分析について、社会学部では必ずしも行われていなかったため、その関係の活動も開始することを柱とすることになった。

この他にも含め、実施された活動は以下のとおりである。

- ① 社会学部新任教員 FD
- ② 基礎演習バイリンガルテキスト『ゼミで学ぶ：基礎編』について

- ③ 2014 年度社会学部入学生の追跡から見えてくること ― 成績（GPA）と PROG データを用いて
- ④ 経済学部 of FD 活動に学ぶ ―ゼミアンケートと学習ポートフォリオを中心に―

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 社会学部新任教員 FD

4 月の社会学部教授会で告知し、個別に新任教員、各学科の FD 推進委員および学部長に案内を出した。参加者は、新任教員 8 名（1 名は忌引きで不参加）、教員 8 名、社会学部教務課職員 3 名、合計 19 名が参加した。11 時 30 分より昼食を取りながら、リラックスした雰囲気の中、新任教員からの疑問や質問に教職員が答える形式で進められた。議論したテーマは以下に集約される。

1 大講義室での大人数授業を reactive にする工夫について。教室の機器、Respon の使い方について質疑応答等、各教員の取り組みからの助言が行われた。

2 Toyonet-G、Toyonet-ACE、ガルーン、会計システムの使い方について。

全学の新任教員研修でも実習を取り入れ説明する。

3 特別な教育的配慮を必要とする学生への対応について。1) 運動部学生からの公欠届への対応、2) 2 部学生への対応、等。

4 その他 社会調査室の位置づけや利用法、支援の仕方。学外実習等の申請や事務処理について。語学教員の取りまとめや連携の工夫について。

今後については、社会学部 F D の中でも、アクティブラーニングに関する実践報告や Toyonet-ACE の使用法を取り上げる機会を設ける予定である。

② 基礎演習バイリンガルテキスト『ゼミで学ぶ：基礎編』について

6 月の社会学部教授会で告知し、7 月 30 日に開催された第 5 回社会学部教授会のあと開催された。講師は、社会学科の米原あき准教授、小山裕准教授である。まず社会学科の中山伸樹委員から本企画の目的についておよび講師の紹介があった。

参加者は、専任教員、契約制外国語講師、社会学部教務課職員、高等教育推進センター職員の、合計 53 名が参加した。17 時より、ワークショップ形式で進められた。最後に教員からの疑問や質問に教職員が答える形式で進められた。

社会学科では、基礎演習などの必修ゼミで、academic skills の基礎をバイリンガルテキストで実施している。その活用報告と課題の共有が、本 FD の目的であった。集団内での英語力のばらつきや、比較的英語での授業に積極的な学生さんへの負担の偏り（消極的な学生さんの社会的手抜き）、英語の学力が低い学生を動機づけるための教育上の工夫など、実践的な内容

が展開された。英語教育の授業の中で日本によるフォローの仕方、教材の実践例と15回の授業展開と、非常に興味深い内容であった。そのあとの懇親会でも、講師と参加者の間で、積極的な議論が行われた。

今後については、社会学部FDの中で、今回のFDをふまえて、社会学科が作成した基礎演習用アカデミックスキルに関するバイリンガルテキストの更なる運用報告、契約制英語教員と専門科目を英語で行っている教員との対話集会の機会を設ける予定である。

③ 2014年度社会学部入学生の追跡から見えてくること——成績（GPA）とPROGデータを用いて

教授会終了後に標記FD研修会を開催した。当該研修会については、前回の教授会にて周知をした。

高等教育推進センターから矢野智子氏にお出でいただき、2014年度社会学部入学生（2018年3月まで）の経年データを用いて、GPAとPROGについてお話をいただいた。卒業までに5年以上の時間を要したり、卒業に至らない学生の特徴、在学中のGPA、PROGのリテラシーおよびコンピテンシーの変化と入試別の比較、学科間の比較について、詳細な報告をいただいた。特に二次進級時の単位僅少者面談で、従来の単位数（21単位以下）のみならず、GPA2.0～2.5の基準も併用して学生をスクリーニングすることの提案があった。

ご報告後はフロアから下記の要望・質問がなされた。

- ・ 在学中の学習効果について、さらに詳細な分析があると、日常の教育活動にも有用である。
- ・ GPAの学科間の比較をすることに意味はあるのか。
- ・ GPAの点数配分（1～4.3）の根拠はどのようなものか。
- ・ 使用データに成績が「*」である場合も含まれているために、GPAスコアの経年変化の解釈を確定できない。「*」を除いていただきたい。

時間を有意義に用いての研修会であった。参加者は、約50名であった。

FD研修会後の懇親会に、高等教育推進室の矢野さん、石川さんにもご参加いただき、社会学部の教職員のディスカッションが継続された。

④ 経済学部FD活動に学ぶ——ゼミアンケートと学習ポートフォリオを中心に——

教授会終了後、経済学部FD推進委員会の千明誠先生にお越しいただき、学内でも取組が進んでいる「経済学部のFD活動について」お話しいただいた。

経済学部では、2000年度からFD活動を始めており、その蓄積の上に、現在では、①教員総合評価システム「経済学部教員総合評価」、②授業評価アンケート、③FD・SD研修会、④FD会合、⑤他大学視察、⑥学生との意見交換会、⑦授業参観など多様な取組を実施している。こ

れは、学部として、教職員・学生の「気づき」と「振り返り」による自発的な改善によって組織的に教育力の向上（レベルアップ）を目指すものであるとの説明があった。特に説明があったのは、授業評価アンケートの概要、ゼミアンケートと学習ポートフォリオ、学生との意見交換会、分野ごとのFD会合、FD・SD研修会であった。節目の中で注目される点は、以下のとおりである。

- ・ 全学の授業評価の関係でも、評価科目の選択について学部として独自ルールを設けていること（経年的な変化が分かるように継続性を重視した科目選択）
- ・ 全学の授業評価以外に学部独自のゼミアンケートを全てのゼミを対象に実施し、教育改善報告を作成していること、また、質問内容も社会人基礎力と結び付けたものを選んでいること
- ・ ゼミのアンケート結果を学習ポートフォリオとして学生にフィードバックしており、4年間の学生の成長の振り返りに活かしていること、また、今年度からPDCAになるよう改修を加え始めていること
- ・ 他大学及び朝霞を参考に学生との意見交換会を最初イベント式で始めたことが、うまくいかないことから、昼休みの自由討論会にやり方を変えて実施していること、また、結果を学科会議や教授会にフィードバックし改善に活かしていること
- ・ FD会合を学科、グループごとに秋学期に実施していたが、縦割りになることから、テーマ別のFD会合を春学期に導入したこと
- ・ 研修会については、講演会だけではなく、職員に来てもらい学内の活動が教員にも分かるようにしていること

総じて言えば、10年の取組により、学部の教育力は向上しているとのことであった。その後質疑に移り、社会人基礎力、PROG、自己評価と客観評価との関係等に関する質問が出された。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの 公表有無
		教員	職員	計	
5月14日	社会学部新任教員 FD	16	3	19	無
7月30日	基礎演習バイリンガルテキスト『ゼミで学ぶ：基礎編』について	48	5	53	無
12月3日	2014 年度社会学部入学生の追跡から見えてくること ― 成績（GPA）と PROG データを用いて	45	5	50	無
3月4日	経済学部の FD 活動に学ぶ ―ゼミアンケートと学習ポートフォリオを中心に―	54	3	57	無

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

①FD 委員会の定期的な開催

社会学部 FD 委員会を年 4 回開催することを目標とする。

- ・ 5 月上旬 年間計画の再確認
- ・ 7 月下旬～8 月上旬 次年度予算要求のための計画の立案
- ・ 12 月上旬 年内の計画の進捗状況の確認および報告書の作成
- ・ 1 月下旬 報告書作成と当該年度の活動内容の反省及び次年度への引継ぎ事項の確認

②新任教員に対する FD

新年度開始時に、社会学部新任教員との交流を深め、本学の授業に関する FD 研修を実施。

③FD 講演会の開催

当該年度の FD 講演会の実施の具体案を第 1 回 FD 委員会で企画する。

④授業評価アンケートを元に学部課題の共有化と改善策を検討

⑤年間活動報告書作成

報告書の作成に向けてスケジュールを確認し、各委員の担当部分を決定する。

理工学部

作成者 石田 哲朗

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

理工学部では学士力の質保証に主眼を置き、学生に充実した専門教育を提供するように努めた。その結果、原級率は 2011 年入学生の 22.7%から 2015 年入学生の 14.4%に減少した。2018 年度は従来の FD・SD 活動を継続すると共に、理工学部教員と川越事務部職員が学生の学士力保証を目指した教育に取り組む考えである。理工学部生の学修意欲を向上させ教員の教育力を高めるために、アクティブラーニングに関する講習会を計画した。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

- ① 春・秋学期の出席状況調査（4～5 月，9～10 月）
- ② 学修相談会（2018/9/22，2019/3/16）
- ③ アクティブ・ラーニングに関する講習会
- ④ 全科目シラバス点検
- ⑤ 基盤教育科目の学修支援
- ⑥ グローバル化への取り組み
- ⑦ 学科独自の取り組み

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 春・秋学期の出席状況確認（4～5 月，9～10 月）

理工学部教員が必修科目を中心に学生の出席状況を調査し、職員が電話連絡により出席不良の学生と保証人に科目履修指導した。職員が電話連絡を繰り返した結果、電話連絡できた割合は 95.1%(534 件中 508 件)と高いが、教職員の負担は大きい。出席不良の学生数を減少することが課題である。

② 学修相談会（2018/9/22，2019/3/16）

春・秋学期の成績を基に学生と保証人を交えた面談を行い、学生に科目履修指導した。学修困難な学生を早期発見することは、学生に対する継続的な学修指導と、学生の学修改善に繋がる。学修相談会は、学生の原級率低下に貢献していると捉えているが、面談対象の学生数を減少することが課題である。

③ アクティブラーニングに関する講習会（2018/12/13）

東京理科大学の渡邊雄貴 先生が「授業設計とアクティブラーニング - 主体的な学びをめざして」と題目して講演された。講演概要は、講義のインストラクショナルデザインとアクティブラーニング型授業、自立的学習者を目指した自己調整学習法である。理工学部教員 88 名が参加した。教員同士でディスカッションとワークに取り組む機会となった。

④ 全科目シラバス点検

2019 年度の全科目シラバス点検を教務委員会が中心となって行った。各学科の教務委員と教員が科目担当者に必要な修正を依頼して、滞りなくシラバスを修正した。

⑤ 基盤教育科目の学習支援

大学 1, 2 年生を主な対象として、学生の基礎学力習得を目的とした支援に取り組んでいる。基礎科目学習支援室では、理工学部生が数学・物理学を修得するために、支援室アドバイザーが円滑な学習支援に努めた。また、夏期・春期休暇中に微分積分学の特別講座を開催した。ここ数年、専門科目に関する利用者が増えていたが、教員の努力により減少傾向にある。英語学習支援室では、出席不良学生への補習、留学方法や基礎文法の授業外学習と自主学習個別指導を行った。適切に学習支援できる様、利用時間帯に工夫がなされている。学生の英語力に明確な差があることから、今後、能力別の教育方法を検討する必要があると考える。授業外学習と自主学習の目的別に支援を行った。

⑥ グローバル化への取り組み

英語による専門科目の開講コース数は、教員の努力により年々コース数は増えている。現時点では、履修者数を増やすことが目標である。また、学生の学習意欲を高めるために、理工学部長が英語成績優秀者に「理工学部長賞」を授与し、教授会で表彰している。2016 年度から GCS(Global Communication Spaces at Kawagoe Campus)を設置して、国際的に活躍できる学生の育成に努めてきた。その結果、今年度は、理工学部から TGL ゴールド認定者を 2 名輩出することができた。

⑦ 学科独自の取り組み

学科単位で新入生、在学生対象の面談会、茶話会、女子会を実施した。特に、新入生歓迎行事の開催は、友達作りを支援し、教員・在校生・OB との繋がりを強化した。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの 公表有無
		教員	職員	計	
7/12	PROG テスト結果の教員向け報告会	79	3	82	無
11/ 8	ハラスメント防止対策研修会	84	4	88	無
12/13	川越キャンパス FD 講演会	79	4	83	無

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

これまで取り組んできた FD・SD 活動を継続し，理工学部教員と川越事務部職員が学生の学士力保証を目指した教育に努める考えである。理工学部学生の学修意欲を向上させ，教員の教育力を高めるために，今年度の FD・SD 活動を通じて課題として挙げた点を改善していく。

国際学部

作成者 藤本 典嗣

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

2017 年度に発足した国際学部は 2 年が経過した。その際に、新しい試みとして、クォーター制の導入、海外英語実習の必修化と一部科目の英語化（国際地域学科）、全講義の英語化（グローバル・イノベーション学科）が実施されている。これらの新制度は、概ね、順調に実施されているが、改善点として、クォーター制は、国際学部のみが導入しているため、他学部開放科目や教員の人的運用に関して弾力性が欠けること、海外英語実習必修化は教育面以外の実務的負担が大きいこと、講義の英語化は、受講学生の英語力の格差により理解力に差があることが挙げられる。これらの課題点は、引き続き学部・学科において組織的に共有を進め、改善を図っていく必要がある。慣例となっている、授業評価アンケート、シラバス点検は、今年度も実施された。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

授業評価アンケート、シラバス点検、PROG テスト結果説明会は、例年どおり実施した。また、5 月 23 日には、EMI（English Medium Instruction）をテーマとした FD セミナーを、国際交流委員会と合同で開催した。新高等学校学習指導要（2018 年 3 月公示）に対応して、高校地理必修化に関する研修（於和歌山大学）に教員 1 名を派遣した。

① 授業評価アンケート

2018 年アンケート実施科目数は、国際学部全体で 319 科目、回答者延べ数 6,028 名であった。

② PROG テスト結果説明会

2018 年 7 月 10 日 15:00-16:00（於：125 記念ホール）、PROG テストについて、専門の業者を招いて本年度の結果や、他大学・本学内他学部との比較などについて解説を受けた。

③ EMI についての FD セミナー

2018 年 5 月 23 日 16:40~18:15（於：国際学部資料室）、'English Medium Instruction in Japanese Higher Education'というタイトルで、新潟県立大学の Howard Brown 教授による講演と、参加者による意見交換がおこなわれた。

④ 高校地理必修化に関する研修

2018 年 9 月 22 日、23 日に開催された日本地理学会（於：和歌山大学）において、公開講座地理総合講習会の「次期高校学習指導要領の公表をうけて」と「GIS 公開講習会」に参加した。

⑤ シラバス点検会

2019 年 2 月 13 日 11：30（於：125 記念ホール）で、学部教員による分担で、専任、非常勤の双方のシラバスについてピアレビューをおこなった。分担および集約は教務課職員が行い、ピアレビュー結果を担当教員に送付して基準に従って修正を行った。

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 授業評価アンケート

アンケートの評価は、国際地域学科・グローバルイノベーション学科とも、前年度より全体的に向上した。

② PROG テスト結果説明会

7 月 10 日の教授会の前に開催され、24 名の教員の参加があった。数値化された項目やその内容については、個人情報の秘匿の観点から公表できないが、専門の業者による説明があり、本年度の結果・本学他学部の学生との比較・他大学の同系統の学部との比較について、詳細の解説があった。

③ EMI についての FD セミナー

5 月 23 日に、非英語圏における英語による授業（EMI：English Medium Instruction）を日本で実施するにあたっての、課題点と今後の方向性について、北脇副学長・荒巻学部長による挨拶の後、新潟県立大学の Howard Brown 教授に講演をおこなっていただき、参加教員との間で意見交換を、おこなった。司会進行は、国際学部の Robert Hughes 教授が務めた。12 名の教員の参加があった。

④ 高校地理必修化に関する研修

9 月 22 日に開催された日本地理学会において、高校・大学教員向けの公開講座地理総合講習会の「次期高校学習指導要領の公表をうけて」で、文部科学省の指導要領が、どのように変化し、どのように教育界は対応していくべきなのかのシンポジウムに、教員 1 名が参加した。「GIS 公開講習会」に参加した。

翌日の 23 日には、同学会で、和歌山で開催された地理的特性を活かした、GIS 講習会に参加し、和歌山大学学術情報センターにて「GIS で見る熊野古道」「スマホ・タブレットで行うフィー

ルドワーク」についての説明をうけ、ArcGIS Online によるマップ作成、その地理や歴史の授業における活用方法についても説明を受けた。

⑤ シラバス点検会

2019 年 2 月 13 日 11 : 30 (於 : 125 記念ホール) で、学部教員による分担で、専任、非常勤の双方のシラバスについてピアレビューをおこなった。分担および集約は教務課職員が行い、ピアレビュー結果を担当教員に送付して基準に従って修正を行った。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの 公表有無
		教員	職員	計	
5/23	EMI についての FD セミナー	12	2	14	無
7/10	PROG テスト結果説明会	24	4	26	無
2/12	シラバス点検会	30	4	34	無

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

引き続き、クォーター制の導入、海外英語実習の必修化と一部科目の英語化、全講義の英語化を PDCA により検証していくことに加え、授業評価アンケート、シラバス点検、PROG テスト、各種セミナーと、高校学習指導要領に対応した本学部の教育のあり方（高校におけるプログラミング、地理などの新規科目の必修化）に対応した FD についても実施していく。

国際観光学部

作成者 中挾 知延子

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

2017 年度は国際観光学部が発足して最初の年であった。FD 活動は、国際地域学部時から展開してきた活動に引き続き、1) 授業評価アンケートと、2) PROG 報告会や FD 講演会といった外部から識者を招聘してのイベント、3) シラバス点検会になる。授業評価アンケートは、教員間に十分に定着し、一定の成果は得ていると考えられる。また、イベントにおける異種教育現場からの講演は、普段接することのない経験談を聴くことができ、知見を広めることに大いに役立った。また、シラバス点検会では、関連分野の教員がグループになってお互いのシラバスをチェックしあうことで、同僚ではあるがそこまで知りえない授業の内容を知ることができたのは今後の授業運営に効果的であった。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

- ① 授業評価アンケート
- ② GPA 講習会
- ③ コース別プレゼンテーション 3 回
- ④ PROG テスト報告会
- ⑤ FD 講演会（テーマ：反転授業）
- ⑥ シラバス点検会
- ⑦ 特色ある授業プレゼンテーション

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

①授業評価アンケート

2018 年度春・秋セメスタにおけるアンケートを実施した。概要は以下である。なお、国際観光学部及び国際地域学部国際観光学科の合計としている。

<春セメスタ>

科目数：107 科目 回答数：のべ 3044 件

<秋セメスタ>

科目数：124 科目 回答数：のべ*件（結果は 3 月末頃返却予定）

②GPA 講習会

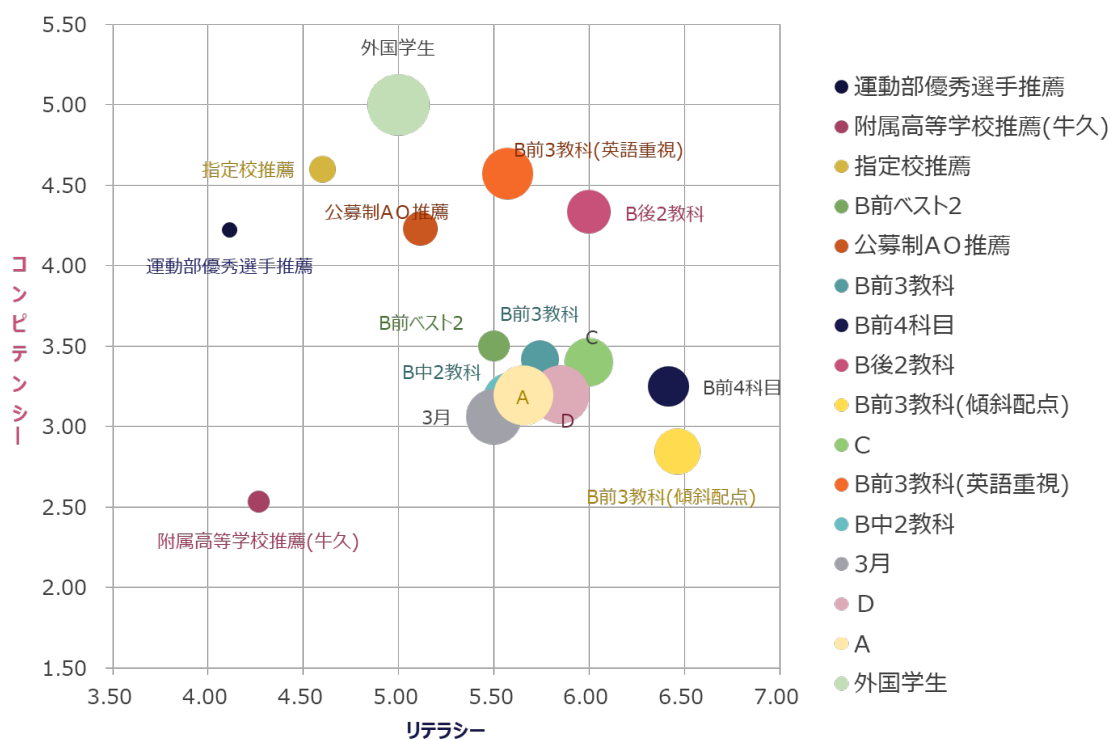
開催日時：2018 年 4 月 12 日（木）14 時 00 分～14 時 30 分

開催場所：特別会議室（8 号館）

講師：本学高等教育推進センタースタッフ

出席者：国際観光学部専任教員 27 名

本講習会のねらいは、今までにどのような教学データが蓄積されてきたかを認識すること、成績データ等から見た国際観光学部の学生を把握すること、そして、4 年間の大学生活を通じて（国際観光学部の教育課程を通じて）、学生が何ができるようになったのかという観点から、次のアクションを考えていくことである。講習では、平成 26 年度国際地域学部国際観光学部入学生を対象に、GPA と PROG に焦点をあて、入学年度春学期 GPA×4 年後の累積 GPA、3 つのコース（ツーリズム・ホスピタリティ・レジャー&リゾート）×GPA、科目群別 GPA、入試種別×GPA、入試種別×GPA+PROG といったデータとその分析結果が示された。GPA は入学時春セメと 4 年後の累積とでは平均が 3.30 から 3.32 になり、標準偏差は 0.55 から 0.50 に凝縮し、より成績の良い方へ全体的にシフトしていることが分かる。様々な結果の中で、興味深かったグラフの一つが「入試種別×GPA+PROG」であり、以下に示す。円の大小は、GPA の高低を示している。



（講習会パワーポイント資料より引用）

この表から、推薦入試に比べて一般入試で入った学生が GPA・PROG とともに高く、外国学生の GPA・PROG が B 方式と並んで際立っていることがわかるが、外国学生については、数が少なく、特定の学生一人、特に語学で極めて優秀な学生がおり、その学生の数値が影響を及ぼしているのであろうということであった。また、コース別にみると、各コースで用意され推奨されている科目群の GPA の高低がほぼ一致しており、コースに拘らず難易度のバランスがとれているといえる。卒業時の GPA が全学の 3.01 に比べ本学科は 3.64 と高くなっていることも、GPA の高い学生、いわゆる優秀な学生をより多く社会に輩出している証拠になると考えられる。

③コース別プレゼンテーション 3 回

開催日時：2018 年 4 月 12 日（木）14 時 30 分～15 時 00 分 教授会前に開催

開催場所：特別会議室（8 号館）（6 月はスカイホール）

4 月 12 日(木) ツーリズム、エグゼクティブマネジメント

出席者：国際観光学部専任教員 27 名、職員 2 名

5 月 10 日(木) サービスコミュニケーション、観光プロフェッショナル

出席者：国際観光学部専任教員 32 名、職員 2 名

6 月 14 日(木) 観光政策、英語担当

出席者：国際観光学部専任教員 33 名、職員 2 名

国際観光学科のカリキュラムでは上述の 5 つのコースに分かれており、学生は 1 年次秋 semester で選択して興味あるコースに進むようになっており、原則として卒業まで変更は認められていない。コースごとに推奨される講義科目や、コースメンバー優先のインターンシップ科目などが用意されており、学生は将来のキャリアデザインを同じくする仲間と切磋琢磨して学修するようになっている。コースごとに教員もグループ化されており、ゼミはその学生に限定といった硬い縛りはないが、1 学年の人数の多い学生をコースで分けて面倒を見ていくということにしている。ただ、コースが異なると別のコースでどのような取組を行っているのかが教員間で徐々に希薄になっていく。そこで、教員間で情報共有の目的で、学科のすべてのコースを十分に認識しておくことをねらいに各コースのプレゼンテーションを企画した。コースに加えて、すべてのコースにまたがる英語担当教員から、学科の語学学習及び国際活動についての説明もしてもらった。これらのプレゼンによって、お互いに各コースの理解、そしてコース間リンクできる学修内容の認識が深まったと考えられる。※別添でプレゼンテーション資料あり（ツーリズム・エグゼクティブマネジメント・英語担当プレゼンテーション分）

④PROG テスト報告会

開催日時：2018 年 7 月 12 日（木）13 時 30 分～14 時 15 分

開催場所：125 記念ホール（8 号館） 講師：㈱リセアック

出席者：国際観光学部専任教員 31 名、職員 2 名

現在、「社会人基礎力」、「学士力」といった、大学教育を通じたジェネリックスキル育成への期待が高まっている。PROG(Progress Report on Generic Skills)は、学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同で開発した新しいタイプのプログラムで、学士教育を通じたあらゆる段階において、学生のジェネリックスキルを可視化するツールとして役立てることができるというものである。PROG はジェネリックスキルをリテラシーとコンピテンシーの2つの観点から見るものであり、本学ではリテラシーを「知識活用力」とコンピテンシーを「行動実践力」と定義し、学生へのアンケートによって測られている。

報告会では、本学部学生の結果について、全学や近接分野の学部とも比較しながら、学年別、入試経路別にデータが示され、アンケート関連分析の結果も説明された。学科のアドミッションポリシーとディプロマポリシーを再確認し、それに応じた学生の資質を客観的に知る良い機会になったと考える。

⑤FD 講演会

開催日時：2019 年 1 月 10 日（木）13：00～14：00

開催場所：125 記念ホール（8 号館）

テーマ：「反転授業を組み合わせたアクティブラーニングの実践」

講師：森澤正之氏（山梨大学大学院総合研究部工学域 教授・教育国際化推進機構 大学教育センター 副センター長）

出席者：国際観光学部専任教員 31 名、職員 2 名

従来の授業形式は、授業中に知識を獲得し、授業時間以外の例えば自宅での復習においてそれら知識を基に応用問題を解いたりするものであった。それに対して反転授業（FL、フリップラーニング）は、授業時間以外、主に予習時間に知識を獲得し、授業ではその知識を基にディスカッションや問題を解いていくという、いわば内容をひっくり返した授業形式である。ここで重要なのは、反転授業における自宅などでの学習は予習ではなく、授業の一部ということである。そのため、大学での授業はその続きという認識である。ICT やスマートメディアの発達と普及により、学生は自宅で苦勞なく知識獲得のための動画を閲覧できるようになったことも反転授業を下支えしている。最初教員からは、知識の動画作成の手間が大変かかるのではないかという空気があったが、説明では 10 分でも OK で、アプリを使って通常の授業をする感覚で容易に作成できるということであった。講師が実際に反転授業で用いた動画や大学での授業の様子などが映し出され、大変理解しやすかった。講演後、質問もさかんに行われ、教員からは「今度試しにしてみたい」「思っていたよりも簡単にできそう」などという声があった。すべての担当授業に用いる必要もなく、最初は 1 つの授業で試みるということも薦められた。また、反転授業の結果、学生の理解度が大幅に伸びたことを示すデータもあり、今後活用できる有力な授業方法の一つであるという認識に至った。※別添で講演のパワーポイント資料あり

⑥シラバス点検会

開催日時：2019年2月14日（木）12時00分～13時30分

開催場所：8601 教室（8号館6階）

出席者：国際観光学部専任教員 31 名、職員 2 名

専門分野にしたがって教員を4つのグループに分け、グループの中で自身以外の教員のシラバスを点検した。大学全体でのシラバス作成指針に則ったループリック及びチェック項目に従って、修正の必要があるか否かについて相互チェックをした。一昔前までは教員の講義内容やシラバスは、他の教員からは「聖域」とされ、お互いにチェックをするなど想像もつかなかった時代もあった。しかし、近接分野の同僚教員がどんな内容の授業を行っているのか知り合うことは興味深いことであり、自身の教育活動の啓発にもつながる。形式・内容双方のチェックをすることは意義があった。

⑦特色ある授業プレゼンテーション

開催日時：2019年3月7日（木）13時00分～14時30分

開催場所：125 記念ホール（8号館）

出席者：国際観光学部専任教員 21 名、職員 3 名

2名の教員による授業の紹介が行われた。

- 「ホテル開発論」 飯嶋好彦教授

日本国内のホテルの公開しているデータから、いくつかの項目（年間総売上、部門別比率、客室稼働率など）に注目し、データから経営に必要な知見をエクセルを用いて計算させて学習させる。また、データからどのようなことがらが読み取れるのかについて解説することで、ホテル開発のための知識を身につけるように指導している。数字にアレルギーのありがちな文系の学生に対して、目的意識を持たせて計算のアウトプットから見えてくるホテル経営についての知見を学生に理解させる努力を行っている。

- 「観光ファイナンス」「経営分析論」 吉岡勉准教授

財務三表を用いて企業価値を算出したり、資産利益率の計算を身近な例を用いて指導している。真のアクティブラーニングを目指して、学生が復習を通じて自発的に授業で学んだ算出方法をほかの会社に適用したりすることを促している。数字を扱う作業であるが、数字ありきではなくイメージを重視し、理屈ありきの数字を習得させる。なぜこのようになるのかと学生に考えさせるために、すべてを教えず、知的好奇心によってその先を知りたくさせる工夫をしている。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの 公表有無
		教員	職員	計	
4/12	GPA 講習会	27	0	27	無
4/12	コース別プレゼンテーション	27	2	29	無
5/10	コース別プレゼンテーション	32	2	34	無
6/14	コース別プレゼンテーション	33	2	35	無
7/12	PROG テスト報告会	31	2	33	無
1/10	FD 講演会（反転授業）	31	2	33	無
2/14	シラバス点検会	31	2	33	無
3/7	特色ある授業プレゼンテーション	21	3	24	無

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

31 年度も、1) 授業評価アンケート、2) FD 講演会を主体として展開したい。新学部が 3 年目に入り、新学部の 2 年間の成果と課題を基に近々カリキュラム改正も念頭におかれており、新カリキュラム策定に有用なものとなるような FD 活動を行うようにしていきたいと考える。さらに、最後に行った同僚の教員による授業の紹介は今後も持続的にしていき、お互いに良い点を取り入れ合って、学生の学修をよりよいものに充実していきたいと考える。

国際観光学部 ～ツーリズム・コース～

2018年4月12日

◆実習、演習、インターンシップ科目◆

募集型企画旅行演習

良質なパッケージツアーの企画の裏側を、実際にツアーに参加して体験します。旅行保険の安心安全のしくみ、旅行業界のルールなど、旅行がどのような仕組みで成り立っているかを産学連携の講義で学びます。ツーリズムコースは原則履修してください。

本演習は、受入企業の受入枠の制約があるため、「必修」とはなっていない。(希望者多数の場合は選抜を実施する)
2017年度秋学期に行われた本演習の報告会が4月18日6時限に実施されるため、積極的な参加を推奨する。(1602教室)

グローバルディストリビューション科目関連

科目ナンバリング	科目名	配当学年	単位数	履修モデル				
				ツーリズム	エグゼクティブマネジメント	サービスコミュニケーション(A・Eライン系)	観光プロフェッショナル	観光政策
TOS214	グローバルディストリビューションシステム論	2	2	○	◆	◆A	◆	◆
TOS216	グローバルディストリビューションシステム実務演習I	2	2	○	◆	◆A	◆	◆
TOS291	グローバルディストリビューションシステム実務演習II	2	2	○	◆	◆A	◆	◆

コースのあるべき姿

本コースの目的:

「高度な市場調査力と企画能力を有し、新しい観光を創造できる人材の育成」

これまで、旅行産業における基礎力涵養を企図し、

国内・総合旅行業務取扱管理者試験の受験

を推奨してきた。

コースの目的を踏まえると、語学に加え、経営学・商学領域、具体的にはマーケティング、管理会計、統計学基礎といった汎用スキルや、歴史・宗教・文化などの素養にも目配りしその人材育成を目指すべき、との意見も存在する。

「ツーリズムコース」とは

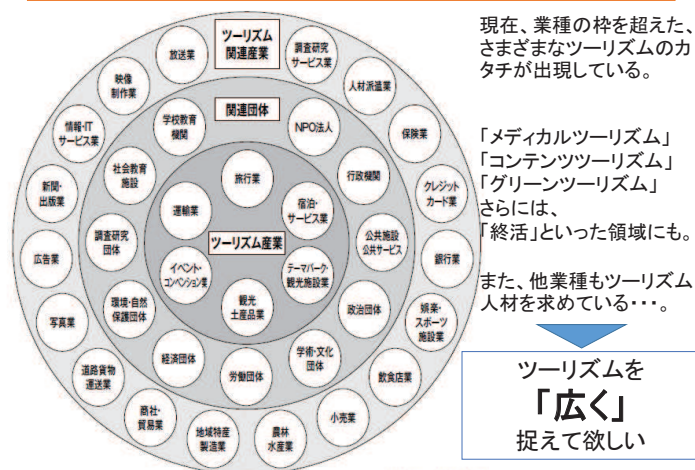
【ツーリズムコース】

このコースは、旅行業界に進む希望を持つ人に開かれたコースです。そのため、旅行企画を実践するために日本および世界の文化、歴史、地理に興味を持っている人、多様な主体をまとめあげることが求められるため、さまざまな人びとと出会うことに喜びを感じる人、旅行産業の発展のために、信じた道を突き進むことができる推進力を持っている人、資格取得を目指して熱心に勉強する習慣を身につけている人を求めています。

グローバル・ディストリビューション・システムとは何か

GDS(Global Distribution System)とは、世界中の航空会社、ホテル、レンタカーなどの予約・発券ができるコンピュータシステム。セーバー、アマデウスなどが有名。航空会社、ホテル、レンタカー会社の予約システムと接続されており、リアルタイムでの予約が可能。世界各国の旅行会社に設置もしくは旅行会社の予約システムと接続し販売されている。

ツーリズム産業の広がり



コースのあるべき姿

当コースの目標を若干幅広に捉え、現状の目標を活かしつつ、旅行産業で活躍できる素養を持った人材育成の方向性を模索してみたい。

「広く観光に携わる」には、どんな職業においてどんな活躍ができるのか、またそのためには何を学ぶべきかなどを整理し学生に示す必要がある。

観光政策コースとの「違い」も明示する必要も出てくるため、当該コースとの連携・確認(要は、棲み分けに関わる意思疎通)が必要になろう。

「ツーリズムコース」の特徴

観光に関するプランニングやマネジメントを中心に学び、観光ビジネスが企画・立案できる将来の観光ビジネス・リーダーを養成する。

【その具体的な将来像】

旅行会社
法人セールス
ツアー企画・手配
ビジネストラベル

交通関連企業
(鉄道、航空、バスなど)
航空会社(セールス、事務職)
鉄道会社(駅務、乗務、事務職)
バス会社(事務職、企画職、セールス)

観光関連企業
観光関連商社(アメニティ、土産品などの企画、コンサル、セールス)
MICE関連(企画、運営)
空港、商業施設(企画、運営)

観光地開発・経営企業
地方銀行(法人融資)
観光開発、不動産、リゾート施設(企画、セールス)

観光関連団体、自治体
業界団体(旅行業協会など)
DMO(Destination Management Organization、観光協会、コンベンションビューローなど)
日本政府観光局(JNTO)
地方公務員

コースの課題とは何か

ツーリズムコースの目玉となっている募集型企画旅行演習について、出発前講義、旅行の運営を知るためのツアー参加による調査、実施後の報告会などを実施している。今後、その内容・運用方法(スケジュールを含む)について質の維持・向上へ向けた議論を行う必要がある。

学生がその将来像を固める過程でツーリズムコースの中でも旅行会社への就職を望まない学生も少なからず出てきた。その他関連産業領域にも活躍できる場があることを示す機会をつくる必要性も存在する。

コースの課題とは何か

「卒論」の取り扱いについて今後コース内で検討進めていきたい。

4年間の総仕上げとしての卒論の意義は認めるが、一方で過去のエビデンスが重視される「論文」が果たしているのかどうか、との意見が提示された。

卒業要件については論文執筆に限定せずに、卒業制作としてプレゼンなども入れる可能性について検討を行いたい。

国際観光学部 国際観光学科 エグゼクティブ マネジメント コース ガイダンス

吉岡 勉
Tsutomu YOSHIOKA

Faculty of International Tourism Management, Toyo Univ.

エグゼクティブマネジメントコース 目指すは、ジェネラル・マネジャー

計数や法律に明るく、マネジメント能力を有するリーダー人材を育成

計数や法律に明るく、
マネジメント能力を有するリーダー人材を育成

Executive Management Course Aim to become a general manager!

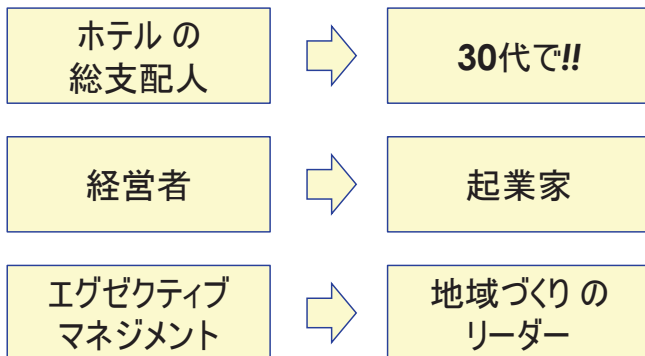
Developing leaders who are good with figures, have extensive knowledge of laws, and possess management capabilities

Developing leaders who are good with figures, have extensive knowledge of laws, and possess management capabilities

Faculty of International Tourism Management, Toyo Univ.

さらに（たとえば）、、、

5



Faculty of International Tourism Management, Toyo Univ.

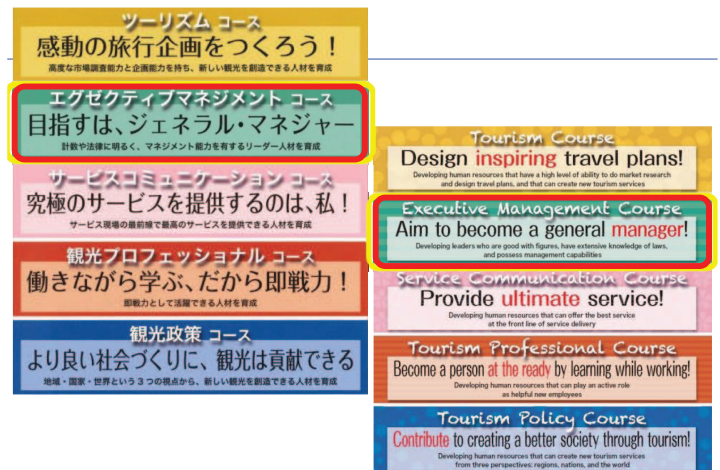
2年次、3年次で受講できる専門科目の関連性

7

分野	2年次	3年次
業界	- ホテル経営概論 - 旅館・リゾート経営論 - F&Bビジネス経営論 - セレモニー経営論	- 温泉総論 - ホスピタリティ施設開発論 - ブライダル事業論 - 葬祭ビジネス論
-	エグゼクティブ演習	

・「業界」は、特に興味ある業界を中心に学ぶ

Faculty of International Tourism Management, Toyo Univ.

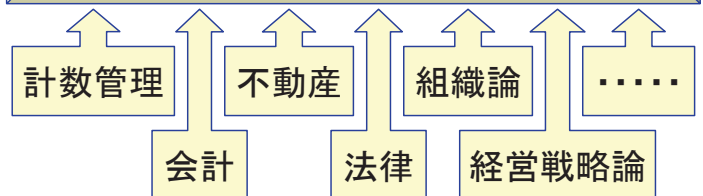


Faculty of International Tourism Management, Toyo Univ.

エグゼの教育は何を目指しているか

4

ホテルなどホスピタリティ業界における
総支配人や経営者になる人材を
育てること



Faculty of International Tourism Management, Toyo Univ.

2年次、3年次で受講できる専門科目の関連性

6

分野	2年次	3年次
会計	- ホスピタリティ計数管理 - 観光ファイナンス - 財務諸表論 - 簿記会計論	- 経営分析論 - コスト管理論
不動産	不動産関連法	不動産学
起業	起業論	- ホテル開発論 - 中小企業論
組織	- ホスピタリティ人的資源論 - 経営戦略・組織論	- 女将・総支配人論 - リーダーシップ実践演習

Faculty of International Tourism Management, Toyo Univ.

外国語教育

- 英語教育
- 初習言語教育
- 留学生の日本語教育
- 留学（短期・長期）

英語教育－概要

目的

- インターンシップ・留学への準備
- 将来観光現場で利用できる英語スキルを磨く
- TOEICスコアを向上させる
- 英語を好きになる

担当教員

専任教員2名、契約講師5名、非常勤講師5名

英語カリキュラム

外国語教育 科目 (14)	選択科目 (8)	英語教育 A (1) English for Tourism Industry (1)		英語教育 B (1) English for Tourism Industry (1)	
		Reading and Vocabulary A (1)	English Tourism Projects (1)	Reading and Vocabulary B (1)	Applied Reading (1)
選択科目 (3)	英語 I	(1)	ドイツ語 I	(1)	ドイツ語 I
	英語 II	(1)	フランス語 II	(1)	スペイン語 II
	英語 III	(1)	フランス語 III	(1)	ハンガリー II
	英語 IV	(1)	スペイン語 III	(1)	ハンガリー I
選択科目 (3)	英語 V	(1)	スペイン語 IV	(1)	中国語 I
	英語 VI	(1)	中国語 II	(1)	中国語 III
	英語 VII	(1)	中国語 IV	(1)	中国語 V
	英語 VIII	(1)	中国語 VI	(1)	中国語 VII

英語教育－特徴

- クラスの中では原則英語のみを使う
- TOEICスコア及び英語コミュニケーション能力でクラス分けされている
- FD活動
- 英語でのクラス外活動を評価する

クラス外活動ガイドライン

- ECZ - いつ誰と話し、どのぐらい(最低30分)、内容は何かを、150単語程度でメモ帳に書いて先生に見せてください。(現地のスタンダード取得は不要)
- オンラインリスニング - 以下のサイトを利用して、40分ほどのリスニングで何をどのように学習したか、150単語程度でメモ帳に書いて先生に見せてください。
<http://www.eslcity.com/index.htm> - リスニングサイト (10ポイント中2ポイント申請提出まで可)
- インターネットビデオ - "TEDTALKS"という教育ビデオサイトを利用して、自分が見たビデオの内容を150単語程度で感想をメモ帳に書いて先生に見せてください。(10ポイント中3ポイント申請提出まで可)
<http://www.ted.com/talks>
- インタビュー - 学内の留学生や学外の外国人など3人以上に、簡単なインタビューをしてください。自分で考えた質問(5つ以上)でインタビューし、その答えや感想を150単語程度でメモ帳に書いて先生に見せてください。(10ポイント中2ポイント申請提出まで可)
- ビデオ録画 - クラスの友達2・3人と会話をスマホなどで録画し、担当の講師にメールで送ってください。課題(トピック)は自由ですが、複数の課題について話すことを避け、1つの課題に絞り(例: クラスの課題、最近のニュース、これからの計画など)、30分程度話を継続してください。ファイル名には必ず、録画されている全員の名前、クラス名と撮影した日付を記入してください。
例えば、"Rina Anki Jan Hagura - class 13 - Oct 25" 記録した会話をToymet Aceまでアップロードしてください。(10ポイント中2ポイント申請提出まで可)
- Lunchtime language and culture sessions, 各英語先生は春学期も秋学期も、(昼休みをかねて言語学習および文化紹介の講義を実施する予定) 定めて1回参加すると1ポイントになります(150単語の感想文を書いてください)
(10ポイント中2ポイント申請提出まで可)
- その他の活動 - そのほか自分で何か活動の思いいたら、担当講師と個別で相談してください。(例: ランゲージセンターのライティング講座、IELTS・TOEFL・TOEICの受験講座、スピーチコンテストなど)
(10ポイント中2ポイント申請提出まで可)

クラス外活動の記録書・レポート

クラス外活動ポイント - cut out and put in back of your BS note books -

You get 1 point for each activity. Write the date you did the activity and the activity types (in act). The types are as follows.

ECZ - オンラインリスニング - インターネットビデオ - インタビュー - ビデオ録画 - Lunchtime language and culture sessions - その他の活動

Date:	Date:	Date:	Date:	Date:	Date:	Date:	Date:
Act:	Act:	Act:	Act:	Act:	Act:	Act:	Act:
Date:	Date:	Date:	Date:	Date:	Date:	Date:	Date:
Act:	Act:	Act:	Act:	Act:	Act:	Act:	Act:
Date:	Date:	Date:	Date:	Date:	Date:	Date:	Date:
Act:	Act:	Act:	Act:	Act:	Act:	Act:	Act:

Activity target:
3 points by week 5, 6 points by week 8, 10 points by week 13/14



seminars and lunch time events

teacher	Theme	involving
??	how to navigate ted talks	TED talks are popular all over the world. Learn what they are, and how to find talks (and subtitles and transcripts in your language) and how to use them for learning English.
??	A tip for English listening	Explain how to listen to English better using a part of a song. The focus is the "word linking" to show how to listen.
??	Communicating with American students online	Talking about student experiences from the J-Pop culture project, and working on techniques for commenting on other people's ideas.
??	listening to podcast	Podcasts are easy to access listening tool. We will look at how to use podcast for fun and learning English.
??	English through movies	Watching your favorite movies in English is an excellent way to improve your English ability. In this presentation I will provide some tips on how to study English from movies effectively and we will study a scene from a popular movie.

去年のTOEIC 結果

1年生 2017年4月 (n=385)

	Minimum	Maximum	Mean	Std. Deviation
Listeningスコア	5	495	227.57	72.704
Readingスコア	55	425	175.17	68.238
Totalスコア	130	900	402.74	128.410

2年生 2017年1月 (n=231)

	Minimum	Maximum	Mean	Std. Deviation
Listeningスコア	85	485	255.06	72.594
Readingスコア	65	440	193.38	69.381
Totalスコア	155	925	448.44	132.623

1年生 2017年12月 (n=382)

	Minimum	Maximum	Mean	Std. Deviation
Listeningスコア	75	485	262.47	77.780
Readingスコア	45	440	194.31	78.344
Totalスコア	160	945	456.65	146.958

2年生 2017年12月 (n=229)

	Minimum	Maximum	Mean	Std. Deviation
Listeningスコア	23	495	281.63	81.498
Readingスコア	40	445	205.75	78.155
Totalスコア	140	940	488.32	148.864

多言語学習

- ▶ ドイツ語、フランス語、中国語、ハングル、スペイン語
(国際地域の時代はこれに加え、ロシア語・タイ語・マレーインドネシア語が関与)

れていた、徐々に語学の種類を減らした)

- ・ I・II・III・IV、「...語圏の言語と文化」(このうちIの再履修クラスあり)
- ・ 非常勤講師が占める割合が高い。日本人と母語話者の配置を工夫。
- ・ 専任が中心の言語では同じ教材を使うようにしている。
- ・ 2017年度よりサービスコミュニケーションコースを中心に中国語クラスを新設した
- ・ 初習外国語・・高校での多言語選択科目、日本における国際化の進展、外国語学習環境の進展により、初習であって初習ではないケースが増えている。

英語教育に関する課題とこれからの対

課題	対策
1 授業外の自律的学習に対する意識が低い	Lunchtime sessions・イベントを増やす
2 語学クラス人数の制限を設ける(25人)	契約講師を増やす
3 カリキュラムの強化へ	学部独自のテキストへの作成
4 語学クラス人数の制限を設ける(25人)	契約講師を増やす
5 全体のグローバル化を進む	卒業まで英語でのサブメジャーを設ける

初修外国語外国語の問題点と提案

- ▶ 現状の問題点①
初修外国語の必修単位3単位及び、週1コマ履修⇒学習時間の不足。
* 実用に足りる語学力が身につかない
* 交換留学や海外インターンシップなど海外大学との学生交流の実質化に支障
- ▶ 提案①
* 1年次からの週2コマ履修化(もしくは1年次春学期1単位、秋学期2単位履修)、
* 2年次からの中級〜上級クラスの充実。
* 卒業に必要な単位数の増加。必修6単位+選択必修もしくは選択科目として+2単位必要
- ▶ 提案②
TLP(Trilingual Program)の導入。入学時に一定以上の英語力のある学生に対し、他の外国語を集中的に学ばせることによって、母語、英語、その他外国語の3言語の運用能力のある人材を育成。
詳細は (<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/info/academics/zenki/tlp/index.html>)
- ▶ 入学前、入学以降に取得した各種外国語能力検定スコアによって初修外国語の選択必修単位を一部、認定する。

国際観光学部の留学生

- ▶ 2年生: 中国7人、台湾2人、韓国2人、トルコ1人、ベトナム2人、マレーシア2人、ミャンマー1人、ネパール1人(計18人)
 - ▶ 1年生: 中国12人、韓国3人、ネパール1人、ベトナム3人、スリランカ1人(交換留学生: 台湾2人)(計22人)
- 2018: J-CAT試験結果(N1相当9名、N2相当12名)
- 1年生の必修言語として日本語・英語を合計週5コマ学ぶ。2年生以降は英語の必修科目のみ。
- N1に単位を認定している(今年は9名、2年次)。
- 外国語の感性を持っている人が多く、初習外国語(選択)も受講しに来る。一方で日本語を得意とする学生であっても、日本語は難しいという根強い意識もある。

今後の展望

- ▶ 昼食会・遠足・外部講師による講演・スピーチコンテストへの参加、チューターと知り合うなどキャンパス生活での様々な日本人との接点を準備する。
- ▶ チューターを支援し、行事をコーディネートするTA(長期アルバイト)を配置する
- ▶ と同時にN1の取得がこれからの学生にとってはN1、取得している学生には日本語における次の目標(ビジネス日本語検定・弁論大会での上位入賞など)を主に1年次において提示する。

学内短期プログラム



- 特徴:
1. アメリカでトップ3のホスピタリティ・マネジメントスクールでの学習
 2. 大学内ホテルやレストランでの接客、サービス、調理などの実習(Hands-on)

基本構成

午前 ●ホスピタリティ・マネジメント専門クラス
午後 ●ESL 英語クラス
週一 ●実習、●校外施設訪問、●ショッピングモール
週末 ●観光地訪問



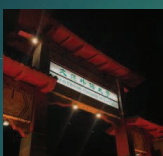
- 特徴:
1. 中国語の経験なしから始める

基本構成

午前 ●中国語勉強
午後 ●現地の文化交流
週末 ●フリータイム

長期留学(学部内)

文藻外語大学(2017年度交換留学開



留学に参加できる部局間交流協定校他に

「香港理工大学」
「キーン大学」(中国・広州)

海外研修に関する課題とこれからの対策

課題	対策
1 プログラム・1年次全員が海外研修などの実施、期間は春休みに集中	各委員同士で検討していく
2 中レベルの学生をもっと海外に送る	ブリッジプログラムを推薦・海外研修に対する意識を深める
3 部局間交流協定校の地域をより広げる	ヨーロッパの大学にもアプローチ

反転授業を組み合わせたアクティブラーニングの実践

森澤 正之

山梨大学
大学教育センター 副センター長

山梨大学 大学院 総合研究部工学域 教授
(工学部 情報メカトロニクス工学科担当)



大学教育の質的転換

- ✓ 国際化・情報化の進化による労働環境の変化
- ✓ 技術革新による職種の喪失と創出
- ✓ 雇用形態そのものの流動化

知識の伝達と獲得

自ら考え行動できる学力

主体性を持ちグローバル化に対応できる「真の学力」

主体的・対話的で深い学び

大学教育の質的転換

自ら考え行動できる学力

主体性を持ちグローバル化に対応できる「真の学力」

主体的・対話的で深い学び

知識の伝達と獲得

講義形式を継続するだけで大丈夫？

反転授業を組み合わせたアクティブラーニング

講義形式

知識の獲得と定着を主体とする授業

教員が目に見える効果を得るためには

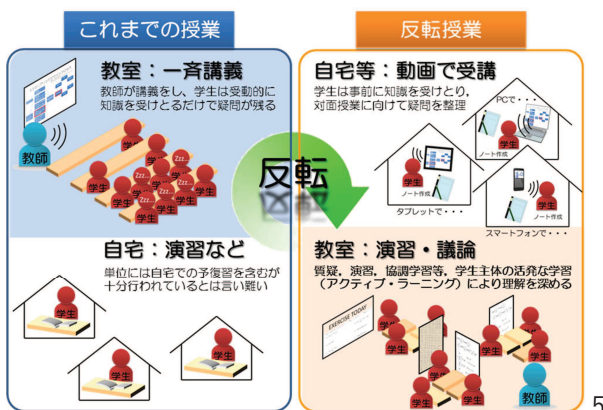
- ・毎回
- ・授業時間の半分以上

知識伝達量を減らさずに

アクティブラーニング

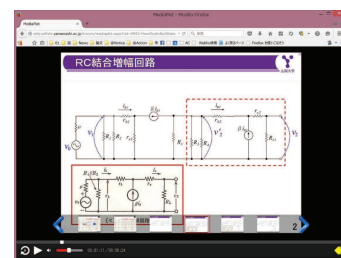
スライドキャストシステムを用いた反転授業を組み合わせたアクティブラーニング

反転授業 (FL/フリップトラニング)

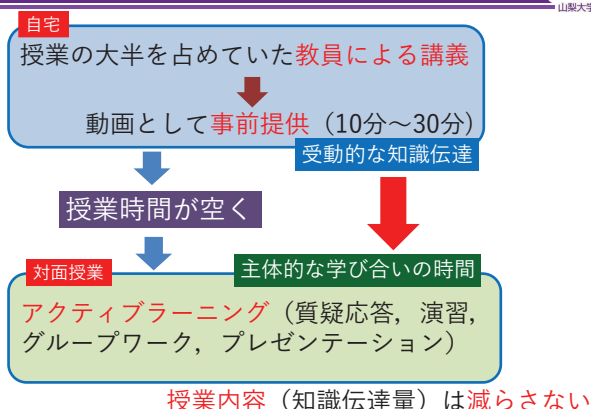


スクリーンキャストシステム

- 一般のPCにマイクを接続して、PCの画面と音声を同時記録するシステム
- マウスポインタの位置も記録
- ネットワークを使用して配信



反転授業を組み合わせたアクティブラーニング



おおまかな実施方法

事前学習

授業の3日前に10~15分の事前学習動画を2~3本を提供
学生には事前のノート作成を指示する。

対面授業

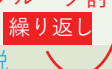
【授業前】4人グループでホワイトボード (WB)を用意して着席

事前学習ノートの自己評価と相互評価

対面授業中に動画の内容の講義は行わない

WBを使った4人グループでのグループ学習/グループ討論

巡回し、必要ならば全体発表、教員による解説



1



山梨大学の取組の紹介 (5分)



<http://youtu.be/HrnHTrPPNRA>



19

実施科目



組込みプログラミング1	演習向き	演習あり	1年後期
C言語によるプログラム、構造体、ポインタ、線形リスト、再帰プログラム			
6年間			
アナログ回路1	演習向き		2年前期
電気回路の基礎、直流回路と交流回路の回路解析			
5年間			
アナログ回路2	演習向き		2年後期
電子回路、トランジスタ増幅回路の理解と設計			
5年間			
組込みアーキテクチャ			3年前期
コンピュータのハードウェアの理解、特に、CPUの動作の理解と設計			
5年間			

試験得点分布 組込みプログラミング1



演習向き 演習あり

平成24年度 (FCなし)	得点	平成25年度	
97	00-09	7	低得点者 減
9831110	10-19	49	
954442	20-29	68	
99981	30-39	2589	
9976511100	40-49	03468	
96610	50-59	2246788	
965554331	60-69	03345677889999	
86541	70-79	0001112333466770	
8833300	80-89	0456	
	90-99	100	高得点者 増
N=56 平均値58.1 中央値58		N=55 平均値69.7 中央値77	

22

平成24年度 (FCなし)	得点	平成25年度	平成26年度	平成27年度
97	00-09	低得点者 減		
9831110	10-19	7		
954442	20-29	49		
99981	30-39	68		888
9976511100	40-49	2589	458	6
96610	50-59	03468	2579	0125799
965554331	60-69	2246788	1223569	12334477889
86541	70-79	03345677889999	0112224677899	001223455556889
8833300	80-89	0001112333466770	00123333334455567899	0133556689
	90-99	0456	0111224556	00004566
	100			
N=56 平均値58.1 中央値58		N=55 平均値69.7 中央値77	高得点者 増 平均値76.9 中央値80	N=55 平均値72.0 中央値73

得点	平成28年度	平成29年度
00-09		
10-19	4	
20-29		01
30-39	02	0
40-49	15799	04
50-59	112234455578	33499
60-69	12223466788	1112334444555677999
70-79	014556779	122233346699
80-89	0011112234455569	001122455678999
90-99	00134	001
100		
N=60 平均値67.8 中央値69		N=59 平均値69.4 中央値71

25

試験得点分布 アナログ回路1



演習向き

平成25年度 (FCなし)	平成26年度 (FCなし)	得点	平成27年度
		00-09	
		10-19	
3	1	20-29	3
876640	65	30-39	457
87650	77531	40-49	6677999
9887743220	9400	50-59	12233477779
9999888776200	8888764322111000	60-69	011223444466789999
98776655333200	986543332000	70-79	002345689
	96665210	80-89	000689
	751	90-99	15
		100	
N=55 平均値62.6 中央値67	N=50 平均値66.0 中央値68		N=57 平均値63.0 中央値64

27

平成25年度 (FCなし)	平成26年度 (FCなし)	得点	平成27年度	平成28年度
3	1	00-09	低得点者	
876640	65	10-19		8
87650	77531	20-29	3	5
9887743220	9400	30-39	457	0012
9999888776200	8888764322111000	40-49	6677999	13358
98776655333200	986543332000	50-59	12233477779	0002222233556688999
	96665210	60-69	011223444466789999	22445777788999
	751	70-79	002345689	0002222233556688999
		80-89	000689	01347
		90-99	15	002347
		100		
N=55 平均値62.6 中央値67	N=50 平均値66.0 中央値68		高得点者 平均値63.0 中央値64	N=55 平均値69.5 中央値70

得点	平成29年度
00-09	
10-19	
20-29	
30-39	67
40-49	35667
50-59	046789
60-69	01146667778899
70-79	0001111223335788999
80-89	0111224555
90-99	223
100	
N=58 平均値68.7 中央値70	

28

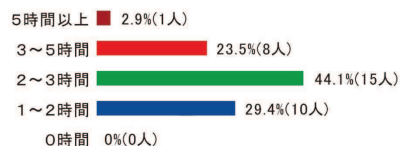


演習向き

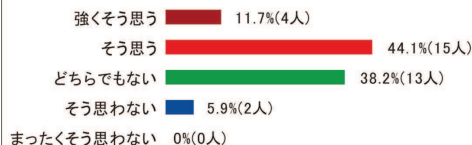
平成23年度 (FCなし)	得点	平成25年度	平成26年度	平成27年度
00-09	7	6	6	6
10-19	3	3	3	3
20-29	3	3	3	3
30-39	6	156	589	589
40-49	88	4666	2668	2668
50-59	22344469	00000135579	23355678889	23355678889
60-69	0002255566799	256999	333	333
70-79	11245666789	5679	5679	5679
80-89	0277	244444689	678	678
90-99	35	37	23	23
100				
N=35 平均値56.6 中央値61		N=42 平均値65.4 中央値66	N=43 平均値62.4 中央値60.5	N=31 平均値59.8 中央値58

30

この授業の授業時間以外に学習に充てた時間は1週間あたり何時間ですか

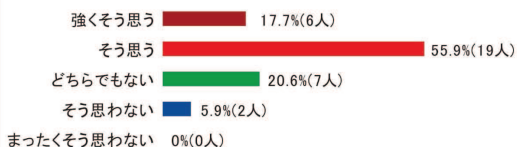


事前学習ビデオの閲覧とアクティブラーニングを組み合わせた反転学習によって学習意欲が高まったと思う

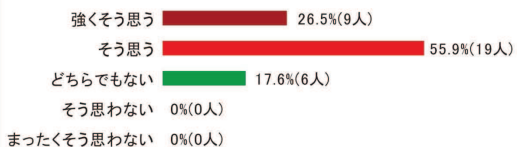


31

授業中のグループワークなどのアクティブラーニングによってこの科目についての理解が深まったと思う



事前学習ビデオを閲覧して授業に臨んだことによってこの科目についての理解が深まったと思う



32

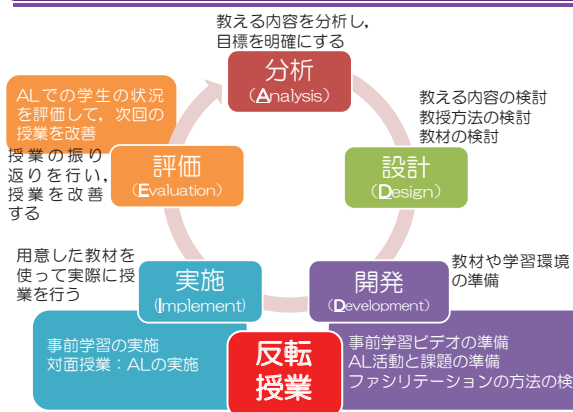
反転授業+アクティブラーニング導入後の気づき



- ✓ 事前学習動画資料の作成は手間がかからない。
- ✓ 反転授業と連携させて一定以上の時間をかけてアクティブラーニングを行うと授業改善が進む。授業中に学生の状況を良く把握することができ、目に見える改善ができる。
- ✓ 事前学習で何をどこまで学習させて、それに対して対面授業で何を行うのかという両者の連携の大切さを痛感。
- ✓ 授業時間中の教師と学生、学生同士のインタラクションは大幅に増える。
- ✓ 理解力の高い学生、低い学生のどちらにも効果がある。

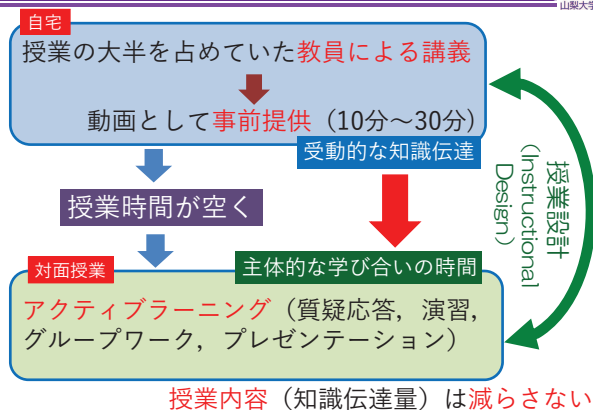
33

反転授業+アクティブラーニングをADDIEモデルで考えると



34

反転授業を組み合わせたアクティブラーニング



グループワーク 重要性の高い項目



事前学習	講義と同レベルの説明
対面授業	✓ 事前学習の内容を再説明するような課題 ✓ 時間があれば、何人かの学生による全体発表 ✓ 必要に応じて、教員による再説明、解説 ✓ 応用問題、演習問題 演習向き項目の場合

事前学習	簡単な説明
対面授業	✓ 詳細な説明を行わせる課題 ✓ 教員による解説 ✓ 応用問題、演習問題 演習向き項目の場合

37

グループワーク 演習タイプ



事前学習	講義と同レベルの説明
対面授業	✓ 応用問題、演習問題 ✓ 時間があれば、何人かの学生による全体発表 ✓ 解答の提示 ✓ 必要に応じて、教員による解説

39

38



事前学習 講義と同レベルの説明

- 対面授業
- ✓ 解説などは特に行わない
 - ✓ 演習課題だけ提示する **演習向き項目の場合**
(必要に応じて)

事前学習 行わない

- 対面授業
- ✓ 教員による講義

39



反転授業は授業のオンライン化ではない！事前学習動画は手段の一つ。ビデオが素晴らしいければ、うまくいくわけではない。対面授業との連携こそが鍵！

- ✓ 簡易な学習ビデオでも効果は大きい
- ✓ 15分の事前学習動画で、対面授業の30～50分のアクティブラーニングの時間が取れる
- ✓ 事前学習を確実にするため、ノート作成、クイズ、ごく簡単なレポートなどを実施する（ビデオを見ながらできる程度のもの）

40



事前学習は予習ではない！何をどこまで事前に学習させて、それに対して対面授業で何を行うのか、などの授業設計が大切。

- ✓ 事前学習の内容は、対面授業で講義をしない
- ✓ 事前学習をしてこなかったら。最初の1回くらいしてこなくても大丈夫。妥協しない。最初が肝心。
- ✓ 対面授業では、4名1組のグループで協調型グループワークを実施。個人ワークも組み合わせる。

41



アクティブ・ラーニングで授業改善が進む。FCとALを連携させることで、学生の状況を良く把握することができ、目に見える改善ができる。

- ✓ うまいかなかった回があっても大丈夫。むしろ、学生の問題点が明らかになったことを喜ぶべき。授業は15回ある。
- ✓ 授業の種類やクラスの雰囲気に合わせて15回の授業の改善を怠らない。

42



- 反転授業を組み合わせたアクティブラーニングを5年にわたって実施し、その改善を模索してきた
- 授業時間中に行う教師と学生の活動は大きく変わる。教師と学生、学生同士のインタラクションは確実に増える。
- 理解力の高い学生、低い学生のどちらにも効果がある。
- 正直教師の準備作業量は増える。事前学習動画の作成より、FCと連携したALの設計が大変。しかし、教員の目に見える効果がある。

43

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

これまでのように生命科学研究科の FD 活動と連携を保ちつつ、昨年度においてはそれまで継続してきた取組については引き続き実施を行い、それに加えて新たな取組を 1 つスタートさせた。具体的には、引き続き実施が、(1) 授業評価アンケートの作成と結果に基づく所見の作成、(2) 新入生基礎学力調査とこれに基づく学習支援プログラムの実施、(3) 外部講師による FD・SD 講演会、(4) 学外 FD 推進ワークショップへ専任教員および板倉事務課職員の派遣、であり、新規の取組が、(5) 全国私立大学 FD 連携フォーラム・ビデオ教材の視聴、であった。

これら(1)～(4)の内、(1)や(2)の参加・実施率が高いのは当然のことながら、(3)や(4)への教員の参加率をどう捉え向上させていくかが課題であった。例えば 2017 年度においては(3)の研修会を 3 回行ったが、出席した教員数は各回とも所属教員の 3 分の 2 前後（20 名前後）であった。参加率としては必ずしも悪いとは言えないのかもしれないが、理想は全教員が参加することであるので、教員が出席しやすい実施のあり方を求めて何らかの改善・改革が必要と言えた。

その視点から 2017 年度の研修会の実施態様を見ると、授業期間中に実施した 2 回よりも授業期間外（2 月）に行った研修会で参加人数が若干多かったことから、2018 年度は 3 回の研修会を 2 月の特定の 1 日（実際には 24 日）に集中して行ってみることとした。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

上記のような課題意識を踏まえ、今年度は以下の①～⑤のような活動を行った。③が研修会に関するものである。

①授業評価アンケートの作成と結果に基づく所見の作成

本学部では、とりわけ学生との繋がりが薄くなりがちな講義科目に関し、これを学生の実態を把握する上での貴重な機会と捉えている。そこでアンケート項目に生命科学部独自のオプション項目を加えるとともに、全学的な実施のフォーマットでは見落とされてしまう履修生 10 名以下の科目について、ToyoNet-ACE を用いて独自にアンケートを行った。

②新入生基礎学力調査とこれに基づく学習支援プログラムの実施

新年度が初まったばかりのタイミングで新入生に「生物」と「化学」のテストを実施し、学生の学力の実態を把握すると共に、講義のクラス分けや個人の学習をサポートするための資料

とした。また新入生歓迎会を学生食堂で行い、各教員が新入生と積極的に対話をすることで、教員の学生理解の向上に努めた。

③外部講師による FD・SD 講演会

生命科学研究科の FD 活動と連携しながら 3 本の講演会を実施した。先述のように、2 月 24 日（金）の午後に板倉キャンパスで集中的に行っている。

- 『respon の活用法と可能性について』（藤原喜仁・東洋大学情報システム部・課長補佐）
- 『理系学部での初年次教育とリメディアル教育：ユニバーサル段階における課題の多様化を踏まえて』（沖清豪・早稲田大学文学学術院・教授）
- 『大人数授業でのアクティブラーニング：ワークショップ型授業のススメ』（川西諭・上智大学経済学部・教授）

④学外 FD 推進ワークショップへ専任教員の派遣

これまでのように生命科学部予算内に FD 予算を確保し、学部教員が学外の FD 講演会等に参加する場合の参加費や交通費の支出を行っている。また同様の予算措置が高等教育推進支援室でもなされており、そちらの利用も可能であった。

⑤全国私立大学 FD 連携フォーラム・ビデオ教材の視聴

本学が加盟している「全国私立大学 FD 連携フォーラム」は、立命館大学にサーバーを設置して FD・SD 活動用のさまざまなビデオ教材をオンデマンド方式で提供している。本学部教員の希望者は、高等教育推進支援室と連絡してアクセスのためのアカウント申請および取得を行い、各人で教材の視聴を行なった。

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

上記の番号に対応させて実施状況もしくは結果等をまとめる。

①授業評価アンケートの作成と結果に基づく所見の作成

本学部の授業評価アンケートの実施状況に関し、2018 年度春学期における実施率は 100%（全学平均 98.3%）、回答率は 61.65%（同 46.11%）であった（秋学期の数値はまだ未定）。学生の意見を汲み上げ授業改善に反映させる基本的な機会として、今後も実施と活用を続けていく。

②新入生基礎学力調査とこれに基づく学習支援プログラムの実施

学生を学力別にグループ化することは、各人に「わかる授業」を保証する必要な措置と考えられる。また多くの新入生と穏やかな雰囲気の中で対話をすることも、その後の授業や指導に役立つと、教員間で実感されている。

③外部講師による FD・SD 講演会

最初に記したように、今年度は授業期間外の1日を確保して講演会を集中的に開催した。その参加状況は次の表の通りであった。

参加した本学部教員はほぼ全員が3本全ての講演に出席したが、全学部教員数に対する出席者の割合は1/3～1/2程度と振るわない状況となった。今回たまたまの結果なのかもしれないが、どうしても外部講師のスケジュールを優先せざるを得ず、それに本学部教員が自分の都合を調整するといった方法が原因となった可能性はある。板倉という遠隔地への講師招聘が難航すること、そして大学教員の多忙化といった構造的要因が考えられる。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの 公表有無
		教員	職員	計	
2/22	『respon の活用法と可能性について』	14	1	15	無
同上	『理系学部での初年次教育とリメディアル教育』	14	2	16	無
同上	『大人数授業でのアクティブラーニング』	11	1	12	無

④学外 FD 推進ワークショップへ専任教員の派遣

本学部もしくは高等教育推進支援室の予算で本学教員が参加した学外研修会等は以下の通りである。他の財源で学外 FD 活動に参加した教員については把握しきれていない。

〈学部予算〉

- 『学生の主体性と問題解決能力を育成するアクティブラーニング授業メソッド体験ワークショップ』（共催：東洋大学経済学部経済学科・リアセック）（2019年1月26日、於・東洋大学 白山キャンパス 10号館）

- 『2018 年度第 4 回千葉大学アカデミック・リンク/ALPS セミナー 政策と現場から考える大学のカリキュラムマネジメント』（主催：千葉大学アカデミック・リンク・センター）（2019 年 2 月 8 日、於・千葉大学アカデミック・リンク・センター）

〈高等教育推進支援室予算〉

- 『平成 30 年度 FD 推進ワークショップ(新任専任教員向け) 大学教員の職能開発と FD』（主催：日本私立大学連盟）（2018 年 8 月 9～10 日、於・グランドホテル浜松）
- 『物理学・化学・機械工学・建築学・経営工学・電気通信工学・土木工学・生物学グループ 分野連携アクティブ・ラーニング対話集会』（主催：公益社団法人 私立大学情報教育協会）（2018 年 12 月 26 日、於・法政大学 市ヶ谷田町校舎 デザイン工学部棟）
- 『＜第 4 回 CTLT×DCC 産学交流フォーラム＞ 汎用的能力の育成を目指した教養教育改革』（主催：早稲田大学 大学総合研究センター）（2019 年 1 月 25 日、於・早稲田大学 早稲田キャンパス 大隈小講堂）
- 『平成 30 年度 FD のための情報技術研究講習会』（主催：公益社団法人 私立大学情報教育協会）（2019 年 2 月 26～27 日、於・追手門学院大学）

⑤全国私立大学 FD 連携フォーラム・ビデオ教材の視聴

学部教員 31 名のうち、26 名がアカウントを取得した。この e-learning 的な方法は、時間や場所の制約に縛られない FD 活動として捉えられている。よって視聴や活用等のあり方については本人のペースや判断に任せている。

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

来年度に向けては、まず現在実施中の活動は継続して取り組むこととしたい。それに加えて、学部長等との意見交換を通して 2 つの新たな活動を構想中である。

生命科学部は人材の養成に関する目的として、「生命の総合的理解の上に立って、地球社会の発展に貢献する創造的思考力、かつ倫理観を併せ持った人材を育成」することを掲げている。この目的は学生の教育に於いてだけでなく、その教職員の成長や資質能力の向上にも深く関わると解される。そこで生命科学分野との関連をもった FD・SD の取組として、遺伝資源の取得機会や利益配分に関して 2010 年に採択されたいわゆる「名古屋議定書」と、教職員の教育・研究力や学生指導力とが絡まった講演会等を実施したいと考えている。

また、教職員の学生理解力や対応力を増進するための取組も企画していきたい。本学部のように理系の学部においては、研究室等における人間関係が複雑化しやすい。そうした状況の中で悩みや問題を抱える学生に対しどのように対処・支援していくべきか、学内の関連部署との連携も視野に入れながら考えていく機会を持ちたい。

なお、FD 研修会等への教員の出席率の向上については、引き続き検討課題として残っている。よって上記の計画についても、できるだけ多くの教員が参加できる途を模索しながら実現化を目指したい。

ライフデザイン学部

作成者 高野 龍昭

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

2018 年度のライフデザイン学部における FD 活動の推進については、基本的には 2017 年度までの活動を継続・充実させることを主眼とした。具体的には、①FD 研修会の開催、②学生との意見交換会の実施、③シラバス点検、④授業評価アンケート、⑤FD 研修会等に参加しやすい支援体制の検討、⑥TA 研修会の実施を主な活動とした。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

① FD 研修会の開催（計 2 回）

* 講演「気づきから始まる発達障がい学生への支援～大学生のディスレクシア(読字障害・書字障害)：事例から学ぶ障がいの理解と支援のあり方～」

- ・講師 杉田記代子氏（東洋大学ライフデザイン学部教授・医師）
- ・日時 2018 年 10 月 24 日（水）15：30～16：30 （朝霞キャンパス情報棟）
- ・参加者 教員 49 名、職員 8 名、他キャンパス職員 3 名（計 60 名）

* 講演および演習「アクティブ・ラーニング～協調学習の導入とその具体的な進め方～」

- ・講師 白水始氏（東京大学高大接続研究開発センター教授）
- ・日時 2019 年 1 月 9 日（水）14:30～16:00（朝霞キャンパス講義棟）
- ・参加者 教員 48 名、職員 4 名（計 52 名）

② 学生との意見交換会の開催

* 授業内容や施設・設備、学生生活に関する学生からの要望の聴取・意見交換

- ・日時 2018 年 6 月 19 日（火）12:15～13:00（朝霞キャンパス講義棟）
- ・参加者 学生：45 名、教員 8 名、職員 3 名

③ シラバス点検

* 「シラバス作成のためのガイドライン」に則り、次年度開講全科目について、FD 委員を中心に組織した点検委員（学科・専攻各 3 名）によりシラバス点検を行った。

- ・実施時期 2019 年 2 月～3 月

④ 授業評価アンケートの実施

*専任教員は各学期2科目（通年4科目）、非常勤の教員については1科目の授業評価アンケート（対学生）を実施した。

・実施時期 2018年6～7月 および 2018年12月～2019年1月

⑤ FD研修会等に参加しやすい支援体制の検討

*教職員がFD研修会等に参加しやすい体制を取るため、研修会を教授会直後に実施した。

⑥ TA研修会の実施

*TAと教員で『TA/SAハンドブック』に基づいたディスカッションを行った。

・日時 2018年4月18日（水）13:00～15:00（朝霞キャンパス講義棟）

・参加者 TA（大学院生）1名、教員1名

3) 2018年度におけるFD・SD活動の成果と課題 【C】

① 本年度実施したFD研修会は学部教員およびFD委員からの提案に基づいて実施したものである。いずれも学部の教育活動に関わる重要なテーマであり、教職員の関心も比較的高く「参考になった」「実際に取り組んでみたい」との感想が多かった。

② 学生との意見交換会は、今回も学生ならではの視点からの貴重な意見があり、授業ならびに教育環境の改善に向けた有意義な意見交換会となった。学生からの意見をより幅広く吸い上げるためにグループディスカッション形式で実施したが、学生からは授業の進め方に関する意見（レポートなどの評価詳細や教員コメントの希望など）、TGLに関する意見（英語教育の拡充）や施設・設備に関する意見などが出された。こうした意見については関係部局等で検討し、学生のニーズに沿った対策等を考えていく。

③ シラバス点検については、今年度はガイドラインの見直しもあり、作成方法について各教員への周知・徹底が不十分であった。同時にシラバス点検の作業も手間取ってしまい、例年よりも相当に遅れ、FD委員・教員とも戸惑いが大きかった。

④ 授業評価アンケートは、教員及び学生もToyonet-ACEを使用した授業評価の実施に徐々に慣れつつあり、スムーズな実施・活用に結びついている。

⑤ FD研修会は昨年度に同様に実施した。英語での授業実施に関するテーマがFD委員会では議論されたが、具体的内容が固まらず、それについては見送りとなった。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの 公表有無
		教員	職員	計	
4/18	TA 研修会	1	TA : 1	2	なし
6/19	学生との意見交換会	8	3	56 (学生 45)	なし
10/24	FD 研修会（発達障がい学生）	49	11	60	なし
1/9	FD 研修会（アクティブラーニング）	48	4	52	なし

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

2019 年度のライフデザイン学部における FD 活動の推進については、2018 年度に実施した内容を、さらに拡充させていくことが必要であると考えている。

FD 研修会の開催については年度内 2 回の開催を維持しながら、学部教員の希望を参考にし、よりニーズに沿った研修テーマを検討していきたい。今年度見送られた英語での授業実施に関することをテーマとした開催は是非とも実現したい。また、大学教育における喫緊の課題等について、他学部との学部横断型講演会開催の可能性を模索していきたい。

学生との意見交換会については、昨年度から実施しているグループディスカッション形式の取り組みが好評であり、学生の意見等も踏まえながら、次年度以降も継続的に実施したい。

シラバス点検については、今年度は若干の混乱もあったことから、点検体制の見直しを図りたい。なお、シラバス作成方法について各教員に周知・徹底する方策についても検討を要すると考えられる。点検の時期については、可能であれば 12 月のシラバス入力前の実施が望ましいが、事務的な時呈を考えると、年明けの 1 月での実施が妥当と考えられる。

授業評価アンケートについては、Toyonet-ACE を用いた授業評価のシステムが浸透し始め、各授業でスムーズに実施できている。引き続きスムーズな実施が行えるよう、学部内での体制作りを整えたい。

また、TA 研修会は、少人数ではあるが、朝霞キャンパスにおいて継続的に開催していきたい。なお、次年度の研修会から、TA だけでなく SA の研修会参加も周知し、さらなる授業改善の一助としたい。

総合情報学部

作成者 土田 賢省

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

総合情報学部では 21 世紀のユビキタス・コンピューティング・ネットワーク時代に必要不可欠な情報通信技術に習熟し、社会を先導できる「第一級の情報の創り手・使い手」の輩出を目的として FD 活動を行ってきた。この教育方針を実現させるために、これまでの具体的な活動として、1. 春・秋学期の出席状況確認、2. 学修相談会、3. FD 講演会・講習会、4. 全科目シラバス点検、5. 基礎教育・専門教育・ICT 教育の学修支援に関する取り組み、6. 春・秋学期の履修相談、7. 全学年の学生に対して担当教員を割り当てるクラス制度、を行ってきた。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

- ① 春・秋学期の出席状況確認 (4～5 月, 9～10 月)
- ② 学修相談会 (9 月 22 日、3 月 16 日)
- ③ FD に関する講演会・講習会 (12 月 13 日)
- ④ 全科目シラバス点検 (1 月)
- ⑤ 基礎教育・専門教育・ICT 教育の学修支援
- ⑥ 全学年の学生に対して担当教員を割り当てるクラス制度
- ⑦ 英語による専門科目開講
- ⑧ 英語学習法に関するセミナー (4 月 5 日)

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 出席状況確認

出席不足の学生に電話連絡をし、状況の確認を行っており、その結果について、情報を共有した。

② 学修相談会

年 2 回学生及び父兄との学修相談を行いその結果を教員間で共有し、学生にフィードバックした。

③ アクティブラーニングに関する講習会（2018/12/13）

東京理科大学の渡邊雄貴による「授業設計とアクティブラーニング - 主体的な学びをめざして」と題目された講演会が開催された。講演概要は、講義のインストラクショナルデザインとアクティブラーニング型授業、自立的学習者を目指した自己調整学習法である。

④ 全科目シラバス点検

平成 31 年度の全科目シラバス点検を教務委員会が中心となって行い、各学科の教務委員と教員が科目担当者に必要な修正を依頼して、滞りなく行った。

⑤ ICT 教育の学修支援

総合情報学部では、独自に情報学習支援室を開設し、学生同士が学び教え合う場を用意し、1 年次からの ICT スキルとコミュニケーション能力醸成の支援を行った。1 年次の必修演習科目において、IT パスポート試験合格程度の情報処理技術の習得を目指した。

⑥ クラス担任制度

全学年の学生に対して担当教員を割り当てるクラス制度を活用し、学生と教員間のコミュニケーションを密に行える支援を行っている。具体的には、1 年次春学期必須科目として基礎ゼミナールⅠをクラス単位での講義体制で実施したり、個別履修相談を実施した。

⑦ 学部としてのグローバル化に対する取り組み

4 年次を対象にした英語による専門科目として、専門英語講読Ⅰ、Ⅱをゼミ単位の少人数クラスで開講し、研究室単位で専門に関連させながらグローバル化に対する取り組みが行えた。

海外語学研修として、2 月 19 日より 3 週間、ハワイのマウイ島にあるハワイ大学にて開催した。これは、現地学生との交流、マウイ島の文化などを直に学べるユニークな海外研修である。今年度は教員 1 名が全行程にわたり同行し、安心・安全で充実した学習環境が確保されている。研修参加者は語学研修で学んだことについて、2 回のグループプレゼンテーションと 1 回の個人プレゼンテーションを実施することになっている。

7 号館 1 階に SGU ルームを開室し、英語学習全般、留学等グローバルに関する学習相談や学習支援を行った。本年度は内丸助教を中心に対応や指導に当たり、本学部より交換留学生 2 名が最終選考に通過し、2019 年度夏より半年間米国の本学提携校に 1 名、ISEP で米国の大学に 1 名それぞれ派遣されることになった。

コンピテンシー評価と PROG テストの結果を GPA と比較して今後のカリキュラムの参考にした。秋学期には、授業アンケートを実施したが、概ね良好な結果であった。

昨年度から総合情報学部でスタートした「英語カラオケ・チャンピオンシップ」（12月15日開催）では、14名が決勝進出を果たした。学部教員や協賛企業の審査員らによる審査の結果、優勝者から3位および特別賞が表彰され、協賛企業から豪華賞品が贈られた。参加者にはTGポイント5、来場者にも1ポイント授与された。来年度以降も開催する予定であるが、白山を会場としての開催の要望が他学部の参加者等から寄せられているので、今後も国際教育センターと交渉していきたいと考えている。また、このイベント参加への一つの動機付けとして、常時7号館シアターにカラオケ最新機 LIVEDAM STADIUM が設置されており、誰でも自由に利用できる。。

⑧ 英語学習法に関するセミナー（2018年4月5日）

例年4月初旬の新入生ガイダンス時に、東進ハイスクール講師、一般財団法人実用英語推進機構代表理事で、文部科学省の「英語教育の在り方に関する有識者会議」の委員でもある安河内哲也氏による、英語学習法に関するセミナーを開催し、新1年生全員が参加した。

4) 2019年度に向けたFD・SD活動実施計画 【A, P】

これまで通りの活動の継続と共に、各コースでの学習意欲，授業改善のためのFD活動を提案し，実施していく予定である。また、グローバル化推進の一環としての海外研修の候補地として、これまでのハワイ・マウイ島に代わり、アメリカ本国の大学を新たな候補先として検討を開始している。

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

食環境科学部は、食環境科学科（フードサイエンス専攻、スポーツ・食品機能専攻）と健康栄養学科の2学科からなる。これまでのFD活動として①新入生基礎学力調査の実施とこれに基づく学習支援プログラム、②FD/SD講習（講演）会、③FD推進ワークショップ（新任専任教員対象）への派遣および報告会、④TOEIC Workshop・English Loungeにおける英語プログラム、⑤TA・SA講習会、⑥安全講習会、⑦学会発表・参加奨励金制度、⑧学部独自の評価項目を含む授業評価アンケート、⑨食育作文コンテストによる食育活動といったプログラムを実施し、高い成果を得てきた。

特に昨年度は、FD・SD研修活動として、「発達障害のある学生への合理的配慮と就学支援：発達障害の可能性のある学生を含めた大学での対応」「聴覚障害学生支援の実践 -情報保障から情報支援へ-」「eduroamとビデオ会議システムの活用」の3講演を開催し、教職員から高い評価を得た。

本年度においては、これまでと同様の取り組みとさらに以下のような活動を実施した。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容

- ① 管理栄養士国家試験出題基準（ガイドライン）改定、国家試験対策に関する講演
- ② 英語論文の読ませ方のコツセミナー

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題

①管理栄養士国家試験出題基準（ガイドライン）改定、国家試験対策に関する講演

3月6日（水）10時～11時30分に（株）インターメディカルの今井皇希様をお招きし、平成31年度より改定され施行される管理栄養士国家試験のガイドラインについてご講演いただいた。講演内容としては、管理栄養士国家試験と管理栄養士養成の教育との関係について、これまでとの出題内容との違い、出題数、出題形式についてである。

また他大学の管理栄養士国家試験対策の状況や模擬試験の活用状況、学生に対する国家試験の勉強方法の推奨方法等についてもお話をいただいた。健康栄養学科の教員にとって授業や国家試験対策に直結する非常に充実した講演会となった。今後も本学の国家試験対策を充実させていくために、本講演のようなFD研修会を実施していきたい。

②英語論文の読ませ方のコツセミナー

3月18日（月）13時20分～14時20分に（株）アルク 教育ソリューション部 英語プログラムディレクター Bence Tamas 先生をお招きし、英語論文の読み方のコツを指導するための効果的な指導方法についてご講演をいただいた。非常に分かりやすく、学生に指導する際の実践的なスキルをご教授いただき、参加した多くの教員から好評を得た。本企画は、食環境科学部と大学院食環境科学研究科の合同FD研修会として開催したが、生命科学部、生命科学研究科の教員も多数参加し、板倉キャンパスの国際化に資する上でも非常に充実した研修会となった。今後も国際化推進の一環として、本講演のようなFD研修会を企画していきたい。

本年度は、FD・SD合同の研修会を開催出来なかった。次年度は、FD・SD合同で開催できる企画を教職員で話し合い、実施していきたい。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	教員 参加者数	職員等 参加者数	参加者数 合計	ホームページでの 公表有無
3月6日（水）	管理栄養士国家試験ガイドライン改定・国家試験対策に関する講演	16	0	16	無
3月18日（月）	英語論文の読ませ方のコツセミナー	20	0	20	無

4) 2019年度に向けたFD・SD活動実施計画 【A, P】

来年度のFD・SD活動として、今年度実施の管理栄養士国家試験出題基準（ガイドライン）改定、国家試験対策に関する講演をさらに発展させ、e-ラーニングを活用した国家試験対策方法や効果的な模擬試験の活用法、模擬試験の成績をデータベース化し、国家試験合格までの効果的な教育方法の構築等について、外部講師をお招きし、FD活動を実施することを検討している。また、今年度行う「英語論文の読ませ方のコツセミナー」を発展させた内容で、英語教育に関するプログラムを企画することを検討している。

来年度も教職員のFD・SDに関するニーズを調査しつつ、本学部の状況に即したプログラム、教育の更なる質的向上を目指したプログラムを企画していきたい。

情報連携学部

作成者 情報連携学部長 坂村 健

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

情報連携学部（Information Networking for Innovation and Design:INIAD）は、2017 年 4 月に開設した新学部であり、2018 年度は開設 2 年目にあたる。

INIAD の「人材の養成に関する目的」は、

コンピュータ・サイエンス教育を基盤とし、チームを組んで、コンピュータを使いこなし、情報を通して連携し、素早くアイデアを形にできるような人材を養成する。

プログラミングを含むコンピュータ・サイエンスの教育をすべてのコースの基盤とし、新しいビジネスを構築できるマネージャー人材、新しい公共をシステムとして構築できるコーディネーター人材、新しい製品と新しい情報サービスを技術とデザインの両面から具体化できる人材など連携イノベーションを起こせる中核人材を養成する。

となっており、教育の特徴としては、以下の点あげられる。

- ・ 1 年次にはすべての学生がプログラミングとコミュニケーションを集中的に学び、情報連携の素地を身に付ける。2 年次からはエンジニアリング、ビジネス、デザイン、シビルシステムの 4 コースに分かれて専門的な知識や実践的なスキルを身に付け、3 年次には各コースの専門性を活かしたコース横断のチーム実習を行い、社会での働き方を身に付ける。
- ・ 入学初日から学生一人一人が自分の PC を持参することを義務付けており、授業は黒板やホワイトボードのない教室で教材をプロジェクターに投影して行う。課題提出や試験についても、各自の PC で電子的に行うことを中心としている。
- ・ MOOCs を活用した反転型の教育を重視しており、知識を受け取る部分は授業前に配信された教材で予習をしておき、どこでも何度でも学修することができる。一方、キャンパス内では少人数教室で、教員や学生同士の対話中心の授業や、グループワークやプレゼンテーションなどを行う。

- ・ 教員組織は、専任教員と特別教員（ハーフタイム）と助教によって構成されており、講義科目と演習科目、実習科目を連携させた教育や、複数コース開講の科目では同一のシラバス、同一の教材を使うなど、教員のチームによる教育を実施する。

現状としては、まだ完成年度を迎えておらず、年次計画を遂行していく段階ではあるが、アジャイル型の学部運営とすることを方針としており、教育研究に関してもプロジェクトごとに随時見直し、改善を行ってきている。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

2018 年度については、エンジニアリング、ビジネス、デザイン、シビルシステムの 4 コースの教育が開始した。

INIAD の各コースでは、カリキュラムマップに則り、各科目の順次制、関係性を明確にした上で、体系的に学修していくことを学生に求めており、2、3 年生のうちは、自分の所属するコースが提供する講義科目、演習科目はすべて必修である。

しかし一方で、あくまでコースは学科ではないため、カリキュラムは情報連携学科 1 学科としてのカリキュラムであり、最終的な到達目標やディプロマ・ポリシーは一つである。

このため、各コースの到達目標、各科目の教育内容、実施体制等については、執行部との複数回のディスカッションを経て決められる。

また、各科目のシラバス作成や実際の授業実施にあたっては、執行部が了承したコースの方針に則り、各教員が作成したものをコース内でチェックしたり、確認、共有したりして進めている。

これらは、特段 FD 研修会という名称で行われることはないが、学科やコース、同一科目、関係科目の各単位において、SNS におけるチャンネルや共有ドライブが作られ、インターネットや対面でのミーティングが、学部長の指示の下、教員の主体性、必要性によって随時行われている。

また、その結果は適宜学部長に報告され、学部共通の課題については、学部全体のチャンネルや教授会でディスカッションし、改善方策を決定していくこととなる。

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

INIAD では、卒業生にディプロマ・ポリシーに記載した知識、能力、スキル等を確実に身に付けさせるために、INIAD の 2、3 年生の各コースの科目はすべて必修となっており、1 年生から 4 年生までの必修科目は 84 単位にも及ぶ。

その上、各科目はカリキュラムマップに明示されているだけではなく、実際の授業も教員間の連携によって、順次制、関係性を持って開講されているため、一つの科目が不合格となった際のリスクが他学部よりも大きい。

そのため、学生には丁寧な履修指導の上で、必死に勉強しなければ卒業できないという風土を作っていかなければならない。この点に関しては、現在様々な取組を開始しているが、今後も継続的に学部やコースで取り組んでいく必要がある。

また、教授会で複数回、学生の学修状況について議論した結果として、学部として、出席について特に厳しく取り扱うこととしている。

これは科目の不合格者の多くが、授業を欠席した場合に、その回の内容については自分学修をしなければならないという認識が十分でなく、結果として、授業についていけず、単位取得ができなくなってしまうためである。

そのため 2018 年度から、主要科目では MOOCs を使用し、学内 Wi-Fi からのみ回答できる課題によって出席を確認する方法を導入した。

一方、優秀な学生のモチベーションを高めるために、GPA の上位学生や、プログラミングで優れた成果を出した学生、外部のコンテスト等で入賞した学生など、優れた学修成果を上げた学生に対しては、積極的に表彰することとした。

また、FD・SD ではないが、教員についても、学会での受賞など、優れた研究成果を上げた場合には、教授会で報告した上で HP で掲載するようにしている。

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

開設 3 年目となる 2019 年度には、いよいよ学部教育のひとつの核となる 3 年次のコース横断の連携実習を実施する。

この連携実習では、2 年次からエンジニアリング、ビジネス、デザイン、シビルシステムの 4 コースに分かれていた学生が、1 学年 400 名の中で、学生主体でコース横断の 80 チームを作り、共通テーマに対してプロジェクトを立案、遂行し、成果を発表する。

まさに、INIAD のテーマである文芸理融合、連携力、多様性を体現する重要科目であり、初年度である 2019 年度については、共通テーマを「2020 オリンピック・パラリンピックに貢献する」に設定した。

学生には学年当初に実習の趣旨や、プロジェクト/研究の進め方、チームの作り方、ロジカルシンキング等について授業を行った後、学部長の下で 20 名程度の専任教員が、やはりチームを組んで学生のチームを指導する。

ただし、指導にあたっては、「学生が自主的に取り組むもの」とし、学生にはグループワークを進めるための場所と SNS を提供するが、教員が具体的な進め方を細かく指示することはない。

このことで、「自分の頭で考える」「考えて自分から動く」という姿勢だけではなく、多様な視点を意識すること、想像力を使って立場を変えてみることに、個だけでなく全体を考えると、実社会でプロジェクトを進めていくために必要な能力を育成する。

実施にあたっては、1 年間の実習を第 1 フェーズから第 4 フェーズに分け、それぞれの到達目標を明確にするとともに、教員においても各チームの状況や指導方法、報告や発表の際のチェックポイントや基準などを、ミーティングや SNS 上で共有することとしている。

2019 年度では、上記の連携実習の運営や教育方法を、学部全体として開発、実行するとともに、適宜ブラッシュアップ、改善していくことが、最も主要な取組といえる。

5) その他

その他、現在は学生の教育と直接関係していないが、現在 INIAD では、文部科学省からの委託事業（enPiT-PRO）や企業からの直接の委託により、社会人の再教育プログラムも多数実施している。

INIAD では、目覚ましい進化を続けている最新技術について、社会に出る前の若者が学ぶ場としてだけでなく、一度社会に出た人々が学び直す場を提供することも、新たな大学の役割として重要であると考えており、2018 年度では、IoT や AI、データサイエンス等について、最短 1 週間の集中プログラムから半年間のプログラムで 300 名程度の社会人を受け入れている。

これらの教育プログラムは、INIAD が学生向けに実施した教育経験や教材などを元に、専任教員が現役の社会人に向けた実践的な教育を行うことで、学部の新たな展開だけではなく、学部教育のさらなる充実、専任教員の FD・SD にもつながっていくことが期待できる。

研究科／センターFD・SD 活動報告

文学研究科

作成者 野間 信幸

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

文学研究科における FD 活動は、研究科が包摂する 8 専攻が持つ学問・研究面での性格の違いや多様性によって、共通の活動計画や目標等を設定しにくい状況があった。「文学研究科は、それぞれ内容の異なる 8 専攻から構成されていて、文献を主要な研究対象とする分野、語学や文化事象を対象とする分野、あるいは精神作用や教育論を対象とする分野など多岐にわたる範囲を網羅する。従って研究科全体に共通する研究法や論文作成法に関わる指導は、確立したものが無く、どうしても担当教員の持つ主観的、或いは経験的方法に依ることが多い。」（昨年度報告書）と説明するとおりである。

ただし、それでも数年間にわたって実施してきた「授業評価アンケート」の蓄積があり、FD に特化したものでなくとも「OB・OG 講演会」のような催しがあると、それらを FD 活動の観点から利用すべく検討を試みており、様々な機会をとらえて活用する姿勢を保ってきた。

なお、昨年度の反省点として、授業評価アンケートの回収率を改善することと、領域を異にする 8 専攻で一体感を持った活動を志向することを、今後の課題として申し送りされている。ただし問題によっては、一朝にして改善できる性質ではないものも含まれているので、焦らずに検討してゆくことが必要と思われる。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

- ① 講演会等の開催を検討
- ② 「授業評価アンケート」の結果を受けて FD の観点で検討

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 講演会開催の検討

6 月・7 月にかけて、文学研究科で講演会が開催できないものかと、研究科長から提案があり、研究科長にもテーマや人選まで含めて多方面に打診していただいた。しかし結果的には、文学研究科の課題や問題意識に合致する講演テーマおよび講師が見つからなかったこともあって、本年度は開催を見合わせるようになった。

講演会の内容が、研究科委員の教育活動や授業力の向上に益するものでないかぎり、たとえば委員会の時間の一部を割いて講演会を催しても、有効な時間を送ったとは認められないであろう。そこで本研究科では講演会の開催を急ぐことをやめ、もっと有効でふさわしい活動はないものかと、一度落ち着いて考案してみることにした次第である。もっともそれは講演会を否定するものではないが、せっかく 8 専攻という多様性を擁するわけだから、それを強みとしてで

きる活動はないか検討したのである。本年度中にすぐさま結論を導き出すことはできなかったが、あらゆる活動がマンネリ化や形骸化から免れない以上、考察と検討の時期があっても無駄ではないと考える。

② 「授業評価アンケート」の結果を受けてFDの観点で検討

「授業評価アンケート」の実施は、研究科内の自己点検・評価委員が行うが、アンケートによって得られた結果については、FD活動の観点からも活用すべく、研究科内で共有されている。

さて昨年度も問題になった回収率の低さであるが、残念ながらこれは本年度も改善されなかった。アンケートをする側もされる側も、双方にマンネリによる倦怠感が拡散しているのかもしれない。ともあれ、FD活動の立場からこのアンケートの活用を図ろうとするなら、「自由記述」欄に学生（院生）の「生の声」が反映されており、貴重な資料となる。

以下に、文学研究科が共有すべき「声」を、要約していくつか拾い上げておく。

まず、本研究科への志望動機であるが、「専門の指導を受けることができる」というのが各専攻に共通するところである。研究科の存在意義は保たれている、といえよう。

授業の成果については、教員との対面授業に意義を認める意見があり、少人数教育が有効であることがわかる。また院生研究発表会にも、期待を示す記述があった。

一方、改善点として寄せられた意見は、同じテキストを通年で読むことに退屈感を訴えるものや、研究指導の時間の充実を求める要望があった。

これらの改善要求は、8専攻の領域の違いに関わりなく、各専攻、各教員が、直ちに検討し改善に取り組むことのできる内容である。

授業評価アンケートを通してみると、概して文学研究科のFD活動に関しては、組織的取り組みによって改善を図るものよりも、教員個人の意識改革や努力で改善可能なものが多いことに気付かされる。

4) 2019年度に向けたFD・SD活動実施計画 【A, P】

本年度は諸般の事情を検討した結果、最終的に講演会を見送ったが、来年度は条件が合致すれば講演会を催すよう努めるべく、予算は用意されている。ただしやみくもに予算を消化すればよいというわけではないので、学生の納付金がFD活動の成果として有効に還元されることを忘れずに取り組んでゆきたい。

むしろ、研究領域の異なった8専攻を抱える文学研究科としては、多岐にわたる授業形態や教育目標を理由に同一行動を取ることの難しさを感じるよりは、この多様性を維持し、それを強みとして利用できる活動を考えるべきである。たとえば本年度の授業評価アンケートに寄せられた、同じテキストを通年で読むことに退屈を訴える意見に対して、その必要性を受講生に説明しても理解は得られないかもしれない。それよりも本研究科には多彩な教員が揃っているの

で、こうした問題を克服する知恵や体験を持った人が必ずどこかにおられるはずだ。テキスト問題に限らず多方面にわたって、知恵を集め蓄積できる仕組みの構築を、焦ることなく図ってゆきたいものだ。FD 活動とは、本来そういうものであるはずで、遠くの講師よりも隣の同僚に、知恵やヒントが宿ってるかもしれないのである。

社会学研究科

作成者 桐生 正幸

1) 2017 年度までの FD 活動状況 【C, A, P】

社会学研究科では、前任の研究科長時代から、授業の内容及び方法の改善を図る組織的な取り組みを実施するため、研究科内に「社会学研究科改革ワーキンググループ（以下WGと表記）」を発足させ、研究科委員会終了後にWG会議や研究会院全体からなる全体会を開催し、積極的にFD活動に取り組んできた。2017年度は、その一環として、在籍学生に向けたアンケートを実施し、満足度と改善への希望・アイデアをすくい上げた。

それら結果を、WGにて検討したところ、増加している留学生に対する指導体制の充実や、学部学生に対する大学院進学へのPRが必要であることが認識された。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

本年度の研究科における主要なFD活動は以下の通りである。

- ① 社会学研究科改革ワーキンググループによる将来構想と学生募集に関する検討
- ② 社会学研究科FD推進委員による院生へのアンケート調査の実施
- ③ HIRC21の催しに伴う海外教員・院生を交えた研究に関する懇談会も実施
- ④ 在学生への進学PR及び留学生への指導体制に関する検討

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 社会学研究科改革ワーキンググループによる将来構想と学生募集に関する検討

定員充足が厳しい「福祉社会システム専攻」の発展的なあり方を検討するため、複数回のWGを開催し将来構想案を練り、全体会にて検討を進めた。現在の進捗は、社会人を含めた大学院進学希望者のニーズに応え、「院生が満足できる教育」を可能にする専攻を目指すことを共有したところである。また、具体的な新体制へのスケジュールも立てており、2019年度に向けた課題も明確にしている。なお、WGのメンバーは、研究科長、3専攻長、及び福祉社会システム専攻の担当教員である。

② 社会学研究科FD推進委員による院生へのアンケート調査の活動

社会学研究科FD推進委員である片山先生を中心に、例年の調査項目を踏まえ調査を実施した。

設問は、回答の手軽さのため 10 問とした。回答者の授業履修数を尋ねた Q1 に続いて、Q2～Q4 は大学院の授業に対する評価を聞き出す設問で、授業アンケートとして中心的な設問である。そしてその後続く Q5～Q9 は、2015 年年度に大学院 FD を目的に実施した学生アンケートと同じ設問・選択肢として、今後の大学院の FD 活動に資するデータを収集するために設定した設問である。最後の Q10 は、国際化の一環で導入されている英語授業の履修状況をチェックする設問である。

調査対象は、研究科に在籍する博士前期及び後期学生の 53 名で、回答率は、17%であった。

主な結果は、以下のとおりである。

「問 3 大学院の授業を受講することで得た成果、役立ったことを記入してください」

- 実務を行なう上での理論を学んだことにより仕事の質が高まったように思う。
- 色々な研究のアプローチについて学べた。
- 修士論文の執筆に資する知識(先行研究を中心に)を学べた。
- より専門的な知識を深めることができた。
- 批判的な視点。
- 学部でできていなかった所を痛感させられる上に、一研究者として研究方法を一から学ぶことができたこと。
- 統計授業で、知識を身につけられることが助かった。

「問 4 学修・研究を進める上で、思うようにいかなかった点、改善してほしい点があれば、自由に記入してください。」

- 先行研究の整理が遅くなっている。
- 社会心理の枠を拡げるようなものも欲しかった。
- 社会調査の方法論をうまく理解することが難しかった。
- 学内で院生の共同研究室が入数に対して不釣り合い。
- 予定変更を早めに情報共有してほしい。
- 自分の研究が思うように進まなかった。

これらの結果から、院生の考えやニーズをつかむことが出来、今後の教育活動に資するものとなったところである。

③ HIRC21 の催しに伴う海外教員・院生を交えた研究に関する懇談会

10/19、及び 2/22 に、韓国から教員と院生を招き、共同セミナーを実施した。各研究報告の後、双方の院生間でのディスカッション、教員も参加した懇談会を行った。

それぞれの共同セミナーの概要は以下のとおりである。

・10/19(金)：韓国から中央大学校、光云大学校の教授2名、院生4名を招き、本研究科教員5名と院生8名とで、「消費者行動の社会心理学」をテーマにし研究発表を行った後、今後の研究活動や教育活動について討議した。

・2/22(金)：韓国から成均館大学校の教授3名、院生4名を招き、本研究科教員6名と院生9名とで、「アジア社会心理学の最前線」をテーマにし研究発表を行った後、今後の研究活動や教育活動について討議した。

それぞれとも、院生が中心となり討議、懇談会を企画運営したことにより、国際的な交流のノウハウを学び、教員間でも両国における教育における情報交換ができたことは、大変有益であったと評価される。

④ 在学生への進学 PR 及び留学生への指導体制に関する検討

継続事業である学内 PR については、4月の学部ガイダンスに「大学院紹介コー

ナー」を設け、また学部教授会で、随時大学院報告を行って研究科に所属していない教員にも大学院の存在等をアピールした。

留学生については、チューターを通したきめ細かい指導を確実なものにするための人選等の工夫を重ねて、次年度に向けては学外の大学院生も活用して指導体制の充実を期すことになった。

双方とも、2019年度に向けて継続的に検討すべきと考えられた。

4) 2019年度に向けたFD・SD活動実施計画 【A, P】

2019年度も、2018年度のFD活動を受け進めていく予定である。

「①社会学研究科改革ワーキンググループによる将来構想と学生募集に関する検討」については、研究会委員会終了後に定期的に討議しあい方向性を定め、具体的な働きかけなどを実施する予定である。

「②社会学研究科FD推進委員による院生へのアンケート調査の実施」については、引き続き院生の意識、意見などを知るため実施する。回答率を高めるための対策も十分に検討したい。

「③HIRC21の催しに伴う海外教員・院生を交えた研究に関する懇談会も実施」については、予算の許す限り、院生が主体となる企画を教員がサポートしながら実施したい。また、中国の大学や院生との交流も深める下地を作っていきたい。

「④在学生への進学PR及び留学生への指導体制に関する検討」については、教員一丸となって、積極的な働きかけと体制作りに努力したい。

法学研究科

作成者 坂本 恵三

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

法学研究科では、FD・SD 活動として、①FD 講演会、②教員相互の授業参観、③専攻長による学生からの意見聴取または学生アンケートを行ってきた。

①は、FD に関わる重要テーマについて外部から講師を迎え教員を対象とする講演会を開催してもらうことによって、教員の FD に関する意識を高めることを目的としている。

②は、教員が他の教員の授業を参観し、または逆に他の教員に授業を参観してもらうことによって、自己の授業方法の改善を目的とするものである。

③は、FD 活動に学生の視点を取り入れ、FD に学生の意見を反映させることを目的とするものである。

①、②、③の活動は、その結果を研究科委員会等における委員会報告等を通じて、講演会の内容や、授業聴講の結果報告、学生へのアンケート結果を専任教員が共有することによって授業改善に関して一定の成果を上げてきた。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

- ① 教員による授業相互聴講（2018 年 11 月 14 日～平成 30 年 11 月 20 日の期間に実施）
- ② 法学研究科学生アンケート（2018 年 11 月 13 日～2018 年 12 月 18 日の期間に実施）

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

- ① 教員による授業相互聴講（2018 年 11 月 14 日～平成 30 年 11 月 20 日の期間に実施）。

今年度は 4 名の教員が、他の教員の授業を聴講し、6 通の報告書が提出されている。授業を聴講した教員数は少なかったが、提出された報告書には、参観した授業についてポジティブな意見が寄せられている。FD 活動の観点からは、改善すべき点の指摘が有益であり、参観者には、参観した授業についてのアドバイスなども報告書に記載することを促すようにしたい。

また、他の教員の授業を聴講してその良い点を自分の授業に取り入れることが、FD 活動において重要であることに鑑みて、相互聴講に参加した教員が、非常に少ない点は、日程の設定も含め改善を要するものと思われる。受講生が少ない授業では、他の教員による授業聴講自体が適切か否かも検討されなければならないが、授業聴講自体は、一定の成果を上げている。

② 法学研究科学生アンケート（2018 年 11 月 13 日～2018 年 12 月 18 日の期間に実施）。

「人数が少ないこともあり、個別指導になる授業が多数あるので、一人一人じっくり指導を受けられるメリットがある。」という意見が複数寄せられているように、小規模の研究科の特色を生かした個別的な指導が行われている点が、学生からも高く評価されている。しかしアンケートを一層有意義なものとするためにさらにアンケートの回収率を高める工夫をしたい。またアンケートにどのような質問項目を設定するかについては、さらに検討を重ねたい。

③ FD 講演会

今年度は、外国人研究者と国内の著名研究者の学術講演会を 2 回開催することができ、FD 講演会を開催することができなかった。法学研究科に所属する教員は、例外なく法学部に所属する関係にあり、法学部の FD 活動として開催される講演会には、法学研究科の教員も参加するため、法学研究科独自の FD 講演会を開催する必要性があまり意識されていないように思われる。しかし、学部と研究科とでは、その役割が必ずしも同じであるとはいえず、法学研究科に固有の FD 講演会のテーマを考えて、研究科主催の FD 講演会を開催することを検討したい。

④ 模擬授業を FD 活動として活用する。

法学研究科では博士後期課程の在學生に、就職活動を支援する活動として模擬授業の機会を提供している。そこでは、研究科所属の教員が、学生の行う模擬授業に対して様々なアドバイスを提供している。この内容は、授業改善と密接にかかわっており、次年度からは、この模擬授業に、授業方法を検討する法学研究科の FD 活動の意味合いを付与することが、研究科委員会で、承認されている。

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

2019 年度についても、法学研究科では基本的には、①FD 講演会、②授業相互参観、③学生アンケートを中心にして FD 活動を実施する予定である。また、2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題において示したように、博士後期課程の学生による模擬授業を、法学研究科の授業改善ないし授業方法の改善のための検討会として利用することを計画している。

実施体制についても、研究科委員全員で FD 活動を実施する体制を維持する予定である。

経営学研究科

作成者 鳥飼 裕一

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C,A,P】

- ① 授業改善について 学生アンケートの実施
- ② 修士論文中間報告会・修士論文発表会・博士課程中間報告会・博士課程公聴会の実施

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

① 授業改善について

「学生アンケート調査」（授業アンケートも兼ねている）は、平成 30 年 12 月 18 日から平成 31 年 1 月 20 日までに実施した。その結果は、「平成 30 年度学生授業アンケート調査報告」としてまとめ、経営学研究科委員会の資料として公表した一方、大学院の講義と演習を担当しているすべての教員にフィードバックした。

② 修士論文中間報告会・修士論文発表会・博士課程中間報告会の実施

平成 30 年 1 月から 12 月には、経営学・マーケティング・会計ファイナンスの 3 専攻はそれぞれ修士中間論文報告会、修士論文発表会ならびに博士課程中間報告会、博士課程公聴会を実施した。中間報告会と論文発表会それぞれの日程と参加者数は、下表の通りである。

< 博士前期課程 >

専攻	修論中間報告会 (1)	修論中間報告会 (2)	修論発表会(論文口 述試験)(1)	修論発表会(論文口 述試験)(2)
	実施日:8月1日	実施日:11月7日	実施日:2月4日	
経営学	参加者数:報告者 12名	参加者数:報告者 13 名(内 1 名は 10 月 31 日実施)	参加者数:発表者 12 名	
	実施日:8月1日	実施日:11月1日	実施日:2月3日	
マーケ	参加者数:教員 6 名;報告者(2年 生)5名;1年生 4名;合計15名	参加者数:教員 9 名; 報告者(2年生)5 名;1年生4名;合計 18名	参加者数:発表者 4 名	
	実施日:8月4日	実施日:11月10日	実施日:1月20日	
①	参加者数:報告者 14名	参加者数:報告者 14 名	参加者数:発表者 15 名	
BA F	実施日:7月26日	実施日:11月29日	実施日:1月26日	実施日:7月25日
②	参加者数:報告者 3 名(平成 30 年 9 月 修了者 1 名につい ては 1 月 26 日に 実施)	参加者数:報告者 3 名	参加者数:発表者 2 名	参加者数:発表者 1 名

注:BAF専攻の①は、企業家・経営幹部養成コースと中小企業診断士登録養成コース;②は会計ファイナンス専門家養成コース;をそれぞれ示している。

< 博士後期課程 >

専攻	博士課程中間報告会(1)	博士課程中間報告会(2)	博士課程公聴会
経営学			実施日:10月3日
			参加者数:発表者 1名
BAF	実施日:7月17日		実施日:10月3日
	参加者数:報告者 1名		参加者数:発表者 1名

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題

① アンケート調査結果

学生アンケート調査についての具体的な内容と結果は以下の通り。

○調査期間：平成 30 年 12 月 18 日から平成 31 年 1 月 20 日；○調査方法：講義と演習の時間にアンケート票を配布；○回収方法：担当教員を通じて FD 推進委員の鳥飼に提出；○回答者 72 名；○調査項目：(1)志望理由、(2)講義・演習・研究指導及び講義科目の満足度、(3)満足あるいは不満の理由、(4)授業を受講して得た成果または役立ったこと、(5)学習・研究を進める上で、思うようにいかなかった点、改善点、(6)現在設置している講義科目以外で、設置してほしい科目や研究領域（前期課程のみ）、(7)博士学位論文の中間報告会の回数や時期および形式についての改善すべき点（後期課程のみ）(8)講義科目や演習・研究指導、ならびにその他要望事項（授業運営、院生生活、設備など）。

アンケートの結果、満足度については、経営・マーケ・BAF の 3 専攻・コースともに「大変満足」「満足」の回答が圧倒的に多かった。満足の理由としては、教員から十分な指導が受けられ、講義、カリキュラム内容が良いことを挙げる者が多かった。授業で得た成果や役立ったことについては、プレゼン能力の向上ができたこと、論文の書き方が習得できたこと、統計学の知識、統計ソフトによる分析方法の習得、新しい分野での知識の習得ができたことを挙げる院生が多かった。

② FD 研修会ならびに FD 講演会の実施

経営学の指導方法等のテーマで FD 講演会を企画していたが、今年度は適切な外部講師の招聘ができなかった。来年度は、外部講師による FD 講演会を実施することとしたい。

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画

平成 30 年度までの活動を踏まえ、平成 31 年度の FD・SD 活動実施計画を下記のように設定した。

① 研究指導

前・後期課程在籍の院生に対する教育研究指導の更なる改善の検討ならびに実施

研究指導は、経営学研究科の 3P(AP,CP,DP)に基づき、院生の興味、関心ならびに個性に応じ、独創的な研究を展開し、修士・博士の研究能力と「学位力」を十分身につけさせることを指導方針の根幹とし、主指導教授と副指導教授が連携して担当する。

② 授業改善

A) SGU の目標に向けて、グローバル人材の育成を心がける。

B) 講義・演習時間の活用方法 (ex.プレゼンテーション、ディスカッション) の工夫

③ 大学院生の論文作成支援の継続実施

院生全体に対して、そのコンセプチャル・スキルとロジカルシンキング・スキルの向上を図ると同時に、留学生に対しては、その日本語力のブラッシュアップと外部機関からの支援を継続する。

④ FD 研修会ならびに FD 講演会の継続実施間報告会・修士論文発表会・博士論文公聴会の実施

⑤ 上記の報告会・発表会・公聴会における報告者の発表時間の確保。

⑥ 上記の報告会・発表会・公聴会への教員と在学院生の参加を促す。

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

2015 年度に第三者評価の指摘を受けて、教育目標、教育課程、授業改革のための組織的な取り組み方法等を含むプロセスが適性に機能しているかを検証するため「適切性等の検証に関する内規」を作成した。院生の学修・研究能力向上と、大学院担当教員の指導力（質保証）を高めるために、専攻長会議で継続的に検証を実施し、改善に務めてきた。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

- ① 川越フォーラムの開催
- ② 英語特別プレゼンワークショップ
- ③ ベンチャー・サイエンス特論
- ④ 教育・研究等改善アンケート
- ⑤ シラバス点検
- ⑥ 適切性等に関する検証

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 川越フォーラムの開催（2018/10/27）

学内外に向けて、大学院の教育・研究活動の取組を理解してもらう場として、川越キャンパスの学部・大学院が共同で開催した。学部生とその父兄に対して、大学院担当教員並びに院生から、大学院での研究活動の魅力について伝えた。また、院生には研究発表（ポスター発表含む）を通じて、プレゼンテーションスキル向上を目指した実践的な内容とした。出席した企業担当者並びにOBからは、研究発表に対する産業界側からの社会的ニーズや多様な視点に基づき、教育的な講評を受けることが出来た。しかし、学部生の参加者が想定より少なかったため、来年度に向けて、より一層の魅力あるプログラム内容への見直しと、学外者も含めた周知方法について、3月に専攻長による適切性の検証会議で協議を行う。

② 英語特別プレゼンワークショップ（2018/10～2018/12 計4回）

国際学会等での発表能力向上を目的に開催した。参加した院生はネイティブによる英語プレゼン技術指導を受けるとともに、英語の苦手な学生へのサポートも含めて大学院担当教員と留学経験持つ外部講師のダブルキャスト方式を採用し、プレゼンテーション能力とともに質疑応答対応能力の向上を目指した。院生はプレゼン用パワーポイントの添削指導を受け、英語による

発表資料作成能力の向上を図った。しかし、充実した内容ではあるが参加者が定員（15 名）に達しなかったため、来年度は指導教員からも参加を促すなどの対策を行う。

③ ベンチャー・サイエンス特論（集中講義）（2018/10～2019/1 計 4 回）

ものづくり分野の中核を担いうる人材に必要な実践的マネジメント能力をワークショップを通じて習得することを目的とした講義である。今年度は、本学産学協同教育センター・中核人材育成講座と連携して「イノベーション」と「マーケティング」に関する実践的理論と戦略策定演習により、事業戦略や商品開発等の知識とスキル修得することが出来た。参加者アンケートでは、マーケティングの抽象的な知識を実践的な視点から学ぶことが出来た等の満足度の高い回答であった。しかし、途中で出席しなくなった院生もいたため、担当教員が履修者と面談等を行い、全員が最後まで受講するように対応を検討する。

④ 教育・研究等改善アンケート（2018/12～2019/1）

2018 年度の理工学研究科・工学研究科としての「教育・研究等改善アンケートを踏まえた研究指導・授業評価および改善課題の概要は以下の通りである。なお回収率は、博士前期課程で、87.8%（前年度 92.8%）、博士後期課程で 75%（前年度 33.3%）で、前年と比較して若干下回った。

- ・研究指導に関する評価：研究指導に対する評価は、博士前期課程（93.1%）・博士後期課程（88.8%）共に満足の高い評価で、教員や院生同士の意見交換等が活発であったとの回答もほぼ同じ割合である。

- ・授業科目に関する評価：博士前期課程の授業科目に対する評価については、84.5%の院生が「意欲的・どちらかと言えば意欲的」と回答している。しかし、15.4%の院生が十分ではないと回答しているため、改善に向けて研究科内で検討を行う。

- ・研究発表活動支援：博士前期課程で 67%、博士後期課程で 55.5%の院生が研究発表奨励金を活用し国内外の学会で研究発表（ポスター発表含む）に参加している。また、約 3 割前後の院生が発表を行っていないため、指導教員と協力して積極的に発表機会を作るように努力を行う。

- ・TA について：博士前期課程で 63.3%、博士後期課程で 22.2%の院生が TA を担当している。大学院生数と TA を必要とする授業科目数にアンバランスがあり、結果として、院生自身の授業や研究に影響がある回答したものが博士前期課程で 17.8%いた。TA 担当については依頼する教員と大学院生側の十分な調整が必要である。

⑤ シラバス点検（2019/2）

2019 年度シラバス点検を専攻長が中心となり行った。11 月開催の専攻長会議で研究科長からシラバス作成の方針、変更点と点検方法の確認があり、各専攻長から所属教員に周知がされた。

シラバス入力完了後に専攻長がチェックを行い、担当者に必要な修正依頼を行いシラバス点検を完了した。

⑥ 適切性等に関する検証（2018/10、2019/3）

「適切性等に関する検証」内規に基づき、今年度 10 月に専攻長による適切性の検証会議で「学生募集および入学者選抜」「関連分野の企業のニーズへの対応状況」について検証を行った。また、3 月にも「研究科、専攻の目的」と、今年度の就職状況を踏まえて検証を行う。

研修会等の参加状況（大学院担当教員）

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの公表有無
		教員	職員	計	
7/12	PROG テスト結果の教育向け報告	69	3	72	無
8/29.30	日本工学教育協会第 66 回年次大会	1	0	1	無
11/8	ハラスメント防止対策研修会	71	4	75	無
12/13	川越キャンパス FD 講演会	50	4	54	無

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

「適切性等の検証に関する内規」に基づき、院生の学修と研究能力向上、大学院担当教員の指導力（質保証）を高めるために、大学院担当教員と川越教学課大学院担当職員が連携して FD・SD 活動を継続して推進し行く。従来から実施しているインターンシップ、PBL 教育（芝浦工業大学 GTI コンソーシアム含む）、学外実習、海外留学の参加を促し、タイのチュラロンコン大学への短期留学プログラム、イタリア・カメリーノ大学との共同で「イタリア中部地震からの復興に向けた学際的」なプログラムを実施する予定である。

また、本研究科では、留学生の進学者が本学学部以外に、日本学校から直接進学してくるケースが増えてきている。入試では日本語能力を出願資格の条件としておらず、日本語能力も測っていたため、入学後の授業並びに論文指導等に影響が出てきている。本研究科として日本語教育の取り組みにいて検討を行う。

経済学研究科

作成者 佐々木 啓介

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

【経済学専攻】

- ①年度 2 回（春学期と秋学期）、授業評価アンケートを行い、学生評価結果を研究科委員会にて全教員（全委員）に提示し、改善点を洗い出し、対応を図ってきた。
- ②博士前期課程においては、全学生が出席する論文発表会を開催し、各学生の報告について指導教員とともにその他の教員もコメントすることを繰り返し、教員相互間の指導能力の向上に努めた。
- ③博士後期課程においては、年 1 回の論文中間報告のほか、D3 時点での博士論文報告会に指導教員以外の教員の参加を広く募り、様々な観点からコメントすることにより、教員相互間の指導能力の向上を図っている。

【公民連携専攻】

- ①セメスター終了後、授業評価アンケートを全科目を対象に実施している。投稿者が特定できないように工夫された専用ソフトを用いている。評価のうち要望事項を中心に、担当教員がコメントを返す形式としている。結果は要望事項と回答を併記して、ToyoNet-ACE を用いて、全院生、全教員が閲覧できるようにしている。最終的に公開される状況にあるため、院生からの評価も教員からのコメントも責任ある建設的なものになっている。
- ②専攻として、（１）院生の成果発表会（年 1 回、教員・院生が科目、ゼミで取り組んだ活動の成果を院生が発表する、一般公開）、（２）院生の論文報告会（論文提出セメスターにおいて各人 2 回）、（３）連続トーク（講義とは別に教員が講師となって行う一般公開講演）を提供している。専任、客員教員は自由に参加し、院生の関心事項や他の教員の研究内容を知ることができる。
- ③原則として毎週 1 回、専攻長および大手町サテライト教務スタッフ、研究スタッフによるミーティングを行い、各人の活動の状況を報告し課題と対策の必要性を共有している。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

【経済学専攻】

- ①平成 30 年度は、授業評価アンケートを春学期の 7 月と、秋学期の 1 月の 2 回行なった。Toyonet-ACE（manaba）のアンケート機能を用いた結果、学生の回答負担が減り、集計・対応が迅速となった。また、主な回答結果を集計したものを 10 月および 2 月の研究科委員会で配布し、改善点を洗い出して対応を図ってきた。

②博士前期課程の研究発表会を春学期に計5回、秋学期に計6回を開催した。指導教員以外の教員のより多くの参加を促すことにより、FD効果の向上を図った。また12月の「修士論文発表会」においては、多数の教員が一堂に会して同席しコメントすることで、相互に指導能力の向上を図った。

③博士後期課程については、例年通りに6月に1回論文中間報告会を開催した。

④11月、1月に計2回、外部講師を招聘し、多くの院生および教員が参加し、交流および活発な論議を行った。

【公民連携専攻】

①春学期授業評価アンケートは8月に実施し9月に結果をフィードバックした。秋学期授業評価アンケートは2月に実施し、教員のコメントを付した後、年度内にフィードバックする予定である。

②（1）院生の成果発表会を1月に開催した。（2）院生の論文報告会は4月、6月、10月、12月に開催した。

③国連COE 地方政府PPPセンターと認定されたことを受けて、月1回専任教員が出席する連絡会議を開催している。必要に応じて研究科委員会に報告、審議することとしている。

④原則として毎週1回、専攻長および大手町サテライト教務スタッフ、研究スタッフによるミーティングを行い、各人の活動の状況を報告し課題と対策の必要性を共有している。

【共通】

①研究活動の過程で接する個人情報の保護の観点から研究活動や発表に支障が生じないように、研究科倫理規定を制定し、研究科内倫理委員会にて運用する体制を構築している。

3) 2018年度におけるFD・SD活動の成果と課題 【C】

【経済学専攻】

①授業評価アンケートの回答率は、春学期は83%（博士前期80%、博士後期100%）、秋学期は71%（博士前期75%、博士後期50%）。肯定的なコメントは増加した。

②研究発表会、修士論文発表会には各回4、5名の教員が参加し、活発に議論を行っている。

【公民連携専攻】

①授業評価アンケートの回答は項目ごとにシャッフルされるため、回答者数を算出することはできないが、毎回50項目程度の評価コメントが得られている。

②院生の論文報告会には各回6、7名の教員が参加し、活発に議論を行っている。

③原則として、月 1 回専任教員が出席する連絡会議を研究科委員会終了後に開催することで、専任教員が参加しやすい環境を整えている。院生の論文指導の内容やシラバスの記載内容など FD にかかわる事項を協議している。

④原則として毎週 1 回、専攻長および大手町サテライト教務スタッフ、研究スタッフによるミーティングを行い、各人の活動の状況を報告し課題と対策の必要性を共有する。国連対応等教職員が密接に連携する必要がある活動に対して円滑に対応できた。

【共通】

①研究科倫理規定の適用に関する相談が 1 件あり研究科内倫理委員会にて審議し研究科委員会に報告した。

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

【経済学専攻】

①引き続き年度 2 回（春学期、秋学期）の授業評価アンケートを実施する。回答率の向上を目指す。

②博士前期課程の研究発表会・修士論文発表会、博士後期課程 D3 時点での博士論文報告会における指導教員以外の参加を促す。また、各報告会后に教員間で議論をする場を持つことを検討する。

③新規科目「総合演習 A・B」を開講し、研究発表会・論文発表会および授業評価アンケートなどが授業内で実施し、参加率、回答率の向上および FD 効果の向上を図る。

④教員の FD 会合を実施し、教育・指導能力の向上、ノウハウの共有等を図ることを企画する。

【公民連携専攻】

①国連 COE 認定にあたっては、上記の FD 体制が評価されこの維持が求められている。今後も現在の方法を踏襲しつつ、形骸化することなく環境変化に合った改善に取り組みたい。その機会として、月 1 回専任教員が出席する連絡会議の充実を図ることとする。

②多くの教員が参加している PPP 研究センターの提案が 2019 年度より「東洋大学重点研究推進プログラム」に選定されたため、この研究を推進することで、FD の実効性を高める予定である。

③引き続き、原則として毎週 1 回、専攻長および大手町サテライト教務スタッフ、研究スタッフによるミーティングを行い、各人の活動の状況を報告し課題と対策の必要性を共有する。

【共通】

①倫理規定および倫理委員会に関しては、引き続き、運用していく。そのため、全院生を対象に周知を徹底する。

国際学研究科

作成者 岡村 敏之

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

国際学研究科の前身である国際地域学研究科では、国際地域学・国際観光学両専攻で修了生を対象としたアンケートを実施している。学部と比べて学生数が限られている分、記述式を多くしてできるだけ生の意見を吸い上げて行くことに重きをおいている。その結果は専攻会議で報告され、教員間で共有・議論し、今後の研究教育体制の向上にフィードバックされる。一例として、院生共同研究室や院生発表会の運営において学生の要望が反映され、改善が行われてきた。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

- ① 修了予定学生のアンケートの実施
- ② 大学院教務課主催の FD 研修会への参加

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 修了予定学生のアンケートの実施

3 月修了予定の学生に対し毎年行っている専攻の教育に関するアンケートである。国際学研究科は今年度は修了者はまだないため、対象学生は国際地域学研究科の国際地域学専攻の学生であるが、実施主体は実質的に現研究科の教員組織によって行われた。

実施日：2019 年 1 月 26 日（土）

有効回答数：国際地域学専攻（M・4 名、D・1 名）の全学生

実施方法：口述試験実施日に紙の質問票（無記名）を配布し、基本的に同日に回収。

設問：大問が 6 つ。具体的には以下の通り

1. 以下の項目について、あなたの印象評価してください。（＜大変満足、満足、どちらでもない、やや不満、不満＞の 5 段階評価と自由記述）
 - （ア）講義・演習
 - （イ）研究指導
2. 授業を受講することで得た成果、役立った事を記入して下さい。（自由記述、以下同様）
3. 研究を進める上で、思うようにいかなかった点、改善点があれば記入して下さい。
4. 院生発表会の回数や時期および形式について改善すべき点があれば記入して下さい。

5. より国際地域学研究科らしい教育プログラムにするためには、どのような授業科目、授業形態、取り組みが必要だと思いますか？
6. その他の要望(学生生活、設備等)があれば、記入して下さい。

上記の結果を抜粋すると以下のとおりである。

- ・ 設問1：講義演習・研究指導に対しては、全員が＜大変満足＞または＜満足＞と回答
- ・ 設問2：調査・分析手法に代表されるような、研究の遂行により直接的に必要なスキルに関する講義の評価が高かった。国際学研究科となってからは、これらに関する授業を充実させ選択必修としたことから、学生からの評価は今後高くなると想定される。
- ・ 設問3から5：個々の学生の事業を反映した意見が記述されており、またそれらは想定内の記述であった。
- ・ 設問6：院生研究室の学習環境（机・パソコン）について、より一層の充実を求める意見が多くみられた。机の数（ほかの専攻より院生研究室利用率が高い）とパソコン環境（台数および各種設定）については引き続き課題であることが明らかとなった。

大学院教務課主催のFD研修会への参加

2018年7月14日に大学院教務課主催により実施された「英語で効果的に教えるために」は、国際学研究科所属教員が2名参加した。また同10月に同じく大学院教務課主催により実施された「英語の論文指導を行うために」は、国際学研究科所属教員が2名参加した。本研究科においては、英語による講義および演習のスキル向上は、教員側のニーズと意欲は高い。2017年以前の同種の研修会と比べると参加者数は少なくなったが、これは7月の研修会の内容が以前のものとほぼ同様であったことも理由として挙げられる。

4) 2019年度に向けたFD・SD活動実施計画 【A, P】

国際学研究科では、ほぼすべての講義を隔年でそれぞれ英語と日本語で提供しており、研究指導も全教員が英語で行うことを可能としている。英語による講義（演習、研究指導を含む）に対するFDのニーズは引き続き存在しているため、来年度については大学主催の研修への参加を呼び掛けていくこととする。

また、修了生を対象とするアンケートは今後も毎年実施していき、あわせてそこで明らかとなった課題については適宜予算措置をとるなどして改善に努めていく。

国際観光学研究科

作成者 中挾 知延子

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

国際地域学研究科ではこれまで1年に1回、何らかの形で学生への満足度アンケートを実施してきた。今年度は国際観光学研究科に改組した上で、これまでと同様に国際地域学研究科国際観光学専攻・国際観光学研究科国際観光学専攻（以降、両方合わせて国際観光学専攻と呼ぶ）でアンケートを実施した。学部と比べて学生数が限られている分、記述式を多くしてできるだけ生の意見を吸い上げて行くことに重きをおいた。その結果は、研究科委員会ならびに専攻会議で報告され、教員間で議論し、今後の研究教育体制の向上にフィードバックされた。一例として、院生共同研究室や院生発表会の運営において学生の要望が反映され、改善が行われてきた。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

① 学生へのアンケート（詳細は 5）に記載）

実施日：2019 年 1 月 26 日（土）

有効回答数：国際観光学専攻在籍学生

（M1：7 名、M2：2 名、D1：1 名、D2：2 名、D3：1 名）合計 13 名

質問内容 ※満足度以外はすべて記述式（研究指導は 5 段階評価と満足度両方）

- (1) 印象評価 講義・演習/研究指導 5 段階の満足度と理由
- (2) 授業を受講することで得た成果、役立ったこと
- (3) 研究を進める上で思うように行かなかった点、改善点
- (4) 院生発表会の時期および形式について改善すべき点
- (5) より国際観光学らしい教育プログラムにするためにはどのような授業科目、授業形態、取組が必要か
- (6) その他の要望(学生生活、設備等)

以上の 6 項目について、専攻長から学生に院生発表会の際に紙ベースで配布して記入してもらった。

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 学生へのアンケート

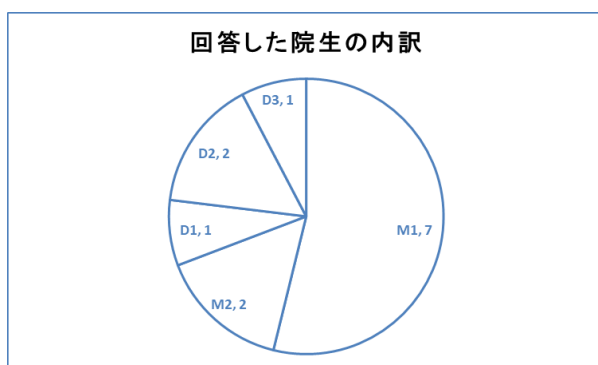
毎年、院生発表会の際にアンケートを実施しており、経年データになるにつれ、本研究科の運営に関しても有用な示唆を得られるようになった。具体的な内容については来年度以降、研究

科委員会ならびに専攻会議で議題にあげて検討していく。来年度以降も継続的にアンケートを行っていく。

具体的な課題としては、院生発表会の回数があげられる。これは以前より議論になっており、いくつかの案が出ているが、改組直後であり、文科省への届出文書に「各セメスタにおいて中間と期末の2回、年4回発表会を行う」と明記しているため、完成年度までは変更ができない。そのため、次期のカリキュラム改正に合わせて、特に回数について専攻会議等で議論を重ねていくのがよいと考えられる。以下、具体的なアンケート結果を示す。

< 学生への満足度アンケート結果 >

● 学生内訳（学年、人数）



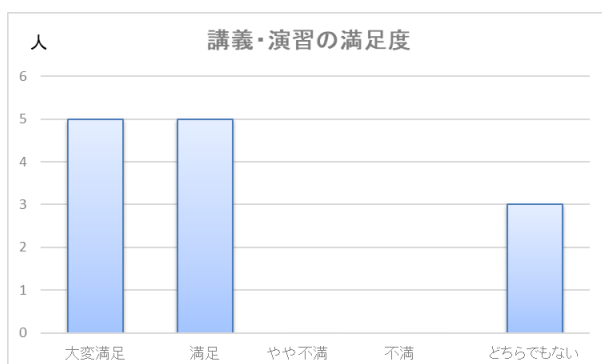
対象者数：27 名

回答者数：13 名

回答率：48.1 %

※休学者 3 名は対象に入れていない。

(1) 印象評価 講義・演習/研究指導 5 段階の満足度と理由



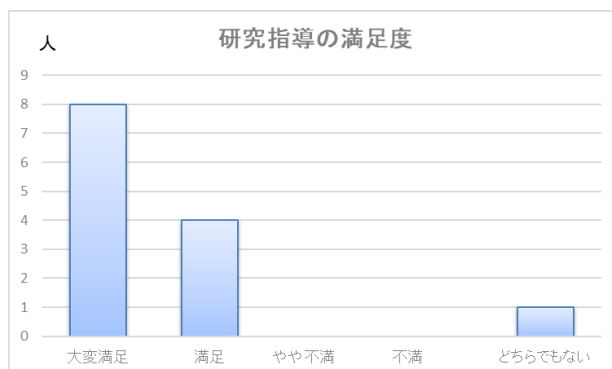
※「やや不満」「不満」はいなかった。

なお、「どちらでもない」の3名中2名は、D のため講義がないので評価できないということで、このように回答したと書かれていた。

(理由) ※括弧内は課程と学年、理由は記述されていた回答のみ

- ✓ 社会人なので、6・7 限しか受講できないので選択できない講義があるのは残念。(M1)
- ✓ 日本でしか学ぶことができないことを勉強しました。(M1)
- ✓ 大学時代よりさらに深く勉強できて非常に勉強になりました。(M1)
- ✓ 理論と実践ともにバランスされた内容であるから。(D2)

- ✓ 特に問題なかったが、目的や期待されていることがわからない。(M1)



(理由) ※括弧内は課程と学年、理由は記述されていた回答のみ

- ✓ ご多忙の中、日々寛大にそして親切にご指導いただき感謝しております。(D2)
- ✓ 知識は増えましたが、研究成果の最後の形がよく見えない。自分はどう進めばよいのかよくわからない。(M1)
- ✓ 毎週丁寧なご指導をいただいている。(D2)
- ✓ 先生からいろんな自分が知らない研究の方法を勉強しました。(M1)
- ✓ 適切な指導をいただいているから。(D3)
- ✓ ご丁寧に様々なことを教えてくださいました。(M1)
- ✓ 毎回ご丁寧に論文のご指導をいただき、すごく感謝です。(M1)
- ✓ アドバイスが適確。発表会で様々な先生方からアドバイスがあるのも良い機会でした。(M1)

(2) 授業を受講することで得た成果、役立ったこと (記述式)

- ✓ 様々な分野の授業があって良いと思います。(M1)
- ✓ 研究方法が役に立ちました。(M1)
- ✓ 観光業界や政策などの取組が分かるようになりました。(M1)
- ✓ 論文を学ぶ意義を知る。(M1)
- ✓ 様々な分野について広く学ぶことができ、先生や生徒同士の距離も近くて良かったです。(M2)
- ✓ とても役立ちました。(M2)
- ✓ 違うことが関連性がある。物事の本質を探し出すような研究思惟が一番よい収穫であると考えます。(M1)
- ✓ 観光学に関する知識を幅広く勉強できました。(D1)

- ✓ 日本における各地域の事例などを勉強できました。(D1)
- ✓ 授業を受講することを通じて、自分の視野が広がり、研究にも役立つよになりました。(D1)
- ✓ 私は観光出身ではないので、受講して観光側の考え方がわかるようになった。仕事には役立つと思う。(M1)
- ✓ 社会人になって忘れていた学ぶことの喜びを実感できること (D2)

(3) 研究を進める上で思うように行かなかった点、改善点 (記述式)

- ✓ 自分の知見のなさを痛感しています。日々学んでいくしかありません！(M1)
- ✓ やはり現地での取材が難しいです。(M1)
- ✓ 先生方の得意分野のようなことをシラバスとは別で教えていただきたいです。(M1)
- ✓ 手順、考え方 (M1)
- ✓ 同じ分野の方がいなかったのが難しかった。もう少しディスカッションや課題のある授業を期待していた。(M2)
- ✓ たくさんあります。書ききれません。(M2)
- ✓ 自分の主張がなかなかまとまりません。(D2)
- ✓ データ収集が思ったより難しい (M1)
- ✓ D 課程なので私は不都合に感じませんが、M 課程の時間割では社会人の履修が困難になっている。(D2)

(4) 院生発表会の時期および形式について改善すべき点 (記述式)

- ✓ 問題ないと思います。(M1)
- ✓ 毎学期 1 回のペースでする方がもっとちゃんとしたテーマと内容をよくできます。(M1)
- ✓ ちゃんと出席率を注意すべきだと思います。(M1)
- ✓ D の学生は発表を免除していただきたい。発表の準備のため博士論文の執筆が中断するため。(D3)
- ✓ もう少し少なくなるとありがたいです。(M1)
- ✓ 発表スケジュールのしかたや担当準備が分かりにくかったです。(M2)
- ✓ 年 4 回はちょっと大変ですが、2 回にすれば助かります。(M1)
- ✓ 期末のみでもよいようにも思われます。(D2)
- ✓ 別の先生なしの発表会をやりたい。同期の意見が知りたい。(M1)

- ✓ 回数・時期はこのままでよいと思います。(D2)

(5) より国際観光らしい教育プログラムにするためにはどのような授業科目、授業形態、取組が必要か(記述式)

- ✓ 実践科目が必要と思います。(M1)
- ✓ 実践科目の増加が必要だと思います。(M1)
- ✓ 現状で良いと思う。(D3)
- ✓ フードに関する授業が欲しかったです。(M1)
- ✓ 様々な国の留学生の受け入れ、外国人の先生の拡充、授業科目を増加(M2)
- ✓ インバウンド振興、異文化理解、コミュニケーションに関する授業など。(D2)
- ✓ 国外の観光に関する成功事例を勉強できる授業(D1)
- ✓ マーケティング、観光客行動(顧客行動)に関する基礎知識(D1)
- ✓ 仕事をする人本人の話を知りたい、聞きたい。(M1)
- ✓ 模擬授業(D2)

(6) その他の要望(学生生活、設備等)があれば、記入して下さい。

- ✓ カジノ設備など。(M1)
- ✓ 留学生交流会など。(M1)
- ✓ いつもありがとうございます。(M1)
- ✓ ありがとうございました。(M2)
- ✓ 共同研究室にペーパーカッターがあれば(D1)
- ✓ 研究で成功している人はどうしたらなれるのか教えてもらいたい。(M1)
- ✓ できれば図書館を日曜にもオープンしてほしい。(D2)

・研修会等の参加状況について

今年度は、研修会を実施していない。

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

前述したように、平成 30 年度国際観光学研究科は改組発足した。今年度はいわば研究科として無事課程表に沿って大学院教育が滞りなく行われるのかどうか、万全は期しているものの手探りもあった挑戦の年であった。おかげ様で院生数の充足度も良く、英語で修了できるコースも始まり、期待以上の滑り出しであったと感じる。次年度以降も記述式アンケートは続けて、

経年データを蓄積していき、院生の要望などが変化してくるかどうかなどの分析をしたいと考えている。また、院の教育に携わる教員は同時に学部の教員でもあるので、学部の成果も参考にしつつ、FD 講習会を合同で開催したいと考えている。実施体制については、研究科長・専攻長・教務委員を中心に行っていく。

生命科学研究科

作成者 三浦 健

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

生命科学部と連携し「6 年間の一貫教育」を目指して、継続的に授業方法の改善、学習および研究環境の整備、学生へのキャリア支援を行っている。そこで、FD・SD 講演会（例年）、オンデマンドビデオ（全国私立大学 FD 連携フォーラム）視聴（2017～）、授業評価アンケート（～2017）を実施、さらに安全講習会および機器分析教育プログラムの講習会の開催（例年）、グローバル化を視野に入れた基盤科目の開講（2017～）、M1、D1、D2 による中間発表会（例年）、他研究科との研究交流会（例年）の開催、学会奨励金の支給（例年）を行っている。その成果として、成果発表数と賞の受賞数が年々増加しているため、今後も、上記の取組を継続しながら、学生個人に合わせた指導を行う必要がある。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

本年度も、2017 年度まで行ってきた取組の多くを継続・実施した。

①**FD・SD 講演会の開催**：「多様化する学生に対する学習手法」を大きなテーマとして講演会（グループワーク）を実施した。「研究倫理教育」は、神田 雄一先生（産官学連携推進課）、「Respon の活用法」は、藤原 喜仁氏（情報システム部）「初年次教育」は、沖 清豪先生（早稲田大学 教授）、「大人数のアクティブラーニング」は、川西諭先生（上智大学 教授）に講師を務めて頂いた。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの公表有無
		教員	職員	計	
7/23	「研究倫理教育」 (15:00～15:45)	20	2	22	無
2/22	「Respon の活用法」「初年次教育」「大人数のアクティブラーニング」 (13:30～19:00)	15	3	18 (講師 3 名)	無

② **学生の研究および学習能力の向上（安全講習会および機器分析教育プログラムの講習会）**：専門分野の研究計画を実施し学位論文の作成へと展開できるように「良い環境作り」を目指している。そこで、生命科学部と共催で、実験を行う全学生を対象に、実験に伴う事故の予防や

対処に関する安全講習会、また希望学生を対象に、質量分析器と透過電子顕微鏡の使用法などに関する技術講習会を実施した。

③ 学生の人間力の向上

③-1 **グローバル人材の育成**：専門科目以外に基盤教育科目として「英語プレゼンテーション演習」「科学英語ライティング」「科学コミュニケーション特論」「科学コミュニケーション演習」を開講し、英語でのプレゼンテーションとコミュニケーション能力を強化した。さらに、独自の奨励金を支給し英語による学会発表を推奨した。

③-2 **中間発表会**：指導教員だけではなく、全教員が全学生を指導するという意識を持つために、M1生（21名）、D1生（4名）が研究の進捗状況を英語のポスター形式で発表し、研究目標設定の確認と達成状況について点検・評価を行った。

③-3 **朝霞・川越・板倉キャンパス研究交流会**：理系学部の教員と学生の意見交換により、新しい観点から様々な発見をすることを目的として、ポスター発表会を実施した。

④ **大学院進学率の向上**：推薦入試受験の資格者条件（理系国家資格取得者）の追加、新たに2月推薦入試を導入した。さらに、学部と連携して大学院進学の説明会を実施した。

留学生のため、シラバスやホームページ、各種書類の英語化などの整備を順次行った。

3) 2018年度におけるFD・SD活動の成果と課題 【C】

① **FD.SD 講演会**：「研究倫理教育」では、「大学の現状、文科省の研究活動における不正行為等のガイドライン紹介など」を聴き、学生に対する教育・指導法を再確認することができた。また「Responの活用法、初年次教育、大人数のアクティブラーニング」では、他大学でも大いに苦労している様である。講演後、意見交換の中で「多様化する学生の観察、教員同士での情報共有、教員の意識改革・独自アイデアへの挑戦」などが重要であるとの共通の認識を持つことができた。さらに、留学生を含む学生の主体的行動に対する教員（FD）と専任職員（SD）のバックアップ体制の構築が重要であり、今後、教職員だけではなく学生との連携が課題である。

② **学生の研究および学習能力の向上**：安全講習会および分析機器の技術講習会により多数の学生が知識・手法を身に着けた。今後、ニーズに合わせ継続することが重要である。

③ **学生の人間力の向上**：学生が国際学会やセミナーにおいて海外の研究者と交流、プレゼンテーションおよびコミュニケーション能力を涵養するために基盤教育科目の開講、中間発表、交流会、学会発表・参加奨励金により、学生の論文発表・国内外学会発表件数が増加した。今後、学生レベルに適応させながら継続することが重要である。

④ **大学院進学率の向上**：昨年度と比較して志願者数が5名増加した。今後、学部と連携し学生の意識改革、研究環境の整備を行っていくことを目指していく。

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

① **学生の研究環境の向上**：学生が「研究および学習能力の向上」と「人間力の向上」を目指す取組（中間発表、技術講習会、基盤教育科目など）は継続する。さらに SGU 構想の数値目標のためには、今後一層の英語化が求められる。また、それに伴い、シラバスやホームページ、各種書類の英語化などの整備、教職員による留学生サポートを行う。

② **学生生活委員会との連携強化**：学生が研究や人間関係から生じる様々なストレスを解消するため、学生生活委員会と連携による精神的なサポート体制の強化を目指す。

③ **FD・SD 講演会の開催**：例年同様に、学習手法とアカデミックハラスメント（学生の心ケアなど）をテーマに、生命科学部との共催で春学期、秋学期で各1回の講演会を実施する。さらに、出席者を増加させるための工夫、講演の録画およびLIVE配信を検討する。

④ **授業評価アンケートの活用**：履修生が10名以下の場合、全学共通アンケートが使用不可となったため、独自のアンケートを「ToyoNet-Ace」を利用して実施し、各自で、授業改善に役立てる。

社会福祉学研究科

作成者 金子 光一

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

本研究科では、福祉社会開発研究センターにおける活動等を通じて、教員の研究、社会貢献、管理業務に関する資質向上を図ってきた。また、授業能力向上に資するため、外部の FD 講演会等への参加促進、関連図書の配置などを行ってきた。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

2018 年度は、主に次の活動を行った。

研究科アンケート：授業・研究指導等の改善を目的に、2018 年 12 月 20 日～2019 年 1 月 31 日、以下の通り、院生に対するアンケート調査を行った。

聴取内容：①「講義」および②「指導教員（主査・副査）の『諸指導』」③その他。

アンケート回収：社会福祉学専攻・前期課程：5 件、社会福祉学専攻・後期課程 10 件

分析：各質問への回答を「肯定的な意見」「否定的な意見」「その他の意見」に分類し、コメント（改善方法等）を、研究科内で検討した。（2019 年 2 月 18 日）

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

①博士前期課程（講義・演習・指導等について）

講義・演習・指導等に関する一人ひとりの院生の要望を研究科内で共有し、今後の改善点等について話し合った。基本的には、これまで同様、受講生の研究テーマに関連するもの、あるいは論文作成に必要な内容を講義・演習に取り入れながら、個別の要望にも出来る限り対応していくことで確認した。

②博士後期課程（講義・演習・指導等について）

昼間開講の講義を増やしてほしいという要望があった。また、主査・副査の演習は 7 限においてほしくないという意見もあった。社会人が多いことから夜間開講や遅い時間帯の開講が望ましいと考えていたが、必ずしもそうではないことが、今回のアンケート調査で明らかになった。2019 年度はすでに時間割が確定しているので、2020 年度からの時間割では、昼間開講の授業をより一層増やすと同時に、主査・副査のゼミも可能な限り 6 限までに入るように工夫したい。

③その他

入学直後、細かいルールや段取りがわからず戸惑うことがあったという院生がいた。新入生に対するオリエンテーションをさらに徹底する必要があることがわかった。

また、院生研究室の備品等に関する要望も多かったが、それらについては、教務課と協議し、出来る限り対応したい。

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

2018 年度行ってきた実績を踏まえて継続的に教育研究活動を実施する。具体的には、年 2 回の中間報告、夏の学内学会の実施によって教員による共同指導の機会を提供する。また後期課程の院生が多いという当専攻の状況を踏まえ、博士学位論文の執筆に向けた体制づくりを専攻全体の共通課題として共有していくために定期的に専攻会議の議題とすることにしたい。その他、専攻に所属する教員や専攻の院生の教育・研究活動の活性化に努めていく。

ライフデザイン学研究科

作成者：大迫 正文 金子 元彦

1. これまでの FD 活動の概要と成果【P、A】

本研究科としての活動は平成 30 年度からとなるが、改組前の福祉社会デザイン研究科においては合同発表会の実施などを通じ、教員の研究、社会貢献、管理業務に関する資質向上を図ってきた。また、授業能力向上に資するため、外部の FD 講演会等への参加促進、関連図書の配置などを行ってきた。

2. 平成 30 年度の具体的な FD・SD 活動状況【D】

平成 30 年度は、主に次の 2 件の活動を実施・計画した。

1) 研究科学生アンケートを実施した。

授業・研究指導等の改善を目的として、ライフデザイン学研究科・福祉社会デザイン研究科（朝霞）所属の大学院生全員を対象に 2018 年 11 月 6 日～2019 年 1 月 21 日の期間において、Google Form で作成した Web 学生アンケートを実施した。質問は主に①「講義」 ②『授業時間内における「研究指導」』 ③『授業時間外における指導教員（主査・副査）の「諸指導」』 ④「授業（講義や研究指導）の開講曜日・時限」 ⑤その他の観点（国際化、キャリア支援等）から設定した。この結果を、研究科内で共有し、今後の改善方法の検討を行っている。

2) FD 講演会を実施する。

「研究倫理について学生を指導する上での留意点」というテーマで荒尾孝氏（早稲田大学名誉教授）をお招きして FD 講演会を以下のとおり実施予定である。荒尾氏は早稲田大学在職中、多年に亘り倫理・倫理審査に関する委員も務められ、理論および実践両面から多岐に亘る経験による知見を教授いただく予定である。（日時：2019 年 3 月 14 日〈月〉15：30～17：00（予定） 場所：東洋大学朝霞校舎第 2 会議室）

3. 平成 30 年度の FD・SD 活動の成果と検証【C】

1) 研究科学生アンケートより

延べ 17 名から回答が得られ、アンケートそれぞれの設問に対する回答を、その内容にしたがって分類、整理し、その人数と、回答者 17 名（件）に対する比率を求めた。

昨年度までの紙ベースのアンケートより回答率も増加したが、匿名性の確保の為に回答方法を設定したことにより、回答数が延べ 17 件（回答者 17 名以内）で、17 件の回答のすべてが別の学生であるか、同一学生が複数回回答した否かについては判別できなかった。

今後、アンケート結果の公表を行う予定であるが、アンケート実施上の方法論の再検討とともに、入学者の確保（回答対象者数の確保）等も本件に関係する課題となろう。

2) 研修会より

「研究倫理について学生を指導する上での留意点」というテーマで FD 講演会を実施予定であるが、研究倫理に関する学生指導上の留意点に留まらず、研究倫理そのもののこと、昨今取り沙汰される、いわゆるハゲタカジャーナルの問題等、根源的な問題から今日的なトピックスまで幅広く検討していく必要があると思われる。

4. 平成 31 年度以降の FD・SD 活動計画と実施体制【P、A】

研究科全体として、以下の諸点から活動の充実を図っていく。

1) 日常における教員の研究、社会貢献、管理業務に関する資質向上の啓発

- ① 研究科委員会等を活用し、FD・SD に関係する情報の確実な共有と議論ならびに実践。
- ② 在籍する大学院生との適切なコミュニケーションを通じた日常的なリフレクション（省察）の実施。

2) 学生アンケートの継続的な実施

- ① 研究科委員会等を活用したアンケート結果の確実な共有と議論ならびに改善。
- ② より有意義な学生アンケートとして発展するよう質問項目および方法論の継続的な検討。
- ③ 学生アンケート結果に対する各専攻によるコメントの継続的な公表とともに、回答内容の公表。

3) FD 研修会等の継続的な実施

- ① 研究科所属教員ならびに職員の研鑽の機会としての当該研修会等の継続的な実施。
- ② 社会情勢の変化に応じたトレンドやトピックスを把握する契機としての実施。
- ③ 2019 年度については「留学生」をキーワードとした研修会の開催を予定。

4) 対面による大学院生－研究科教員による情報交換会の実施

1) Outline of the FD/SD programmes up to 2017 【C, A, P】

The Doctoral and Master Courses of the Graduate School of Interdisciplinary New Science were, respectively, opened in 2007 and 2011. Several advanced educational programmes were developed and quite a few international symposia and seminars were held to initiate international collaborative research projects and encourage students to carry out advanced research. As a result, a number of scientific papers were published in international journals of high impact factors by the students and their supervisors, and truly advanced young researchers; i.e., 29 doctors including 19 foreigners, were created during the academic years from 2007 to 2017. The School exchanged agreements on PhD double degree programmes with L'Université Pierre et Marie Curie - Paris 6 and L'Université de Nantes in 2012. International academic internship programmes were specially designed for post-doctoral researchers and PhD and master students from partner universities. The secretariat supported the above activities quite efficiently. The remarkable achievements in the research and educational programmes at the School proved that the academic standards of the faculty members were very high even from an international point of view and as a result, the academic activities at the School made a great contribution to the advancement of the international programmes including the "Top Global University Project" carried out at Toyo University.

2) FD/SD programmes and activities in 2018 【D】

2.1 Syllabi

The School was established as an international graduate school and therefore the syllabi were written in English so that both Japanese and foreign students could understand the research and educational policies and programmes organised by the School. The style and content of each syllabus were improved via mutual review among the academic staff members of the School.

2.2 Advanced educational programmes

The lectures and workshops were given in English. Particularly, in “Web education”, students gave presentations on their research plans and results in English, which were recorded and distributed via the Web educational programme “GEOSSET TOYO” in collaboration with overseas universities. In “Workshop on advanced equipment”, the principles and operational techniques of state-of-the-art microscopic and spectroscopic equipment were taught and instructed, which contributed greatly to the progress in the students’ ability to operate advanced equipment and carry out advanced research.

2.3 Advanced research

Advanced research in the fields of bio-nano fusion science/technology was actively carried out via interactive instructions and discussions between students and their supervisors, thanks to which quite a few scientific papers were published in international journals.

2.4 Collaborative research and educational programmes

The School has so far exchanged memoranda of understanding (MoUs) on the development of collaborative research and educational programmes with 19 overseas universities and 10 companies. Toyo University exchanged an MoU with Sorbonne Université to start a “PhD double degree programme” between the Graduate School of Interdisciplinary New Science and the School of Physics at Sorbonne Université. The International Affairs Office supported the conclusion of the MoU. The School also organised international academic internship programmes for foreign students and researchers from partner universities. The secretariat efficiently supported the above academic activities. The collaborative programmes were successfully carried out in terms of the joint publications of scientific papers in international journals and joint presentations at international conferences.

2.5 Organisation of international symposia and seminars

The School organised and held international symposia and seminars for young researchers in collaboration with the Bio-Nano Electronics Research Centre to encourage and accelerate their international research activities. There were three plenary talks on bio-nano science and technology and students gave poster presentations on their latest results at the 16th International Symposium on Bioscience and Nanotechnology. An “EU: Horizon 2020 Seminar” was held in collaboration with 5 EU universities and 3 companies. “Erasmus+ Programmes” were also carried out in both Romania and Japan. The secretariat was involved in the organisation of the symposia and seminars in collaboration with the academic staff members.

2.6 Presentations by students at international conferences

Five students gave presentations on their latest research results at international conferences; i.e., (a) *NanoteC18: International Conference on Carbon Nanoscience and Nanotechnology* (2018), Brighton, UK; (b) *The 13th International Conference on Surfaces, Coatings and Nanostructured Materials (NANOSMAT)* (2018), Gdansk, Poland; (c) *International Conference on Nanomedicine and Nanobiotechnology (ICONAN-2018)* (2018), Rome, Italy; and (d) *The 12th IEEE International Conference on Nano/Molecular Medicine and Engineering (IEEE-NANOMED 2018)* (2018), Honolulu, USA.

2.7 Academic and administrative evaluation by an advisory committee and students

An advisory committee was held and the academic activities carried out at the School were evaluated by seven committee members. The future strategies for the development of research and educational programmes were also discussed and several constructive comments and suggestions were given by the committee members. The lectures, research supervision and administrative support were evaluated by the master and doctoral students, via which some important issues were raised and discussed for the improvement of the curriculum, the contents and management of the lectures and the administrative support to the students.

3) Outcome and evaluation of the FD/SD programmes in the academic year 2018 【C】

3.1 Impact of the research results

Advanced research was carried out by the doctoral and master students and quite a few scientific papers were published in international journals and presented at international conferences/symposia.

- (a) 15 scientific papers were published in international journals. The mean impact factor of a journal was over 5.000, which shows that the academic standards of the School are very high even from an international point of view.
- (b) 7 plenary/invited talks were given by some of the academic members at international conferences, which shows that the academic level of the members is high by world standards.

- (c) 14 papers were presented at international conferences/symposia.

3.2 Research and educational collaboration with advanced overseas universities and companies

The School exchanged or renewed MoUs on the development of research and educational programmes with the following universities and companies. The secretariat supported the exchange of the MoUs.

- (a) Sorbonne Université, France (PhD double degree programme, New MoU)
- (b) Nicole Grobert's Research Group, University of Oxford, UK (Renewal)
- (c) Nano Research Facility, Indian Institute of Technology Delhi (Renewal)
- (d) Nanotechnology & Advanced Materials Research Centre, C.M.S. College, India (Renewal)
- (e) Shimadzu Corporation, Japan (Renewal)
- (f) Nissan ARC Ltd., Japan (Renewal)
- (g) Sabinsa Japan Corporation, Japan (New MoU)

3.3 Organisation of international symposia and seminars

The School held the following symposia and seminars in collaboration with the secretariat.

- (a) EU: Horizon 2020 Marie Skłodowska-Curie ITN "Enabling Excellence" International Symposium on Nanoscience and Nanotechnology
- (b) Erasmus+ Programmes in Romania and Japan
- (c) The 16th International Symposium on Bioscience and Nanotechnology
- (d) 5 International Seminars on Bioscience and Nanotechnology
- (e) 2 Academia-Industry Collaborative Seminars

3.4 International academic internship programmes

The following internship programmes were organised for an overseas post-doctoral researcher and PhD student. The secretariat supported the international internship programmes quite efficiently.

- (a) 1 post-doctoral researcher from the Politehnica University of Timisoara, Timisoara, Romania; Observation of nanostructures by transmission electron microscopy
- (b) 1 PhD student from the Politehnica University of Timisoara, Timisoara, Romania; Patterns formed by magnetic particles in 3-dimensional magnetic fields

3.5 Academic and administrative evaluation by the Advisory Committee and students

The international research and educational activities up to 2018 were highly evaluated by the Advisory Committee. The Committee members and the academic staff members of the School discussed short and intermediate strategies for the academic programmes carried out at the School from 2019.

Students were basically in favour of the contents, level and management of the lectures organised by the School. Interdisciplinary lectures were particularly interesting for the students from different backgrounds. Students were also satisfied with several courses which focused on up-to-date research.

However, the following issues must be urgently taken into consideration for the improvement of the curriculum and lectures; (a) The goal of the lectures should be more clearly explained; (b) More training-oriented lectures on instruments and equipment may be necessary for future research; and (c) More discussion and interaction between the students and lecturers may be necessary in the class. One of the most serious problems for foreign students is that they cannot communicate with Japanese administrative staff members in a proper way although some of them are very helpful. All the administrative procedures should be instructed in English so that foreign students wouldn't need any extra support from administrative and academic staff members.

4) FD/SD strategies in 2019 【A, P】

The Graduate School of Interdisciplinary New Science will intensify and accelerate the international research and educational activities in collaboration with the secretariat and advanced overseas universities and industries, which we believe will make a great contribution to the progress of the international programmes such as the “Top-Global University Project” carried out at Toyo University.

総合情報学研究科

作成者 湯舟 英一

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

総合情報学研究科は、設置以来、教育理念の実現のために以下の FD・SD 活動に取り組んできた。①定期的に FD 研修会を開催し、授業方法の研鑽や改善に努めてきた。②授業アンケート（平成 28 年春学期は授業評価アンケート）を実施し、大学院生の意見を尊重しながら授業の改善や環境整備を行ってきた。③涵養した行動力を評価するため、コンピテンシー評価を実施してきた。④毎学期、修士研究発表会を開催してきた。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

- ① FD 研修会
- ② 授業アンケート
- ③ コンピテンシー評価
- ④ 修士研究発表会
- ⑤ 博士研究発表会：2018 年度博士後期課程新設

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① FD 研修会

年 2 回定期的に開催し、FD および自己点検評価へつなげている。

第 1 回 FD 研修会（8 月 25 日）

- (1) コンピテンシー評価（喜岡）
- (2) 英語論文作成講座（田村）：次年度より正式科目とするため内容を検討した。

第 2 回 FD 研修会（2 月 21 日）

- (1) コンピテンシー評価（上原）
- (2) 授業アンケート（上原）

② 授業アンケート

ToyoNet Ace を用いて授業アンケートを実施した。総評として、研究に直接役立つ科目に対する評価が高かった。一方、教室等の施設面での不備が目立った。これらの問題点は直ちに改善するように処置した。

③ コンピテンシー評価

春学期では、ルーブリックを3段階から6段階に変更して実施した。これにより詳細な差異を分析可能となった。秋学期では、ルーブリック段階方式から設問方式に変更し、基準が明確となった。両方式に有意な差がないことと、その上で M2 に有意な増加傾向が見られた。よって、教育目標の一つである行動力の涵養が達成できた。これは昨年度実施した PROG によっても裏付けられている。

また、第2、3セメスタの博士前期課程の学生を対象として新たに 2018/2/21 に PROG テストを実施した。この結果の分析は報告書執筆段階で完了していないため、次年度9月のFD研修会で報告する予定である。

④ 修士研究発表会

毎学期末、修士研究発表会を開催し、客観かつ厳密に研究を評価している。質疑時間に収まらないコメントは紙面で発表者に渡している。指導教員は、多角的な視点からの批評に耐える研究を指導することで指導力が涵養される。また、修了要件の一つである英語論文を無理なく執筆できるように学期進行と共に英文要約のページ数を増やしている。研究業績を集約したところ、修士は英語論文を含み平均3件の学外発表を行っていた。

⑤ 博士研究発表会

第1、3セメスタの博士に学振様式の研究計画書を課し、計画的に研究を遂行する能力を涵養している。その他のセメスタの博士には学期末に研究発表会を課し、公聴会に準じた討論を行った。これらの結果、研究計画の問題点が浮き彫りにされ、必要な修正がなされた。指導教員は、多角的な視点からの批評に耐える研究を指導することで指導力が涵養される。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページ での公表有無
		教員	職員	計	
2018/8/6	春学期修士研究発表会	16 名	-	16 名	有
2018/9/13	第 1 回 FD 研修会	10 名	-	10 名	無
2019/2/2	秋学期修士研究発表会	16 名	-	16 名	有
2019/2/4	博士研究発表会	16 名	-	16 名	有
2019/2/21	第 2 回 FD 研修会	14 名	-	14 名	無

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

次年度以降も①～⑤の活動を継続する。これらは自己点検強化の指標とも連携している。特に、博士課程の完成へ向けて教員の指導力向上に FD を活用する。また、総合情報学研究科独自のコンピテンシー評価の効果を検証するために、PROG との関連性を調査している。2018 年度に確かな指標が確立できたため、2019 年度には相関を調査する。2019 年度は学部のカリキュラム改定と連動して大学院のカリキュラム改定にも着手する。

食環境科学研究科

作成者 藤澤 誠

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

科学技術の高度化、社会・経済・文化のグローバル化などにより、社会経済の各分野において指導的役割を果たすとともに、国際的にも活躍できるような高度な専門能力を有する高度専門職業人の養成が強く求められている。食環境科学研究科食環境科学専攻修士課程は、「食品・栄養及び本学の特徴であるスポーツを通じた健康寿命の延伸、食の安全・安心に係る分野でグローバルに活躍できる高度専門職業人」を育成する目的で、2016 年度に開設された。FD 活動においては、2017 年度に引き続き、① FD 講習(講演)会、② English Lounge における英語プログラム、③ TA・SA 講習会、④学会発表・参加奨励金制度 を食環境科学部、生命科学部、生命科学研究科と共同して実施している。また、高度専門職業人を養成するために必要な食環境科学研究科独自の FD 活動として、⑤ 研究科独自の評価項目を含む授業評価アンケート、⑥ 研究とキャリアの進捗状況：年次評価、⑦ 食のグローバルイノベーション人材創出塾および中間発表会を実施している。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

- ① 英語で論文指導をするための教授法についての講演
3 月中旬に株式会社アルクの講師をお招きし、学生の卒業論文、修士論文や英語論文の輪講指導の際に必要な、英語論文の読み方のコツを指導するための効果的な教授方法について講演をしていただく予定となっている。尚、本企画は、食環境科学部と大学院食環境科学研究科の合同 FD 研修会として開催するものである。
- ② English Lounge では、春学期に外国語専任教員が週一回のレギュラーセッションを設け、英会話を行ったほか、各種イベントを実施し、学生の英語学習意欲の向上を促した。
- ③ TA/SA 研修会では、大学院生が TA の制度と役割について理解を深め、実験実習の円滑な運営に携われるよう、講演およびグループディスカッションを行った。
- ④ 学会発表・参加を促す目的で、全学の奨励金制度に加えて、食環境科学研究科においても学会発表・参加奨励金制度を導入しており、今年度も複数名の利用があった。
- ⑤ 講義に対する FD 活動として、研究科独自の授業評価アンケートを実施した。各教員は集計結果をもとに「授業評価アンケート結果に対する所見」を作成した。集約した所見の結果は、2019 年 2 月 22 日の食環境科学研究科中間発表会の際に学生に返却した。また、施設設備についての質問には事務課の対応について学生に説明した。
- ⑥ 高度専門職業人として将来を意識しながら研究活動を行うために、博士前期課程 1 年生および博士後期課程 1 年生を対象とし、年次評価を指導教員と学生が話し合いながら作成し

た。年次評価は研究科委員によって閲覧できるように学部事務室に保管するとともに、2019年2月22日の食環境科学研究科中間発表会の際に学生に返却した。

- ⑦ 高度専門職業人として必要な、高い専門性を活かした情報発信能力、ディスカッションなどによるコミュニケーション能力、自身の専門分野以外の分野との異分野間コミュニケーション能力、ロジカルシンキングを活かした提案・問題解決能力、世界情勢・風潮に対応できる国際性豊かなバランス感覚等を身に着けた人材を養成するために、食のグローバルイノベーション人材創出塾を開催した(2018年8月21, 22日)。院生が自らの研究内容についてプレゼンテーションを行い、様々な業種の学外有識者に評価していただいた。また、半年後の中間発表会を2019年2月22日に実施し、発表はフラッシュプレゼンテーションおよびポスター発表形式で行い、学外有識者に評価いただき学生の成長度を測ることができた。また、本研究科では海外研修を必須としており院生(4名)は、GiFTの海外研修において、マレーシア・ボルネオ島のクチンに留学し、国外の学生と共に多くの文化、価値観を共有した(2018年8月29日～9月6日)。なお、学会等で参加できなかった院生には語学能力及び海外での活動を鑑みて、海外研修と同等とみなした。

3) 2018年度におけるFD・SD活動の成果と課題 【C】

- ①～③ FD講演会、English Lounge、TA/SA研修会については、板倉キャンパスとして実施しており、参加者からも好意的な評価をいただいております、高い教育改善効果が見込まれた。
- ④ 学会発表・参加奨励金制度については、本制度を利用して発表を行った学生が多数いたことから、学会発表を行う機会が増加し、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力等が高められたと考えられた。
- ⑤ 授業評価アンケートについては、本年度より研究科独自の授業評価アンケートを実施し、学生からは建設的な意見が寄せられた。2019年2月22日の中間報告会において、各教員から所見が返却された。また、学生から指摘のあった施設設備に関しても改善された。このように、授業評価アンケートは、教員・事務・学生のコミュニケーションの為の有用なツールとして機能しており、今後も持続的な改善が行われると思われる。
- ⑥ 2017年度より実施した研究活動の年次評価については、年次評価の形式はキャリアの目的を意識するようにし、各指導教員および各学生には、研究科での教育研究活動と学生のキャリアの目的がどのように結びついているのかを考えてもらった。年次評価は研究科で共有された後、各学生に返却され(2/22に返却済み)、翌年度の研究活動に活用してもらう予定となっている。
- ⑦ 食のグローバルイノベーション人材創出塾において外部有識者から評価いただいたことで、高等教育機関と実社会との関係性が緊密となり、高度専門職業人の育成のための基盤が形成できた。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの 公表有無
		教員	職員	計	
3月6日(水)	管理栄養士国家試験ガイド ライン改定・国家試験対策 に関する講演	18(予定)	0(予定)	18(予定)	無
3月18日(月)	論文の読ませ方のコツセミ ナー	(予定)	(予定)	(予定)	無

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

上記の FD 活動はどれも高い教育効果・教育改善効果が認められたことから、2019 年度以降も引き続き全教員および外部有識者が関わりながら施していくこととし、食環境科学研究科の教育に合った FD 活動について議論を重ねていくこととする。また、海外研修についてはさらに食環境科学研究科に特化したプログラム立ち上げに向けて準備を進めている。

情報連携学研究科

作成者 情報連携学研究科長 花木 啓祐

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

情報連携学研究科は、2017 年 4 月、赤羽台キャンパスに情報連携学部と同時に設置された新研究科である。情報連携学部が完成年度を迎える平成 32 年度までは、基礎となる学部から進学する学生が存在せず、下記の人材養成に関する目的のとおり、社会人の再教育を中心とした研究科となっている。

(人材養成に関する目的)

社会人の再教育を軸に、さまざまな分野においてある程度の社会的な実績を有する人材に対して、「情報連携」を実現するための横断的な教育を実施し、それによってその人材が持っていた専門性を情報連携の見地から大きく発展させると共に、新たなビジネスをインキュベーションできる高度な専門的職業人を養成します。

2018 年度に関しては、1、2 年生ともに企業に在勤しながら本研究科で研究する学生が数名という状態であり、そのため、開設と同時に、社会人学生が入学しやすい入試制度とした一次試験免除制度や、入学後の学修計画に配慮した長期履修制度、短期修了制度を導入している。また、社会人学生が履修計画を立案しやすいよう、原則週 2 日の授業で修了できる時間割を編成している。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

大学院生の研究テーマについては、企業に在勤している社会人学生ということで、自ずから現在在勤している企業での課題に直接的に関係するものとなった。

このような研究科として心掛けたこととしては、本研究科での研究が、社会人学生にとって、これまでの職務経験のブレークスルーとなることを促すとともに、深く追究する姿勢の育成、多様な分野の教員との交流による幅広い知識の拡大や、社会人学生同士の交流の場となることなどが挙げられる。

前年度と同様に、まだ FD・SD 活動という段階には至っていないが、研究科委員会等において上記のことを教員間で共有し、修士論文の中間報告や論文報告会については、多くの教員の参加により、特に活発な議論が行われた。

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

2018 年度については、研究科として初めての 3 名の修了生を輩出した。

まだまだ修了生の数は少ないが、これを足掛かりとして、多様な分野で活躍する職業人への修士教育によって、大学と産業界との連携を促進し、また異業種間の新たな連携を可能にすることで、日本の産業と社会を変えるいくことを目指したい。

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

2019 年度には、情報連携学部が 3 年生になるため、年度内に複数回、大学院での研究の意義や、大学院で得られる能力、また必要な姿勢などについて、学部学生に対する説明の場を設定する予定である。

また、課題である社会人学生の募集教化も計画しており、それらの準備や実施の過程において、2) や 3) で掲げた目標に向けた、大学院担当教員のさらなる意識共有を諮っていく予定である。

国際教育センター

作成者 高橋 一男

1) 2017 年度までの FD・SD 活動状況 【C, A, P】

国際教育センターの組織は一般の専任教員に加え、LEAP プログラム、NEST プログラム、さらに国際部国際課オフィスの 4 つに分類される。LEAP プログラムでは年 1～2 回程度、外部講師あるいは学内講師を招聘し、英語教育や留学準備に関する研修を開催してきた。NEST プログラムでは、2017 年度に採用教科書の変更に合わせ、新教材の活用法に関する FD を実施した。

SD においては、学生の海外派遣時の危機管理を目的とした危機管理シュミレーション等を実施してきた。国際部のみならず、学部教務担当職員も参加することで、学部海外研修業務等に携わる職員の危機管理意識を高め、各種プログラムにおいて有事の際に迅速に対応できる体制の構築を行っている。

2) 2018 年度における FD・SD 活動実施内容 【D】

① 国際部 SD 研修

国際部の職員が 6 つのグループに分かれ、スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）採択校のうち先駆的な取り組みを行っている大学を対象に調査を行った。各グループが資料調査を行った上で対象大学を訪問し、国際関連業務に関するヒアリングを行った結果を研修会において発表した。研修会では、全グループの発表後、他大学の事例をいかに本学が応用できるかについて、ワークショップを行った。

② 危機管理研修

国際課職員および学部教務課職員を対象として、本学の学生を海外へ派遣する際に加入している危機管理サービス（危機管理サポートデスク・海外健康電話相談サービスデスク）の見学、海外留学生安全対策協議会（JCSOS）による説明会実施した。

③ 異文化理解講習

海外へ派遣する学生がプログラム参加前・参加後に受検している異文化適応診断（IDI）のシニアトレーナーであるメーカー亜希子氏を講師にお迎えし、研修会を実施した。

本研修は、異文化感受性とは何か、IDI で何を測ることができるのかについて、アクティビティを通して学び、国際課職員および国際教育センター運営委員が参加した。

3) 2018 年度における FD・SD 活動の成果と課題 【C】

① 国際部 S D 研修

実際にヒアリングを行うことで、他大学におけるグッドプラクティス（海外留学の派遣者数を増やしている取り組みの内容、海外留学生の受け入れ体制を整え学内の国際化を進める施策や、学生主体の国際交流のあり方等）を学ぶことができた。調査結果を発表する研修会では、海外留学の派遣者数を増やしている取り組みの内容、海外留学生の受け入れ体制を整え学内の国際化を進める施策や、学生主体の国際交流のあり方等、他大学が実践している具体的事例が紹介された。また、研修後半のワークショップでは、それらの事例を本学にいかに応用できるかについて議論がなされ、多くの職員が学生主体となる国際交流を本学でもさらに推進する必要性を指摘し、活発に意見を交わした。研修内で議論した計画案等をどのように実現していくかが今後の課題である。

② 危機管理研修

サポートデスクの見学を通じて、海外派遣中の学生に生じたトラブル、特に緊急対応が求められる事案への対処法について理解を深めることができた。今後、学生派遣前のオリエンテーション等における危機管理指導に活かしていく。

③ 異文化理解講習

学生へ受検を課しているものの、これまで担当職員の IDI への理解は低かったため、本講習を通して、IDI のみならず異文化感受性への理解を深めることができた。オリエンテーションをはじめ、各種留学プログラムに参加する学生への指導等に役立てていきたい。

研修会等の参加状況

開催日	研修会名	参加者数			ホームページでの 公表有無
		教員	職員	計	
9/23	国際部 S D 研修	1	32	33	有
11/9	国際部危機管理研修	0	10	10	無
11/30	国際部危機管理研修	0	7	7	無
12/6	IDI（異文化理解）	2	13	15	無

4) 2019 年度に向けた FD・SD 活動実施計画 【A, P】

FD については、国際教育センターで 2019 年度、新任教員が 2 名着任することから、異文化感受性および日本語教育分野での研修等を実施する。LEAP では 2021 年度のカリキュラム改編を見据えたカリキュラムおよび教材開発等の研修を行う予定である。

SD についても、国際業務に携わる職員のスキルアップと全学的な意識共有を図れるよう積極的に実施する予定である。

高等教育推進センター / 高等教育推進委員会
活動報告

2018(平成30)年度 東洋大学高等教育推進センター活動一覧

月	推進委員会・部会長会議・各部会							行事	
	推進委員会	部会長	教育方法改善	FD・SD研修	高等教育研究	教育開発・改革	教学データ	日程	内 容（予定含む）
4					①4/3		国際観光学部	4月12日	国際観光学部FD研修会
							経済学部	4月13日	全学授業評価アンケート実施依頼
								4月14日	ティーチング・アシスタントFD研修会（白山・川越・板倉キャンパス）
	⑦4/24							4月18日	ティーチング・アシスタントFD研修会（朝霞キャンパス）
								4月	『東洋大学FD・SD活動報告書（平成29年度）』刊行
5			①5/11		②5/10	①5/10			
				①5/16				5月15日	学生FDチーム新入生歓迎会
					③5/30			5月28日	授業評価アンケート第1Q実施期間開始（～6/9）
6				②③6/8					
	⑧6/25							6月21日	第27回関東圏FD連絡会@立教大学
7					④7/3			7月2日	授業評価アンケート第2Q/春学期実施期間開始（～8/6）
								7月7日	新任教員FD研修会
					⑤7/24				
						②7/31			
8							建築学科	8月4日	平成29年度優秀教育活動賞表彰式
9									
								9月14日	オンデマンドシラバス4本学生公開
								9月18日	東洋大学高等教育推進センターニュースレター創刊
10							建築学科		
		①10/15							
11				④11/6			総合情報学部	11月5日	授業評価アンケート第3Q実施期間開始（～11/19）
			②11/15		⑥11/14				
	⑨11/21								
12							社会学部	12月3日	社会学部FD研修会
								12月8日	平成30年度FDワークショップ（学生の学びを促す評価）
								12月17日	授業評価アンケート第4Q/秋学期実施期間開始（～1/28）
1									
								1月11日	2018年度全国私立大学FD連携フォーラム ミーティング・懇談会
2							文学部	2月6日	文学部教授会
							都市環境デザイン		
3							キャリア教育連絡会		
	⑩3/11							3月12日	英語で授業をおこなうためのFD研修会
								3月13日	第28回関東圏FD連絡会@青山学院大学
								3月21日～22日	全国学生FDサミット@島根県立大学
								3月20日	高等教育推進センターニュース第2号刊行

高等教育推進委員会

第1回（第Ⅰ期通算第7回）

日時 2018年4月24日（火） 18:15～

場所 白山キャンパス 8号館 M2階 第二会議室

〔はじめに〕

- (1) 高等教育推進センター長の挨拶
- (2) 高等教育推進委員会委員の紹介
- (3) 平成29年度第6回東洋大学高等教育推進委員会要録の確認

〔議 題〕

1. 報告事項

- (1) 平成30年度TA・SA研修会について
- (2) English Support Serviceの利用状況について
- (3) 学修成果指標検討会議の設置について

2. 審議事項

- (1) 平成30年度高等教育推進センターの活動方針について
- (2) 部会長の選出及び委員の各部会への配属について

3. 協議事項

- (1) 平成30年度高等教育推進センター活動スケジュールおよび委員会の運営について（会議日、連絡方法等）

4. その他

- (1) 各学部・研究科におけるFD・SD活動状況報告
- (2) 学外におけるFD・SD関連研修会について
- (3) English Support Service 利用案内

第2回（第Ⅰ期通算第8回）

日時 2018年6月25日 10:40～

場所 白山キャンパス 8号館 7階 特別会議室

〔はじめに〕

- (1) 委員の交代について
- (2) 平成30年度第1回東洋大学高等教育推進委員会要録の確認

〔議 題〕

1. 報告事項

- (1) 東洋大学 FD・SD 活動報告書（平成29年度）の刊行（PDF）について
- (2) English Support Service の利用状況について

2. 協議事項

- (1) 各部会の活動計画（進捗状況報告含む）

3. センター長報告

- (1) PROG テスト結果の概要について
- (2) GPA 等の成績情報の分析について
- (3) 学修成果指標検討会議の検討状況について

4. その他

- (1) 各学部・研究科における FD・SD 活動状況報告
- (2) 学外における FD・SD 関連研修会について
- (3) 学長フォーラムについて（8/3 13:00～ 8号館 8階 125 記念ホール）
- (4) その他

第3回（第Ⅰ期通算第9回）

日時 2018年11月21日

場所 白山キャンパス 8号館中2階 第二会議室

〔はじめに〕

- (1) 平成 30 年度第 2 回東洋大学高等教育推進委員会要録の確認

〔議 題〕

1. 報告事項

- (1) 各部会活動状況報告
 - ① 教育方法改善部会
 - (ア) 2018 年度第 1 クォーター、第 2 クォーター及び春学期授業評価アンケート実施結果
 - ② FD・SD 研修部会
 - (ア) 平成 30 年度新任教員 FD 研修会実施報告
 - (イ) 平成 30 年度 FD ワークショップの開催について
 - (ウ) 平成 30 年度英語で授業をおこなうための FD 研修会について
 - ③ 高等教育研究部会
 - (ア) 東洋大学高等教育推進センターニュースレターについて
 - ④ 教育開発・改革部会
 - (ア) オンデマンドシラバスについて
- (2) センター長報告
 - ① 学修成果指標検討会議の進捗報告
 - ② 各学部・研究科からの教学データ提供依頼状況
 - ③ English Support Service の利用状況について
 - ④ 学外機関との連携について（6 月 21 日関東圏 FD 連絡会への参加）

2. 協議事項

- (1) 授業評価アンケートの有効活用に向けたアンケート調査について

3. その他

- (1) 各学部・研究科における FD・SD 活動状況報告
- (2) 学外における FD・SD 関連研修会について
- (3) 平成 30 年度高等教育推進センター活動スケジュールの確認

- (4) その他

第4回（第Ⅰ期通算第10回）

日時 2019年3月11日（月） 14：30～16：00

場所 白山キャンパス 8号館中2階 第二会議室

〔はじめに〕

- (1) 平成30年度第3回東洋大学高等教育推進委員会要録の確認

1. 報告事項

- (1) 各部会活動状況報告

- ① 教育方法改善部会
- ② FD・SD研修部会
- ③ 高等教育研究部会
- ④ 教育開発・改革部会
- ⑤ 2018（平成30）年度高等教育推進センターの活動一覧

- (2) 各学部・研究科におけるFD・SD活動状況報告

- (3) センター長報告

- ① 学修成果測定指標の策定について

- (4) センター報告

- ① English Support Service の利用状況
- ② 各学部・研究科からの教学データ提供依頼状況
- ③ 学生FDチームの活動状況
- ④ 学外機関との連携について
- ⑤ 刊行物の作成状況
- ⑥ 学外におけるFD関連研修会について

2. 協議事項

- (1) 2019 年度授業評価アンケートの実施について
- (2) 2019 年度ティーチング・アシスタント FD 研修会の開催について

3. その他

- (1) 次年度の委員一覧
- (2) 高等教育関連書籍のお知らせ

部会長会議

第1回（第Ⅰ期通算第4回）

日時 2018年10月15日（月） 10：40～

場所 白山キャンパス8号館8階 学長会議室

議題

1. 各部会の活動に係る近況報告

（1）教育方法改善部会

- ・授業評価アンケートに関する教員向けアンケートについて

（2）FD・SD検討部会

- ・秋学期の研修プログラムについて

（3）高等教育研究部会

- ・メールマガジンの配信について

（4）教育開発・改革部会

- ・オンデマンドシラバスについて

2. 次回の高等教育推進委員会の開催について

（1）学修成果指標検討会議の進捗報告

（2）授業評価アンケートに関する教員向けアンケート

（3）成績評価状況の検証について（各学部からのリクエスト他、情報発信）

教育方法改善部会

1. 部会

第1回（第Ⅰ期通算第5回）

日時 2018年5月11日

場所 メール会議

議題

1. 平成30年度の活動計画について

第2回（第Ⅰ期通算第6回）

日時 2018年11月15日

場所 メール会議

議題

1. 授業評価アンケートの有効活用に向けたアンケート調査について

2. 授業評価アンケート

■回答期間

実施時期	実施期間		
第1クォーター	平成30年5月28日(月)	～	平成30年6月9日(土)
第2クォーター/ 春学期	平成30年7月2日(月)	～	平成30年8月6日(月)
第3クォーター	平成30年11月5日(月)	～	平成30年11月19日(月)
第4クォーター/ 秋学期	平成30年12月17日(月)	～	平成31年1月28日(月)

■学生公開用結果の配信

実施時期	配信日
第 1 クォーター	平成 30 年 6 月 18 日(月)以降
第 2 クォーター/春学期	平成 30 年 8 月 22 日(水)以降
第 3 クォーター	平成 30 年 11 月 26 日(月)以降
第 4 クォーター/秋学期	平成 31 年 2 月 4 日(月)以降

■学生へのフィードバックコメントの入力

実施時期	入力期間		
第 1 クォーター	平成 30 年 6 月 19 日(火)	～	平成 30 年 7 月 3 日(火)
第 2 クォーター /春学期	平成 30 年 8 月 23 日(木)	～	平成 30 年 9 月 7 日(金)
第 3 クォーター	平成 30 年 11 月 27 日(火)	～	平成 30 年 12 月 11 日(火)
第 4 クォーター /秋学期	平成 31 年 2 月 5 日(火)	～	平成 31 年 2 月 19 日(火)

■教員用アンケート分析結果の納品

- ①〔第 1 クォーター、第 2 クォーター/春学期分〕平成 30 年 9 月中旬
- ②〔第 3 クォーター、第 4 クォーター/秋学期分〕平成 31 年 3 月下旬

平成30年度活動報告 教育方法改善部会

計画日 平成30年5月16日
報告日 平成31年3月11日
部会長 千明 誠

活動項目	平成30年度計画の概要	検討・活動にあたって留意したい点	年間活動報告
①授業評価アンケートの開発、分析及び活用	1. 春学期からWebによる授業評価アンケートを実施する。 2. 秋学期から、教員用の授業評価アンケートの教員用の結果表をPDFなどでToyonet-Aceにて閲覧できる仕組みを構築する。 3. 授業評価アンケートの活用状況を把握する。（各学部委員にアンケート調査）アンケート結果をもとに、授業評価アンケートの今後の積極的な活用方法や実施に際しての改善内容などを検討する。	1. 授業評価アンケートの実施率の低下を防ぐため、マークシートにて実施していた時と同様に、授業内で実施するように留意する。ただし、アンケート実施時に欠席した学生については、後日、入力できるようにすることで、実施率の向上を図る。 2. パスワードにて学生には閲覧できないようにするなど、情報管理に留意する。	本年度も引き続きWebによる授業評価アンケートを春学期・秋学期に実施した。ToyoNet-ACEによる教員に対する結果（PDF）の返却とコメント入力の流れも整い、教員と学生にとって振り返りの仕組みとして機能してきている。教員用の最終結果表は紙での配布を希望する教員も多いため、引き続き検討する。また、授業評価アンケートをより有効に活用するために、全学的なアンケート調査を企画して部会案を作成したが、委員会で改善意見が出されたことから継続して検討することになった。
②学生の学修成果指標開発の支援	1. 「学修成果指標検討会議」の検討状況や結果を把握するとともに、7月に予定される高等教育推進委員会の中間報告の内容や方向性を受け、センター長と協議のうえ、学科レベルでの指標開発に係わる支援等に尽力する。 具体的な活動内容については、現段階では保留とする。	左記のとおり、具体的な方向性が高等教育推進委員会にて報告され次第、センター長と協議のうえ進めていく。	学修成果指標検討会議の報告書が提出され、各学科独自の学修成果指標の作成に向けて全学的な作業が始まった。今年度中は指標作成の基になる3つのポリシーの再点検がメインであり、次年度がら具体的な指標作りの作業に入る予定である。

◆総括（ふりかえり／来年度に向けての改善）

授業評価アンケートの実施については、春学期・秋学期ともに順調に実施することができた。Web化によってアンケート実施⇒結果の返却⇒教員コメント入力という流れが整い、教員と学生にとって授業評価アンケートを通じた振り返りの仕組みが構築されたことのメリット大きい。この仕組みをより有効に活用するためには、現行のアンケートの問題点の検討と全学的なグッド・プラクティスの共有が必要であろう。そのためのアンケートを企画したのだが、委員会での議論をふまえて継続して検討することになった。授業評価アンケートに対しては様々な考え方があることから、来年度はそうした点を十分踏まえてアンケートを実施していきたい。また、学修成果指標の作成も具体的な作成段階に入ることから、全学的な取組をしっかりとサポートしていきたい。

FD・SD 研修部会

1. 部会

第1回（第Ⅰ期通算第7回）

日時 2018 年 5 月 16 日

場所 メール会議

議題

1. 平成 30 年度の活動計画について

第2回（第Ⅰ期通算第8回）

日時 2018 年 6 月 8 日 16:30～17:30

場所 学長会議室

議題

1. 平成 30 年度新任教員 FD 研修会の開催について
2. 平成 30 年度 FD 研修会スケジュール案

第3回（第Ⅰ期通算第9回）

日時 2018 年 6 月 8 日

場所 メール会議

議題

1. 平成 30 年度新任教員 FD 研修会の事前アンケートについて

第4回（第Ⅰ期通算第10回）

日時 2018 年 11 月 6 日

場所 メール会議

議題

1. 平成 30 年度 FD ワークショップについて

2. 学内 FD・SD 関連研修会

ティーチング・アシスタント FD 研修会

日時 平成 30 年 4 月 14 日（土）13：00～15：00（白山・川越・板倉キャンパス）

平成 30 年 4 月 18 日（水）13：00～15：00（朝霞キャンパス）

場所 白山 ナレッジスクエア（3 号館 1 階）

川越 2106 教室（2 号館 1 階）

板倉 2206 教室（2 号館 2 階）

朝霞 講情 301 教室（講義棟 3 階）

参加人数

キャンパス	人数	内訳	
		TA	SA
白山	13	13	
川越	58	33	25
板倉	65	23	42
朝霞	1	1	
計	137	70	67

◆各キャンパス講師（FD・SD 研修部会員）

白山 千明 誠 先生

川越 村野 昭人 先生

板倉 井上 広子 先生

朝霞 是枝 喜代治 先生

◆参加者の Web アンケート回答期間

平成 30 年 4 月 14 日（土）～5 月 3 日（木）

◆欠席者／研修会後の採用者への対応

TA/SA ハンドブックを読んだ上でワークシートに回答し、
各学部教務担当へ提出。ワークシート提出後は Web アンケートに回答。
(回答期間：平成 30 年 4 月 16 日 (月) ～5 月 14 日 (月))

新任教員 FD 研修会

日時 平成 30 年 7 月 7 日 (土) 10:40～14:00 (懇親会含む)
対象者数 69 名
参加者 新任教員 55 名 (+ 欠席者課題提出 9 名)
高等教育推進委員会 FD・SD 研修部会 委員 6 名

プログラム

10:40～10:55 (15)	開会のあいさつ ・ プログラム説明
	グループディスカッション①
10:55～11:25 (30)	「ご着任後 3 か月を振り返り、東洋大学の学生に思うこと、授業について感じること」
11:25～11:30 (5)	休憩
11:30～11:50 (20)	講演 高等教育推進センター長 (副学長・経済学部総合政策学科) 松原 聡
	グループディスカッション②
11:50～12:55 (65)	「学生の意欲的・主体的な授業参画を促す授業をおこなうためには？」
12:55～13:00 (5)	閉会のあいさつ FD・SD 研修部会長 藤松 信義
13:10～	懇親会 @8 号館 1 階 トレス・ダイニング

FD ワークショップ

日時 平成 30 年 12 月 8 日 (土) 10:00～16:00
場所 白山キャンパス 10 号館 3 階 A301 教室
講師 栗田 佳代子 氏 (東京大学 大学総合教育研究センター 准教授)
参加者 11 名

テーマ 「学生の学びを促す評価」

プログラム

10:00～12:00 (120) セッション 1

12:00～13:00 (60) 昼食会・交流会

13:00～16:00 (180) セッション 2

英語で授業を行うための FD 研修会

日時 平成 31 年 3 月 12 日 (火) 10:00～17:10

場所 白山キャンパス 10 号館 2 階 A201 教室・A203 教室

参加者 21 名

テーマ Program A : Lectures and Presentation

Program B : Academic Writing

平成30年度活動報告 FD・SD研修部会

計画日 平成30年5月16日
報告日 平成31年3月11日
部会長 藤松 信義

活動項目	平成30年度計画の概要	検討・活動にあたって留意したい点	年間活動報告
①全学的な研修会の企画、実施	・FD研修の実施 ・SD研修の実施 ・新任教員FD研修会・TA研修会の実施	・従来実施されている活動を含めて、企画全体を検討する ・SD研修の企画を検討する．既存の研修内容調べると共に、事務職員の意見を反映した内容となるように留意する	4月14日 ティーチャング・アシスタントFD研修会（白山・川越・板倉キャンパス） 4月18日 ティーチャング・アシスタントFD研修会（朝霞キャンパス） 4月末 『東洋大学FD・SD活動報告書（平成29年度）』刊行 7月7日 新任教員FD研修会 12月8日 平成30年度FDワークショップ（学生の学びを促す評価） 3月12日 英語で授業をおこなうためのFD研修会 ・SD研修会の開催は今後の検討課題である。
	②各学部・研究科の研修の支援	・各学部・研究科の求めに応じる形とする（ボトムアップ） ・開催学部・研究科以外の教職員も参加できるように、学内への情報提供に留意する	各学部・研究科が開催するFD研修に対して、事務局を通じて講師やテーマの選定等の助言をおこなった。（国際観光学部、法学部、経営学研究科）
	③その他	・各部会の活動状況を共有しつつ、意見交換可能な環境の整備をはかる	部会間の交流を図れなかったので、次年度の目標とした。

■総括（ふりかえり／来年度に向けての改善）

・ 予め予定していた企画については滞りなく実施できた。 ・ 研修内容の充実と体系化については今後部会内で議論を深めたい。 ・ SDの実施についても、職員向けのもものと両方兼ねるものを検討していきたい。 ・ 次年度の部会長への引継ぎ事項となるが、SD研修会の開催とセンター内の4部会間の交流について、事務局と連携して実施を検討して頂きたいと考えている。

高等教育研究部会

1. 部会

第1回（第Ⅰ期通算第4回）

日時 2018年4月3日

場所 メール会議

議題

1. 高等教育推進センターニュースの刊行に向けて

第2回（第Ⅰ期通算第5回）

日時 2018年5月10日

場所 メール会議

議題

1. 平成30年度の活動計画について

第3回（第Ⅰ期通算第6回）

日時 2018年5月30日 18:00～19:00

場所 学長会議室（Web 会議）

議題

1. 高等教育研究部会メンバー紹介
2. 2018年度高等教育研究部会の活動計画の確認
3. 活動計画②「高等教育関連情報の発信・刊行物の作成」の今後の進め方について（テーマ決定・役割分担）
4. 今後のスケジュールに関して（メール会議）

第4回（第Ⅰ期通算第7回）

日時 2018年7月3日

場所 メール会議

議題

1. メールマガジンの担当記事の割り振りについて

第5回（第Ⅰ期通算第8回）

日時 2018年7月24日

場所 メール会議

議題

1. 報告 メールマガジン担当振り分けについて
2. 協議 メールマガジン運用ガイドラインについて
3. 協議 メールマガジンの配信パターンについて

第6回（第Ⅰ期通算第9回）

日時 2018年11月14日 18:15～19:15

場所 学長会議室（Web会議）

議題

1. 「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」配信状況
2. 2月以降の「ニュースレター」の連載シリーズのテーマについて
3. 「年間の成果を取りまとめた報告書」の進め方について

2. 東洋大学高等教育推進センターニュースレター

配信対象者 専任教職員（常勤嘱託含む）

配信者数 1,311名（2019年1月18日現在）

配信実績

通算	巻, 号	配信日
1	Vol.1, No.1	2018 年 9 月 18 日(火)
2	Vol.1, No.2	2018 年 10 月 2 日(火)
3	Vol.1, No.3	2018 年 10 月 16 日(火)
4	Vol.1, No.4	2018 年 10 月 30 日(火)
5	Vol.1, No.5	2018 年 11 月 13 日(火)
6	Vol.1, No.6	2018 年 11 月 30 日(金)
7	Vol.1, No.7	2018 年 12 月 11 日(火)
8	Vol.1, No.8	2018 年 12 月 19 日(水)
9	Vol.1, No.9	2019 年 1 月 17 日(木)
10	Vol.1, No.10	2019 年 1 月 29 日(火)
11	Vol.1, No.11	2019 年 2 月 12 日(火)
12	Vol.1, No.12	2019 年 2 月 26 日(火)
13	Vol.1, No.13	2019 年 3 月 12 日(火)
14	Vol.1, No.14	2019 年 3 月 26 日(火)

平成30年度活動報告 高等教育研究部会

計画日 平成30年5月16日
報告日 平成31年3月11日
部会長 角谷 昌則

活動項目	平成30年度計画の概要	検討・活動にあたって留意したい点	年間活動報告
①国内外の高等教育の動向の調査、研究	国内については、文部科学省、他大学、学内のグッドプラクティス（学生調査分析等含む）、海外については、アジア、北米、欧州の高等教育機関の動向を調査し、収集した有益な情報や知見を活動項目の②「高等教育関連情報の発信・刊行物の作成」として学内教職員に還元する。	調査、研究テーマの選定にあたっては、本学の教学施策や本学の学生の実態を把握した上で、時宜に応じたものでありかつ、教職員に発信することで、本学の教育活動の発展に資するものとなるよう留意する。	活動項目②の『ニュースレター』の発刊に伴い、「学生の学修時間」および「授業の工夫」に関する連載記事を掲載した。その連載の中で、関連する法制度上のトピックや文部科学省の政策動向や国内外の大学での取組事例、あるいは学内教員によるグッドプラクティスなどを取り上げて紹介した。
②高等教育関連情報の発信・刊行物の作成	活動項目の①「国内外の高等教育の動向の調査、研究」において収集した情報を、テーマ別に年3回（4ヶ月に1回程度）の頻度でメールアドレスとして本学教職員に配信する（メール内のリンク先をToyoNet-ACE又は高等教育推進センターHPとしてToyoNet-ACE又は記事のアーカイブ化や学外者への取組の広報も兼ね効果的な取組とする。また、職員も対象とすることでSDも兼ねる）。その他、年間の成果物として調査を取りまとめた報告書を年度末に1点刊行する。	情報を発信する際には、教職員の興味を引くものとなるよう、中身だけでなくレイアウトやデザイン等の体裁も工夫するよう努める。 また、可能な限り、ToyoNet-ACEや高等教育推進センターHPと連動することを意識し、作成した記事のアーカイブ化、学外に向けた本学のプレゼンスの向上に努める。	上述のように『東洋大学高等教育推進センターニュースレター』を9月に創刊し、2週間に1度の頻度で学内教職員全員に電子メールにて定期配信を行った。年度末の時点で14号まで配信の予定。この『ニュースレター』は、バックナンバーも含めてToyoNet-ACEの高等教育推進センターのページにても閲覧することができようにした。
③学会、他大学との連携、情報交換	「関東圏FD連絡会」や「全国私立FD連携フォーラム（JPFF）」との連絡会参加と情報共有に加え、新たな連携先を模索する。	学外FD・SD関連研修会に積極的に参加するなどして、新たな連携先（情報交換ができる関係）を開拓する。	職員が「関東圏FD連絡会」や「全国私立大学FD連携フォーラム（JPFF）」に参加し、得られた情報を高等教育推進委員会で報告した。

◆総括（ふりかえり／来年度に向けての改善）

今年度の活動の中心は、学内教職員に向けた定期刊行物を創刊し軌道に乗せることにあった。その活動は『東洋大学高等教育推進センターニュースレター』として結実したため、当部会の本年度の主たる目的は達成されたのではないかと考える。尽力を惜しまなかった部会メンバー教員および事務局職員に感謝する次第である。 このように今年度は形を作ることができたため、来年度は当部会の本旨を踏まえながらその内容の充実や質的向上を目指して活動を行っていきたい。
--

教育開発・改革部会

1. 部会

第1回（第Ⅰ期通算第3回）

日時 2018年5月10日

場所 メール会議

議題

1. 平成30年度の活動計画について

第2回（第Ⅰ期通算第4回）

日時 2018年7月31日 11:00～11:45

場所 学長会議室

議題

1. 教育開発・改革部会メンバー紹介
2. 平成30年度教育開発・改革部会の活動計画の確認
3. オンデマンドシラバス（トライアル）について
4. 学外FD・SD研修会のご案内
5. ToyoNet-ACE「高等教育推進センター(研修会等)」の運用状況について（報告）

2. 授業紹介動画（オンデマンドシラバス）

No.	授業名	教員名
1	心理学 B／社会適応の心理学 2	松田 英子 先生
2	社会心理学特別講義	大島 尚 先生
3	犯罪心理学 B	桐生 正幸 先生
4	社会福祉学概論 A【2019年・春学期】	金子 光一 先生

URL: https://www.youtube.com/channel/UCNmHCX4_SMP433AGnxU-GtQ

平成30年度活動報告 教育開発・改革部会

計画日 平成30年5月10日

報告日 平成31年3月11日

部会長 松田 英子

活動項目	平成30年度計画の概要	検討・活動にあたって留意したい点	年間活動報告
①新たな教育形態（ICT、反転授業、その他）の研究	各学部・各学科・各研究科で、教員が取り組んで既に実施している新しい教育形態（ICT、反転授業、その他）および学外における最先端の教育の取り組みに関する情報共有を行う。情報共有の場として、ToyoNet-ACE上の、「高等教育推進センター（研修会等）」のコースをプラットフォームとして、各種資料のデータベース化と効率的な共有をはかる。さらに本年度は新たに「動画やインタラクティブな要素を含むシラバス」をトライアルとして導入する。	学内、学外の取り組みに関しては、FD・SD研修部会や高等教育研究部会からの情報提供及び学内外のFD・SD研修会の資料を参考にする。また、動画シラバスの内容については教務部と、また技術的には情報システム課にご協力をお願いする。「動画やインタラクティブな要素を含むシラバス」のトライアルに協力してくれる教員として、まずは教育開発・改革部会の教員に呼びかける。大講義科目の初回をオンデマンド授業にするなどのトライアルについては、教務部と意見交換しながら検討する。	各学部各研究科の高等教育推進センター委員を中心に、秋学期から動画シラバスをトライアルで導入した。動画シラバスの導入は、履修者と受講科目のマッチングをはかることと、初回の授業が始まる前の事前学習を導入することが目的であった。より長時間の動画による授業を、反転学習の素材として利用することの可能性について、教務部長と意見交換を行った。取組を活性化するために、来年度以降、ニーズ調査の実施について検討したい。
②アクティブ・ラーニング、主体的学習の促進	各学部・各学科・各研究科で、教員が取り組んで既に実施している新しいアクティブラーニングの取り組みおよび学外における最先端のアクティブラーニングの取り組みに関する情報共有のための資料を、Toyonet-ACE上の、「高等教育推進センター（研修会等）」のコースをプラットフォームとして、各種資料のデータベース化と効率的な共有をはかる。平成30年度新任教員FD研修会の中で、responの操作説明等、アクティブラーニングを導入するための情報提供を行う。さらに授業の予習・復習のための図書館保有の電子書籍の活用法について検討する。	教員が取り組んですでに実施している新しいアクティブラーニングの取り組みに関しては、教員活動評価や学生アンケート（在校生、卒業生等）を援用することで整理できると考えられ、関係各所に協力を要請する。新任教員FD研修会に関しては、FD・SD研修部会の協力を得る。その他のFD研修会についても、FD・SD研修部会との連携可能性について留意する。	・新任教員FD研修会の中で、responを活用するよう、FD・SD研修部会に依頼した。 ・電子書籍について、高等教育研究部会が運営している「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」の中で紹介いただいた。 ・Toyonet-ACE上の、コース「高等教育推進センター（研修会等）」の中に「ICT活用」というコンテンツを作成し、各種資料のデータベース化に向けて整備をおこなった。
③学部横断型の教育プラットフォームの開発	学部横断的な教育プラットフォームの開発として、各学部・各学科・各研究科での優れた教育取り組みの資料（教材等）を、ToyoNet-ACEで公開し共有する。	東洋大学優秀教育活動賞受賞教員及び教育プログラムや、部会の委員から推薦された優れた教育的取り組みの推薦を受け、部会で検討し、選ばれた資料（教材等）を全学で共有する。公開については情報システム課の協力を得る。	・2月から、高等教育研究部会が運営する高等教育推進センターニュースレターにおいて、平成29年度東洋大学優秀教育活動賞受賞教員によるコラムが配信されており、優れた教育的取り組みが共有されている。

◆総括（ふりかえり／来年度に向けての改善）

3分程度のシラバス動画の収録に関して、教員側の負担は比較的少なかったものの、機器の設定や時間の調整など、収録や編集にかかわる職員の負担は大きかったものと考えられる。さらにシラバス動画を増やしていく場合には、この部分の道具的、人的な資源の確保が課題となる。また、履修者からは特に否定的な意見は出ていないものの、シラバス動画がある授業を履修している学生の中でも、それがあることを知らない学生も多くいると想定され、これまでシラバスを読んでいた学生にも、授業の準備としてみてもらう工夫が今後必要になると考えられる。さらに、課題を含む、より時間の長い（30分程度）授業の動画視聴を初回の授業におきかえて、2回目以降の履修の条件とするなど、反転授業の取り組みの一環とすることは、さらに教務部との相談が必要になると考えられる。

その他—各学部・研究科からの教学データ提供依頼状況—

1. 2018 年度の依頼状況

高等教育推進センターでは、2017 年 12 月から、各学部・研究科の自己点検・評価活動支援の一環として、組織のニーズに応じて教学データを分析した資料を提供している。2018 年度は、8 件の依頼を承った（表 1）。昨年度の依頼 11 件と比較して件数は減少したが、今年度は 1 件あたりの分析情報が増え、分析手法も複雑になりつつある。また、今年度は 3 学部の FD 研修会・教授会で先生方に分析結果をご説明する機会をいただいた。

表 1 2018 年度にデータを提供した組織とその内容

#	月日	組織	内容
1	4 月	◆国際観光学部	①入学年度春学期 GPA×4 年後の累積 GPA ②コース×GPA ③科目群別×GPA ④入試種別×GPA ⑤入試種別×GPA+PROG ⑦【資料】1 年次 PROG×3 年次 PROG、PROG×GPA
2	4 月	経済学部	①科目群別 GPA
3	8 月	理工学部建築学科	①留学生の入試科目成績×入学後の成績
4	10 月	理工学部建築学科	①入試方式の違いによる卒業後進路の傾向分析
5	11 月	総合情報学部	①総合情報学部独自アンケートの集計、分析
6	12 月 3 日	◆社会学部	2014 年度社会学部入学生の追跡から見えてくること— 成績（GPA）と PROG データを用いて
7	2 月 6 日	◆文学部	文学部 2017(平成 29)年度授業評価アンケート分析結果報告— 授業評価アンケートが語る授業設計のヒント
8	2 月	理工学部都市環境デザイン学科	①入試種別×GPA×ストレート卒業率（過去 5 年分） ②高校ランク×GPA×ストレート卒業率（過去 5 年分）
9	3 月	キャリア教育連絡会	キャリア教育科目履修者の PROG テスト結果

※網掛けは前回の高等教育推進委員会で報告済み

※◆は学部の FD 研修会、教授会にてご説明

2. 課題と今後の展望

来年度も引き続き各学部・研究科の組織的な取り組みの支援を目的に教学データの提供に努めたい。昨年度は、依頼に基づく資料の送付で完結していたことが多かったが、今年度は、各組織の執行部との打合せや、FD 研修会への発展、学部の自己点検・評価報告書への資料収録等、各組織とのやり取りが増え、ニーズ把握に繋がった。引き続き各組織と連携しながら、情報提供を続けていきたい。加えて、高等教育推進センターニュースレター等を通じてデータ提供の取組を発信し、グッドプラクティスを全学で共有していきたい。

3. その他

「データ提供依頼書」は、下記 URL からダウンロードが可能です。

(ダウンロード先)

ToyoNet-ACE>高等教育推進センター(研修会等)>コンテンツ>教学データ提供

URL: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2765078c1263429

高等教育推進センター刊行物

高等教育推進センターの刊行物は下記 URL からご覧いただけます

東洋大学高等教育推進センターHP>「刊行物」

URL : <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/publications.html>

◆『東洋大学高等教育推進センターニュース』（創刊号～） 旧『東洋大学 FD ニュース』（創刊号～第 19 号）

～本学の特色ある FD・SD 活動を取りまとめた定期刊行物～

URL : <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/fdnews.html>



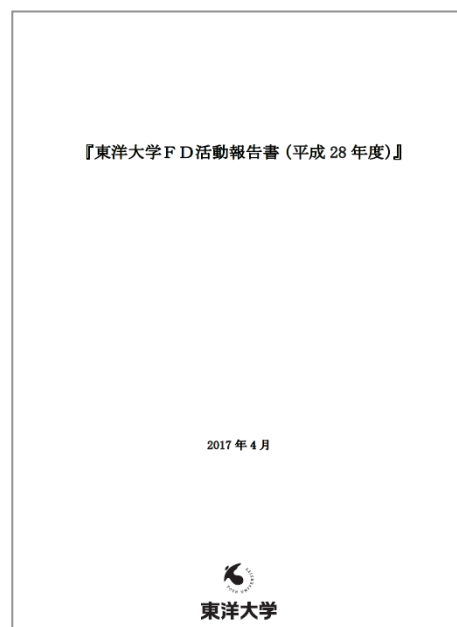
◆『東洋大学FD活動報告書（平成29年度）』（平成21年度～）

～学部・研究科、高等教育推進センター／委員会の年間のFD活動を取りまとめた報告書～

URL：<http://www.toyo.ac.jp/site/fd/fd-report.html>

CONTENTS：

- I. 平成29年度 学部FD活動状況報告
- II. 平成29年度 大学院FD活動状況報告
- III. 平成29年度 高等教育推進センター活動報告
- IV. 関係資料（規程、刊行物）



◆『TA/SA Handbook』2018年4月1日改定発行

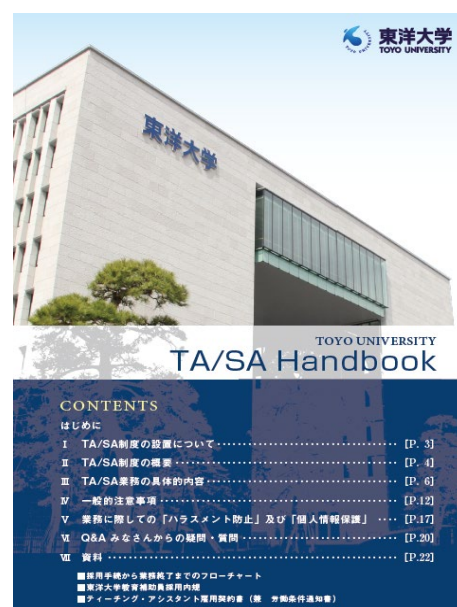
～TA/SA業務の担当者が教育補助業務を遂行するための手引書～

URL：<http://www.toyo.ac.jp/site/fd/tahb.html>

CONTENTS：

はじめに

- I. TA/SA制度の設置について
- II. TA/SA制度の概要
- III. 一般的注意事項
- IV. TA/SA業務の具体的内容
- V. 業務に際しての「ハラスメント防止」および「個人情報保護」
- VI. Q & A みなさんからの疑問・質問
- VII. 資料
 - ・採用手続から業務終了までのフローチャート
 - ・東洋大学教育補助員採用内規
 - ・ティーチング・アシスタント雇用契約書(兼労働条件通知書)



◆『FD ハンドブック』（第2 判）

～授業運営の基本事項をまとめた手引書～

URL： <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/fdhb.html>

CONTENTS：

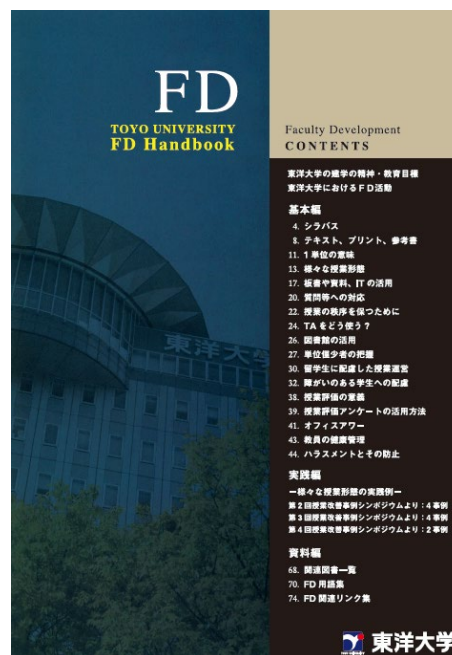
■基本編

- ・ シラバス
- ・ テキスト、プリント、参考書
- ・ 1 単位の意味
- ・ 様々な授業形態
- ・ 板書や資料、IT の活用
- ・ 質問等への対応
- ・ 授業の秩序を保つために
- ・ TA をどう使う？
- ・ 図書館の活用
- ・ 単位僅少者の把握
- ・ 留学生に配慮した授業運営
- ・ 障がいのある学生への配慮
- ・ 授業評価の意義
- ・ 授業評価アンケートの活用方法
- ・ オフィスアワー
- ・ 教員の健康管理
- ・ ハラスメントとその防止

■実践編 ―授業改善事例シンポジウムから―

■資料編

- ・ FD 関連図書一覧
- ・ FD 用語集
- ・ FD リンク集



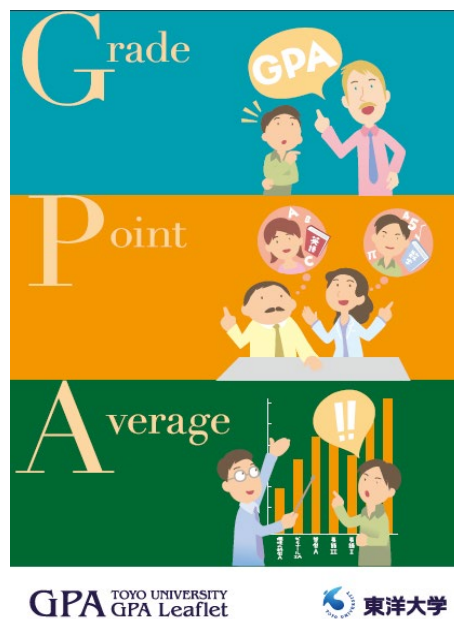
◆『GPA リーフレット』

～GPA 制度の導入と活用について～

URL : <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/17133.html>

CONTENTS :

- ・ 東洋大学における GPA 制度の導入にあたって
- ・ GPA とは
- ・ 提示方法
- ・ どのように使われる？
- ・ 導入の背景は？
- ・ どんな影響があるのか？
- ・ 教員の成績評価は何かが変わる？
- ・ 他大学の取組み



◆『学生 FD チームニュースレター』(No.1～No.10)

URL : <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/49128.html>

CONTENTS :

- ・ 先輩による履修相談会
- ・ 学生 FD サミット 2016 夏 in 札幌大学
- ・ 学生 FD チームの紹介
- ・ 先生インタビュー! in 川越
- ・ 第 4 回東洋授業へのコンクール



東洋大学高等教育推進センター規程

改正 平成 30 年 4 月 1 日

(設置)

第 1 条 東洋大学（以下「本学」という。）は、東洋大学学則第 3 条の 3 及び東洋大学大学院学則第 1 条の 3 に基づき、「東洋大学高等教育推進センター」（以下「高等教育推進センター」という。）を設置する。

(目的)

第 2 条 高等教育推進センターは、本学の教育活動の継続的な改善、改革を組織的に推進、支援することを目的とする。

(事業)

第 3 条 高等教育推進センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 教育内容及び方法改善のための調査、研究及び支援
- (2) F D（ファカルティ・ディベロップメント）及び S D（スタッフ・ディベロップメント）の研究会、研修会、講演会等の企画、実施及び支援
- (3) 国内外の高等教育の動向に係る調査、研究及び情報提供
- (4) 新たな教育形態及び教育プログラム等の研究、開発
- (5) 各学部、研究科での教育活動の改善、改革の情報交換、調整及び支援
- (6) その他高等教育推進センターの目的達成に必要な事項

(センター長)

第 4 条 高等教育推進センターに、センター長を置く。

- 2 センター長は、高等教育推進センターの業務を統括し、高等教育推進センターを代表する。
- 3 センター長は、学長が指名する副学長とし、理事長が任命する。
- 4 センター長の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、副学長の在任期間内とする。

(副センター長)

第 5 条 高等教育推進センターに、副センター長を置くことができる。

2 副センター長は、本学の専任教員のうちから、センター長の推薦を経て、学長が指名し、理事長が任命する。

3 副センター長は、センター長を補佐するとともに、センター長に事故があるとき、又はセンター長が欠けた場合は、センター長の職務を代理し、又は代行する。

4 副センター長の任期は、センター長の任期満了とともに終了する。ただし、再任を妨げない。

(センター員)

第6条 高等教育推進センターに、第3条に掲げる事業を推進するために、センター員を置くことができる。

2 センター員は、学内外の専門的な知識を有する者とし、センター長の推薦を経て、学長が指名し、理事長が任命する。

(高等教育推進委員会)

第7条 高等教育推進センターに、高等教育推進委員会（以下「推進委員会」という。）を置く。

2 推進委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) センター長、副センター長
- (2) 各学部から推薦された専任教員 各1名
- (3) 各研究科から推薦された専任教員 各1名
- (4) 教務部長
- (5) 教務部事務部長
- (6) 高等教育推進支援室長
- (7) センター員
- (8) 学長が推薦する本学専任教職員 若干名

3 前項第2号、第3号及び第8号に掲げる委員の任期は、2年とする。ただし、任期の途中で委員となった者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 委員は、再任することができる。

第8条 推進委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 第3条に掲げる事業に関する重要事項
- (2) 学長から諮問された事項
- (3) その他高等教育推進センターに関する重要事項

2 推進委員会はセンター長が招集し、その議長となる。

3 推進委員会は、委員の3分の2以上が出席しなければ開会することができない。

4 推進委員会の議決に当たっては、出席委員の過半数で決し、可否同数の場合は、センター長が決する。

5 推進委員会は、必要に応じ、委員以外の者（学外者を含む。）を推進委員会に出席させ、その意見を求めることができる。

（部会）

第9条 高等教育推進センターに、第3条に掲げる事業を推進するために、部会を置くことができる。

2 部会の部会長は、推進委員のうちから推進委員会の議を経てセンター長が指名する。

3 部会の構成員は、推進委員のうちから部会長の意見を聴いてセンター長が指名する。

4 センター長が部会長と協議し、必要に応じ、推進委員以外の者を部会に加えることができる。

5 その他部会に必要な事項は、別に定める。

（学生F Dチーム）

第10条 センター長のもとに、学生F Dチームを置くことができる。

2 学生F Dチームは、センター長のもとで、F D活動を行う。

3 学生F Dチームは、本学の学部又は研究科に在籍する学生で、F D活動への参加を希望する者のうちから、センター長が任命する。

（細則）

第11条 この規程の実施について必要な事項は、推進委員会の意見を聴いて学長が定める。

（事務の所管）

第12条 高等教育推進センターの事務は、高等教育推進支援室の所管とする。

（改正）

第13条 この規程の改正は、学長が推進委員会及び各学部教授会の意見を聴いて行う。

附 則

1 この規程は、平成20年12月1日から施行する。

2 この規程施行の際、改正後の第6条第2項第2号、第3号、第4号及び第6号の委員は、現に「東洋大学F D委員会規程」により選出された委員をもって充てる。ただし、任期は、平成21年3月31日までとする。

3 東洋大学 F D委員会規程（平成19年規程第8号）は、廃止する。

この規程は、平成29年4月1日から施行する。

附 則（平成27年規程第72号）

この規程は、平成27年4月20日から施行する。

附 則（平成29年規程第126号）

この規程は、平成 29 年 4 月 1 日から施行する。

附 則（平成 30 年規程）

この規程は、平成 30 年 4 月 1 日から施行する

付録

東洋大学高等教育推進センターニュースレターアーカイブ（Vol.1. No.1～No.14）

目次

東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2018年9月18日	創刊号（Vol.1, No.1）		1
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2018年10月2日	Vol.1, No.2.....		11
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2018年10月16日	Vol.1, No.3.....		19
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2018年10月30日	Vol.1, No.4.....		26
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2018年11月13日	Vol.1, No.5.....		35
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2018年11月30日	Vol.1, No.6.....		42
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2018年12月11日	Vol.1, No.7.....		50
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2018年12月19日	Vol.1, No.8.....		55
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2019年1月17日	Vol.1, No.9.....		62
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2019年1月29日	Vol.1, No.10.....		73
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2019年2月12日	Vol.1, No.11.....		81
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2019年2月26日	Vol.1, No.12.....		87
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2019年3月12日	Vol.1, No.13.....		99
東洋大学高等教育推進センターニュースレター	2019年3月26日	Vol.1, No.14.....		109

シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

Vol.	No.	タイトル	氏名
1	1	第1回「求められる学習時間と単位の実質化」	角谷 昌則 高等教育研究部会 部会長 ／生命科学部生命科学科教授
1	2	第2回「各種学生アンケートから見る本学学生の学修／学習時間の実態」	坂本 恵三 高等教育研究部会 部会員 ／法学部企業法学科 教授
1	3	第3回「国内他大学の学修時間の調査報告の紹介」	藤澤 誠 高等教育研究部会 部会員 ／食環境科学部健康栄養学科 准教授
1	4	第4回「海外大学の修士・博士課程学生の質の維持・向上のための取り組み」	前川 透 高等教育研究部会 部会員 ／学際・融合科学研究科 教授

1	5	学生の授業外学習を促す取組について オーダーメイド教育（tailored education） — 学生一人一人の要求や状態にあわせた教育 を目標に	吉田 宏予 平成 29 年度東洋大学優秀教育活 動賞受賞 ／理工学部生体医工学科 教授
1	6	第 6 回「授業外学修を促す ICT 活用例 —電子 ブック eBook Library のご紹介」	矢野 智子 高等教育研究部会 部会員 ／高等教育推進センター センター員
1	7	第 7 回「授業外学修時間の増加に資する教育 手法と教学改革—早稲田大学におけるブレンディ ッドラーニングの取組紹介」	上田 知亮 高等教育研究部会 部会員 ／法学部法律学科 准教授
1	8	第 8 回「授業設計の段階で授業時間外学習を 促す工夫を考える—書籍『授業設計』の紹介」	矢野 智子 高等教育研究部会 部会員 ／高等教育推進センター センター員
1	9	第 9 回「授業外学習時間増加に資する教育手 法～ICT を活用した山梨大学の反転授業の取 組紹介を交えて～」	徳江 順一郎 高等教育研究部会 部会員 ／国際観光学部国際観光学科 准 教授
1	10	第 10 回「オンライン大学講座 MOOC（ムーク） について」	野間 信幸 高等教育研究部会 部会員 ／文学部東洋思想文化学科 教授
1	11	総括	角谷 昌則 高等教育研究部会 部会長 ／生命科学部生命科学科 教授

シリーズ 2「わたしが実践する授業の工夫」

Vol.	No.	タイトル	氏名
1	12	第 1 回「学生に参加させる授業づくりの工夫」	三浦 健 生命科学部応用生物科学科 准教 授 ／高等教育推進委員会委員
1	13	第 2 回 ToyoNet-ACE のドリル機能を活用し た授業運営の紹介	長谷川 輝明 生命科学部生命科学科 教授
1	14	第 3 回 総合 II（詩を楽しむ）のクラス	近藤 裕子 経済学部経済学科 教授

コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

Vol.	No.	タイトル	氏名
1	12	第1回「アクティブラーニングによる講義外学習の活用」	澁澤 健太郎 経済学部総合政策学科 教授
1	13	第2回「マーケティングデータ分析入門」の取り組み	石田 実・李 振 経営学部マーケティング学科 講師
1	14	第3回 卒業研究（生命）	井ノ口 蘭 生命科学部生命科学科 助教

特別寄稿

Vol.	No.	タイトル	氏名
1	14	「学生 FD サミット@島根県立大学」に参加して	大山瑞稀 学生 FD チームスタッフ ／文学部第2部教育学科 3年

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2018 年 9 月 18 日 創刊号 (Vol.1, No.1)

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、

メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブなどはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

(2018 年 9 月 14 日学部長会議での報告資料を掲出しています)

目次

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第 1 回「求められる学習時間と単位の実質化」(角谷 昌則)

【2】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

【3】国内外の高等教育政策動向

【4】あとがき

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第 1 回「求められる学習時間と単位の実質化」

(高等教育研究部会長・生命科学部教授 角谷 昌則)

これから何回かにわたって、学生の「学習／学修時間」をテーマとした記事をお届けします。

この第 1 回目では、なぜこのテーマで連載を行うのか、その理由について記します。

大きな理由として少なくとも次の 3 つが挙げられると思います。

- ①法令上の定めがあること
- ②必要とされる実態があること
- ③本学に密接なトピックであること

以下で順に見ていきましょう。

①法令上の定めがあること

この「学習／学修時間」の問題を考えるにあたっては、まず大学の単位制度について知っておく必要があります。その単位制度については、大学設置基準 の第 21 条に定めがあります。

(単位)

第二十一条 各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする。

2 前項の単位数を定めるに当たっては、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもつて構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。

一 講義及び演習については、十五時間から三十時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。

二 実験、実習及び実技については、三十時間から四十五時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、大学が定める時間の授業をもつて一単位とすることができる。

三 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち二以上の方法の併用により行う場合については、その組み合わせに応じ、前二号に規定する基準を考慮して大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。

3 前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業研究、卒業制作等の授業科目については、これらの学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、これらに必要な学修等を考慮して、単位数を定めることができる。

(出典) e-Gov 法令検索「大学設置基準」,

<http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=331M50000080028&openerCode=1#107>2018 年 9 月 10 日アクセス。

この法律に拠りますと、1 単位を認定するには 45 時間の学修が必要です。そしてその 45 時間のうち、各大学は 15 時間から 30 時間の範囲で任意に授業時間を設定します。ちなみに、多くの大学の“1 コマ”は 90 分ですが、これは 1 時間（45 分授業 + 15 分休憩）の授業時間のみを 2 時間分連続させたものと考えて、2 時間とみなします（諸説あり）。よって 1 つの学期に 15 回の授業を行うのであれば、2 時間×15 回 = 30 時間と計算できるわけです。そして残りの 15 時間については、学生が授業外で行う学習（予習・復習など）ということになります。

こうした法令上の規定がある以上は、当然ながら大学はこれを遵守することが求められます。

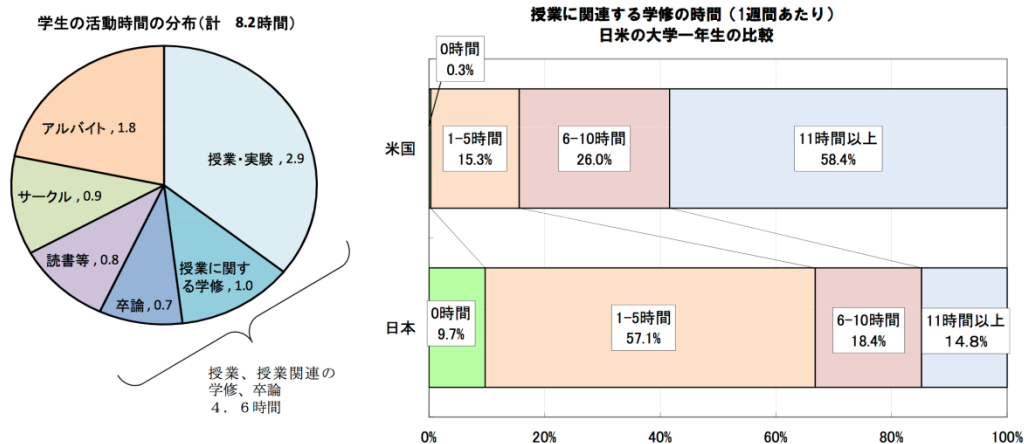
②必要とされる実態があること

ところが問題なのは、学生が果たして 45 時間／単位の学習を実際に行っているかどうかです。いま仮に、1 学期で 2 単位の授業について計算しますと、45 時間×2 単位で 90 時間の学修が必要です。ということは、大学の授業が週に 1 コマあって 30 時間を消費するなら、学生は 90 時間－30 時間＝60 時間を授業外で学修しなければなりません。60 時間を学期期間の 15 週で割ると、2 単位の科目 1 つにつき 1 週間で 4 時間の授業外学修が必要になります。もしその学生がその学期中に 20 単位分の授業を履修しているなら、計 40 時間／週の授業外学修となります。

さて、日本の大学生はどのように勉強しているのでしょうか。

学生の学修時間の現状

我が国の学生の学修時間(授業、授業関連の学修、卒論)は一日 4.6 時間とのデータもある。
これは例えばアメリカの大学生と比較しても短い。



出典: 東京大学 大学経営政策研究センター(CRUMP)『全国大学生調査』2007年、サンプル数44,905人 <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>
NSSE(The National Survey of Student Engagement)

58

(出典) 中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」p. 58,

<http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_7.pdf> 2018 年 9 月 10 日アクセス。

このグラフは文部科学省中央教育審議会が平成 24 年 8 月 28 日に出した、『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて?生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ? (答申)』の「資料 ?」(p.58) に載せられているものです (このデータは 教育再生実行会議『これからの大学教育等の在り方に

ついて（第三次提言）』などにも援用あり）。この数値を見ますと、日本の大学教育では単位が実質化されていない、と判断されることになるわけです。

③ 本学に密接なトピックであること

翻って本学の学生はどうでしょうか。

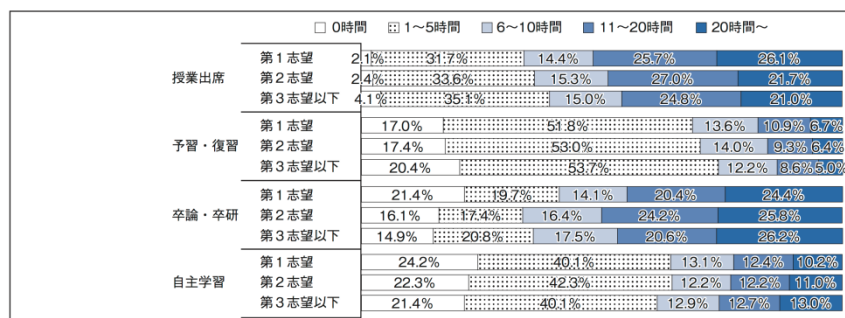
結果報告 「平成27年度卒業時アンケート結果報告—入学時志望順位に着目して」

1. 調査概要

- 1) 実施時期：平成28年3月23日 卒業証書・学位記授与式の時間内にて実施
- 2) 調査対象：全学部・全学科の卒業生、回答者数5,501名、回答率91.2%
- 3) 調査方法：マークシート用紙によるマーク及び記述方式
- 4) 調査目的：当該年度に卒業する全学生を対象に、授業・学習全般や大学生生活全般、4年間の成果、大学への満足度などについて把握し、さらなる改革・改善を図っていくことを目的としている。

2. 主な結果

① 1週間の生活時間



（出典）東洋大学 IR 室（2017）「結果報告 平成 27 年度卒業時アンケート結果報告—入学時志望順位に着目して」『東洋大学 IR 室ニュースレター』4, p.4,

<<https://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/113089.pdf>> 2018 年 9 月 10 日アクセス。

これは「平成 27 年度卒業時アンケート結果報告」として、本学の IR 室ニュースレター第 4 号（2017 年 3 月）の p. 4 に掲載された、「1 週間の生活時間」に関するデータです。政府が議論で使っていた先ほどのデータよりは良い数値が出ていますが、それでも大学設置基準第 21 条の求める水準やアメリカの大学 1 年生のレベルには明らかに達していないことが分かります。

以上のような理由から、「求められる学習時間と単位の実質化」のテーマでこの問題を掘り下げていくこととしました。ではとりあえず何らかの手段で学修時間を確保すれば良いのか、というそう話は単純ではありません。元々は“学士課程の質保証”や“大学教育の質的転換”といった近時の高等教育改革の中で重視されるに至ったトピックでもありますので、本学の学生や本学自身の質的な成長や発展に結びつかないと意味がありません。突き詰めれば「東洋大学は学生にどのような成長をさせたいのか」という、本学の教学思想や力量が問われる問題になってきます。ぜひ私たち自身の問題として、皆様と幅広く議論を展開していけたらと思います。

(第 2 回につづく)

【2】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

1) English Support Service (ESS) のご案内

本学の更なる教育の国際化を推進することを目的に、
英語ネイティブ講師によるマンツーマンレッスン「English Support Service」が
2017 年度からスタートしています。

平日の午後、白山キャンパスを中心に、朝霞、川越、各キャンパスを巡回しています。
(板倉キャンパスは web 会議システムを利用)

▼詳細・ご予約

ガルーン掲示板「English Support Service の開始について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

2) 学外 FD・SD 関連セミナーへの参加申込、随時受付中

高等教育推進センターは学外で開催される FD・SD 関連のセミナー及びイベントの情報を
ガルーンと ToyoNet-ACE にて、集約・周知しております。
参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

▼詳細

・ガルーン掲示板「【ご案内】2018 年度学外 FD・SD 研修会について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE「平成 30 年度学外 FD 研修会のお知らせ」

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

3) 平成 29 年度東洋大学優秀教育活動賞表彰式をおこないました

東洋大学優秀教育活動賞は、平成 29 年度に新設された制度です。
本学で実施されている優れた授業や教育プログラムを表彰し讃えるとともに、
FD 活動等を通じて、優れた取り組みを全学に普及させるための制度としてスタートしました。

平成 29 年度の教育活動に対し、11 組 27 名の先生方へ賞を授与することになりました。
この表彰制度が学内の素晴らしい取組に光を当てるきっかけとなることが期待されます。

受賞者一覧及び受賞科目・プログラム紹介動画はこちら

>>> (公式 HP) <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/excellentteacher2017.html>

4) 平成 30 年度第 8 回学長フォーラムを開催しました

8 月 3 日(金)、白山キャンパス 125 記念ホールにて、
通算 8 回目となる学長フォーラムを開催しました。
このフォーラムは更なる教学改革の促進を目指して 2010 年より開催しています。
今年度のテーマは「TGD 構想と中長期計画の達成に向けて」とし、
全学をあげて取り組むべき施策のこれからについて広く意見交換をおこないました。

詳細はこちら

>>> (公式 HP) <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/president-forum-2018.html>

【3】国内外の高等教育政策動向

国外

独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構 評価事業部国際課が
「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」で
海外の高等教育質保証の最新動向を紹介しています。
>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

国内 (2018 年 6 月～8 月)

1) 「2019 年度文部科学省概算要求等」公表

今後、財務省が概算要求を査定し、12 月に予算案が閣議決定します。
その予算案は翌 1 月に国会に提出され、3 月末日までに成立予定です。
(平成 30 年 8 月 30 日)

>>> http://www.mext.go.jp/a_menu/yosan/h31/1408721.htm

2) 国立教育政策研究所が「学生の成長を支える教育学習環境に関する調査研究」報告書を公開

学習成果と教育学習環境の関係を、学生調査や成績データを用いて分析された研究成果が発表されています。

(平成 30 年 8 月 24 日)

>>>

http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/seika_digest_h29.html#school_personnel

3) 「科学技術改革タスクフォース報告 ～みんなで創る未来社会に向けた科学技術システム改革～」公表

今後の科学技術政策について、「未来型研究手法・基盤の確立」「研究者の能力を最大化させる環境の創出」

「現場の強みを活かしたイノベーションシステムの構築」という 3 つの方向性が示されました。

(平成 30 年 8 月 3 日)

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/08/1407887.htm

4) 「平成 30 年度学校基本調査速報値」公表

高等教育機関進学率 (81.5%)、大学 (学部) 進学率 (現役) (49.7%)、大学における女子学生・女性教員の割合は過去最高を更新しました。

(平成 30 年 8 月 2 日)

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/08/1407479.htm

5) 第 20 回 OECD/Japan セミナー「OECD からみる日本の教育政策」開催

約 10 年ぶりに、OECD が日本の教育政策に対するレビューをおこないました。

セミナーでは、レビューの最終報告書の項目順に、

1. 2030 年に求められる資質能力 (第 2 章)、2. 学校と地域の連携 (第 3 章)、
3. 学び直し・リカレント教育 (第 4 章) の 3 つのテーマについて、

課題と目指すべき方向性が議論されました。

当日の資料、動画がリンク先でご覧いただけます。

(平成 30 年 7 月 28 日)

>>> (当日の資料、動画) http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/oecd/1407996.htm

>>> (レビューの最終報告書)

<http://www.oecd.org/japan/education-policy-in-japan-9789264302402-en.htm>

6) 「平成 29 年度文部科学白書」公表

高等教育については、「高等教育の充実」(第 5 章)、

「高等教育における ICT 人材の育成の推進」(第 11 章)をご覧ください。

(平成 30 年 7 月 13 日)

>>> (概要) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/07/1406888.htm

>>> (本文)

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201801/1407992.htm

7) 中央教育審議会大学分科会将来構想部会が「今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ」を公表

「2040 年に向けた高等教育の課題と方向性」が整理されています。

今秋を目途に答申が出される予定です。

この答申の名称は、9 月 5 日に開催された将来構想部会資料 によると、

「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」です。

(平成 30 年 6 月 28 日)

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1406578.htm

8) 経団連が「今後のわが国の大学改革のあり方に関する提言」を公開

「Society 5.0 時代に産業界が求める人材の資質・能力」についての指摘があります。

(平成 30 年 6 月 19 日)

>>> <http://www.keidanren.or.jp/policy/2018/051.html>

9) 平成 30 年 6 月 15 日付で「第 3 期教育振興基本計画」が閣議決定

今後 5 年間の教育政策について、21 の目標が掲げられています。

高等教育については、「目標 4」「目標 5」「目標 7」「目標 8」「目標 9」「目標 10」

「目標 12」「目標 13」「目標 14」「目標 17」「目標 20」「目標 21」の 12 の目標がおもに該当します。

(平成 30 年 6 月 15 日)

>>> http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/

10) 「未来投資戦略 2018 —『Society 5.0』『データ駆動型社会』への変革—」が閣議決定

高等教育における ICT 活用教育について指摘されています。

(平成 30 年 6 月 15 日)

>>> <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/#senryaku2018>

11) 「統合イノベーション戦略」が閣議決定

目指すべき将来像のひとつとして、「大学や国研が産学官を交えた知識集約型産業の中核となる

イノベーション・エコシステムが全国各地に構築 」(p.25) が掲げられています。

(平成 30 年 6 月 15 日)

>>> <http://www8.cao.go.jp/cstp/tougosenryaku/index.html>

12) 人生 100 年時代構想会議が「人づくり革命 基本構想」を取りまとめ

高等教育の無償化、大学改革、リカレント教育などが取り上げられています。

(平成 30 年 6 月 13 日)

>>> <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/jinsei100nen/>

【4】あとがき

わたしが大学に入職して間もない頃は F D (ファカルティ・ディベロップメント) という言葉自体もあまり浸透していなく、「研修」が何かなんだろうくらいの認識でした。

ある日の宴席でのこと。他大学の管理職クラスの職員からこう言われました。
「教員が授業改善していないと思っていたら大間違いだ。君はそう思っているだろう。そういう顔をしている。」と言われ、「ハッ」とした記憶があります。
その後少しムツとしましたが・・・。

さらにその方は「先生方は誰だって授業中に学生を鼓舞したいし、
学問を追求するおもしろさを伝えたいはず。
古いノートを何十年も使いまわしているなんていう都市伝説が出ること自体失礼な話なんだよ。
それだけは知ったうえで先生らと接したほうがいい」と言われ、
今思えばそれがわたしにとっての初めての S D (スタッフ・ディベロップメント) だったような気がします。

本日からスタートするメールによるニュースレター。
高等教育研究部会の先生方によるシリーズものの寄稿。
国内外の高等教育の動向に関する情報、
F D / S D 関連のイベントや研修会の情報などが月 2 回程度配信されます。
きっと、ムツとさせることはありませんので、是非ご愛読いただければ幸いです。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- このメールは本学教職員にお届けしています。
 - このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - 掲載記事の無断転載を禁じます。
- ©2018 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2018 年 10 月 2 日 Vol.1, No.2

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、

メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第2回「各種学生アンケートから見る本学学生の学修／学習時間の実態」(坂本 恵三)

【2】FD・SDに係るお知らせ(各部署より)

1) 2018 年度学科・専攻による自己点検・評価活動スタート

2) 「THE 世界大学ランキング 2019」発表(速報)

【3】学内外のFD・SDセミナー及びイベント情報

1) ESS&学外FD・SD関連セミナーのご案内

【4】国内外の高等教育政策動向など

1) 大学分科会(第143回)・将来構想部会(第9期～)(第26回)合同会議 開催

2) 私大連『私立大学学生生活白書2018』刊行

3) 経団連、定例記者会見で「採用選考」「大学改革」に言及

4) 文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの推進方策について(論点整理)」公表

5) 私大連「高等教育政策に対する私大連の見解」公表

6) OECD「Education at a Glance 2018」(図表でみる教育2018)公表

7) 大学行政管理学会 第22回定期総会・研修集会 開催

8) 内閣府「生涯学習に関する世論調査」公表

9) 科学技術・学術政策研究所「科学技術指標2018」公表

【5】あとがき

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第2回「各種学生アンケートから見る本学学生の学修／学習時間の実態」

(高等教育研究部会委員・法学部教授 坂本 恵三)

① はじめに

本ニュースレター創刊号でも紹介されたように、大学設置基準第21条によれば、学生が予習・復習に相当の時間をかけることを前提に授業を行うように規定されています。すなわち1単位の定義は、「四十五時間の学修を必要とする内容」と定められ、1単位を得るために大学が行う授業時間は、講義及び演習については、15～30時間と定められており、本学では、1時間（45分）の講義15回で1単位と計算しているようです。すなわち不足する30時間については、学生が予習・復習することを前提としています。

② アンケートから見た現状

2017年度在学生アンケートによれば、大学全体では学生が予習・復習等に費やす時間は一週間当たり10～6時間が、20パーセント、5～1時間が58.9パーセント、0時間も7パーセントを占めています（図1）。

(3) 今年度4月以降の典型的な1週間について、平均的な生活時間をお答えください。

©2018東洋大学高等教育推進センターニュースレター

3-2. 授業の予習・復習や課題をする

	7,360	6,761	610	639	284	333	824	1,452	162	324	610	775	237	147	213	151
	大学全体	1部全体	文学部	経済学部	経営学部	法学部	社会学部	理工学部	国際地域学部	生命科学部	ライフデザイン学部	総合情報学部	看護学部	国際学部	国際観光学部	情報通信学部
1.31時間～	1.7	1.7	1.8	3.1	1.8	1.8	0.4	2.7	1.2	1.5	1.3	1.4	0.8	2.0	0.5	1.3
2.30～26時間	0.7	0.6	1.0	1.1	0.0	0.3	0.6	0.9	0.0	0.6	0.5	0.4	0.0	0.0	0.5	0.7
3.25～21時間	1.4	1.4	1.5	1.4	1.1	1.5	0.7	2.0	0.0	2.2	1.0	1.3	1.7	3.4	0.0	2.0
4.20～16時間	3.7	3.8	3.0	3.8	3.2	1.2	2.4	5.8	4.9	5.6	3.1	2.5	4.2	3.4	4.2	6.0
5.15～11時間	6.7	6.9	8.0	5.5	2.5	6.0	4.7	10.3	6.2	8.3	5.1	3.7	8.4	7.5	10.3	12.6
6.10～6時間	20.0	20.2	21.8	16.1	15.8	17.1	17.1	23.1	22.8	29.3	18.2	14.7	26.2	21.8	26.8	28.5
7.5～1時間	58.9	58.5	58.9	60.7	62.0	67.3	63.3	51.6	61.7	45.7	59.3	67.0	55.3	60.5	54.0	47.0
8.0時間	7.0	6.8	4.1	8.3	13.7	4.8	10.7	3.6	3.1	6.8	11.5	9.0	3.4	1.4	3.8	2.0

※表上部の数値は母数(有効回答者数)、表内の数値は%となります

平均時間(1週間) 6時間18分 6時間10分 4時間50分 5時間25分 4時間47分 7時間23分 5時間47分 6時間59分 5時間15分 4時間59分 6時間16分 6時間36分 6時間9分 7時間29分
母集団との差 16分 8分 -71分 -37分 -75分 81分 -15分 57分 -47分 -63分 15分 34分 7分 87分

母集団 1部全体平均
母集団平均 6時間2分

<参考>

一日あたりの平均時間(週6日計算) 1時間3分 1時間2分 0時間48分 0時間54分 0時間48分 1時間14分 0時間58分 1時間10分 0時間53分 0時間50分 1時間3分 1時間6分 1時間2分 1時間15分

図1 (出典)「2017(平成29)年度在校生アンケート」設問(3)3-2※

仮に1セメスターに2単位科目を10科目履修するとすれば、1週間の授業時間は20時間であり、それに対応する予習・復習時間は40時間ということになります。夏休み等の長期休暇中に予習・復習することも考えられますので、一概には言えませんが、本学の学生の予習・復習時間は、極めて少ないといわざるをえません。

③ 予習・復習時間と授業の到達目標等との関係

1時間の授業について1時間の予習と1時間の復習という原則に近い予習・復習時間が必要な授業ほど、授業の到達目標を高く設定できるのではないのでしょうか。そして到達目標が高いということは、一般的には、授業の質が高いことを意味します。十分な予習・復習を必要としない授業は、到達目標も質も低いということになりそうです。

この点で気になるのが、専門教育、教養教育のいずれについても、専門的知識を身に着けることができた、教養を身につけることができたという回答が、80 パーセントを超えている点です（図 2、図 3）。

(5)これまで受けた教養教育において、幅広い教養を身に付けることができましたか。

	7,345	6,749	610	634	281	333	821	1,453	162	324	613	774	236	148	210	150
	大学全体	1部全体	文学部	経済学部	経営学部	法学部	社会学部	理工学部	国際地域学部	生命科学部	ライフデザイン学部	総合情報学部	食環境科学部	国際学部	国際観光学部	情報連携学部
1.身に付けることができた	19.2	18.7	20.2	19.7	14.9	23.1	15.7	17.6	29.6	19.4	21.9	17.2	20.3	20.9	18.6	10.7
2.やや身に付けることができた	64.6	64.7	65.6	59.8	62.3	63.7	66.7	66.8	56.8	67.0	65.1	63.0	70.3	65.5	66.7	54.7
3.あまり身に付けることができなかった	13.6	14.1	11.6	16.6	20.3	12.3	15.0	13.0	11.1	9.9	11.1	17.7	8.1	12.8	14.8	26.0
4.身に付けることができなかった	2.5	2.5	2.6	3.9	2.5	0.9	2.6	2.6	2.5	3.7	2.0	2.1	1.3	0.7	0.0	8.7

※表上部の数値は母数(有効回答者数)、表内の数値は%となります

©2018東洋大学高等教育推進センターニュースレター

図 2 (出典)「2017(平成 29)年度在校生アンケート」設問(5)※

(7)これまで受けた専門教育において、専門的な知識・技能・態度を身に付けることができましたか。

	7,359	6,759	612	640	283	331	821	1,456	161	322	613	773	239	147	211	150
	大学全体	1部全体	文学部	経済学部	経営学部	法学部	社会学部	理工学部	国際地域学部	生命科学部	ライフデザイン学部	総合情報学部	食環境科学部	国際学部	国際観光学部	情報連携学部
1.身に付けることができた	24.1	23.7	27.9	21.1	24.4	28.1	17.3	22.6	46.0	26.1	27.2	19.4	29.3	16.3	31.3	19.3
2.やや身に付けることができた	59.3	59.6	56.2	56.6	62.2	59.5	62.0	60.9	43.5	61.5	62.0	60.9	61.1	58.5	59.2	52.0
3.あまり身に付けることができなかった	13.5	13.7	12.6	18.1	11.0	10.0	17.5	13.5	7.5	9.6	8.8	16.7	7.9	22.4	8.1	20.7
4.身に付けることができなかった	3.1	3.0	3.3	4.2	2.5	2.4	3.2	3.0	3.1	2.8	2.0	3.0	1.7	2.7	1.4	8.0

※表上部の数値は母数(有効回答者数)、表内の数値は%となります

©2018東洋大学高等教育推進センターニュースレター

図 3 (出典)「2017(平成 29)年度在校生アンケート」設問(7)※

すなわち本学学生の予習・復習時間が極めて少ないにもかかわらず、このアンケートからは、学生は、一定の教養と専門知識を習得したと考えていることがわかります。先ほど示した必要な予習・復習時間と授業の質との関係があてはまるとすれば、本学の授業の質を検討する必要があるように思われます。

④ 課題

授業の到達目標と質を高めるためには、学生が十分な予習・復習をして授業に臨む必要があるという認識を共有できるのであれば、次に検討しなければならないのは、「大学生は自主的に予習・復習すべきである」というあるべき論はさておき、どのようにして学生に予習・復習をさせるのかということでしょう。

本学のシラバスでは、授業の予定等以外に、予習すべき内容と復習すべき内容を記載することになっています。とりあえずは、この辺りを実質化する作業から始めるべきではないかと考えています。

(第 3 回につづく)

※IR 室が実施している学生アンケート結果は、ガルーンのファイル管理で公開しています。

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/cabinet/index?hid=1989>

【2】FD・SDに係るお知らせ（各部署より）

1）2018 年度学科・専攻による自己点検・評価活動スタート

9月19日（水）、東洋大学自己点検・評価活動推進委員会において、
2018年度の自己点検・評価活動の具体的な手順やスケジュールが確認され、
全学的にスタートいたしました。
今年度のポイントは、

- ・大学基準協会の定める第3期認証評価基準に準拠した点検評価項目で実施
- ・自己点検・評価フォームを改善（重複した確認事項の統合、合理化）
- ・昨年度のピアレビュー用ルーブリックを刷新し、ピアレビューチェックシートを作成して事前配信
- ・昨年度に引き続き、学修成果の測定等の重点検証項目を設定
- ・第3期認証評価で求められる「全学的内部質保証」機能を図るため、
副学長、学長らによるPDCAサイクルに係る再確認、助言アドバイスを導入

なお、次期認証評価の受審は2021年を予定。

（大学評価支援室）

2）「THE 世界大学ランキング 2019」発表（速報）

本学は、2018と同じ1001+にランク。
2018年度に比して、国内の新規登録大学が増え、
一部の大学でランク変動がある模様です。

詳しくは、以下のURLを参照ください。

>>> <https://www.timeshighereducation.com/>

（学長事務課）

【3】学内外のFD・SDセミナー及びイベント情報

1）English Support Service（ESS）& 学外FD・SD関連セミナーのご案内

○ESS 詳細・ご予約

ガルーン掲示板「English Support Service の開始について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

○学外 FD・SD 関連セミナーへの参加申込

・ガルーン掲示板「【ご案内】2018 年度学外 FD・SD 研修会について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE「平成 30 年度学外 FD 研修会のお知らせ」

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

【4】国内外の高等教育政策動向など

海外

「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」（大学改革支援・学位授与機構）で海外における高等教育質保証の最新の動向が紹介されています。

>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

国内（2018 年 8 月～9 月 26 日）

1）大学分科会（第 143 回）・将来構想部会（第 9 期～）（第 26 回）合同会議 開催

「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申（案））」が示されました。

（2018 年 9 月 26 日）

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/1409589.htm

2）私大連『私立大学学生生活白書 2018』刊行

「第 15 回学生生活実態調査」の分析結果が取りまとめられました。

（2018 年 9 月 25 日）

>>> http://www.shidairen.or.jp/blog/info_c/support_c/2018/09/25/22828

3）経団連、定例記者会見で「採用選考」「大学改革」に言及

「現在の大学教育について、企業側も採用にあたり学業の成果を重視してこなかった点は大いに反省すべきである。

学生がしっかり勉強し、企業がそうした学生をきちんと評価し、採用することが重要である。」

と発言されています。

記者会見の発言要旨はリンクをご覧ください。

(2018 年 9 月 25 日)

>>> <http://www.keidanren.or.jp/speech/kaiken/2018/0925.html>

4) 文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの推進方策について（論点整理）」公表

「大学を場とする取組」の例が挙げられています。

(2018 年 9 月 19 日)

>>>

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/041/toushin/1409250.htm

5) 私大連「高等教育政策に対する私大連の見解」公表

近時の国の高等教育政策について、

私大連が危機意識を抱いている観点が示されています。

(2018 年 9 月 14 日)

>>> http://www.shidairen.or.jp/blog/info_c/others_c/2018/09/14/22816

6) OECD「Education at a Glance 2018」(図表でみる教育 2018) 公表

国際比較可能な指標が豊富に掲載されています。

(平成 30 年 9 月 12 日)

(2018 年版) >>> http://www.oecd.emb-japan.go.jp/itpr_ja/00_000372.html

(2017 年以前) >>> http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/index01.htm

(CiNii 図書) >>> <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN14201414>

7) 大学行政管理学会 第 22 回定期総会・研修集会 開催

本学からは 3 名の職員が参加されました。

研究・事例研究の資料の閲覧を希望される方は、

高等教育推進支援室までご連絡ください。

なお、来年度は 9 月 7 日～8 日、実践女子大学渋谷キャンパスで開催されます。

(平成 30 年 9 月 1 日～2 日)

>>> http://juam.jp/wp/im/assembly/2018_22/

8) 内閣府「生涯学習に関する世論調査」公表

第 2 章は「大学などにおける社会人の学習に関する考え方について」です。

>>> <https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-gakushu/index.html>

(平成 30 年 8 月 30 日)

9) 科学技術・学術政策研究所「科学技術指標 2018」公表

日本は、学士号取得者は増加傾向にある一方、
修士号及び博士号取得者は減少しています。

(平成 30 年 8 月 22 日)

>>> <http://www.nistep.go.jp/archives/37708>

【5】あとがき

京都大学の本庶佑先生がノーベル医学・生理学賞を受賞されました！

医学分野から免疫学の第一人者として名を馳せた本庶先生ですが、
2011 年に Hoffmann 教授などが同賞を受賞し、
免疫分野では日本人の受賞はないだろうと言われてきました。

一方で、本庶先生は同年に WPI 拠点 長に選ばれた
大阪大学の免疫学者であり、かつての教え子でもある、
審良静男先生を国家プロジェクトリーダーに押し上げた
科学技術行政面での貢献者でもあります。

大学での研究が引き継ぎを繰り返し、
これからも基礎研究の土台として、
重要な役目を果たし続けることを期待して止みません。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

■このメールは本学教職員にお届けしています。

■このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

■掲載記事の無断転載を禁じます。

©2018 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2018 年 10 月 16 日 Vol.1, No.3

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、

メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第 3 回「国内他大学の学修時間の調査報告の紹介」(藤澤 誠)

【2】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

1) ESS&学外 FD・SD 関連セミナーのご案内

【3】国内外の高等教育政策動向など

1) 文科省「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申(案))」に関する意見公募実施

2) 文科省 2018 年度就職・採用活動に関する調査結果(速報版)公表

3) 内閣府 学生の就職・採用活動開始時期等に関する調査結果(速報版)公表

4) 経団連 2021 年度以降の新卒一括採用ルール廃止へ

5) 文科省 平成 30 年度世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)の採択拠点決定

6) 科学技術・学術政策研究所「サイエスマップ 2016」(2011～16 年の論文対象)報告書 公表

7) 文科省 平成 30 年度「卓越大学院プログラム」の選定結果公表

【4】あとがき

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第 3 回「国内他大学の学修時間の調査報告の紹介」

(高等教育研究部会委員・食環境科学研究科 藤澤 誠)

① はじめに

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申)」(中央教育審議会、平成 24 年 8 月 28 日、以下「答申」)では、「学生の主体的な学び

を確立し、学士課程教育の質を飛躍的に充実させる諸方策の始点として、学生の十分な質を伴った主体的な学修時間の実質的増加・確保が必要」(p.11)とあります。これは大学設置基準が想定している一般的な学期中の一日当たりの授業時間を含む総学修時間が8時間(注1)であるのに対し、実際にはその約半分の一日4.6時間にとどまるという調査結果があること、また、諸外国に比べて日本の大学生の学修時間が著しく短いことが明らかになったためです(答申、p.12)。そこで今回は国内の大学生の学修時間に関わる調査報告の一部を紹介します。

② 学修時間の調査報告事例

「2007年全国大学生調査」(東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策研究センター)

まずは、少し古い情報ですが、東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策研究センターによる2007年全国大学生調査の結果の学修時間に関する一部を表1に示します。全国127大学288学部48,233名の調査結果で、このときの調査が答申における国内大学生の学修時間が短いという根拠の1つになっています。学期中における「授業・実験の課題、準備・復習」にかかる時間は1-5時間が51.2%と半数を占めていることが分かります。また、「授業とは関係のない学習」では0時間が38.1%、1-5時間が38.9%となっています。

表1. 典型的な1週間の平均的な生活時間を、学期中と休暇中の別に教えてください。(%) (東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策研究センター 2007年全国大学生調査)

		0時間	1-5	6-10	11-15	16-20	21-25	26-30	31時間以上
学期中	授業・実験への出席	2.8	14.2	13.6	12.4	17.3	15.2	9.3	12.1
	授業・実験の課題、準備・復習	12.9	51.2	17.4	7.0	3.3	1.7	0.9	1.7
	卒業研究・実験・卒論(該当者のみ)	17.4	10.0	4.8	2.9	2.1	1.4	1.0	4.4
	授業とは関係のない学習	38.1	38.9	8.9	4.0	2.0	1.2	0.5	1.6
	サークル・クラブ活動	44.9	24.9	11.8	6.4	3.3	1.7	0.9	2.0
	アルバイト・仕事	32.1	15.6	14.0	12.7	10.2	5.3	2.4	3.8
休暇中	学習	22.4	42.1	13.2	5.7	3.0	1.4	0.7	2.2
	サークル・クラブ活動	47.5	17.7	9.2	5.5	3.8	1.9	1.1	3.3
	アルバイト・仕事	27.0	12.6	13.5	9.8	9.7	6.7	3.9	8.0

©2018東洋大学高等教育推進センターニュースレター

(出典) 全国大学生調査コンソーシアム 東京大学 大学経営・政策研究センター「2007年全国大学生調査 第一次～第三次調査 基礎集計表」p.6,

<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/kiso2008_01.pdf>2018年10月10日アクセス。

※画像をクリックすると拡大表示されます。

「上級生調査2017年」(一般社団法人 大学IRコンソーシアム)

一般社団法人 大学 IR コンソーシアムは、全国の国公私立 54 大学が加盟しており、毎年学生調査を実施しています。2017 年の上級生(2～4 年生, 42,316 名)の学生調査結果のうち、学修時間に関する一部の結果を抜粋したものが表 2 です。2017 年においても前述の 2007 年全国大学生調査結果とほぼ同様の結果となっていることが分かります。これは、前回の東洋大学の在校生アンケートの結果ともほぼ一致しており、学生の学修時間が少ないのは本学に限ったことではないことが分かります。

表 2. 週あたりの正課内外の活動時間（一般社団法人 大学 IR コンソーシアム 上級生調査 2017 年一部抜粋）

	全然ない	1 時間未満	1～2 時間	3～5 時間	6～10 時間	11～15 時間	16～20 時間	20 時間以上
週あたりの活動時間：授業時間以外に、授業課題や準備学習、復習をする	7.4%	18.8%	26.5%	24.4%	12.1%	4.7%	2.2%	3.9%
週あたりの活動時間：授業時間以外に、授業に関連しない勉強をする	26.3%	26.7%	20.9%	13.2%	6.3%	2.6%	1.3%	2.7%

©2018 東洋大学高等教育推進センターニュースレター

（出典）一般社団法人 大学 IR コンソーシアム IRiS「基礎集計結果 [問 9B]週あたりの活動時間：授業時間以外に、授業課題や準備学習、復習をする」

<<https://iris.irnw.jp/survey/19/result/36?search%5Bk%5D=&search%5Bt%5D=>>
2018 年 10 月 10 日アクセス。

（出典）一般社団法人 大学 IR コンソーシアム IRiS「基礎集計結果 [問 9C]週あたりの活動時間：授業時間以外に、授業に関連しない勉強をする」

<<https://iris.irnw.jp/survey/19/result/37?search%5Bk%5D=&search%5Bt%5D=>>2018 年 10 月 10 日アクセス。

※画像をクリックすると拡大表示されます。

「第 53 回学生生活実態調査」（全国大学生生活共同組合連合会）

全国大学生生活協同組合連合会が 2017 年 10～11 月に全国 30 大学 10,021 名の学部学生を対象に行った第 53 回学生生活実態調査では、次のように報告されています。

1. 授業時間を除く予習・復習・論文などの勉強(以下「大学の勉強」)時間は 1 日平均 49.6 分。文系 32.2 分、理系 59.6 分、医歯薬系 72.8 分と、学部による平均時間の差は大きい。全体平均は前年から 3.2 分減少し、文系は 3 年連続減少。文系はこの 6 年間で最も長かった 14 年から 7.2 分減少している。

2. アルバイト就労者の大学の勉強時間や読書時間は非就労者より短い傾向があり、1 日の差は文系 12.8 分、理系 9.2 分、医歯薬系 21.5 分。また文系では就労時間が長い学生ほど大学の勉強時間が短い傾向が見られる。

3. また貸与型奨学金受給者は奨学金非受給者に比べ、週 5 時間以上働く層で勉強時間が長い傾向がある。

(出典) 全国大学生生活協同組合連合会「第 53 回学生生活実態調査の概要報告」, <<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>>2018 年 10 月 10 日アクセス。

③ まとめと今後の課題

日本の大学生の学修時間に関する調査結果からすれば、授業に関連しない学修の時間がこの 10 年で伸びていないことから、大学生の自主性だけでは学修時間を増やすのは困難であろうことが推測されます。一方で、答申では「ただ授業時数を増加させたり、教員・科目間の連携や調整なく事前の課題を過大に課したりすることは、学修意欲を低下させることはあっても、学士課程教育の質的転換に資することにはならない」

(p.16) とも述べられており、「教員中心の授業科目の編成から学位プログラム中心の授業科目の編成への転換」(p.15) を求めています。また、今年 10 月 9 日には経団連が「採用選考に関する指針」を 2021 年春入社の就活から廃止することを正式に決めました。このような背景の中で、学生の学習習慣の構築は今後さらに重要になってくることは明らかで、学科での方策に基づき、各科目のシラバスに効果的な予習復習の内容を記載していくことが必要となっています。

※上記の各調査報告の詳細およびその他の調査報告については、ToyoNet ACE の「高等教育推進センター(研修会等)」のコンテンツ「リンク集」-「各種学生調査」をご参照ください。

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2511035c1263429_3221750997

注 1) 学期中の一日当たりの総学修時間について、8 時間が前提とされる根拠の算定方法は、「答申」12 頁参照。

【2】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

1) English Support Service (ESS) & 学外 FD・SD 関連セミナーのご案内

○ESS 詳細・ご予約

ガルーン掲示板「English Support Service の開始について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

○学外 FD・SD 関連セミナーへの参加申込

・ガルーン掲示板「【ご案内】2018 年度学外 FD・SD 研修会について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE「平成 30 年度学外 FD 研修会のお知らせ」

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

【3】国内外の高等教育政策動向など

1) 文科省「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申（案））」に関する意見公募実施
「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申（案））」についてのパブリックコメントが 10 月 26 日まで実施されています。

（2018 年 10 月 10 日）

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410039.htm

2) 文科省 2018 年度就職・採用活動に関する調査結果（速報版）公表

本年度の就職・採用活動の状況を把握し、今後の就職・採用活動の円滑な実施の検討に資することを目的に、高等教育機関と民間企業に対してアンケート調査を実施した結果（速報値）が公表されました。

（2018 年 10 月 10 日）

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410009.htm

3) 内閣府 学生の就職・採用活動開始時期等に関する調査結果（速報版）公表

学生の就職・採用活動の実態を把握するため、平成 30 年度卒業・修了予定の大学生及び大学院生を対象に調査が実施され、その結果（速報値）が公表されました。

（2018 年 10 月 10 日）

>>> <http://www5.cao.go.jp/keizai1/gakuseichosa/index.html>

4) 経団連 2021 年度以降の新卒一括採用ルール廃止へ

今後は、未来投資会議等、政府の関係会合において、2021 年度以降のルールのあり方について議論するとの発言がありました。

（2018 年 10 月 9 日）

（発言要旨）>>> <http://www.keidanren.or.jp/speech/kaiken/2018/1009.html>

5) 文科省 平成 30 年度世界トップレベル研究拠点プログラム (WPI) の採択拠点決定

基礎研究機能を格段に高め、国際競争力を強化するために、平成 19 年度より、世界トップレベル研究拠点プログラム (WPI) が推進されています。13 機関の応募のうち 2 件採択されました。

(2018 年 10 月 9 日)

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410033.htm

6) 科学技術・学術政策研究所「サイエンスマップ 2016」(2011～16 年の論文対象)報告書 公表

論文データベースの分析によって、国際的に注目を集めている研究領域を俯瞰したサイエンスマップが作成されています。

(2018 年 10 月 9 日)

>>> <http://www.nistep.go.jp/archives/38290>

7) 文科省 平成 30 年度「卓越大学院プログラム」の選定結果公表

「卓越大学院プログラム」は、今年度からの新規事業です。54 件の申請のうち、13 大学 15 件の事業が選定されました。(2018 年 10 月 3 日)

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1409731.htm

海外

「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」(大学改革支援・学位授与機構)で海外における高等教育質保証の最新の動向が紹介されています。

>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

【4】あとがき

職員の皆様もニュースレター読んで感想やご意見をお寄せ下さい！

隔週火曜日に発行しているニュースレターも今回で 3 回目となりました。発行をしている側としては、「どれくらい読んでいただけているか？」「有意義な情報提供になっているか？」色々なことに思いを馳せながら送信ボタンを押しています。その中でも個人的に関心が高いのは「職員の皆様がどれくらいニュースレターを読んでいただけているか？」ということです。

このニュースレターを受け取る方の中には、必ずしも内容が業務に関係ある方ばかりではないと思います。しかし「情報は力」です。すぐに役に立たないとしても、いつか何かと繋がってその情報が生きてくることも考えられます。

ご存知の通り、平成 29 年の大学設置基準等の改正を受けて SD が義務化されました。大学運営の高度化に向けて各種 SD はいまや必須事項です。

身近で手軽な SD として、まずはこのニュースレターに目を通していただければ幸いです。そして、欲しい情報等
フードバック頂ければ大変嬉しく存じます。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

■このメールは本学教職員にお届けしています。

■このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

■掲載記事の無断転載を禁じます。

〒2018 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2018 年 10 月 30 日 Vol.1, No.4

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、

メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第4回「海外大学の修士・博士課程学生の質の維持・向上のための取り組み」(前川 透)

【2】FD・SDに係るお知らせ(各部署より)

1) 第3クォータ授業評価アンケートの実施期間について

【3】学内外のFD・SDセミナー及びイベント情報

1) ESS&学外FD・SD関連セミナーのご案内

【4】国内外の高等教育政策動向など

1) 【就職活動】「2020年度卒業・修了予定者の就職・採用活動日程に関する考え方」公表

2) 【Society5.0】超スマート社会の実現に向けたデータサイエンティスト育成事業選定

3) 【QSアジアランキング】QS Asia University Rankings 2019 公表

4) 【国立大学】大阪大学 指定国立大学法人に追加指定

5) 【スポーツ】日本版NCAA(仮称)の名称「大学スポーツ協会(UNIVAS;ユニバス)」に決定

6) 【グランドデザイン答申】各団体から答申に対する意見が示される

7) 【留学生】経団連「外国人材の受入れに向けた基本的な考え方」公表

8) 【専門職大学】専門職大学に初認可1校

【5】あとがき

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第4回「海外大学の修士・博士課程学生の質の維持・向上のための取り組み」

(高等教育研究部会 委員／学際・融合科学研究科 教授 前川 透)

はじめに

2000 年以降、日本の科学技術力が衰退し続けており、今後も改善される見込みはない [1,2]。その原因として、

- (a) 自由な発想に基づく研究に対する研究費の削減；
- (b) 基礎研究の軽視（短期的な実用化研究の重視）；
- (c) 若手研究者数（特に、博士後期課程学生数および Post-doctoral (PD) 研究者数）の減少；
- (d) 研究時間の削減；
- (e) 教育研究プログラムにおける国際化の欠如 等

が挙げられる。東洋大学においても、世界に向けて発信している研究教育成果は多いとは言えず、教育研究プログラムの質的転換・国際化が望まれている。

このような状況のもと、本学の教育研究プログラムの質の向上・国際化をさらに促進する目的で、2018 年 9 月に UK の大学（University of Oxford, University of Exeter）および France の大学（Universite Paris Diderot Paris 7）を訪問し、教育研究プログラムおよび学生の質の向上のための取り組みについて取材した。

Department of Materials, University of Oxford

Professor Nicole Grobert の研究室を訪問した。学生は、博士課程に応募する際に、研究計画を提出し発表をする。特に、文献検索を十分に行い、研究の独創性・先進性について説明する必要がある。博士課程は 5 年である。様々な国（UK, Netherlands, Trinidad and Tobago, Philippines, Thailand, Iran, France, Mexico, USA, China）からの学生が独自の発想・計画に従い、研究に励んでいる。特に重要なのが、学生は、毎週、研究計画・研究経過・研究成果の発表を行うことである。毎週発表者数は変動するが、3 時間、発表および議論を行う。発表が得意ではない学生は、特別に指導を受ける。指導教授が不在の場合でも、発表会は実施される。後ほど、指導教授が Video をみて、適切なアドバイスを与える。

また、外国大学（Germany, France, Spain 等）との共同研究を積極的に実施し、国際共著論文が多い（ただし、Brexit 後の国際連携がどのようになるかは不明である）。PhD 取得条件として、国際論文誌への論文発表は課されていないが、すでに高 Impact factor の論文誌に論文発表をしている学生もいる。ただし、学生の独立性・自主性が重んじられ、博士課程からの脱落者も多い。PhD 取得者の解析能力・論文執筆能力・発表能力・議論をする能力は、国際的な観点からかなり高く、研究者としての質の高さ・博士論文の質の高さは保証されていると言って良い。

School of Physics, University of Exeter

Dr Sharon Strawbridge の研究室を訪問した。School of Physics では、学部教育を重視しており、そのことが、博士課程の教育研究活動・成果に良い影響を与えていると思う。基本的に学部教育は 3 年間で

ある。非常に特徴的なことは、School of Physics の学生は学部 1 年次より「研究プロジェクト」に参加し、研究を実施する。我が国の大学における「学部実験」とは異なり、本格的な研究を行う。学部生の研究実施のための実験室・実験機器・計算機が整備されている。また、学生は関連する研究分野の研究室と共同研究を実施する（他学科の研究室との連携も積極的に行っている）。外国大学との「Internship programmes」も積極的に実施している。学生は毎週、順番に研究経過を発表し、他の学生・教員と議論をする。School of Physics の廊下には、昨年の研究成果のポスターが掲示されており、学術的な水準は高く、圧巻である。本研究プロジェクト教育の成果は素晴らしく、20%強の学部学生が博士課程に進学している。

博士課程の学生は、The Centre for Doctoral Training (CDT) in metamaterials にも所属し、基本的な科学・技術教育を受ける（現在、80 名の博士課程の学生が所属している）。なお、CDT は Engineering and Physical Sciences Research Council (EPSRC) から £12,000,000 の補助金を獲得しており、先端的な博士教育が実施されている。

Formation Physique, Universite Paris Diderot Paris 7

Dr Florence Gazeau の研究室を訪問した。基本的に誰でも大学に入学できるので、Formation Physique における学士号取得者の割合は非常に低い（入学者の 30 %）。大衆化した大学において学士号の質を保证するためには、卒業生数が少なくなるのは当然のことであろう。

博士課程には、多くの外国人が在籍しており、それぞれの学生が独立して研究を実施している。Formation Physique においても、研究経過・成果の発表・議論が重要で、学生は 2 週間に 1 回、研究室セミナーにおいて、研究計画・研究経過・研究成果を英語で発表する（修士・博士過程における公用語は英語である）。また、4 週間に 1 回、Formation Physique 全体セミナーにおいて研究計画・研究経過・研究成果を英語で発表する。外国大学（Brazil, Latvia 等）との「PhD double degree programmes (Cotutelle)」を積極的に実施しており、このことが学生の国際化に繋がっていると感じる。PhD 取得条件として、国際論文誌への論文発表は課されていないが、学生は、高 impact factor の国際論文誌への論文発表意欲が強い。

まとめ

我が国においては、Bottom-up（基礎・専門科目を学習した後に研究に従事する）教育が主流であるが、私自身は、Top-down 教育が重要で、学位の質の向上に有効であると感じている。また、発表能力、議論をする能力、論文執筆能力が重要であり、本学の教育にも導入する必要があると思う。一般に、先進国においては、PhD 取得条件として、国際論文誌への論文発表が課されておらず、このことが、PhD の質の高さに繋がっているのではないかと思う。論文誌への論文発表を博士号取得条件とすることにより、発表論文誌の質が低下するのではないか。博士号取得後に、高 Impact factor 論文誌に論文発表することにより、博士号の質の高さが証明される。

なお、UK においては Research Excellence Framework (REF) が実施され、文系・理系 34 分野において各大学のそれぞれの分野における研究レベルが評価され、Web 公表されている [3,4]。France においても、4 年に一度、研究室の評価が実施される。Metric indices（発表論文数・論文の被引用回数等）によって、指導教員・研究室の質が評価される。学生に対する Interview もあるそうである。我が国、本学においても、分野別の教育研究水準を向上するための評価システムの構築が必要であろう。

なお、12 月 17, 18, 20 日に、Dr Sharon Strawbridge (University of Exeter) が「Research and educational programmes at Exeter and in the UK」という題目の講義を行います。興味のある教職員の方々に参加していただきたいと思います（Poster 参照）。

TOYO UNIVERSITY
Top Global University Lecture series

Special Lectures
Research and Educational Programmes
at Exeter and in the UK

Dr Sharon Strawbridge
School of Physics
College of Engineering,
Mathematics and Physical Sciences
University of Exeter
UK

Current research programmes at Exeter 13:10, 17 th December 2018 International Seminar Hall Bio-Nano Electronics Research Centre: Annex Beta	Educational programmes on natural sciences at Exeter 10:40, 18 th December 2018 Room 2205 No.2 Building	Science and educational systems in the UK 10:40, 20 th December 2018 International Seminar Hall Bio-Nano Electronics Research Centre: Annex Beta
---	--	---

Organised by:
Global Communication Spaces
Top Global University Project, Kawagoe Campus, Toyo University

Supported by:
Bio-Nano Electronics Research Centre, Toyo University
Graduate School of Interdisciplinary New Science, Toyo University

Enquiries
Bio-Nano Electronics Research Centre
Graduate School of Interdisciplinary New Science
Toyo University
2100, Kujirai, Kawagoe, Saitama 350-8585, Japan
Tel: +81 49 239 1375
Email: maekawa@toyo.jp

GCS
Global Communication Spaces

Bio-Nano **I'dNS**
Toyo University

※クリックすると拡大表示されます。

今後も、UK, France, USA 等の大学において顕著な成果が得られている教育研究プログラムについて紹介する予定である。

1. M. Staniland, Japanese science stalls over past decade, threatening position among world's elite, Press release archive (2017), Springer Nature.
<https://www.nature.com/press_releases/nature-index-2017-japan.html>
2. M. Staniland, Decline of Japanese science continues, as its smaller institutions shine, Press release archive (2018), Springer Nature.
<https://www.nature.com/press_releases/nature-index-2018-japan.html>
3. REF 2021, <<http://www.ref.ac.uk>>
4. REF 2014, <<http://www.ref.ac.uk/2014/>>

(第5回につづく)

【2】FD・SDに係るお知らせ（各部署より）

1) 第3クォータ授業評価アンケートの実施期間について

授業評価アンケートは、全学を対象に授業評価アンケートを実施するとともに、教員への実効性あるフィードバックをおこない、本学の授業改善を図ることを目的としています。

第3クォータ開講科目に対する本アンケートは、11月5日(月)～19日(月)が学生の回答期間ですので、対象の先生は授業時間内に学生が回答できるよう、時間設定のほどどうぞよろしくお願いいたします。

【参考】実施期間

第3クォータ | 2018年11月5日(月)～19日(月)

第4クォータ/秋学期 | 2018年12月17日(月)～2019年1月28日(月)

(高等教育推進支援室)

【3】学内外のFD・SDセミナー及びイベント情報

1) English Support Service (ESS) & 学外FD・SD関連セミナーのご案内

○ESS 詳細・ご予約

ガルーン掲示板「English Support Service の開始について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

○学外FD・SD関連セミナーへの参加申込

・ガルーン掲示板「【ご案内】2018年度学外FD・SD研修会について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE「平成 30 年度学外 FD 研修会のお知らせ」

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

【4】国内外の高等教育政策動向など

海外

○「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」(大学改革支援・学位授与機構)

>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

○「海外学術動向ポータルサイト」(日本学術振興会)

>>> <https://www-overseas-news.jsps.go.jp/>

国内 (2018 年 10 月 5 日～29 日)

1) 【就職活動】「2020 年度卒業・修了予定者の就職・採用活動日程に関する考え方」公表

就職・採用活動日程に関する関係省庁連絡会議が開催され、2020 年度卒業・修了予定者(現 2 年生)の就職・採用活動日程は、現行ルールが維持されると発表されました。現 1 年生の就職・採用活動日程については、来年度議論されますが、現行ルールが維持される見通し。

(2018 年 10 月 29 日)

>>> https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/shushoku_katsudou/index.html

2) 【Society5.0】超スマート社会の実現に向けたデータサイエンティスト育成事業選定

申請 18 件のうち 5 件の事業が選定されました。

(2018 年 10 月 24 日)

>>> http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/miraikachisouzou/1409532.htm

3) 【QS アジアランキング】QS Asia University Rankings 2019 公表

イギリスの大学評価機関、クアレリ・シモンズ社によるアジア大学ランキングが発表されました。

本学は、アジアで 401-450、国内で 71-75 にランクイン(昨年、アジア 351-400)。

(2018 年 10 月 24 日)

>>>

<https://www.topuniversities.com/university-rankings/asian-university-rankings/2019>

4) 【国立大学】大阪大学 指定国立大学法人に追加指定

文部科学省は、「世界最高水準の教育研究活動の展開が相当程度見込まれる」として大阪大学を指定国立大学法人に指定しました。

(2018 年 10 月 23 日)

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410263.htm

5) 【スポーツ】日本版 NCAA（仮称）の名称「大学スポーツ協会（UNIVAS；ユニバス）」に決定

大学横断的かつ競技横断的統括組織（「日本版 NCAA（仮称）」）設立準備委員会において、日本版 NCAA（仮称）の名称が「大学スポーツ協会（Japan Association for University Athletics and Sport, UNIVAS；ユニバス）」と発表されました。

(2018 年 10 月 22 日)

>>>（報道発表）http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/houdou/30/10/1410376.htm

>>>（設置準備委員会）

http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/021_index/index.htm

6) 【グランドデザイン答申】各団体から答申に対する意見が示される

第 26 回、第 27 回将来構想部会にて、各団体（下記一覧参照）からグランドデザイン答申に対する意見が示されました。次回の大学分科会・将来構想部会（11 月 6 日）を経て、11 月 26 日（月）の中央教育審議会総会にて答申が提出される予定です。

※審議会、大学分科会ともに傍聴可能です。開催される約 1 週間前からオンラインで傍聴登録ができます。

- 1-1 日本経済団体連合会
- 1-2 全国公立短期大学協会
- 1-3 日本私立短期大学協会
- 1-4 全国専修学校各種学校総連合会
- 1-5 公立大学協会
- 2-1 全国知事会
- 2-2 日本私立大学連盟
- 2-3 日本私立大学協会
- 2-4 経済同友会
- 2-5 国立高等専門学校機構
- 2-6 全国公立高等専門学校協会
- 2-7 日本私立高等専門学校協会
- 2-8 国立大学協会

>>> (1-1~1-5 ; 第 144 回大学分科会・第 27 回将来構想部会配布資料)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/1410146.htm

>>> (2-1~2-8 ; 第 28 回将来構想部会配布資料)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/042/siryo/1410271.htm

7) 【留学生】経団連「外国人材の受入れに向けた基本的な考え方」公表

「わが国の大学等への留学生の就職促進は、今後の高度外国人材確保の有力な手段となる。具体的には、留学生向けの就職支援の充実や在留資格変更の円滑化などを通じて、様々な国や多様な専攻の留学生増大を図り、日本での就職を拡大していくべきである。」と指摘されています。

(2018 年 10 月 16 日)

>>> <http://www.keidanren.or.jp/policy/2018/086.html>

8) 【専門職大学】専門職大学に初認可 1 校

専門職大学制度創設後初となる平成 31 年度開設予定の案件として、17 件（専門職短期大学・専門職学科を含む）の諮問がなされ、うち 1 大学の開設を認める答申が出されました。

(2018 年 10 月 5 日)

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/daigaku/toushin/1409960.htm

【5】あとがき

先月、THE 世界大学ランキング 2019 の結果が出ました。

国内大学では立教大学が躍り出たものの、

総じて医学部がある大学が上位にランクインしました。

研究の発表数や引用等を重視するランキングであるだけに、

致し方ないところはあります(補正がかかるとの噂もありますが)。

本学は日本 52 位タイの 1001+位にランクイン。

ランクは昨年を維持しました。

本ランキングについては配点の妥当性などに色々意見も挙がっていますが、

番付表よろしくやはり並べられると気になってしまうものではあります。

さて、来春には"THE 世界大学ランキング日本版"が発表されます。

こちらは研究成果よりも、国内での評判調査が評価されます。

今年から、本学の学生からの評判も指標の一つになるとか。

本学の日頃の教育研究やサポートが高く評価されることを祈っています。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

■このメールは本学教職員にお届けしています。

■このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

■掲載記事の無断転載を禁じます。

©2018 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2018 年 11 月 13 日 Vol.1, No.5

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、

メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第5回「学生の授業外学習を促す取組について」（吉田 宏予）

【2】学内外のFD・SD セミナー及びイベント情報

1) 【申込受付中・12/8(土)@白山】FD ワークショップ「学生の学びを促す評価」開催のお知らせ

2) ESS&学外FD・SD 関連セミナーのご案内

【3】国内外の高等教育政策動向など

1) 【SGU】スーパーグローバル大学創成支援事業 秋のレビュー実施

2) 【経済財政諮問会議】教育・科学技術に関する経済・財政一体改革を議論

3) 【高大接続】「大学入学共通テスト」2 回目の試行調査 実施

4) 【文化庁】平成 31 年度大学における文化芸術推進事業 募集

5) 【設置認可】平成 30 年 10 月末申請の大学等の設置認可の諮問

6) 【科研】文科省「平成 30 年度科学研究費助成事業の配分について」公表

7) 【補正予算】文科省 平成 30 年度補正予算案成立

8) 【経団連】「Society 5.0－ともに創造する未来－」公表

【4】あとがき

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」第5回

学生の授業外学習を促す取組について

オーダーメイド教育 (tailored education)

ー 学生一人一人の要求や状態にあわせた教育を目標に

吉田 宏予（平成 29 年度東洋大学優秀教育活動賞受賞・理工学部生体医工学科 教授）

授業に関連する学習について

授業外学習という場合、通常は授業に関連する学習を指しますが、私の英語の授業では、授業の予習箇所の勉強と、復習として翌週に行う小テストの為に勉強になるかと思います。所属学部では、英語科目は TOEIC-IP テストのスコアによりクラス分けを実施しているので、ある程度似たような学習環境、同様の語学の習熟度を期待しますが、年々同じクラスの中での運用能力の差異に開きが出てきていることに気づかされます。従って、そのような差異を埋める為に ToyoNet-ACE を利用しています。復習用として、授業内で行った説明にさらに詳しく補足をしたものを公開していますので、必要な学生だけがダウンロードする事ができます。授業に関連する学習では、そうした個人差を埋める為のフォローアップをしたいと考えています。

自主的な勉強について

授業外学習と区別して、授業とは関係のない自主的な勉強は自主学習と呼ばれており、知識・能力の獲得の為にこれを増やしたいと思いますが、自主学習を強制する事はできないので難しいです。加えて、理系の学生という事もあって、多くが英語学習には後ろ向きです。そこで、毎日の生活の中で将来を明確に意識させ、継続して英語を学習させ、個人のキャリアに役立てる事を意識させたいと思い、それを奨励するような仕組みを共通カリキュラムで実施しています。

たとえば、1・2 年次の必修科目では、現在と未来の英文履歴書を毎学期ごとに提出させています。自分を客観的に見て自己分析させる為の「現在の履歴書」、将来設計をして自己啓発を促す為の「未来の履歴書」を書かせるのです。

このようにして個人のキャリアに目を向けさせた上で、自主学習をサポートできるようになる活動を提示しています。TOEIC 対策に関しては、TOEIC 対策科目以外に、入学時の TOEIC-IP テストでのスコアにより年ごとの目標スコアを提示し、TOEIC の e ラーニング演習を奨励しています。各自の希望や能力により難易度や演習、時間帯や継続時間を選べますし、パソコンだけでなくスマホでもできるのも良いですね。

e ラーニングが向いていないという学生には英語学習支援室で個別指導を行っています。本人が学習したい内容に合わせて 1 対 1 で毎週一緒に勉強していきます。授業と異なり、理解できないところを理解できるようになるまで立ち止まって聞けるのが良いと好評です。また、英語を話したり聞いたりする練習がしたいという学生には、グローバルコミュニケーションスペースでディスカッションクラブに参加して継続して学習する事ができます。

おわりに

このように、全体での授業の他に、個人の實力や希望に合わせた木目細かい対応と仕組み、つまり「オーダーメイド教育」という、学生一人一人の要求や状態にあわせた教育というものが必要になってきており、それを重視するような教育を目指しています。

(第 6 回につづく)

【2】学内外のFD・SDセミナー及びイベント情報

1) 【申込受付中・12/8(土)@白山】FD ワークショップ「学生の学びを促す評価」開催のお知らせ

栗田先生を講師に迎え、今年度は「評価」に関するワークショップを開催します。

先生は昨年も講師を務められ、参加された先生方から大好評でした。

情報交換会を兼ねた昼食をはさんで6時間の充実したプログラムをご用意しています。

こんな先生方におすすめです！

- ・評価全般の基礎知識を身につけたい
- ・ルーブリックを作りたい etc...

また、このFD ワークショップはアクティブラーニングの形でおこなわれます。

ルーブリックの作成はもちろん、アクティブラーニングを体験することができます。

先生方のご参加をお待ちしております。

日時：2018年12月8日(土) 10:00～16:00

場所：東洋大学 白山キャンパス 10号館 A301 教室

対象：本学教職員【定員 30名】

講師：栗田佳代子氏（東京大学 大学総合教育研究センター）

参加申込フォーム：<https://bit.ly/2SDKevq>（定員に達し次第、申込受付終了）

主催：東洋大学高等教育推進センター

問合せ先

高等教育推進支援室（新山・矢野）

mail: mlfdjimu@toyo.jp

tel: 03-3945-4274

※クリックすると拡大表示されます。

2) English Support Service (ESS) & 学外FD・SD関連セミナーのご案内

○ESS 詳細・ご予約

ガルーン掲示板「English Support Service の開始について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

○学外 FD・SD 関連セミナーへの参加申込

・ガルーン掲示板「【ご案内】2018 年度学外 FD・SD 研修会について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE「平成 30 年度学外 FD 研修会のお知らせ」

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

【3】国内外の高等教育政策動向など

国内（2018 年 11 月 5 日～11 月 14 日）

1）【SGU】スーパーグローバル大学創成支援事業 秋のレビュー実施

今年度の行政事業レビュー（秋のレビュー）の2日目（11/14）に、本学が採択された「スーパーグローバル大学創成支援事業」について、行政改革推進会議の下、公開検証が実施されます。秋のレビューの様子は、ニコニコ動画で生中継されます。

（2018 年 11 月 14 日）

>>> <http://www.gyokaku.go.jp/review/aki/index.html>

>>>（ニコニコ動画）<http://live.nicovideo.jp/gate/lv316356796>

2）【経済財政諮問会議】教育・科学技術に関する経済・財政一体改革を議論

第 13 回経済財政諮問会議が開催され、教育・科学技術に関する経済・財政一体改革について議論されました。

（2018 年 11 月 12 日）

>>> <http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/minutes/2018/1112/agenda.html>

3）【高大接続】「大学入学共通テスト」2 回目の試行調査 実施

大学入試センター試験に代わって 2020 年度から実施される「大学入学共通テスト」に向けた 2 回目の試行調査が実施されました。「思考力・判断力・表現力」を問うものとして、記述式問題に注目が集まっています。

(2018 年 11 月 10、11 日)

>>>

https://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka_test/index.html

4) 【文化庁】平成 31 年度大学における文化芸術推進事業 募集

「大学の有する教員，教育研究機能，施設・資料等の資源を積極的に活用したアートマネジメント（文化芸術経営）人材の養成プログラムの開発・実施を補助し，開発されたプログラムを広く他大学等に周知・普及させることで，我が国の文化芸術の振興を図ることを目的」とした事業です。

(2018 年 11 月 7 日)

>>> http://www.bunka.go.jp/shinsei_boshu/kobo/1410617.html

5) 【設置認可】平成 30 年 10 月末申請の大学等の設置認可の諮問

「本年 10 月末に申請のあった平成 32 年度開設予定の大学の設置認可について，文部科学大臣から 11 月 7 日（水曜日）に大学設置・学校法人審議会へ諮問されました」。平成 32 年度開設予定の設置認可申請があった大学は 4 校（私立 4 件）、専門職大学及び専門職短期大学は 20 校（公立 2 件、私立 18 件）でした。

(2018 年 11 月 7 日)

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/daigaku/toushin/attach/1410381.htm

6) 【科研】文科省「平成 30 年度科学研究費助成事業の配分について」公表

平成 30 年度は、「主な研究種目において 10 万 3,672 件の新規応募のうち 2 万 5,796 件を採択し、継続分と合わせて 7 万 5,095 件に対して約 2,118 億円（直接経費・間接経費の合計）」配分されました。

(2018 年 11 月 7 日)

>>> http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/hojyo/1410868.htm

7) 【補正予算】文科省 平成 30 年度補正予算案成立

大阪北部地震や平成 30 年 7 月豪雨などによる被害からの復旧など、早急を実施すべき事業が補正予算として計上されました。

(2018 年 11 月 7 日)

>>> http://www.mext.go.jp/a_menu/yosan/h30/1394803.htm

8) 【経団連】「Society 5.0 – ともに創造する未来 –」公表

「Society 5.0 において、文系・理系間の垣根は本質的に意味がなく、高校での進路選択により文理が断絶されるのは深刻な問題である。文理分断から脱却して、全ての大学生に基礎的な AI・情報科学・数学・生命科学等を必修化し、文系を専攻する者も理数の知識を身につけ、理系を専攻する者も人文・社会科

学や芸術・デザインなどの領域を学ぶなど、文理を隔てずリベラルアーツを学ばせる必要がある。」など、大学について言及されています。

(2018 年 11 月 5 日)

>>> <http://www.keidanren.or.jp/policy/2018/095.html>

海外

○「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」(大学改革支援・学位授与機構)

>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

○「海外学術動向ポータルサイト」(日本学術振興会)

>>> <https://www-overseas-news.jsps.go.jp/>

【4】あとがき

少し前の話になりますが、平成 29 年 3 月 31 日の大学設置基準等の一部を改正する省令の公布において、大学の事務について改正が周知されました。

改正前「(第 41 条) 大学は、その事務を処理するため、専任の職員を置く適当な事務組織を設けるものとする。」

改正後「(第 41 条) 大学は、その事務を遂行するため、専任の職員を置く適当な事務組織を設けるものとする。」

となっています。これに加えて、教員と事務職員との連携体制を確保し、協働により職務が行われるように留意する趣旨の条文が新設されています。

一方で、図書館の職員については、改正はありませんでしたが上記と表現が少し異なります。

「(第 38 条 3 項) 図書館には、その機能を十分に発揮させるために必要な専門的職員その他の専任の職員を置くものとする。」

この職員については、図書館司書などを指す解釈もありますが、学修・研究等の調査目的を果たすために必要なレファレンスサービスがなければ、学術研究の目的は果たせないと、重要視されてきたことと思われます。

さて、現在どの大学でも事務職員が行う業務内容は多様でかつ高度なものを求められているとは思いますが、過去が単に処理のみに留まっていたわけでもないと思いますし、改正後に自身の職員としての仕事(役割)が大きく変わったかといいますと、その実感もあまりありません。

もちろん大学設置基準は重要な規則ではありますが、万能ではないのだとは思いますが、事務職員に求められる能力というのは、大学によって異なったり、都度最適化されたりするものかもしれませんが、やがて「処理する」ことについては、ICT の進歩により、もっとシンプルなものになっていくでしょう。

また「遂行する」能力とは何か、抽象的なことからでも、各部署や部署間横断的に考えていくときが来ているのだと思います。

高等教育の改革では、「何を教えるか」より「何ができるようになったか」に力点が置かれているといわれています。学生の学修成果を測定し、学生・卒業生の質を担保していくことが重要だということですが、事務職員自

身も「職員として何ができるようになったか（できるのか）」を問われても答えられるようにしないと、学生に申し訳ないなと思っています。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

■このメールは本学教職員にお届けしています。

■このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

■掲載記事の無断転載を禁じます。

? 2018 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2018 年 11 月 30 日 Vol.1, No.6

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、

メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第6回「授業外学修を促す ICT 活用例 —電子ブック eBook Library のご紹介」(矢野 智子)

【2】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

1) 【残席わずか・12/8(土)@白山】FD ワークショップ「学生の学びを促す評価」申し込み受付中

2) ESS & 学外 FD・SD 関連セミナーのご案内

【3】国内外の高等教育政策動向など

1) 【文科省】「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申)」公表

2) 【経団連】「2018 年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」公表

3) 【文科省・厚労省】「平成 30 年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査 (10 月 1 日現在)」

取りまとめ

【4】あとがき

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第6回「授業外学修を促す ICT 活用例 —電子ブック eBook Library のご紹介」

矢野 智子 (高等教育研究部会委員／高等教育推進センターセンター員)

はじめに

5 回にわたって、さまざまな視点から「学修／学習時間と授業手法」について考えてきました。

第2回と第3回においては、授業外学修として予習・復習を学生にどのように促すのか、という問いに対する答えのひとつとして、「各科目のシラバスに予習・復習の内容を具体的に記載すること」が提案されました。予習・

復習の内容を学生に明示する重要性はこれまでも議論されてきました。加えて、「授業の予習復習や課題に取り組むために必要な学習時間量」を伝える必要性も指摘されています（中井、2010）。

では、予習・復習の内容を具体的に明示する方法には、どのような例があるのでしょうか。

本学には授業運営を支援する ICT ツールが充実しています。

そこで第 6 回は ICT ツールの活用に着目して、学生の授業外学修を促すアイデアとして電子ブック「eBook Library」をご紹介します。

電子ブック eBook Library の概要

数年前、600 ページに及ぶ大著『21 世紀の資本』がベストセラーになったことは記憶に新しいのではないのでしょうか。

「 $r > g$ 」というシンプルな不等式に注目が集まりました。

では早速、この不等式が本文中ではじめて説明されたページを下記 URL にアクセスし、読んでみましょう。
（読み終えたら、右上の「閲覧終了」ボタンをクリックして、こちらへ戻ってきてくださいね）

こちらの URL をクリック>>>

<https://elib-maruzen-co-jp.stri.toyo.ac.jp/elib/html/Viewer/Id/3000017583/Page/50>

※すると TRITON を経由します。

このように電子ブックを使えば、授業の予習・復習として読んでもらいたいページに直接アクセスするよう導くことが可能です（図 1）。学生はワンクリックで閲覧することができ、1 回あたり 60 ページまでダウンロードが可能なので、紙のシラバス図書で発生する「返却待ち」もありません。

図1 予習課題の明示例(イメージ)



東洋大学高等教育推進センターニュースレター, Vol.1, No.6.

1

※クリックすると拡大表示されます。

電子ブック eBook Library の使い方

eBook Library の使い方は簡単です。ご説明します。

■電子ブックの検索方法

方法 1.

eBook Library のサイトから検索する

>>> <https://elib-maruzen-co-jp.stri.toyo.ac.jp/elib/html/Top?7>

※「購読契約しているタイトルから検索」をお願いします。

方法 2.

電子ブックタイトルリストから検索する

(和書) <http://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/112355.pdf>

(洋書) <http://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/112356.pdf>

方法 3.

OPAC から検索する

>>>

https://triton.lib.toyo.ac.jp/opac/servlet/ssl/opac.OpacSearchServlet?ACTION_TYPE=new_search&STYPE=2&SLV=1&SEND_SSL=off

※電子ブックがある場合は、「アクセス」の欄に URL が表示されています。

■ URL の共有方法（図 2 の①）

リンクしたい書籍のページを開きます

画面右上に表示された「共有」ボタンをクリックします

クリックすると 2 種類の URL が表示されます

- ・「URL」は書誌情報ページとリンクしています
- ・開いたページをリンクしたい場合は、「ページ URL」をコピーしてください

ToyoNet-G、ToyoNet-ACE、メール等に URL をペーストし、学生に周知をお願いします

■ ダウンロード方法(図 2 の②)

印刷したいページを開きます

「共有」ボタンの 2 つ隣にある「ダウンロード」ボタンをクリックします

開いたページから何ページ分ダウンロードするか指定します（最大 60 ページ）

「実行」ボタンをクリックすると pdf がダウンロードできます

※閲覧、ダウンロードが終了したら、「閲覧終了」ボタンのクリックをお願いします。

図2 電子ブック(eBook Library)の使い方

■ダウンロード
1回あたり60ページまでpdf形式でダウンロード可能です。
紙のシラバス図書で発生する「返却待ち」がなくなります。

■ToyoNet-Gにリンクを記載
書籍詳細ページ、対象ページへのURLをリンクすれば、図書館所蔵の電子書籍に直接アクセスし閲覧することができます。

【テキスト(Textbooks)】
【Rによるデータマイニング入門】
【参考書(Reference Books)】
適宜LMS上で資料を配布する

【関連分野・関連科目(Related Fields and Subject)】
テキストマイニング入門
【参考】Rによるデータマイニング
【参考】人文・社会科学のためのテキストマイニング 改訂版

■ToyoNet-ACEにリンクを記載
次回の授業までに学生へ事前学習していただきたい書籍の該当ページを知らせることができます。

【第1回授業 学生のための情報リテラシー 第4講】【電子書籍】
空室の人の情報リテラシー—Office 2013 Windows 8 10—
著者: 空室, 氏名: 空室, 出版年: 2014, 電子書籍: 電子書籍
https://lib.maruzen.co.jp/elib/BookDetail/Id/3000045967
CQWPT001 情報リテラシー入門
https://lib.maruzen.co.jp/elib/BookDetail/Id/3000045967
CQWPT002 パソコンの基礎から応用まで
https://lib.maruzen.co.jp/elib/BookDetail/Id/3000045967

※クリックすると拡大表示されます

おわりに

今回は、授業外学修を促すアイデアのひとつとして、電子ブックをご紹介します。

現在、電子ブックeBook Libraryのタイトル数は、3,000超のタイトルありますが、まだ実用図書が多いため、授業の参考書、学術書として紹介するタイトル数の増加を期待したいものです。

また、学生が授業を通じて様々な学問に対して興味や関心が高まるよう、学生からの図書リクエストの仕組みと連動するとより機能的なものになるのかもしれません。

電子ブックの他にも ToyoNet-ACE、出席リアルタイムアンケート respon、動画収録・配信ツール mediasite などご紹介したい機能がありますので、引き続きニュースレターを通じてご案内していきたいと思います。

参考文献

中井俊樹（2010）「2 章 授業を設計する」『大学教員準備講座』玉川大学出版部, pp.25-48.

（第 7 回につづく）

【2】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

1) 【残席わずか・12/8(土)@白山】FD ワークショップ「学生の学びを促す評価」申し込み受付中

栗田先生を講師に迎え、今年度は「成績評価」に関するワークショップを開催します。

先生は昨年も講師を務められ、参加された先生方から大好評でした。

情報交換会を兼ねた昼食をはさんで 6 時間の充実したプログラムをご用意しています。

こんな先生方におすすめです！

- ・評価全般の基礎知識を身につけたい方
- ・授業の到達目標を学生に共有させたい方
- ・ルーブリックを作ってみたい方
- ・これから来年度のシラバスを書く方 etc...

また、この FD ワークショップはアクティブラーニングの形でおこなわれるため、アクティブラーニングを体験することができます。

先生方のご参加をお待ちしております。

日時：2018 年 12 月 8 日(土) 10:00～16:00

場所：東洋大学 白山キャンパス 10 号館 A301 教室

対象：本学教職員【定員 30 名】

講師：栗田佳代子氏（東京大学 大学総合教育研究センター）

参加申込フォーム：<https://bit.ly/2SDKevq>（定員に達し次第、申込受付終了）

主催：東洋大学高等教育推進センター

問合せ先

高等教育推進支援室（新山・矢野）

mail: mlfdjimmu@toyo.jp

tel: 03-3945-4274

2) English Support Service (ESS) & 学外 FD・SD 関連セミナーのご案内

○ESS 詳細・ご予約

ガルーン掲示板「English Support Service の開始について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

○学外 FD・SD 関連セミナーへの参加申込

・ガルーン掲示板「【ご案内】2018 年度学外 FD・SD 研修会について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE「平成 30 年度学外 FD 研修会のお知らせ」

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

【3】国内外の高等教育政策動向など

国内（2018 年 11 月 16 日～11 月 26 日）

1) 【文科省】「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」公表

（2018 年 11 月 26 日）

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/11/1411368.htm

2) 【経団連】「2018 年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」公表

選考にあたって特に重視した点の上位 3 つは、「コミュニケーション能力」、「主体性」、「チャレンジ精神」という結果が示されています。

(2018 年 11 月 22 日)

>>> <http://www.keidanren.or.jp/policy/2018/110.pdf>

3)【文科省・厚労省】「平成 30 年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査（10 月 1 日現在）」 取りまとめ

平成 31 年 3 月大学等卒業予定者の就職内定率は 77.0%。

調査開始以降、同時期で過去最高の数値でした。

(2018 年 11 月 16 日)

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/11/1410969.htm

海外

○「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」（大学改革支援・学位授与機構）

>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

○「海外学術動向ポータルサイト」（日本学術振興会）

>>> <https://www-overseas-news.jsps.go.jp/>

【4】あとがき

中教審から、2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)が示されました。

今後の高等教育のあり方と、それを支える高等教育機関のあり方について、

厳しい内容も含め、かなり広範な将来像について言及しています。

概要だけでは伝わらない内容が多いので、是非本文もお読みください。

2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）について

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/11/1411368.htm

答申の中には、本メールマガジン第 1 期目のシリーズである

「学修／学習時間の実態と教育手法」について触れられており、

「大学 1、2 年生の予習・復習の時間の週平均は約 5 時間」と明記されています。

これをいかに実質化できるかは長らくの課題であり、喫緊の課題でもあります。

さて、本学では IR 室が「学生の自律的な学修時間をどう増やすか。」

と題したシンポジウムを、12 月 15 日(土)13:30～開催します。

外部から、金子元久先生(筑波大学)と濱中義隆先生(国立教育政策研究所)を招聘し、

この問題に真正面から向き合います。

是非、ご参加ください。

東洋大学 IR シンポジウム「学生の自律的な学修時間をどう増やすか。」

<https://www.toyo.ac.jp/site/news/sym2018.html>

あとがきというより、宣伝になってしまいましたが、

引き続きメルマガをご愛読いただけるようなこととぞよろしくお願いいたします。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

■このメールは本学教職員にお届けしています。

■このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

■掲載記事の無断転載を禁じます。

©2018 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2018 年 12 月 11 日 Vol.1, No.7

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第7回「授業外学修時間の増加に資する教育手法と教学改革

—早稲田大学におけるブレンディッドラーニングの取組紹介」（上田 知亮）

【2】学内外のFD・SD セミナー及びイベント情報

1) ESS&学外FD・SD 関連セミナーのご案内

【3】国内外の高等教育政策動向など

1) 【経団連】「今後の採用と大学教育に関する提案」公表

2) 【文科省】2018 年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」選定結果 公表

3) 【学術会議】提言「知識集約型社会の拠点となる大学のあり方—2025 年までに達成する社会変革—」公表

4) 【JMOOC】大学のオープン化に関する調査結果（2018 年）公表

【4】あとがき

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第7回「授業外学修時間の増加に資する教育手法と教学改革

—早稲田大学におけるブレンディッドラーニングの取組紹介」

上田 知亮（高等教育研究部会委員／法学部法律学科 准教授）

①はじめに

これまでの連載で指摘されているように、学生の授業外学修時間は十分とは言えず、学生が授業時間以外にも学修するように促す仕組みづくりが、本学を含めた多くの大学において課題となっている。今回は、早稲田大学が推進中のブレンディッドラーニングによる学修時間増大の取り組みを紹介する。

②ブレンディッドラーニングとは何か

ブレンディッドラーニングとは、オンラインで視聴可能な授業（オンデマンド授業）による学修と対面授業の学修を組み合わせた学修形態の総称で、反転授業もその1つである。オンデマンド授業を充実させて予習・復習に活用することにより、単に学修時間を増やすだけではなく、対面授業をより有意義で効果的にすることが目指されている。

授業映像をオンデマンド化している Waseda Course Channel（注1）では2018年11月時点で2400強の科目の映像コンテンツが公開されている（ただし、部局によって科目数はかなり異なり、さらに科目によってもコンテンツの充実度は大きな差がみられる）。

③ハード面の整備

ブレンディッドラーニングを推進するためには、数多くの授業映像コンテンツが必要不可欠である。だが他方で、映像収録は時間や労力の面で教員の負担を増やしてしまうことになる。

こうした問題に対処し、収録と編集の負担を軽減するため、早稲田大学ではいくつかの教室に自動収録システムが導入されており、学内のウェブサイトから予約すると、設定時刻に自動的に録画できるようになっている。このシステムは特に演習（ゼミ）でのプレゼンテーションやディスカッションに活用されているようである（注2）。

④対面授業での予習・復習の確認

早稲田大学におけるこうした取り組みが授業外学習時間を増加させているか、教育効果をあげているかについては、まだ結論が得られておらず、依然としてデータを蓄積して検証している段階だとみられる。

予習・復習のためのオンデマンド映像コンテンツを充実させたとしても、学生が積極的に視聴しなければ教育効果は乏しい。予習してきたかを確認する小テストを対面授業内で実施したり、復習を促すために復習課題を出題するといった工夫をICT（情報通信技術）と組み合わせることが必要であろう。

（注1）Waseda Course Channel：<<http://course-channel.waseda.jp>>, 2018年12月6日。

（注2）早稲田大学 IT サービスナビ, サービス案内：
<<http://www.waseda.jp/navi/services/system/reccls3.html>>, 2018年12月6日。

参考文献

森田裕介「ブレンディッドラーニングによる学修時間の増大」『大学時報』376号（特集：学生の学修時間確保の現状と課題）、2017年9月、54-59頁、

<<https://daigakujihou.shidaiaren.or.jp/list/contents/download?issue=376§ion=2>>、
2018 年 12 月 6 日。

(第 8 回につづく)

【2】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

1) English Support Service (ESS) & 学外 FD・SD 関連セミナーのご案内

○ESS 詳細・ご予約

ガルーン掲示板「English Support Service の開始について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

○学外 FD・SD 関連セミナーへの参加申込

・ガルーン掲示板「【ご案内】2018 年度学外 FD・SD 研修会について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE「平成 30 年度学外 FD 研修会のお知らせ」

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

【3】国内外の高等教育政策動向など

国内（2018 年 11 月 27 日～12 月 4 日）

1) 【経団連】「今後の採用と大学教育に関する提案」公表

経済界が期待する大学の教育改革について言及されています。

(2018 年 12 月 4 日)

>>> <http://www.keidanren.or.jp/policy/2018/113.html>

2) 【文科省】2018 年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」選定結果 公表

計 147 件（大学院：133 件、学部：14 件）の申請に対し、63 件（大学院 56 件、学部 7 件）のプログラムが採択されました。

(2018 年 11 月 30 日)

>>> http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/boshu/1411539.htm

3)【学術会議】提言「知識集約型社会の拠点となる大学のあり方－2025 年までに達成する社会変革－」公表

(2018 年 11 月 28 日)

>>> <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t271-2.pdf>

4)【JMOOC】大学のオープン化に関する調査結果（2018 年）公表

(2018 年 11 月 27 日)

>>> <https://www.jmooc.jp/research2018/>

海外

○「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」(大学改革支援・学位授与機構)

>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

○「海外学術動向ポータルサイト」(日本学術振興会)

>>> <https://www-overseas-news.jsps.go.jp/>

【4】あとがき

現在 IR 室では、学部 1 年生から 3 年生を対象に、12 月 21 日(金)まで「在校生アンケート」を実施しています。

このアンケートは授業など大学における学習を通じて、経験してきたこと、身につけられたことや、今後の学習を展開する上で充実してほしいことなどを聞くことで、学生の現状を把握するとともに、これからの大学の教育改善に活かしていくことを目的としています。

アンケート結果は学部長会議のほか、ガールーンやこのニュースレターにおいてご紹介しています。より多くの回答を得るために、学生への周知にご協力のほどよろしくお願いいたします。

[リンク] 在校生アンケート実施概要について：

<http://www.toyo.ac.jp/about/ir/student-questionnaire/>

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

■このメールは本学教職員にお届けしています。

■このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

■掲載記事の無断転載を禁じます。

©2018 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2018 年 12 月 19 日 Vol.1, No.8

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第8回「授業設計の段階で授業時間外学習を促す工夫を考える

―書籍『授業設計』の紹介」（矢野 智子）

【2】学内外のFD・SD セミナー及びイベント情報

1) ESS&学外FD・SD 関連セミナーのご案内

【3】国内外の高等教育政策動向など

1) 【センター試験】平成31年度大学入試センター試験の志願者数等確定

【4】あとがき

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

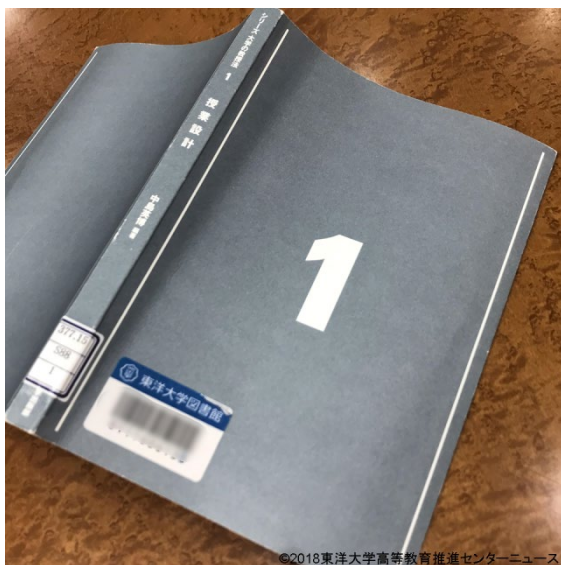
第8回「授業設計の段階で授業時間外学習を促す工夫を考える

―書籍『授業設計』の紹介」

矢野 智子（高等教育研究部会員／高等教育推進センター員）

1. はじめに

今回は、15回のコース設計と90分のクラス設計に関する大学教職員のための実用的な一冊、『授業設計』（中島英博 編著）をご紹介します。



2. 著者はFDの専門家

『授業設計』は、高等教育に関する書籍を数多く出している玉川大学出版部の「シリーズ 大学の教授法」（全6巻）の第1巻にあたります。他に、『2 講義法』（佐藤浩章 編著）、『3 アクティブラーニング』（中井俊樹 編著）、『4 学習評価』（中島英博 編著）、『5 研究指導』（近田政博 編著）、『6 授業改善』（栗田佳代子 編著）が刊行されています（第6巻は刊行予定）。

シリーズの執筆者は、FDerと呼ばれるファカルティ・ディベロップメントの専門家の先生方です。全国各地の大学で、授業やカリキュラムの改善に関するワークショップの講師やコンサルタントをされているため、大学教育の中で実践的に役立つ教授法が体系的に整理されています。

今回、その中でも『授業設計』をご紹介する理由は、1章分を費やして、授業設計の観点から授業時間外学習を促す際の注意点や工夫がまとめられているからです。

3. 授業時間外学習を促す工夫のひとつは課題のフィードバック方法を授業設計に組み込むこと

本書は、授業設計が必要とされる背景をまとめた第1部、授業設計の基本が整理された第2部、応用編の第3部、そして資料集として複数のシラバス例が掲出された第4部から構成されています。

筆者は第3部応用編の中で、「授業時間外の学習を充実させるためには、学生の自主性に任せるのではなく、授業設計の段階で授業時間外の学習を促すように工夫する必要がある」と指摘しています。その工夫のひとつとして、授業設計の段階で課題に対するフィードバック方法を考えておく必要性を訴えています。

しかし、学生一人ひとりの授業時間外の学習活動に対して、毎回教員一人でフィードバックをおこなうことは現実的ではありません。現実的なフィードバック方法として、次の対応策が挙げられています。

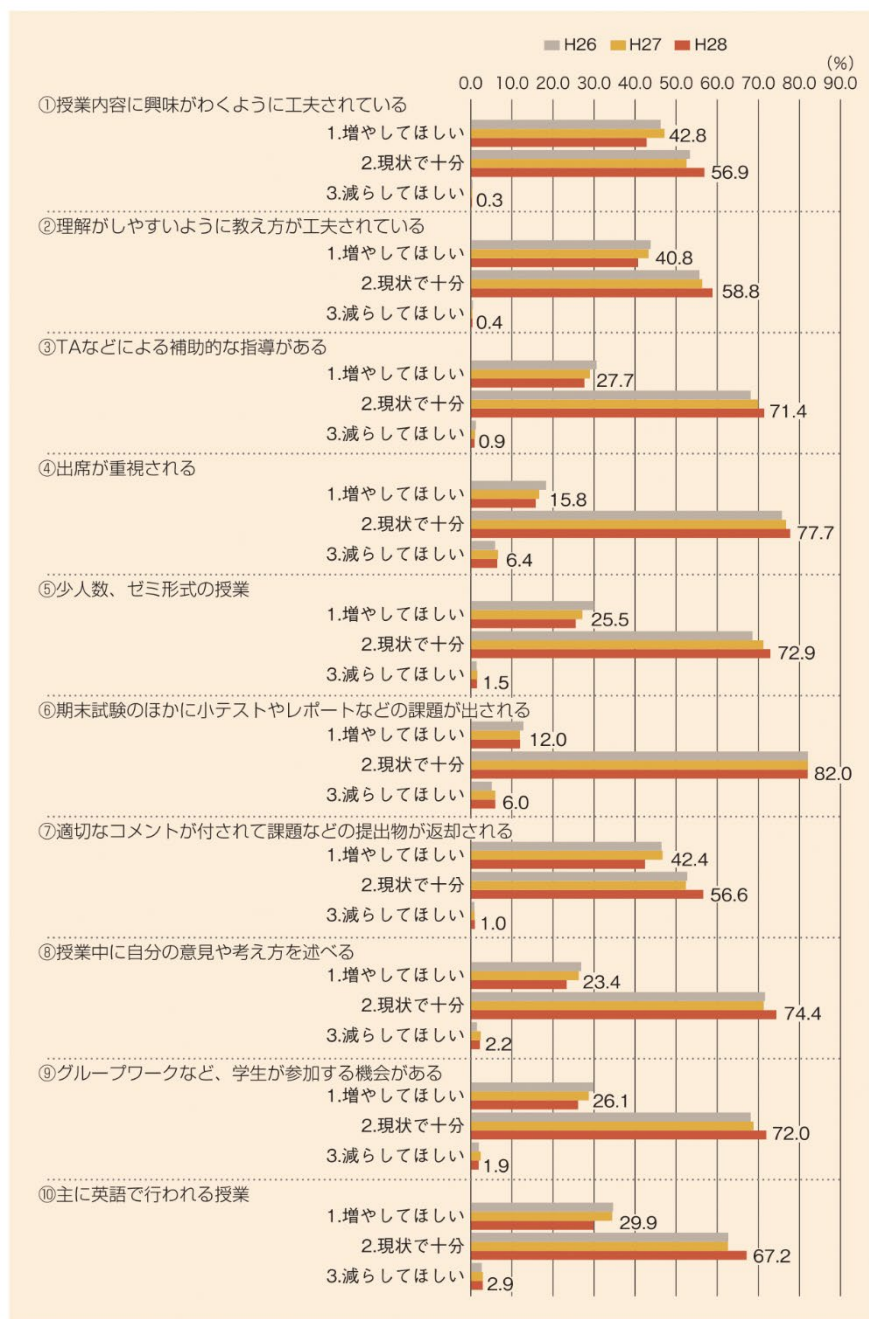
授業時間外の学習活動の成果を確認するために、多肢選択式の小テストを実施し、採点は TA や、学生同士ピアでおこなう

課題用ワークシートなど、授業の学習成果に関わる資料を全て学生に管理させ、さいごにポートフォリオをとして提出させることで、まとめてフィードバックをする（ポートフォリオの作成も授業時間外の学習活動になる）

授業時間外の学習として課題文献に対する意見を書いたワークシートをもとに、授業中にグループディスカッションをさせ、グループ単位でフィードバックをする

実は、毎年卒業式に実施する卒業時アンケートにおいて、「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される機会を増やしてほしい」との回答が 42.4%を占めました（図 1; 2017 年度実績）。フィードバックを学生も望んでいます。

Q7 B. 下記のような授業についてどの程度増やしてほしいですか。



東洋大学IR室(2018)『学生からみた東洋大学の教育：卒業時アンケート結果3カ年比較（平成26年度～平成28年度）』, p.7.

図1 増やしてほしい授業方法（出典：東洋大学 IR 室(2018)『学生からみた東洋大学の教育：卒業時アンケート結果 3 カ年比較（平成 26 年度～平成 28 年度）』, p.7.）

※クリックすると拡大表示されます。

※『学生からみた東洋大学の教育：卒業時アンケート結果 3 年比較（平成 26 年度～平成 28 年度）』のダウンロードはこちらから

（<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/cabinet/view?hid=1989&fid=24426>）。

4. さいごに

このシリーズは、見出しや小見出しが頻繁に付されているのでキーワードが拾いやすく、図表で適宜内容が整理されているため、読みやすいです。上述のフィードバック方法のように、事例も豊富です。また、最初の 1 ページからではなくても、必要な章だけ読むという使い方ができます。

冬休みの一冊として、ぜひ手にとってお読みください。

■ 書誌情報

中島英博 編著（2016）.『授業設計』. 玉川大学出版部, シリーズ大学の教授法, 第 1 巻, 202p.

■ 蔵書情報@東洋大学附属図書館

所蔵館 白山図書館

配架場所 開架 B1 図書

請求番号 377. 15: S88: 1

■ 目次

第 1 部 授業設計を始める前に

1 章 授業設計の利点を理解する

2 章 授業設計の前提を理解する

第 2 部 授業設計の基本を身につける

3 章 学生の到達目標を設定する

4 章 目標に対応した評価をおこなう

5 章 授業の進行と学習活動を設計する

6 章 シラバスを作成する

7 章 授業設計を見直して改善する

第 3 部 さまざまな授業設計に対応する

8 章 授業時間外の学習を充実させる

9 章 教材を準備する

10 章 意欲や態度を育成する授業を設計する

- 11 章 複数教員で授業を行う
- 12 章 研究指導を設計する
- 13 章 英語でシラバスを用意する
- 第 4 部 授業設計のための資料

(第 9 回につづく)

【2】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

1) English Support Service (ESS) & 学外 FD・SD 関連セミナーのご案内

○ESS 詳細・ご予約

ガルーン掲示板「English Support Service の開始について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

○学外 FD・SD 関連セミナーへの参加申込

・ガルーン掲示板「【ご案内】2018 年度学外 FD・SD 研修会について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE「平成 30 年度学外 FD 研修会のお知らせ」

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

【3】国内外の高等教育政策動向など

国内（2018 年 12 月 7 日）

1) 【センター試験】平成 31 年度大学入試センター試験の志願者数等確定

(2018 年 12 月 7 日)

>>>

https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00035654.pdf&n=%E5%BF%97%E9%A1%98%E8%80%85%E7%A2%BA%E5%AE%9A_h31_press.pdf

海外

○「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」(大学改革支援・学位授与機構)

>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

○「海外学術動向ポータルサイト」(日本学術振興会)

>>> <https://www-overseas-news.jsps.go.jp/>

【4】あとがき

書籍『授業設計』をご紹介したところ大変恐縮なのですが、本学の蔵書は一冊のみ。

残念ながら前々回ご紹介した電子書籍もまだありません。

学科に一冊、いかがでしょうか・・・？

早いもので、今年も残すところあとわずかとなりました。

2018 年は、メルマガをはじめとする web 文書を書く難しさと奥深さを知った一年でした。

「おもろくて役に立つメルマガ」を裏テーマに日々編集していますので、来年もご愛読のほどよろしくお願いいたします。

どうぞよいお年をお迎えください。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

■このメールは本学教職員にお届けしています。

■このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

■掲載記事の無断転載を禁じます。

©2018 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2019 年 1 月 17 日 Vol.1, No.9

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、

メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※本号は予定から 2 日遅れて配信しております。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第9回「授業外学習時間増加に資する教育手法

～ICTを活用した山梨大学の反転授業の取組紹介を交えて～」(徳江 順一郎)

【2】学内外のFD・SD セミナー及びイベント情報

【3】国内外の高等教育政策動向など(23件)

【4】あとがき(←反転授業のための簡単な動画収録方法をご紹介します)

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第9回「授業外学習時間増加に資する教育手法

～ICTを活用した山梨大学の反転授業の取組紹介を交えて～」

徳江 順一郎(高等教育研究部会員／国際観光学部国際観光学科 准教授)

1. はじめに

第9回はICTを活用して、いかに講義の時間以外で学習をしてもらうかを考えたいと思います。これまでも授業外学習時間の増加について検討しましたが、今回は、ICTを活用することで、その実現につなげる方策を検討します。

皆様もご存知のとおり、本学ではToyoNet-ACEというシステムにて学習に関する学生とのやり取りを行なっていますが、これをどう活かすかが今回の課題となります。

そこで、2019年1月10日に国際観光学部で実施されたFD研修会における山梨大学・森澤正之先生（教育センター副センター長）によるご講義「反転授業を組み合わせたアクティブラーニングの実践」でご紹介いただいた事例を交えつつ、ToyoNet-ACEの活用法について述べさせていただきます。



国際観光学部のFD講演会の様子

2. ToyoNet-ACE の仕様

これまでも、さまざまな場面で ToyoNet-ACE の使い方について説明があったことと存じます。ただ、（私もそうですが）多くの先生方は、「コースニュース」や「掲示板」での告知・資料の配布、あるいは「respon」の利用による出席管理などしか使っていないのではないのでしょうか。

しかし、ToyoNet-ACE には他にも多様な活用法が存在します。「コースコンテンツ」などに整理して動画をアップすることもできます。この動画こそ、現代の学生たちにとってはきわめて身近な「コンテンツ」となります。

そのため、動画を活用した授業外学習は、学生たちには比較的受け入れやすいものであるといえます。

3. 反転授業について

最近よく聞くこの言葉ですが、端的に言えば「講義と自己学習を入れ替える形態」となります。一般的な講義は、教室における一方通行の講義を基本とし、学生は自宅で予習・復習に励むことになります。しかし、人数の多い一方通行の講義では、つい居眠りをしてしまう学生が生じたり、予習や復習を怠ってしまうことにつながりかねません。

そこで、いわゆる「講義」に該当する部分は動画を活用して事前に学習させ、対面授業ではむしろそれをもとにした演習の時間にするすることで、学生の予復習の総時間数を増やすことなく、効果的な学習につなげよう、というのがこの反転授業ということになります。

この場合、実は、前回（第8回）でご紹介した「授業設計」の考え方こそが重要となります。事前学習でどこまでを学習させ、講義の時間にはそれを活かして、どのようなことの理解を深めさせるのか、その点をしっかりと設計していくことが効果的な反転授業のカギとなります。

4. ToyoNet-ACE による反転授業

本学のシステムでは、各講義において、「コンテンツ」を作成することができます。そこには、YouTube や TED の動画サイトを埋め込むことも可能ですし、アップロードすることで動画をそのままサーバーにアップすることもできます。これが学生の事前学習の「コンテンツ」となるわけです。

動画は、5～10 分のものが効果的ということです。それ以上長いと、学生の集中力が持たないケースが多いようです。そして、この動画をもとにした「事前学習ノート」を作らせた上で、講義に臨ませます。ここまでが「事前学習」ということになります。

講義では、そのノートを自己評価・相互評価させつつ、ホワイトボードなどを活用してグループ学習やグループ討論をさせることになります。必要であれば全体発表や教員による解説を加えていきます。

山梨大学ではその効果も検証しており、実際に理解度が高まった学生が非常に多くなっています。

5. おわりに

最初は抵抗感も多く、なかなか取り組めないのが現実でしょう。しかし、山梨大学での検証から、興味深い事実が浮き彫りになりました。

まず、教員の手間は大きくは増えないそうです。もちろん、教員の負担がまったく増加しないわけではありませんが、学生とのインタラクションが増えて、目に見える効果が生じることから、教員のやりがいにつながる人が多いようです。

また、1～2 回だけやったのでは、効果にはつながらないということです。やると決めたら、最低 5 回程度はやってみないと歴然とした差が生じません。

そして、グループワークをさせるには、1 人の教員では 50 名程度が限界であるとのこと。それ以上の履修者数がある場合には、TA を活用するなどして、監督者 1 名当たり 50 名程度の学生という形で対面授業をする必要があります。

是非とも ToyoNet-ACE の可能性をもっと活かすため、こうした試みをしてみていただければと思います。

※実際の例は、山梨大学の HP をご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=HrnHTrPPNRA&feature=youtu.be>

※2016 年 12 月の「平成 28 年度 ICT を活用した授業改革セミナー」においても、山梨大学の森澤正之氏に「反転授業を組み合わせたアクティブラーニングの実践」と題してご講演いただきました。ぜひ動画をご覧ください。

https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2736777c1263429_3758585055

【参考文献】

Lage, M. J., G. J. Platt & M. Treglia (2000), "Inverting the classroom: A gateway to creating an inclusive learning environment", *Journal of Economic Education*, 31(1), pp.30-43.

Bergmann, J. & A. Sams (2012), *Flip Your Classroom: Reach Every Student in Every Class Every Day*, International Society for Technology in Education.

山内祐平・大浦弘樹監修, 上原裕美子訳(2014),『反転授業』オデッセイコミュニケーションズ.
重田 勝介(2014),「反転授業 ICTによる教育改革の進展」『情報管理』第 56 巻第 10 号,
pp.677-684, 国立研究開発法人 科学技術振興機構.
(第 10 回につづく)

【2】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

1) English Support Service (ESS) & 学外 FD・SD 関連セミナーのご案内

○ESS 詳細・ご予約

ガルーン掲示板「English Support Service の開始について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

○学外 FD・SD 関連セミナーへの参加申込

・ガルーン掲示板「【ご案内】2018 年度学外 FD・SD 研修会について」

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE「平成 30 年度学外 FD 研修会のお知らせ」

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

2) MOST フェローシッププログラム募集について

主催：京都大学高等教育研究開発推進センター

【活動期間】 2019 年 3 月～2020 年 3 月

【活動場所】 京都大学・北海道大学他

【参加対象】 全専任教員

【申込締切】 平成 31 年 1 月 21 日（月）※

※ただし、各種事前課題申請書類の提出締切日も同日となります。

MOST フェローシッププログラムについて、本学専任教員からの参加希望者を募集致します。

参加を希望される方は、直接お申し込みをされる前に高等教育推進支援室（mlfdjimu@toyo.jp）までご連絡下さい。

なお、授業実践に係る活動費や旅費等の費用は、高等教育支援室で負担いたします。

詳しくはこちら

http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/most_fellow/

【3】国内外の高等教育政策動向など

国内（2018年11月30日～2019年1月15日）

1）【文科省・国立大学】平成31年度 国立大学法人の入学定員（予定） 公表

（2019年1月15日）

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1412584.htm

2）【文科省】「学校法人制度の改善方策について」公表

学校法人制度改善検討小委員会において取りまとめられました。

ニュースで報道されている「ガバナンス・コード」等について言及されています。

（2019年1月7日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/daigaku/002-1/houkoku/1412262.htm

3）【高等教育無償化】関係閣僚会合において「高等教育無償化の制度の具体化に向けた方針」了承

2018年12月28日におこなわれた「幼児教育・高等教育無償化の制度の具体化に向けた関係閣僚会合」において、「高等教育無償化の制度の具体化に向けた方針」が了承されました。

（2018年12月28日）

（文部科学省）

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/hutankeigen/detail/1412286.htm

（首相官邸）

https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/201812/28kakuryoukaigou.html

4）【大学入試センター】大学入学共通テストの導入に向けた平成30年度試行調査（プレテスト）マーク式問題に関する実施状況（速報）公表

11月10日（土）、11日（日）に実施された試行調査（プレテスト）マーク式問題に関する実施状況（速報）等が公表されました。

(2018 年 12 月 27 日)

<https://www.dnc.ac.jp/news/20181227-01.html>

5) 【大学入試センター】大学の求めに応じ記述式問題等を提供する方式の試行調査結果 公表

「大学入試センターが大学の求めに応じ記述式問題等を提供する方式」の試行調査の結果がとりまとめられました。

(2018 年 12 月 27 日)

<https://www.dnc.ac.jp/news/20181227-02.html>

6) 【私大連】「教育の質向上の取り組みに関する調査」報告書 刊行

学修成果可視化の事例が紹介されています。

(2018 年 12 月 27 日)

http://www.shidairen.or.jp/blog/info_m/academics_m/2018/12/27/23216

7) 【文科省・初等中等】学習者用デジタル教科書の効果的な活用の在り方等に関するガイドライン 公表

(2018 年 12 月 27 日)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/139/houkoku/1412207.htm

8) 【文科省】私立大学等の平成 29 年度入学者に係る学生納付金等調査結果 公表

(2018 年 12 月 26 日)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/1412031.htm

9) 【文科省・入試】平成 30 年度「高校生のための学びの基礎診断」認定ツール 公表

「高校生のための学びの基礎診断」は、義務教育段階の学習内容を含めた高校生に求められる基礎学力の確実な習得とそれによる高校生の学習意欲の喚起を図るため、高等学校段階における生徒の基礎学力の定着度合いを測定する民間の試験等を文部科学省が一定の要件に適合するものとして認定する仕組みです。(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1393878.htm より引用)

(2018 年 12 月 26 日)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1411945.htm

10) 【文科省】平成 30 年度学校基本調査（確定値） 公表

速報値は、高等教育推進センターニューズレターVol.1, No.1（2018 年 9 月 18 日配信）でお知らせしています。

（2018 年 12 月 25 日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1407849.htm

11) 【文科省・入試】大学入学共通テストの枠組みで行う民間の英語資格・検定試験に関する受検ニーズ調査結果 公表

（2018 年 12 月 25 日）

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1412173.htm

12) 【国立大学】岐阜大学と名古屋大学が「東海国立大学機構」設立を目指した基本合意締結

国立大学の県境を越えた一法人複数大学は初めてとなります。

（2018 年 12 月 25 日）

（岐阜大学）<https://www.gifu-u.ac.jp/about/overview/agreement.html>

（名古屋大学）<http://www.nagoya-u.ac.jp/info/20181225.html>

13) 【文科省・2018 年度補正予算】2018 年度文部科学省第 2 次補正予算案

（2018 年 12 月 21 日）

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2018/12/21/1410170_02.pdf

14) 【文科省・2019 年度予算】2019 年度政府予算案 閣議決定

（2018 年 12 月 21 日）

http://www.mext.go.jp/a_menu/yosan/h31/1408722.htm

15) 【中教審・社会教育】「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）」公表

（2018 年 12 月 21 日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1412080.htm

16)【国立大学改革】第 41 回総合科学技術・イノベーション会議 開催

国立大学改革の方向性に関する資料が掲出されています。

(2018 年 12 月 21 日)

<https://www8.cao.go.jp/cstp/siryo/haihui041/haihu-041.html>

17)【文科省・国公立大学】平成 31 年度入学者選抜の概要 公表

(2018 年 12 月 20 日)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/1412102.htm

18)【経済財政諮問会議】新経済・財政再生計画 改革工程表 2018

「本改革工程表は、『経済財政運営と改革の基本方針 2018』において定められた『新経済・財政再生計画』にのっとり改革を着実に推進するため、個別政策ごとに進捗状況及び今後の取組の進め方等を取りまとめたものです。」(下記 URL のウェブサイトより引用)

高等教育に関しては、「文教・科学技術」の分野をご覧ください。

(2018 年 12 月 20 日)

<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/reform/index.html>

19)【文科省】「医学部医学科の入学者選抜における公正確保等に係る緊急調査の最終まとめ」公表

(2018 年 12 月 14 日)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/1409128.htm

20)【入試】2020 年度（2021 年度入学者選抜）より導入される「大学入試英語成績提供システム」に参加予定の資格・検定試験概要（2018 年 12 月時点） 公表

「英語 4 技能試験情報サイト」(<http://4skills.jp/>) は、英語 4 技能を評価する資格・検定試験についてとりまとめられたウェブサイトです。

(2018 年 12 月 13 日)

<http://4skills.jp/qualification/pdf/20181213.pdf>

21)【欧州高等教育質保証協会】「学生中心の学習（STUDENT-CENTRED LEARNING）」をテーマにワークショップ開催

2018 年 12 月 10 日（月）～11 日（火）に欧州高等教育質保証協会（ENQA）が開催したワークショップの資料が掲出されています。

(2018 年 12 月 10 日～11 日)

<https://enqa.eu/index.php/events/enqa-workshop-on-qa-of-student-centred-learning/>

22) 【内閣府】学生の就職・採用活動開始時期等に関する調査報告書 公表

速報値は、高等教育推進センターニュースレターVol.1, No.3 (2018 年 10 月 16 日配信) でお知らせしています。

(2018 年 11 月 30 日)

<https://www5.cao.go.jp/keizai1/gakuseichosa/index.html>

23) 【文科省】専門職大学・専門職短期大学・専門職学科のウェブページ開設

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senmon/index.htm

海外

○「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」(大学改革支援・学位授与機構)

>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

○「海外学術動向ポータルサイト」(日本学術振興会)

>>> <https://www-overseas-news.jsps.go.jp/>

【4】あとがき

年明け早々この 2 週間で、国際観光学部と法学部の FD への参加、学外出張 2 件とインプットの機会に恵まれました。

この場をお借りして、得た知識を共有したいと思います。

■簡単に反転授業のための動画を収録する

▽使用するツール

・PC (マイク内蔵)

・PowerPoint (Office2016) or QuickTime Player (mac のみ)

※PC にマイクが内蔵されていない場合は、外付けのマイクをご用意ください。

白山ヘルプデスクでは、ヘッドセットの貸出をおこなっています。

▽収録方法

- PowerPoint (Office2016)
→<https://youtu.be/03yZYKXcsfI>
- QuickTime Player
→<https://support.apple.com/ja-jp/HT208721>

▽ポイント (国際観光学部の FD 講演会より)

- 1 動画あたり 5～10 分 (最大でも 15 分)
- 反転授業を前提とした動画であれば、顔を映さなくて OK
- たんたんと話せば OK
- 授業の 2～3 日前に事前学習課題とセットで動画配信
- 授業中に動画の内容の講義をおこなわない
- 反転授業は、始めたら 5 回は続けてみる (1 回では効果は見えてこない)

収録する手立ては他にもたくさんあるようです。Google 先生に聞いてみてください・・・！

また、2019 年 2 月 26 日(火)～27 日(水)@追手門学院大学で私立大学情報教育協会主催「FD のための情報技術研究講習会」が開催されます (<http://www.juce.jp/tech2018/>)。「動画教材の作成」のワークショップもありますので、参加ご希望の場合は高等教育推進支援室 (mlfdjimu@toyo.jp) にご連絡ください。ガルーンにおいてもご案内しています
(<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>)。

■アクティブラーニングの手法

冊子「+15 minutes」において、法学部 FD 学習会で紹介されたアクティブラーニングの手法がまとめられています。

ダウンロード>>> <http://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/download/>

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- このメールは本学教職員にお届けしています。
 - このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
 - 掲載記事の無断転載を禁じます。
- © 2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2019 年 1 月 29 日 Vol.1, No.10

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、

メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第 10 回「オンライン大学講座 MOOC（ムーク）について」（野間 信幸）

【2】本ニュースレターへの投稿を募集しています

【3】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

【4】国内外の高等教育政策動向など

【5】あとがき

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

第 10 回「オンライン大学講座 MOOC（ムーク）について」

野間 信幸（高等教育研究部会員／文学部東洋思想文化学科 教授）

（1）MOOC（ムーク）とは何やる？

MOOC（ムーク）など、初耳だった。それを紹介せよとは無茶振りや!!とも思ったけれど、リレー形式で執筆の順番が決められているので逃げようがない。ともあれ「家庭学習を強いられた学生」の気分になって、ムークなるものを調べてみることにした。

そもそもアルファベットの略称には、年齢のせい（すでに高齢者）なかなか馴染めない。略称のまま放置されているものが、はたして日本の社会に根付くのだろうか、と疑ってしまうことも度々ある。せめて日本語に置き換える努力ぐらいすべきだと、つねづね思っている。そういえば FD・SD・IR・GPA・SGU など、いつの間にか身の回りにこの種のことが溢れていることに気付かされる。理解が追いつかない。やれやれ、である。

ともあれ、気を取り直して MOOC を調べてみた。その結果、MOOC とはインターネットを使って無料で受講できる講座のことだと判明した。授業の程度は大学のレベルで、受講資格はないそうだ。日本版「JMOOC」(ジェイ・ムーク) もあるという。

(2) JMOOC の仕組み

そこで早速、「JMOOC」のホーム・ページを訪問してみた(図1)。最初に講座ジャンルの一覧表が目に入ってくる。文系だと、「人文科学」「社会科学」「ビジネスと経営」などが並んでおり、理系だと、「理工系基礎科目」「自然科学」「工学」「コンピュータ科学」などが並ぶ。他にも「教育と学習」「資格・試験対策」「健康と医療」などがある。

けっこう多分野にお店を広げているようで、頼もしい。因みに私の専門分野の中国文学や台湾文学を探してみたが、残念ながらこちらは見当たらなかった。全ジャンルを網羅するところまでは、まだ至っていないようだ。

なお、各講座には2・3分(10分を超えるものもあった)のガイダンスが付いているので、講座の全体像や内容をほぼ把握するのには役立ちそうだ。

「受講案内」によると、各講座には1週間で見べき講義が5本から10本用意されており(1本10分程度)、見終わると小テストが提示される。また1週間の学習が終わると課題が出される。これを4週間繰り返して、最後に総合課題に取り組むというシステムになっているようだ。

要するに、ネット上での通信教育なのである。各分野の専門家で授業上手と思われる名人の講義が無料で受講できるうえに、万人に開かれているところなど、じつに素晴らしい。ただし本シリーズのテーマである、学生の自律的な「学修」時間の確保という目的にこれが有効かどうかというのは、落ち着いて考えてみる必要がある。



図1 JMOOC トップページ, <https://www.jmooc.jp/>, 2019年1月29日アクセス。

(3) 「MOOC」の取り扱い

もし私達の授業が未熟ならば、ムークの動画に登場する先生方の力を借りるのもよからう。もし海外出張が重なったり、学外活動に多忙で授業にしばしば穴を空けてしまっているなら、これで代替するのも止むを得ぬ？ ことかもしれない。しかしそんな理由でムークを利用するのなら、いかにも情けない。

ムーブを活用するなら、授業で扱えない学際的な分野を補うものや、授業内容を違った角度から切り込んで
いる講座がふさわしく思える。こうした講座が開設されていれば、意欲や興味を持つ学生に勧めるとおおいに学
修成果があがるだろう。すべての学生に対して、課外での学習時間を増やしてしまえる即効薬にはならないもの
の、有効な手段の一つとしてうまく利用できそうに思う。

協道にそれるが、現実的な用途として、1 回分程度なら補講の代役を務めてくれそうに思う。お勤めの講座を
前もって把握しておきさえすれば、休講の埋め合わせとして役立てることができそうだ。

いや、こんなレベルではなく、もっと効果的にムーブの動画をうまく取り扱っている人はいるだろう。この人達の経
験談を聞き、知恵を集める必要がある。おそらく、ムーブと鉋は使いようだと思う。

そういえば、うちの大学にも受験生向けに 20～30 分程度の模擬授業を映した講義（Web 体験授業）が
蓄積されているはずだ。これを「TMOOC」（ティ・ムーブ）とでも呼んで、活用する手があるかもしれない。案外
「灯台もと暗し」だったのかもしれない。尤も私自身は自分の映像など見たくもないので、「TMOOC」の邦訳を
待ってからのことにしようと思う。

・JMOOC（ジェイ・ムーブ）

<https://www.jmooc.jp/>

・Web 体験授業

<http://www.toyo.ac.jp/nyushi/column/video-lecture/>

【2】本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターに FD・SD に係るコラムやイベント情報等の投稿を募集しております。

下記フォームにしたがって、ふるって投稿ください。

=====

投稿申請フォーム：<https://goo.gl/forms/WGnsoEj4A3B28Ndv2>

字数：800～1200 字（目安）

たとえば、こんなコラムを募集しています・・・！

■教員のみなさま

・授業で工夫していること

eg. ・授業運営の際におすすめの ICT ツール、アプリケーションのご紹介

・事前・事後課題の出し方のコツ

・学生の学問に対する興味・関心を高めるコツ、etc.

・学内外の FD・SD 研修会の開催／参加報告

・高等教育に関するおすすめの書籍や web site の紹介、etc.

■職員のみなさま

- ・担当業務の紹介
- ・担当学部・研究科、部署の FD・SD 研修会の開催告知
- ・学内外の FD・SD 研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍や web site（特に SD 関連）の紹介、etc.

=====

【3】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

1) English Support Service (ESS)

詳細・ご予約

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

2) 学外 FD・SD 関連セミナーへの参加申込

・ガルーンから

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE から

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

【4】国内外の高等教育政策動向など

国内（2019 年 1 月 16 日～1 月 25 日）

1) 【文科省】「日本留学海外拠点連携推進事業」海外拠点の公募 開始

(2019 年 1 月 25 日)

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1405561.htm

2) 【文科省】「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について（答申）」公表

(2019 年 1 月 25 日)

>>>

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985.htm

3) 【文科省】法科大学院公的支援見直し強化・加算プログラムの審査結果 公表

(2019 年 1 月 23 日)

>>> http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houka/1412819.htm

4) 【国立大学協会】「国立大学の入学者選抜に係る試験問題及び解答例等の公表の取扱いに関する方針」公表

国立大学協会は、2017 年度入学者選抜において出題・採点等のミスが判明したことの対応として、試験問題及び解答例等の公表の取扱いについて方針を定めました。

(2019 年 1 月 23 日)

>>> <http://www.janu.jp/news/teigen/20190124-wnew-nyushi.html>

5) 【文科省】「人文学・社会科学の振興に向けて（審議のまとめ）」公表

科学技術・学術審議会 学術分科会 人文学・社会科学振興の在り方に関するワーキンググループが 2018 年 12 月 14 日付でとりまとめた「審議のまとめ」を同省ウェブサイト公開されました。

(2019 年 1 月 23 日)

>>>

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/044/houkoku/1412891.htm

6) 【文科省】「2040 年を見据えた大学院教育のあるべき姿～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～」(審議まとめ) 公表

(2019 年 1 月 22 日)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1412988.htm

7) 【審議状況】第 146 回中央教育審議会大学分科会

○「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」を踏まえた大学設置基準等の改正について
（1.学部・研究科等の枠を超えた学位プログラム（（仮称）学部等連携課程）、2.実務家教員の登用促進について）

○高校相当として指定した 12 年制の外国人学校を修了した者等について、「18 歳に達したもの」とする年齢要件を撤廃する事に関する大学入学資格関係告示の一部改正について

○他の議題については、配布資料をご参照ください。

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/1412927.htm

（2019 年 1 月 22 日）

8) 【文科省・初等中等教育】「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」公表

2020 年度以降に順次実施される小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の新学習指導要領の下での学習評価の在り方に関する中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会における議論が取りまとめられました。

（2019 年 1 月 21 日）

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/01/1412838.htm

9) 【文科省・厚労省】平成 30 年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査（12 月 1 日現在）公表

（2019 年 1 月 18 日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/01/1412605.htm

10) 【文科省】「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等 公表

（2019 年 1 月 18 日）

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1412692.htm

11) 【日本学生支援機構】平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査結果 公表

（2019 年 1 月 18 日）

<https://www.jasso.go.jp/about/information/press/19011802.html>

12) 【審議状況】第 2 回教学マネジメント特別委員会

教学マネジメントに係る指針の策定に向けて、審議がはじまりました。

今後、以下の7つの事項について審議が進められ、2020年度中を目途に制度改正・周知される予定です。

1. 学修目標の具体化
2. 授業科目・教育課程
3. 成績評価
4. 学修成果の把握・可視化
5. 教学マネジメントを支える基盤（FD、SD、IR）
6. 情報公開の在り方
7. 教学マネジメント指針案の提示・省令改正案の提示

（2019年01月16日）

>>>（配布資料）<http://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/2019/01/1412574.htm>

海外

・「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」（大学改革支援・学位授与機構）

>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

・「海外学術動向ポータルサイト」（日本学術振興会）

>>> <https://www-overseas-news.jsps.go.jp/>

【5】あとがき

昨学期をもって、放送大学のラジオ放送が廃止されました。

ラジオを聴きながら様々な想像をしながら学んだ方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

インターネットが普及し、そしてオープンエデュケーションの機運が高まり、本文中にもあるMOOCsなど、多くの「知」が開放されています。

これだけコンテンツがある中、どう活用するか、どう身につけるのか

ユーザーとしては、試されているようにも思います（学習に手を付けられない言い訳ではありません）。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- このメールは本学教職員にお届けしています。
- このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
- 掲載記事の無断転載を禁じます。

© 2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2019 年 2 月 12 日 Vol.1, No.11

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、

メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」〈総括〉(角谷 昌則)

【2】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

1) 【申込受付中】「英語で授業を行うための FD 研修会」@白山キャンパス を開催します

2) English Support Service (ESS)

3) 学外 FD・SD 関連セミナーへの参加申込

【3】国内外の高等教育政策動向など

【4】あとがき

【1】シリーズ「学修／学習時間の実態と教育手法」

〈総括〉角谷 昌則 (高等教育研究部会 部会長／生命科学部生命科学科 教授)

高等教育推進センターの『ニュースレター』配信が始まって、もうすぐ半年になろうとしています。2 週間に 1 度の配信というペースではありますが、それを何とか守ってくることができたのも、この『ニュースレター』をお読みくださる教職員の皆様方のご支援の賜物と思っております。高等教育推進委員会高等教育研究部会の部会長として厚く御礼を申し上げます。

さて、創刊号から連載が始まりました、『シリーズ：学修／学習時間の実態と教育手法』ですが、前号をもちまして終了となりました。これまでのご愛顧のほど誠に有難うございました。ただ連載は終わりましたが、私たちが課題として今後も意識していかなければならないテーマでもあります。例えば、連載中に文部科学省中央教育審議会から『2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン』(平成 30 年 11 月 26 日)という答申が出されましたが、その中では「学修者本位の教育への転換」という項目が最初に取り上げられております。大学教

育の質的転換に向けた努力は、今後とも続いていくと推察するべきでしょう。あるいは、そうした政府の掛け声に依らなくても、新学習指導要領で全面的に採用された「主体的・対話的で深い学び」によって教育された若者たちが続々と入学してくるわけですから、私たちも対応に意識的にならざるをえないという現実もあります。高校までに芽生えた〈主体性〉を、どう〈学修者本位〉という形に花咲かせるか、今後も大学教育の力量や内実が問われていきます。

今こうした視点から連載を振り返ってみますと、そこには学生の主体的参加を促す仕掛けとか、学修者を授業の中心に据えようとした工夫などが少なからず紹介されておりました。これらの事例から気付かされるのですが、主体性というものは自由を与えることによって育まれるものでは無いのかもしれませんが。通常でしたら、制度や場所は主体の対極にあると考えられますので、さまざまな“規制緩和”によって主体性の発揮を目指そうとすることでしょう。そうした“リベラル”な思考を重視したくなるわけですが、この連載で取り上げた主体性を伸ばすための手立ては、私たちが通常考える主体性の確保の仕方とは大きく異なっておりました。

場所や制度の制約を極力受けない主体性か、あるいは場所や制度とうまく共振する主体性か。学修体制や授業方法の改善・改革を進めていくにあたり、大学として目指す学生の〈主体性〉の姿について整理していく必要があるように思えます。

『ニュースレター』では次号より新しい連載が始まります。テーマは正に授業に関するものです。本学の先生方にご登場いただき、ご自身の授業で実践されておられる工夫や配慮などについてご披露していただきます。形式としては毎号お一人にお話いただく予定です。ただ前号でもご案内いたしましたように、「投稿申請フォーム」をご利用いただければ、どの先生方にもご自身の授業についてお話いただけます。「コラム」として紹介させていただきますので、ぜひ皆で参考にし合ったり分かち合ったりさせて下さい。

※ 投稿申請フォーム

<https://goo.gl/forms/WGnsoEj4A3B28Ndv2>

- ・「わたしがおすすめする授業の工夫」を選択いただき、フォームにしたがって申請をお願いいたします。
- ・「わたしがおすすめする授業の工夫」をテーマにしたコラムのほかに、FD・SDに係るコラムやイベント情報等の投稿も募集しています。詳しくは、フォームをご確認ください。

【2】学内外の FD・SD セミナー及びイベント情報

1) 【申込受付中】「英語で授業を行うための FD 研修会」@白山キャンパス を開催します

日時：2019年3月12日（火）10:00～17:10

場所：白山キャンパス 10号館 2階 A201 教室、A203 教室

対象：東洋大学専任教員（各プログラム先着 12 名）

講師：British Council の講師

申込フォーム：<https://bit.ly/2HHcDiI>

主催：東洋大学高等教育推進センター

問合せ先：高等教育推進支援室（mlfdjimu@toyo.jp, 03-3945-4274）

高等教育推進センター（主催）

英語で授業を行うための
FD研修会

3/12 10:00～17:10
東洋大学白山キャンパス10号館2階
Program A: A201教室 Program B: A203教室

Program A

Lectures and Presentations

イントロダクション	ツナギ言葉
適切なデータの選択	確信的な構成
ボディランゲージ	まとめと振り返り

Program B

Academic Writing

効果的な序論	エッセイを書く
引用・参照・言い換え	読後感を書く
トピックセンテンス	学術論文の書き方

各プログラム先着12名（本学専任教員）

■お申し込み受付期間 2月1日（金）～2月22日（金）

■お申し込み方法 お申し込みは<https://bit.ly/2HHcDiI>よりお申し込みください。

■お問い合わせ 高等教育推進支援室 電話 03-3945-4274 mlfdjimu@toyo.jp

2018年より大受好評を博している British Council のプログラムです。今年度も参加者の満足度の高い、2つの特別プログラムをご用意しました！

2) English Support Service (ESS)

詳細・ご予約

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

3) 学外 FD・SD 関連セミナーへの参加申込

・ガルーンから

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE から

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

【3】国内外の高等教育政策動向など

国内（2018年12月13日～2019年2月8日）

【文科省】平成31年度「卓越大学院プログラム」公募

2019年2月8日

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/takuetudaigakuin/1413468.htm

【文科省】平成31年度大学教育再生戦略推進費「大学の世界展開力強化事業」～日－EU 戦略的高等教育連携支援～公募

2019年2月4日

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1413413.htm

【文科省・初等中等】特別支援学校高等部学習指導要領 公示

2019年2月4日

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/1386427.htm

【文科省】高等教育・研究改革イニシアティブ（柴山イニシアティブ）公表

2019年2月1日

http://www.mext.go.jp/a_menu/other/1413322.htm

【調査】大学改革支援・学位授与機構「学位に付記する専攻分野の名称」の調査結果（平成29年度分）公表

2019年2月1日

<https://www.niad.ac.jp/publication/gakui/meishou.html>

【文科省・国立大学】国立大学の一法人複数大学制度等に関する調査検討会議（最終まとめ）公表

2019年1月31日

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/092/gaiyou/1413271.htm

【文科省】国立の教員養成大学・学部及び国私立の教職大学院の平成 30 年 3 月卒業者及び修了者の就職状況等 公表

2019 年 1 月 31 日

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoushoku/kyoushoku/1413296.htm

【調査・大学入試】日本財団 第 8 回「18 歳意識調査」(テーマ：大学入試について) 結果公表

2019 年 1 月 30 日

<https://www.nippon-foundation.or.jp/news/pr/2019/7.html>

【文科省】第 9 期研究費部会における審議のまとめ 公表

2019 年 1 月 25 日

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/041/houkoku/1413368.htm

【調査・大学入試】河合塾「英語資格・検定試験に関する意識調査（アンケート）」結果公表

2018 年 12 月 13 日

<https://www.kawaijuku.jp/jp/news/detail.html?id=280>

海外

・「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」(大学改革支援・学位授与機構)

>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

・「海外学術動向ポータルサイト」(日本学術振興会)

>>> <https://www-overseas-news.jsps.go.jp/>

【4】あとがき

センターニュースレターの発行が 10 号を超え、11 号目となりました。

先生や職員の方々から「読みましたよ」「面白い記事でしたね」

「今度私たちが行うシンポジウムの情報も流してほしい」といった声をお寄せいただいております。

とても嬉しく思います。

メルマガは、一方通行になりがちな性格もありますが、このように学内の皆様との接点が作られ、先生方や職員の方同士の会話の話題となったり、皆様の繋がりを生むきっかけとなっているとしたら、なお嬉しく思います。

今後ともご愛読のほど、宜しくお願い致します。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

■このメールは本学教職員にお届けしています。

■このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。

ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。

■掲載記事の無断転載を禁じます。

© 2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2019 年 2 月 26 日 Vol.1, No.12

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、

メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ2「わたしが実践する授業の工夫」

第1回「学生に参加させる授業づくりの工夫」(三浦 健)

(1)復習問題 (30 分)

(2)トピックスの紹介 (10 分)

(3)講義 (50 分)

(4)講義以外の対応

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

第1回「アクティブラーニングによる講義外学習の活用」(澁澤 健太郎)

・ゼミナール教育を考えるー講義外時間の活用ー

・どうやって学習意欲を持たせるのか?ー為替全国大会参加ー

・国際的な視野ー視野の拡大ー

・最後に

【3】FD・SDに係るお知らせ(各部署より)

1) 2018(平成30)年度優秀教育活動賞の推薦期間のお知らせ

【4】高等教育政策動向等(2019年1月31日~2月22日)

1)【国立大学協会】国立大学における連携・協働による取組事例集(大学向け)公開

2)【経済同友会】「地域産業のイノベーション創出に向けて」公表

3)【日本学術会議】報告「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 化学分野」公表

4)【国公立大学】平成31年度国公立大学入学者選抜の確定志願状況・2段階選抜実施状況(前期日程)公表

5)【経団連】「Society 5.0 実現に向けたベンチャー・エコシステムの進化」公表

6)【経団連】「AI活用戦略」公表

- 7) 【河合塾】「日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究」成果報告書 公開
- 8) 【法令関連】大学等における修学の支援に関する法律案 閣議決定
- 9) 【法令関連】学校教育法等の一部を改正する法律案 閣議決定
- 10) 【調査】2020 年卒マイナビ大学生のライフスタイル調査
- 11) 【文科省】総合政策特別委員会論点とりまとめ 公表

【5】その他

- ◆English Support Service (ESS)
- ◆学外 FD・SD 研修会への参加申込
- ◆本ニュースレターへの投稿申請
- ◆リンク

【6】あとがき

【1】シリーズ2「わたしが実践する授業の工夫」

第1回「学生に参加させる授業づくりの工夫」

三浦 健（生命科学部応用生物科学科／高等教育推進委員会委員）

赴任して4年目の夏に、日本私立大学連盟主催の「FD推進ワークショップ（新任専任教員向け）」に参加して、ホワイトボード（2枚・3色ペン）のみでの模擬講義（15分）と他大学の教員とのグループ討論を体験してきた。現在も、FDワークショップ運営員（ファシリテーター）として参加している。そこで、「学生に興味を持たせる（参加させる）授業」のヒントを得ることができた。現在、心掛けていることは、学生を授業の進行に関与させること。また机間巡視を行い、学生への声掛けをすることで「自分も授業に参加している！」という安心感を与えることである。

私の担当している全ての授業は、（1）復習問題 30分＋（2）トピックスの紹介 10分＋（3）講義 50分＝90分、そして（4）授業外の4部の構成で行っている。（4）は、モチベーションが高い学生や授業内で理解できない学生のための時間である。履修者数は20～100名程度の授業を担当している。

（1）復習問題（30分）

問題は、前週の講義内容と定期試験レベル（過去の講義内容など）で構成している。その際、解答は「自力で解答（黒色）、各自で配布プリントと参考書を参照（青色）、間違い（赤色）」で記入させている。解答中は、多数大勢ではなく、個々の学生として授業に参加しているという意識を持たせるため、机間巡視を行い、未解答が多い学生に声を掛けている。

さらに、回答の順番は学生に決定させている。その際のルールは次のようになっている。

1人目は、私が決定すること。

※1問目は理解度の低い学生でも解答できるため、自信を持たせるために当てている。

アイテムとして「人形」を用いており、人形を受け取った学生は必ず回答をすること。

※人形はぬいぐるみを使用しているので投げても安全である。

人形を渡すときは必ず「名前」を呼んでから渡すこと。

正解するまで回答を続けること。

<メリット>

(教員)

回収プリントを見ることで、学生における内容の把握度、講義の進行スピード、内容変更などの再検討ができること。

青字と赤色が多い学生に対しても、机間巡視でやる気を促す声掛けができること。

名前と顔を一致させることができること。

代返を減少することができること。

(学生)

各自の理解度、重要ポイントを確認することができること。

友人の理解度を確認でき、お互いに教え合うことができること。

<デメリット>

回数を重ねるごとに、正解率が高い学生のみで回答するようになること。

最初から、配布プリントを参照する学生が徐々に増えていくこと。

(2) トピックスの紹介 (10 分)

内容は、科学のニュースや研究内容など様々である。オフィスアワーなどで私を訪問できるきっかけ作りや友人との話題作りを期待して提供している。

(3) 講義 (50 分)

毎週、学生にプリントを配布し、PowerPointで行っている。配布プリントは、スライドの重要箇所を記入するだけでなく、口頭もメモすることで完成するものである。さらに、全てのスライドを配布するのではなく、成績の良い学生向けに、発展レベルのスライドも追加している。

(4) 講義以外の対応

オフィスアワーなどで対応している。実際のところ、1 学年で訪問してくる学生は 10 名程度であり、講義内容以外にも、様々な問題の相談にも乗っている。

その他、キャンパス内で「声掛け（挨拶）」をしている。学生にとっては声を掛けられること、名前を呼んでもらえることは嬉しい様である。

最後に、現在、復習問題を行う際、「manaba」を活用した方法を取り入れることを検討している。しかし、「正解か否か」を判断することはできるが、解答に達するまでの過程を判断することが困難である。そこで、新たな手法を考える必要があると感じている。

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

Vol.1, No.5 (2018 年 11 月 13 日) の吉田宏予先生に引き続き、本号から連続して 2017(平成 29)年度東洋大学優秀教育活動賞受賞の先生方に、教育活動(各学部の授業及び授業に伴う教育活動)の特長をご紹介します。

こちらのコラムは、高等教育推進センター公式ホームページ においてもご覧いただけます。

第 1 回「アクティブラーニングによる講義外学習の活用」

湊澤 健太郎(経済学部総合政策学科・2017(平成 29)年度東洋大学優秀教育活動賞受賞)



湊澤ゼミ@2017(平成 29)年度東洋大学優秀教育活動賞授賞式

ゼミナール教育を考える

講義外時間の活用

大学では 1 講義について、年に 30 回と講義回数が決められており、時間数に直すと 1 単位 45 時間と膨大な時間が用意されています(全ての大学ではありません)。しかしながら諸事情による休講、講義内での小テストや出席などによってこの時間は実際には大幅に短縮されていると思われます。さらに学習意欲の喪失、学力の低下については多くの識者の指摘が示されているところです。予習や復習、つまりは講義外時間の活用とアクティブラーニング導入によりこれらの課題についていくつかの点で有効性を示したいと思います。

通常の大講義では、履修者数が多く個別の対応やアクティブラーニング導入は必ずしも効果を発揮することが難しく、情報環境の整備や教員の ICT 活用能力(※1)の有無によっても差が生じます。その点、ゼミナールは少人数であり個々の対応が可能、またアクティブラーニング導入も比較的容易と考えられます。私のゼミ

では、まず講義外時間をどのように組み込み学生が自ら意欲を持ち、教育効果を生じさせることができるのかについて取り組んできました。

※ 1) ICT とは、情報通信技術 (Information and Communication Technology) の略。

どうやって学習意欲を持たせるのか？

為替全国大会参加

文系ゼミのスタンダードとして、本の輪読と発表という形式があげられます。最近では各チームの発表は PC を使ったプレゼン方式が多くなっているように思います。しかし発表方法がデジタル化しても知識量や経験値がより多くなるというわけではなく、むしろ綺麗に見えるような工夫をすることに時間が割かれることもあります。さらにこの形式で特に能動型教育が加速されるということもありません。

私のゼミでは、まず「為替」をテーマに取り入れています。4 月から始まるゼミでは各チームにわけて為替の将来的（短期から中期まで）予測を行います。なぜ「為替」か？といえばもちろん経済と深い関係にあることは当然ですが、毎日変動することや海外の事象に注意を払う必要があるということが重要です。また学生は必ずしも為替について専門的な知識があるわけではないので、ゼミ時間外にお昼休みの時間など使って勉強会を開催しています（講義外学習の事例 1）。これは教員によるプレゼンテーションと質疑応答が組み入れているので、学生は事前学習が必須となります。

重要な点の 2 番目は、ゼミ内での完結にしないことです。その為に 2010 年度から日本経済新聞社が主催する為替予想学生全国大会（円ダービー）にゼミでエントリーしています。ゼミ内討論で終わらせず大会では約 450 チームが約 2 か月間にわたって為替予想（対ドル円）を実施します。澁澤ゼミは、昨年度総合全国第 5 位で入賞し日本経済新聞に掲載されています（最高位は全国 2 位）。こうした事実に基づいて学生のゼミでのモチベーションは非常に高くなっています。

国際的な視野

視野の拡大

澁澤ゼミでは、2003 年度からゼミ単位で海外研修を毎年実施しています。現在、経済学部内で毎年ゼミ単位での海外研修を実施しているのは私のゼミのみとなっています。参加学生は平均 31 名とゼミに所属する学生のほとんどが参加しています。2018 年度はエストニア共和国を訪問しました。海外の先進的企業を訪問し、レクチャーを受けて質疑を行います。他大学の学生とコミュニケーションの機会を設けることもあり、学生は貴重な経験を有します。近年ではインターネットで情報を得ることが一般的であり、わざわざリスクをかけて訪問することに意味があるのかという疑問も生じるかもしれません。しかし現場で得ることができる体験は、何事にも代える

ことができません。たとえば企業でレクチャーを受けた後に、街中でピザ宅配ロボットの走行を見た学生は歓声をあげていました。こうした体験は日本では得ることが叶いません（エストニア共和国：タリン市内）。

また海外研修については事前勉強を繰り返しています。先方企業へ質問を送り、Web 上で議論を事前に行っています。事後的にはアマゾンで海外研修報告書を出版しています（資料 1 参照）。研修報告書は 10 万字を超える大作（笑）であり、昨年度は教育部門で第 1 位を記録しています。出版にあたり原稿作成や編集などに膨大な時間が、かかっています（講義外学習の事例 2）。



資料 1 | amazon のキンドルストアでの電子出版

澁澤ゼミ（2018）『澁澤ゼミ海外研修報告書（2018）』

https://www.amazon.co.jp/dp/B07J27CNPM/ref=cm_sw_r_em_api_i_wVJACbJHRK62E

最後に

上述してきた講義時間外の利用ですが、これらの複数プログラムは通常のゼミナールで行っているプレゼンテーション並びにディベートとリンクされています。例えば、電子居住権について調査し発表することがその後訪問する国の制度と関連づけられています。3 年のゼミで実施している企業のポートフォリオ（企業分析）は為替と関連しています。本学で行われた男女共学 100 周年記念事業学生企画成果報告会などでもこうしたゼミの力は如何なく発揮されています（資料 2 参照）。



資料 2 | 東洋大学男女共学 100 周年記念事業学生企画成果報告会

<https://www.toyo.ac.jp/site/dpol/115166.html>

アクティブラーニング導入はシステムを導入し、利用を呼び掛けても成果を得ることは期待できません。学生（教員）自ら能動型に参加するプログラムが用意され、また成果が検証できることが重要です。時にそれは就職活動に生かされていることは、卒業生が 1 年に 2-3 回程度、ゼミ内キャリアセミナーでしばしば後輩へ直接伝えています。余談ですが、ゼミの Web サイト（ドメインはゼミ名で取得<<http://shibuzemi.com/>>）やツイッター、ネットラジオなどでゼミ学生は主体的に情報を公開しています。

教員は時間外学習に負担を伴うことへ抵抗がありますが、教育者は負担を理由にせず時間を惜しまない姿勢が望まれるのではないのでしょうか。

【3】FD・SD に係るお知らせ（各部署より）

1）2018(平成 30)年度優秀教育活動賞の推薦期間のお知らせ

本学において優れた教育活動（各学部の授業及び授業に伴う教育活動）を企画実施し、学生に大きな教育効果を与えた専任教員に対して顕彰することを目的として、下記のとおり、東洋大学優秀教育活動賞の推薦を依頼いたします。（高等教育推進支援室）

1. 推薦期間 2019 年 2 月 1 日(金)～2019 年 4 月 30 日(火)
 2. 推薦者 規程第 6 条に基づく専任教員
 3. 対象者 専任教員
 4. 対象となる授業 2018(平成 30)年度に実施された学部授業（教育プログラムを含む正課授業）
- ※詳細はガールーン掲示板をご確認ください。

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=14390>

【4】高等教育政策動向等（2019年1月31日～2月22日）

1) 【国立大学協会】国立大学における連携・協働による取組事例集（大学向け）公開

国立大学協会が、国立大学における連携・協働による取組の事例を「教育」「研究」「産学連携・地域連携」「国際展開」「経営・財務・システム」の観点から取りまとめ、公開しました。

（2019年2月22日）

>>> <https://www.janu.jp/news/whatsnew/20190222-wnew-renkei-cs.html>

2) 【経済同友会】「地域産業のイノベーション創出に向けて」公表

（2019年2月22日）

>>> <https://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2018/190222a.html>

3) 【日本学術会議】報告「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 化学分野」公表

32分野目の参照基準が公表されました。

（2019年2月21日）

>>> <http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/daigakuhosyo/daigakuhosyo.html>

4) 【国公立大学】平成31年度国公立大学入学者選抜の確定志願状況・2段階選抜実施状況（前期日程）公表

（2019年2月20日）

河合塾による公表データの分析結果も公開されています。

>>>（文科省）http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/02/1413767.htm

>>>（河合塾調べ）<https://www.kawaijuku.jp/jp/news/detail.html?id=294>

5) 【経団連】「Society 5.0 実現に向けたベンチャー・エコシステムの進化」公表

大学・研究開発法人は「医薬、バイオ、化学、材料・素材などのディープサイエンス系スタートアップの振興に向けた取り組みが必要」（概要, p.8）と言及されています。

（2019年2月19日）

>>> <http://www.keidanren.or.jp/policy/2019/012.html>

6) 【経団連】「AI活用戦略」公表

大学は、「人材需要と大学側の供給の適切なマッチングのためにも、産学官連携のもと、AI 人材に関する教育プログラムの認定を推進することが重要である。」(p.31) 等と言及されています。

(2019 年 2 月 19 日)

>>> <http://www.keidanren.or.jp/policy/2019/013.html>

7) 【河合塾】「日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究」成果報告書 公開

(2019 年 2 月 13 日)

>>> <https://www.kawaijuku.jp/jp/news/detail.html?id=288>

8) 【法令関連】大学等における修学の支援に関する法律案 閣議決定

この法律案は 2020 年度からの高等教育の授業料減免制度創設や給付型奨学金の支給拡充を定めたものです。

(2019 年 2 月 12 日)

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/houan/an/detail/1413436.htm

※高等教育段階の教育費負担軽減に関する特設ページはこちら

>>> http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/hutankeigen/index.htm

9) 【法令関連】学校教育法等の一部を改正する法律案 閣議決定

国立大学法人が複数の大学を経営できる 1 法人複数大学制を可能にする国立大学法人法改正案と、私立学校のがバナンスを強化するための私立学校法改正案が閣議決定しました。

(2019 年 2 月 12 日)

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/houan/an/detail/1413437.htm

10) 【調査】2020 年卒マイナビ大学生のライフスタイル調査

就活生のライフスタイルを明らかにすることを目的に、マイナビと法政大学キャリアデザイン学部が共同で実施した調査結果が公表されました。

『「あなたに欠けていると思うもの」では、女子は 5 年連続で『自分の長所をアピールする力』(45.0%、前年比 1.4pt 減) の割合が最も高かったのに対し、男子は前年 2 位の『コミュニケーション能力』(37.8%、前年比 0.2pt 減) が最も高い割合」(p.12) でした。

(2019 年 1 月 29 日)

>>> <https://saponet.mynavi.jp/release/student/life/mynavilifestyle2020/>

11) 【文科省】総合政策特別委員会論点とりまとめ 公表

(2019 年 1 月 31 日)

>>> http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu22/houkoku/1413784.htm

【5】その他

◆ English Support Service (ESS)

詳細・ご予約

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

◆ 学外 FD・SD 研修会への参加申込

・ガルーンから>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE から>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

◆ 本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターに FD・SD に係るコラムやイベント情報等の投稿を募集しております。

ご希望の教職員は、下記フォームにしたがってふるって投稿ください。

=====

投稿申請フォーム : <https://goo.gl/forms/WGnsoEj4A3B28Ndv2>

字数 : 800～1200 字 (目安)

たとえば、こんなコラムを募集しています。

○教員のみなさま

・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム

eg. ・授業運営の際におすすめの ICT ツール、アプリケーションのご紹介

・事前・事後課題の出し方のコツ

・学生の学問に対する興味・関心を高めるコツ、etc.

・学内外の FD・SD 研修会の開催／参加報告

・高等教育に関するおすすめの書籍や web site の紹介、etc.

○職員のみなさま

・担当業務に係る取組紹介コラム

・担当学部・研究科、部署の FD・SD 研修会の開催告知

・学内外の FD・SD 研修会の開催／参加報告

・高等教育に関するおすすめの書籍や web site（特に SD 関連）の紹介、etc.

=====

◆リンク

・「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」（大学改革支援・学位授与機構）

>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

・「海外学術動向ポータルサイト」（日本学術振興会）

>>> <https://www-overseas-news.jsps.go.jp/>

【6】あとがき

先日、國學院大學様が開催した「学士課程教育におけるシチズンシップ教育」シンポジウムに出席しました。

シチズンシップの概念の発生からシチズンシップ教育の始まり、大学の教養教育が担ってきた理由、

更にリベラル教育への転換と批判といった歴史を知ること、

体系的な学問を順次性を持って「学ぶこと・解くこと」だけでなく

「考えること・自らの体験を体系化すること(アクティブ・ラーニング志向)」を必要とする

教育の改革の流れまでの繋がりがよくわかり、浅学を恥じているところです。

また、他大学における取組を知るよい機会となりました。

高等教育推進支援室では、このような学外シンポジウムなどへの参加につきまして、

ご案内と、研修会参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等の負担しております。(報告が必要となります)

くわしくは下記ページをご覧ください。

・ガルーンから>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE から>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

本号から、新シリーズ「わたしが実践する授業の工夫」と新コーナーであるコラム「東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く」がはじまりました。

新シリーズは vol.1～10 にわたって連載した「学修／学習時間の実態と教育手法」から引き続き、授業テクニックに着目し、授業で実践されておられる工夫や配慮などについて具体的にご紹介いただきます。

一方の新コーナー「東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く」では、本学において優れた教育活動（各学部の授業及び授業に伴う教育活動）を企画実施され、学生に大きな教育効果を与えられた優秀教育活動賞受賞の先生方から教育活動の特長を伺います。

新シリーズ、新コーナーともによりしくお願いいたします。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- このメールは本学教職員にお届けしています。
- このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
- 掲載記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2019 年 3 月 12 日 Vol.1, No.13

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、

メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ2 | わたしが実践する授業の工夫

第2回 ToyoNet-ACE のドリル機能を活用した授業運営の紹介 (長谷川 輝明)

- (1) 教員と学生のインタラクションを促す ToyoNet-ACE のドリル機能
- (2) ドリルを出題する際のポイントは「成績評価との連動」と「提出期間」
- (3) 初めてドリルを作成するときは大変。しかしその後の労力削減に繋がる

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

第2回 「マーケティングデータ分析入門」の取り組み (石田 実・李 振)

【3】FD・SD に係るお知らせ (各部署より)

- 1) 2018(平成 30)年度優秀教育活動賞の推薦期間のお知らせ
- 2) JPFF 実践的 FD プログラム オンデマンド講義のご案内
- 3) 高等教育関連図書のご案内

【4】高等教育政策動向等 (2019 年 1 月 7 日～3 月 7 日)

- 1) 【経済同友会】2018 年度中国委員会ミッション報告書
- 2) 【文科省・教職】平成 29 年度教員免許状授与件数等調査結果 公表
- 3) 【文科省】『科学技術要覧 平成 30 年版』公表
- 4) 【ランキング】QS World University Rankings by Subject (QS 専攻分野別 世界大学ランキング) 発表
- 5) 【文科省】平成 29 年度大学等における産学連携等実施状況 公表
- 6) 【文科省】平成 30 年度「私立大学研究ブランディング事業」の支援対象校 公表
- 7) 【文科省】平成 30 年度「私立大学等改革総合支援事業」の支援対象校 公表
- 8) 【文科省】平成 30 年度「私立大学等経営強化集中支援事業」の支援対象校 公表
- 9) 【審議状況】第3回教学マネジメント特別委員会
- 10) 【センター試験】平成 31 年度大学入試センター試験実施結果の概要 公表

11) 【共通テスト】「大学入試英語成績提供システム」の概要 公表

【5】その他

- ◆English Support Service (ESS)
- ◆学外 FD・SD 研修会への参加申込
- ◆本ニューズレターへの投稿申請
- ◆リンク

【6】あとがき

【1】シリーズ 2 | わたしが実践する授業の工夫

第 2 回 ToyoNet-ACE のドリル機能を活用した授業運営の紹介

長谷川 輝明（生命科学部生命科学科）

教員と学生のインタラクションを促す ToyoNet-ACE のドリル機能

私が担当している講義における工夫として、ToyoNet-Ace 上の「ドリル」機能を用いた学生とのコミュニケーションについて紹介したい。

この試みを行っている講義は、「基礎有機化学」および「生物有機化学」であり、両講義とも、年度によっては履修生が 200 人を越える大規模講義である。これらは自然科学系の講義であることから、従来ではどうしてもスクリーン等を用いた理論紹介がメインとなってしまう、履修生の多さも相まって対面学習が非常に行いづらかった。

そこで、学生の授業参加を促進するとともに授業の双方向性を高めるために、私は数年前から、ToyoNet-Ace 上のドリルを媒介とした講義を展開している。具体的には、毎週の講義終了後、その週の講義内容に関するドリル問題を、使用している教科書の章末問題から抜粋（一部改変）する形で 15 問程度用意し、そこからランダムに 5 問を出題している（これにより、学生が教科書に目を通すようになることにも期待している）。

ドリルを出題する際のポイントは「成績評価との連動」と「提出期間」

このドリルの出題に関して工夫しているのは以下の 2 点である。

①ドリルは何回解いても良いものとし、その最高点（の合計点）を最終的な成績判定の一部（30%程度）に用いている。これにより、ドリルを複数回解くことに対するインセンティブを学生に与えると共に、繰り返しドリル問題を解くことによる学生の理解度向上も期待できる。

②ドリルの提出期間は翌週の講義を跨いだ週末までとしている。これにより、翌週の講義までにドリルに取り組んでいれば、解らない問題を講義中に質問できるようにしている。確かに大多数の学生は積極的に質問をし

たがらない。しかし、質問をしたのちに再度ドリルに取り組めば更なる高得点が期待できることがインセンティブとなり、講義冒頭に「ドリルで何か聞きたいことは無いか？」と尋ねると、複数の（比較的積極的な）学生は毎週挙手して質問をしてくれる。また、これは大っぴらには言えないが「質問が無いならとっとと新しいところに進むぞ（つまり期末テストの範囲が増えるぞ）」という脅し（？）も、学生からの質問を促す上で極めて有効である。

質問があったドリル問題に関しては、講義の冒頭 30 分以上を掛けて詳しく解き方を板書にて説明しており、多くの質問がある場合は講義時間の 7 割が質疑応答で費やされることすらある。しかし、このように十分な時間を掛けて質疑応答を行うことは、学生の理解度を向上させるには重要であると、近年特に感じる次第である。また、学生が質問してくれた問題は、当然、（質問をするような積極的な学生ですら）理解度が不十分な問題であるので、この質疑応答は、教員が学生の理解度を測る上でも重要である。

初めてドリルを作成するときは大変。しかしその後の労力削減に繋がる

この試みを始めた当初は毎週ドリル問題を作成するのに膨大な時間を要した（1 週あたり 15 問ずつなので、セメスターあたり 200 問近くのドリル問題を作製した）。しかし、ToyoNet-Ace では過去のドリル問題をインポートする機能もついているので、一旦作成したドリル問題は翌年度以降の講義に流用できる。そのため、翌年度以降の講義に掛ける労力はこのドリルのおかげでかえって軽減できているのが現状である。

また通常、定期試験問題の作成にも大きな労力が必要であるが、私はドリル問題から数問を抜粋して定期試験問題を作製しており、このドリルがあるおかげで定期テストの問題を作成するための労力も大幅に軽減できている（定期テスト問題がドリル問題からの抜粋であることは学生に周知済み・それもドリルを解くインセンティブになっている）。

更に今年は、定期試験をインフルエンザ等で欠席した学生に対する追試も、このドリル機能を利用した web テスト形式で行った。追試を受ける学生を指定した時間に PC 教室に集めた上で一斉に web テスト行ったが、問題作成の手間も要らず、何より追試答案に対する採点を行わなくて良かったのは大きな労力軽減であった（採点は web 上で自動的に行われる）。

ToyoNet-ACE のドリル機能は小テストの一種です。

詳しい作成方法はマニュアルの小テストのタブからご確認ください。

開講から3年が過ぎて「なぜ統計を勉強しなくてはいけないの?」といった声を聞かなくなりました。それどころか、演習課題を予習して仕上げてから授業を受けに来る学生が大量発生するようになり、これはこれで授業運営の新たな課題になっています。データ分析に興味を持つ学生が増えたのは、ビッグデータやAIの浸透といった社会的な背景もありますが、他の講義やゼミなどで分析の有用性を目の当たりにする機会が多いためと思います。マーケティング学科のゼミでは、他大学と合同の研究報告会に参加する活動が盛んです。リサーチ・デザインと実証分析を根拠として主張するプレゼンを観る機会が多々あります。そのような研究を行う先輩たちの活動を手本として、次の世代が育っているように見えます。

2018年度の演習では、マーケティング分野で国内トップの研究企業から教材データの提供を受けて、実務に近い教材作りに取り組みました。また、マーケティング課題を意識して分析の設計をする力を養うため、各自が仮説や分析に用いる項目を選ぶような課題を増やしました。模擬データを用いた演習では、変数の選択や結果を解釈する際に統計の知識が必要になったとしても、マーケティングの知識が大切であると気付かないでしょう。本科目で学んだ内容を基礎としてさらに専門科目を学び、ゼミ活動や卒論で実証研究に取り組み、卒業して実務でマーケティング課題に取り組める力を養って欲しいと思います。

(文責 石田 実)

◆関連記事

マーケティング学科便り 平成30年度第5号(9月配信)

【3】FD・SDに係るお知らせ(各部署より)

1) 2018(平成30)年度優秀教育活動賞の推薦期間のお知らせ

本学において優れた教育活動(各学部の授業及び授業に伴う教育活動)を企画実施し、学生に大きな教育効果を与えた専任教員に対して顕彰することを目的として、下記のとおり、東洋大学優秀教育活動賞の推薦を依頼いたします。(高等教育推進支援室)

1. 推薦期間 2019年2月1日(金)～2019年4月30日(火)
2. 推薦者 規程第6条に基づく専任教員
3. 対象者 専任教員
4. 対象となる授業 2018(平成30)年度に実施された学部授業(教育プログラムを含む正課授業)

※詳細はガルーン掲示板をご確認ください。

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=14390>

2) JPFF 実践的 FD プログラム オンデマンド講義のご案内

全国私立大学 FD 連携フォーラム (JPFF) が提供する実践的 FD プログラムのオンデマンド講義についてお知らせです。

こちらのオンデマンド講義では、「管理運営」「研究」「教育」に関する講義を web で視聴することができます。一部の講義は日英対応です。

現在、2019 年度開講分の受講申込みを受け付けております (4 月 15 日まで)。(高等教育推進支援室)

対象 : 専任教職員

定員 : 30 名 (先着順)

受講料 : 無料 (高等教育推進支援室が負担いたします)

講義一覧 : 2019 年度オンデマンド講義開講一覧

講義サンプル : [こちら](#)

申込方法 :

アカウントの開設が必要となりますので、「ToyoNet-ACE/高等教育推進センター(研修会等)/実践的 FD プログラム オンデマンド講義」にある申込書に必要事項をご入力の上、高等教育推進支援室まで (mlfdjimu@toyo.jp) ご返送ください。

申込期間 :

【上半期受付期間】2 月 1 日 ~ 4 月 15 日

【下半期受付期間】9 月 1 日 ~ 9 月 15 日

※申込日が 4 月・9 月の場合は年度内利用、2 月・3 月の場合は翌年度 4 月からの利用となります。

※通常、申込受付から登録完了まで 2 週間程度お時間をいただいています。

※アカウントは年度更新です。

3) 高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している図書をご紹介します。

「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、添付のポスター及び下記 URL からご確認ください。(高等教育推進支援室)

(ブックログ) <https://booklog.jp/users/fdsdbook>

(貸出申込フォーム) <https://bit.ly/2H8xGsH> ※ToyoNet Mail へのログインが必要です。

【4】高等教育政策動向等（2019年1月7日～3月7日）

1）【経済同友会】2018年度中国委員会ミッション報告書

中国の研究・学術機関における最新の動向についても報告されています。

（2019年3月7日）

<https://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2018/190307a.html>

2）【文科省・教職】平成29年度教員免許状授与件数等調査結果 公表

（2019年2月28日）

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/1413991.htm

3）【文科省】『科学技術要覧 平成30年版』公表

（2019年2月28日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/006/006b/1413901.htm

4）【ランキング】QS World University Rankings by Subject（QS専攻分野別 世界大学ランキング）発表

（2019年2月27日）

<https://www.topuniversities.com/subject-rankings/2019>

5）【文科省】平成29年度大学等における産学連携等実施状況 公表

（2019年2月27日）

http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/sangaku/1413730.htm

6）【文科省】平成30年度「私立大学研究ブランディング事業」の支援対象校 公表

（2019年2月26日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/02/1413847.htm

7）【文科省】平成30年度「私立大学等改革総合支援事業」の支援対象校 公表

本学は、「タイプ1（教育の質的転換）」「タイプ2（産業界との連携）」「タイプ3（他大学等との広域・分野連携）」「タイプ4（グローバル化）」に選定されました。

（2019年2月26日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/02/1413844.htm

8）【文科省】平成30年度「私立大学等経営強化集中支援事業」の支援対象校 公表

（2019年2月26日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/02/1413842.htm

9)【審議状況】第3回教学マネジメント特別委員会

中央教育審議会大学分科会のもとに、教学マネジメント特別委員会が設置されています。

第3回は、「教学マネジメントについて（案）」（資料3）の中で、複層的・継続的なPDCAが示されました。

また、「授業科目・教育課程」の事項における、「カリキュラムの編成の高度化」「柔軟な学事暦の運用」「アクティブ・ラーニングやICTを活用した教育の推進」「主専攻・副専攻の活用」の4点について議論がなされました。

（2019年2月13日）

（会議資料）<http://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/2019/01/1413532.htm>

10)【センター試験】平成31年度大学入試センター試験実施結果の概要 公表

（2019年2月7日）

https://www.dnc.ac.jp/center/shiken_jouhou/h31.html

11)【共通テスト】「大学入試英語成績提供システム」の概要 公表

「大学入学共通テスト実施方針」（2017年7月13日、文部科学省）を受けて、独立行政法人大学入試センターに設置される予定の「大学入試英語成績提供システム」の概要について公表されました。

（2019年1月7日）

https://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka_test/en_info.html

※大学入学共通テストに関する資料は、下記のwebページにまとめられています。

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1397731.htm

【5】その他

◆English Support Service (ESS)

詳細・ご予約

>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?aid=11322&cid=21&nid=15983939>

◆学外FD・SD研修会への参加申込

・ガルーンから>>>

<https://garoon-t.garoon.toyo.ac.jp/v2/cgi-bin/toyo/grn.cgi/bulletin/view?cid=21&aid=12923>

・ToyoNet-ACE から>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2669925c1263429

※ガールーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターに FD・SD に係るコラムやイベント情報等の投稿を募集しております。

ご希望の教職員は、下記フォームにしたがってふるって投稿ください。

=====

投稿申請フォーム : <https://goo.gl/forms/WGnsoEj4A3B28Ndv2>

字数 : 800～1200 字 (目安)

たとえば、こんなコラムを募集しています。

○教員のみなさま

・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム

eg. ・授業運営の際におすすめの ICT ツール、アプリケーションのご紹介

・事前・事後課題の出し方のコツ

・学生の学問に対する興味・関心を高めるコツ、etc.

・学内外の FD・SD 研修会の開催／参加報告

・高等教育に関するおすすめの書籍や web site の紹介、etc.

○職員のみなさま

・担当業務に係る取組紹介コラム

・担当学部・研究科、部署の FD・SD 研修会の開催告知

・学内外の FD・SD 研修会の開催／参加報告

・高等教育に関するおすすめの書籍や web site (特に SD 関連) の紹介、etc.

=====

◆リンク

・「高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES」(大学改革支援・学位授与機構)

>>> <https://qaupdates.niad.ac.jp/>

・「海外学術動向ポータルサイト」(日本学術振興会)

>>> <https://www-overseas-news.jsps.go.jp/>

【6】あとがき

3月6日(水)に行われた入学試験をもって、2019年度入試の全日程が終了しましたね。

今年度は 12 万人を超える志願者があり、関東の大学の中では最も多い数のようです。

私は白山キャンパスの入試実施担当として正門にいたことが多かったのですが、
緊張した面持ちで歩いてくる受験生の姿をみると、
「きつとここまで色々なことがあって、今日を迎えているんだな」とシミジミ考えてしまいました。

数ある大学の中から東洋大学を選んできた学生のために、
出来ること・やるべきことをひとつずつやっていかなければいけないと
身の引き締まる思いであります。

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- このメールは本学教職員にお届けしています。
- このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
- 掲載記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

東洋大学高等教育推進センターニュースレター

2019 年 3 月 26 日 Vol.1, No.14

高等教育推進センターは、本学教職員に高等教育に関する情報を届けるため、

メールマガジンとして「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」を創刊しました。

※購読を中止する場合はメール末尾記載の手続きをお願いいたします。

※ニュースレターの発行趣旨、運用ガイドライン、アーカイブはこちら

>>> https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/page_2818483c1263429_1074264592

(ToyoNet-ACE に要ログイン)

目次

【1】シリーズ 2 | わたしが実践する授業の工夫

第 3 回 総合 II (詩を楽しむ) のクラス (近藤 裕子)

- ・はじめに
- ・アナログ手法のクラス運営
- ・アクティブ・ラーニング？

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

第 3 回 卒業研究 (生命) (井ノ口 蘭)

1. 卒業研究 (生命) : 大学 4 年間の集大成
2. 魚類の浸透圧調節研究 : 面白いと思い続けられるように

【3】特別寄稿

学生 FD サミット@島根県立大学 に参加して (大山 瑞稀)

- ・参加の経緯と目的
- ・1 日目 | 他大学の事例から学ぶ、学生 FD 活動の目的。
- ・2 日目 | 大学の垣根を越えて、FD 活動活性のための手がかりを得る。
- ・これから

【4】高等教育政策動向等 (2019 年 1 月 11 日～3 月 22 日)

- 1) 【就職問題懇談会】2020 年度大学、短期大学及び高等専門学校卒業・修了予定者に係る就職について (申合せ)
- 2) 【経済同友会】スポーツとアートの産業化に向けた課題整理 公表
- 3) 【文科省・初等中等】報告書「これからの小・中学校施設の在り方について～児童・生徒の成長を支える場にふさわしい環境づくりを目指して～」公表
- 4) 【国立教育政策研究所】平成 29 年度における職場体験・インターンシップ実施状況等について 公表
- 5) 【日本学術振興会】スーパーグローバル大学創成支援事業発展的な構想の見直し

- 6) 【文科省・厚労省】平成 30 年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査（2 月 1 日現在）公表
- 7) 【学術会議】報告「農業経済学の学部教育のあり方」公表
- 8) 【文科省・法令】法科大学院の教育と司法試験等との連携等に関する法律等の一部を改正する法律案 閣議決定
- 9) 【文科省】「今後の科学コミュニケーションのあり方について」公表
- 10) 【文科省】大学等の授業科目として行う企業内実習等の実施に係る労働法上の留意事項について（通知）

【5】その他

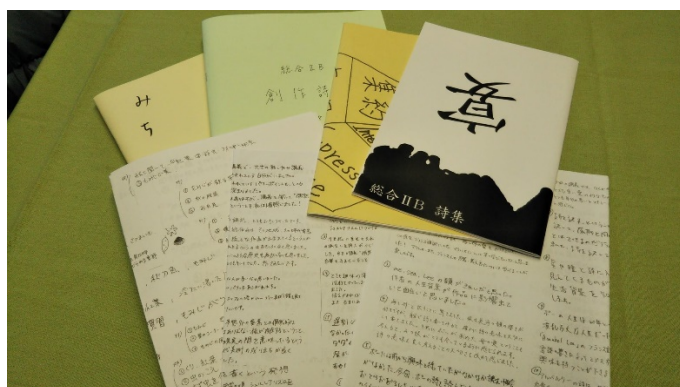
- ◆2018(平成 30)年度優秀教育活動賞の推薦期間のお知らせ
- ◆JPFF 実践的 FD プログラムオンデマンド講義のご案内
- ◆高等教育関連図書のご案内
- ◆English Support Service (ESS)
- ◆学外 FD・SD 研修会への参加申込
- ◆本ニュースレターへの投稿申請
- ◆リンク

【6】あとがき

【1】シリーズ 2 | わたしが実践する授業の工夫

第 3 回 総合 II（詩を楽しむ）のクラス

近藤 裕子（経済学部経済学科）



写真① 学生へのフィードバック（下段）と作品集（上段）

はじめに

このクラスは 1990 年代に郡山直先生、三浦安子先生（現在はお二人共、名誉教授）が始められた一般教養がその原点になっている。2002 年以降は三浦先生と私がペア・ティーチングで担当、2009 年に先生が退職されてからは、私 1 人の担当となり、今日に至っている。

アナログ手法のクラス運営

1～4年生、またさまざまな学部・学科の学生が選択できるクラスであり、その年によって人数は異なるが、50～100名ほどが履修している。

毎回、講師室にある出席カードに、名前だけでなく、裏にその日の感想を書いてもらう。回収したあと、まずは出席をチェック、そのあと、感想側をA3用紙にベタ貼りして、私のコメントも最後に書き、翌週のクラスで配布している。（両面、またセット毎に印刷できるオルフィスのおかげで、印刷はとても楽になった。）（写真①下段）

Toyonet-Ace上で出席、また学生の感想を簡単に集計できることは知っているが、なぜ手書き、アナログ手法にこだわっているのか？それには理由がある。

感想にはさまざまなものがあり、絵を描いたり、文字に飾りをつける感想もあって、学生たちのさまざまな個性が表現されている。同じ授業を聴いても、他の学生がどのように感じ、考えたのかを知ってみたい、また言葉による自己表現についても改めて考えてもらいたい希望があるから、手書きにこだわるのである。

このクラスでは、セメスター毎に1度、ディスカッションも行っている。総合大学の強みを活かして、さまざまな学年、学科の学生が1つのチームになるように私の方でチームは決める。最初、渋っている学生もいるが、その日の感想に、東洋に来て、初めて他学科の人と話せてよかった、面白かったというものが多くあるので、欠かせないイベントの1つになっている。ディスカッションは頻繁には行えないので、上記の感想集がその代わりになると考えている。また私にとっては、セメスター最後のクラス評価アンケートよりもオンデマンドで、学生の意見が確認できるため、大変参考になっている。

アクティブ・ラーニング？

このクラスの大きな特徴として、春学期の好きな詩についてのミニプレゼンと、秋学期の創作詩発表がある。

好きな詩は前もって選んだ詩を書いてきてもらい、資料として配布する。何十人もいるクラスで、聴くだけでは、どんな詩が読まれたかを忘れやすいのを防ぐため、また同じ（長編の）詩を選んできても、選択する部分が人によって異なる場合があるためである。

また創作詩は書いてきたものを最後に作品集として1冊にまとめ（人数も多くなったため、近年、印刷・製本は業者に依頼している。）、学生たちに渡している（写真①上段）。毎回の感想とは異なり、好きな詩と創作詩については誰が書いたか、名前はわかるようになっている。パソコンを使う学生もいるが、手書きの学生も多く、その日の感想に、〇〇さんの字はきれい、また□□さんが書いた詩はとても心にひびいたなどと書かれると、対象の学生にとっては、うれしい褒め言葉になる。

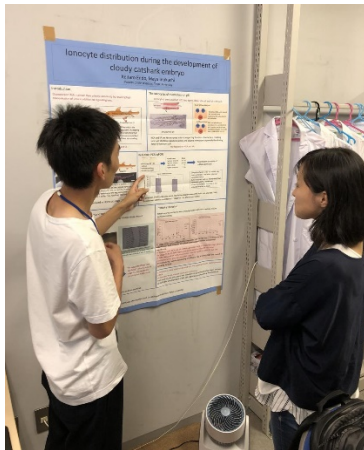
手書きのプロセスによって、感想を書く日本語力、また創作詩の玉石混交度の経年変化を強く感じている。デジタルの時代にアナログ手法満載の手間のかかるクラスである。学生たちにも参加型なので覚悟して履修登録するようにと話している。

【2】コラム | 東洋大学優秀教育活動賞受賞者に訊く

こちらのコラムは、高等教育推進センター公式ホームページ においてもご覧いただけます。

第3回 卒業研究（生命）

井ノ口 繭（生命科学部生命科学科・2017(平成 29)年度東洋大学優秀教育活動賞受賞)



写真① 学会発表に向けた研究指導の様子

平成 29 年度東洋大学優秀教育活動賞に選出していただき、誠にありがとうございました。生命科学部生命科学科の「卒業研究（生命）」について紹介いたしますと共に、個人的にどのような工夫を行ってきたかを書いていきたいと思います。

1. 卒業研究（生命）：大学 4 年間の集大成

本授業は、学生が教員の指導のもと各研究テーマに沿った実験および研究を計画的に行うことを目的としています。また、生命科学科の卒業の認定及び学位授与に関する方針である「生命科学の専門的知識と実験技術を駆使して、創造的な研究活動を行う能力を身につけている」を実現する授業です。

生命科学科では、1年生から3年生まで、各講義や実験実習を通して、生命科学に関する知識・考え方・技術を学びます。授業で行う実験は、失敗しないように教員が念入りに準備したものであり、ほとんどの場合、考察しやすい明確な結果を得ることができます。

一方で、卒業研究の大部分は未知の生命科学現象を探っていくことを目的としており、どんな結果が出るのか、それどころかうまく実験が進むのかも手探りの状態となります。そのような答えが保障されていない問いに対して、自分で計画を立て、成功や失敗を繰り返していくことで、生命科学科の4年生は実験技術だけではなく、問題解決に向けて考える力を身に付けていきます。

2. 魚類の浸透圧調節研究：面白いと思いつけられるように

私の指導する卒業研究（生命）では、「魚類における浸透圧調節機構解明」に関連する研究を卒業研究テーマとして、学生達が日常的に実験を行います。もう少しわかりやすく言うと、「魚がどうして海でも川でも生きられるのか」その体の仕組みを調べています。これは社会的利益に直結するテーマではなく、研究に取り組み続けるためにはその分野に対する強い興味を持つことが重要になります。

「研究って面白い」と思いつけられるように、一人一人に独立したテーマを与え、頑張った分だけ自分の成果になるという環境を心がけています。また、自分の研究の意義や影響力を実感し、次の実験のモチベーションに繋げて行けるように、学会やシンポジウムへの参加を促しています。

そして、実験がどうしてもうまくいかない時、研究テーマが面白く思えなくなった時に、他の研究テーマというオプションを用意しています。うまくいかない実験を鬱々と続けなくていいと思えること、これは意外と重要だと私は考えています。卒業研究では良くも悪くも学生と教員が共に長くて密な時間を過ごすことになるので、持続可能な人間関係を保ちながら持続的に研究を進めていくことを重視しています。

特別寄稿 | 学生 FD サミット@島根県立大学 に参加して

大山瑞稀（学生 FD チームスタッフ・文学部第2部教育学科3年）

2019年3月21日(木)～3月22日(金)に、島根県立大学で開催された「学生 FD サミット 2019 春」に東洋大学学生 FD チームのスタッフを代表して参加してきました。

学生 FD サミットは年に2回開催される、全国の大学から学生 FD 活動に取り組む学生・教員・職員が集まり、各大学の FD 活動の成果を共有し合うイベントです。この場をおかりして、学生 FD チームの紹介と学生 FD サミットで得たことを共有したいと思います。



参加の経緯と目的

東洋大学の学生 FD チームは、2010(平成 22)年度から学生 FD スタッフの募集を始め、現在は高等教育推進センター直属の「学生 FD チーム」となり、東洋大学の授業を中心とした学生生活の向上と学生の意識向上に向けて、教職員の方々と力を合わせ、様々な活動に取り組んでいます。

しかし、最近は他大学と比べて所属人数が少なく、特に 2017 年度以降は、“定例”となっている活動がないため学生同士が顔を合わせる頻度も少ないなど、活発な活動を行えずにいました。

そこで、本学の学生 FD チームが抱えている課題を解決するための手がかりや、他大学 FD とのつながり、本学の学生 FD チームが生みだせるアイデアの幅を広げることなどを目的に、学生 FD サミットに参加しました。

1 日目 | 他大学の事例から学ぶ、学生 FD 活動の目的。

1 日目は、学生 FD サミットの歴史を振り返るプログラムや他大学の活動事例紹介、ポスターセッションが行われました。特に印象に残ったことは、追手門学院大学の「学生 FD 活動の落とし穴」に関するお話です。

追手門学院大学は過去に 2 回学生 FD サミットが開かれるほど学生 FD 活動が盛んな大学でしたが、現在は教育開発センターの事業から「学生 FD 活動の支援」という文言が削除され、学生 FD という組織もなくなっています。理由はオリジナルのシラバスや授業をテーマにしたイベントを定期的に行っていたが、どれも一過性のもので、学生 FD がイベント団体のような位置づけになっていたことにあるとのことでした。

追手門学院大学で長年にわたり学生 FD 活動に携わってきた職員の梅村さんから、学生 FD 活動は続けることが目的ではなく、その先にある授業改善や大学改革こそが目的であり、手段を目的化してしまう落とし穴にはまってはならないという話をいただきました。

2 日目 | 大学の垣根を越えて、FD 活動活性のための手がかりを得る。

2 日目は「学生 FD として成長するためには」というテーマでグループディスカッションを行いました。学生 FD 活動の課題について話し合った際、特に印象的だったのは、教員・職員・学生のそれぞれから「学生 FD 活動における目的意識の乖離」が挙げられたことです。

さらに教職員、学生の両方から「もっと意見交換や情報共有などの話し合いの場を設けたい」という意見が出され、大学の学生 FD の規模や特色に違いはありますが、学生 FD 活動において教職員が同じ課題意識を持っているように感じました。

また、普段はお話をする機会のない他大学の教職員や学生と懇談することもできました。理数系科目の講義でアクティブラーニングを取り入れる際の工夫について学生が教員から試行錯誤の過程を聴き、クォーター制を取り入れはじめた大学の職員がクォーター制を採用している他大学の学生に意見を聴くなど、教員・職員・学生が耳を傾け合い、それぞれの想いを知る貴重な機会となりました。

これから

今回のサミットの総括として参加者全員に、「自分たちが楽しいと思えるような FD 活動を行ってほしい」という呼びかけがありました。学生 FD サミットで感じたことや他大学とのつながりを、東洋大学での学生 FD 活動に活かしていきたいと思います。

【4】高等教育政策動向等（2019 年 1 月 11 日～3 月 25 日）

1) 【就職問題懇談会】2020 年度大学、短期大学及び高等専門学校卒業・修了予定者に係る就職について（申合せ）

2019 年 3 月 25 日

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/03/1414713.htm

2) 【経済同友会】スポーツとアートの産業化に向けた課題整理 公表

2019 年 3 月 22 日

<https://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2018/190322a.html>

3) 【文科省・初等中等】報告書「これからの小・中学校施設の在り方について～児童・生徒の成長を支える場にふさわしい環境づくりを目指して～」公表

2019 年 3 月 22 日

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/toushin/1414523.htm

4) 【国立教育政策研究所】平成 29 年度における職場体験・インターンシップ実施状況等について 公表

2019 年 3 月 19 日

http://www.nier.go.jp/03_laboratory/houdou_pdf/houdou_20190319.pdf

5) 【日本学術振興会】スーパーグローバル大学創成支援事業発展的な構想の見直し

2019 年 03 月 19 日

https://www.jsps.go.jp/j-sgu/kosominaoshi_kekka.html

6)【文科省・厚労省】平成 30 年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査（2 月 1 日現在）公表

2019 年 3 月 18 日

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/03/1414182.htm

7)【学術会議】報告「農業経済学の学部教育のあり方」公表

2019 年 3 月 13 日

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-h190313.pdf>

8)【文科省・法令】法科大学院の教育と司法試験等との連携等に関する法律等の一部を改正する法律案 閣議決定

2019 年 3 月 12 日

http://www.mext.go.jp/b_menu/houan/an/detail/1413769.htm

9)【文科省】「今後の科学コミュニケーションのあり方について」公表

2019 年 2 月 8 日

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/092/houkoku/1413643.htm

10)【文科省】大学等の授業科目として行う企業内実習等の実施に係る労働法上の留意事項について（通知）

2019 年 1 月 11 日

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1414549.htm

【5】その他

◆2018(平成 30)年度優秀教育活動賞の推薦期間のお知らせ

本学において優れた教育活動（各学部の授業及び授業に伴う教育活動）を企画実施し、学生に大きな教育効果を与えた専任教員に対して顕彰することを目的として、東洋大学優秀教育活動賞の推薦を依頼いたします。（高等教育推進支援室）

詳しくは [こちら](#) ※ガルーン要ログイン

◆JPFF 実践的 FD プログラム オンデマンド講義のご案内

全国私立大学 FD 連携フォーラム（JPFF）が提供する実践的 FD プログラムのオンデマンド講義についてお知らせです。

こちらのオンデマンド講義では、「管理運営」「研究」「教育」に関する講義を web で視聴することができます。一部の講義は日英対応です。

現在、2019 年度開講分の受講申込みを受け付けております（4 月 15 日まで）。（高等教育推進支援室）

詳しくは [こちら](#) ※ToyoNet-ACE 要ログイン

◆高等教育関連図書のご案内

高等教育推進センターでは、ブックログという読書記録のためのウェブサービスを利用して、センターが保管している図書をご紹介します。

「センター蔵書あり」の図書については、貸出も可能ですので、詳しくは、下記の「貸出申込みフォーム」からご確認ください。（高等教育推進支援室）

ブックログの本棚

貸出申込フォーム ※ToyoNet Mail へのログインが必要です。

◆English Support Service (ESS)

詳細・ご予約

◆学外 FD・SD 研修会への参加申込

ガルーンから

ToyoNet-ACE から

※ガルーンと ToyoNet-ACE にて同様の情報を集約・周知しております。

※参加に伴う参加費、交通費、宿泊費等は高等教育推進支援室にて負担いたします。

◆本ニュースレターへの投稿を募集しています

本ニュースレターに FD・SD に係るコラムやイベント情報等の投稿を募集しております。

ご希望の教職員は、下記フォームにしたがってふるって投稿ください。

=====

投稿申請フォーム

字数：800～1200 字（目安）

たとえば、こんなコラムを募集しています。

○教員のみなさま

・「わたしが実践する授業の工夫」をテーマにしたコラム

eg. ・授業運営の際におすすめの ICT ツール、アプリケーションのご紹介

・事前・事後課題の出し方のコツ

・学生の学問に対する興味・関心を高めるコツ、etc.

- ・学内外の FD・SD 研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍や web site の紹介、etc.

○職員のみなさま

- ・担当業務に係る取組紹介コラム
- ・担当学部・研究科、部署の FD・SD 研修会の開催告知
- ・学内外の FD・SD 研修会の開催／参加報告
- ・高等教育に関するおすすめの書籍や web site（特に SD 関連）の紹介、etc.

=====

◆リンク

- ・「 高等教育質保証の海外動向発信サイト QA UPDATES 」(大学改革支援・学位授与機構)
- ・「 海外学術動向ポータルサイト 」(日本学術振興会)

【6】あとがき

2018 年 9 月 18 日に創刊したこちらの
「東洋大学高等教育推進センターニュースレター」ですが・・・
今回をもって Vol.1 の配信は最後となりました。

合計 14 回の配信の中では、
連続記事として「学修／学習時間の実態と教育手法」や
「わたしが実践する授業の工夫」などの連載や、
日々の高等教育政策動向など様々な情報をみなさんに発信してまいりました。

新年度の 4 月からは、「Vol.2」として、
引き続きみなさんに有益な情報を発信できるよう頑張ります。

●みなさまの声をお寄せください

これまでのニュースレターに対する
ご意見・ご感想・ご要望、応援メッセージなどを下記のフォームで募集中です。
些細な内容でも構いませんのでお寄せいただけますと幸いです。(匿名です)
こちら：<https://goo.gl/forms/q14H9oRjIAU9uG9C3>

発行元

東洋大学 高等教育推進センター

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

E-mail: mlfdjimu@toyo.jp

HP: <http://www.toyo.ac.jp/site/fd/>

ToyoNet-ACE: https://www.ace.toyo.ac.jp/ct/course_1263429

- ◆このメールは本学教職員にお届けしています。
- ◆このメールは送信専用メールアドレスから配信されています。
ご返信いただいてもお答えできませんのでご了承ください。
- ◆掲載記事の無断転載を禁じます。

© 2018-2019 東洋大学高等教育推進センター

『東洋大学 FD・SD 活動報告書（2018 年度）』

発 行 東洋大学高等教育推進センター

発行日 2019 年 5 月

編 集 東洋大学高等教育推進支援室

〒112-8606

東京都文京区白山 2-28-20

TEL: 03-3945-7253 / FAX: 03-3945-7238

Mail: mlfdjimu@toyo.jp